

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12

下山遺跡(2)

—縄文時代遺構の調査—

2002年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12

下山遺跡(2)

—縄文時代遺構の調査—

2002年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会



下山遺跡出土「屈折像土偶」

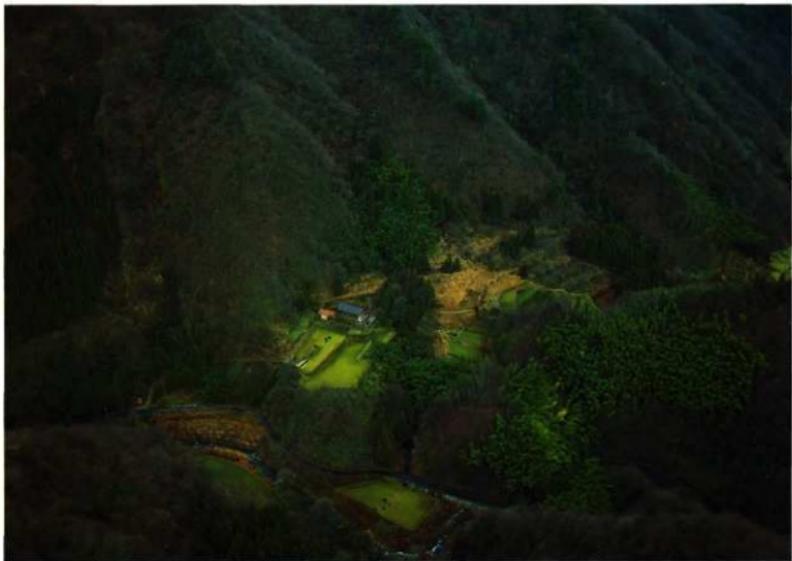
撮影：奈良国立文化財研究所
牛鶴 茂氏



「屈折像土偶」(手前)と復元模型(奥)

撮影：奈良国立文化財研究所

牛堀 茂氏



下山遺跡 調査前遠景



下山遺跡 遠景



下山遺跡 土層



下山遺跡出土「雙耳壺」（左）・策邇遺跡出土「雙耳壺」（右）

資料提供：稻積慎吾氏

序

当事務所では、いわゆる斐伊川・神戸川治水計画3点セットの一翼を担う事業として、神戸川の上流に平成22年度完成を目標に志津見ダムの建設事業を進めています。このダムにより、頓原町大字角井・志津見・八神にわたり面積約2.3km²もの貯水池ができることになりますが、神戸川流域では古くから鉱製鉄が行われていたように、ダムによる水没予定地内にもこれらを含め多くの遺跡の存在が予想されたことから、ダム建設に先立ち、島根県教育委員会を始め関係各位の御協力を頂き、これら遺跡についての調査を計画的に実施してきております。

当報告書は、そのうち下山遺跡の調査結果をとりまとめていただいたものです。この遺跡からは、縄文時代から近世にかけての遺構や遺物、特に当地域では珍しい縄文時代の土偶が出土するなど、当地での生活を知る上で貴重な資料が得られたのではないかと思います。

当遺跡の場所には、改良された国道184号線が位置することから、ダム完成後は遺跡全体を見渡すことができなくなります。そのような意味からも、ダム事業を契機として得られたこの貴重な資料をできるだけ正確かつ詳細に記録し後世に残すことが、せめてもの我々の務めでもあり、この報告書はその成果とも言えるものです。

最後になりましたが、当遺跡の調査並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成14年3月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所

所長 田中 靖

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受け平成元年（1989）から志津見ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を行っています。

志津見ダムが建設される神戸川は、古くから陰陽を結ぶ交通路としての役割を果たし、山陽地域の要素も取り込んだ特色ある文化を育みました。また、この地域は、古代から近世・近代まで豊富に採取できる砂鉄や木炭を使った鉋製鉄がたいへん盛んなところでもありました。

本書で報告する下山遺跡は、平成7（1995）年度から平成8（1996）年度にかけて発掘調査を実施したもので、縄文時代の生活跡や製鉄炉など多様な遺構・遺物が確認され、この地域の歴史を考える上で欠くことのできない資料が明らかになりました。今回の調査成果が地域の歴史を考える上で一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査及び本書の作成につきましては、地元頓原町の皆様方をはじめ、頓原町教育委員会、国士交通省斐伊川・神戸川総合開発事務所など各方面からご協力・ご指導を賜りました。心より感謝申しあげます。

平成14年3月

島根県教育委員会

教育長 山崎 悠雄

例　　言

1. 本書は、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、島根県教育委員会が平成7（1995）年度～平成8（1996）年度にわたって実施した下山遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査組織は次の通りである。

平成7（1995）年度

事務局 勝部 昭（文化財課長）、森川洋光（文化財課長補佐）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、佐伯義治（同課長補佐）、内田律雄（同調査第4係長）

調査員 宮本正保（調査第4係文化財保護主事）、岩崎裕介（同臨時職員）、佐藤幸子（同臨時職員）、唐溪由美子（大和村教育委員会、埋蔵文化財専門研修生）

調査指導 穴沢義功（たたら研究会委員）、大澤正巳（たたら研究会委員）、川瀬正利（広島大学文学部教授）

平成8（1996）年度

事務局 勝部 昭（文化財課長）、森川洋光（文化財課長補佐）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、古崎藏治（同課長補佐）、島谷芳雄（同調査第5係長）

調査員 深田 浩（調査第5係主事）、内田裕二（同教諭兼主事）、坂根健悦（同調査補助員）、佐藤幸子（同調査補助員）

調査指導 穴沢義功（たたら研究会委員）、大澤正巳（たたら研究会委員）、川瀬正利（広島大学文学部教授）、杉原清一（島根県文化財保護指導員）、竹広文明（島根大学汽水域研究センター助手）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、時枝克安（島根大学総合理工学部教授）、中村友博（山口大学人文学部教授）、松井繁司（島根大学汽水域研究センター客員研究員）

平成13（2001）年度

事務局 宍道正年（センター所長）、内田 融（総務課長）、松本岩雄（調査第1課長）、川原 和人（調査第2課長）、今岡 宏（主幹）、萩 雅人（調査第5係長）

調査員 深田 浩（調査第1係主事）、半井大介（同調査補助員）

調査指導 飯泉 澄（島根大学総合理工学部教授）、竹広文明（島根大学汽水域研究センター助教授）

3. 今回の報告に関して自然科学的分野の分析などを次の方々・機関に依頼した。

石器石材鑑定：飯泉 澄（島根大学総合理工学部教授）、石器産地分析：薬科哲男（京都大学原子炉研究所）、土壤分析：若月利之（島根大学生物資源科学部教授）、土壤プラントオパール分析：高橋 譲（ノートルダム清心女子大学教授）

4. 発掘作業（発掘作業員、測量発注ほか）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ

委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部 布村幹人（現場事務所長）、原 博明（技術員）、持田明典（技術員）、勝部達也（技術員）、岩崎あき子（事務員）

5. 発掘作業については、以下の方に参加していただいた。

板山洋子、深井 茜、三島安子、三島・恵、吉川先枝、深井春信、杉本正枝、渡辺秋代、深井博文、橋 重成、能美マサコ、岸 光枝、岸美代了、三島澄江、板垣 栄、森山一代、山本満好、三島美登枝、西村芳江、渡辺安行、神田 茂、神田操代、藤原初代、鎌田スミ子、有馬紀美子、立脇重富、毛利 充、内藤ステヨ、平田咲江、渡部 一夫、後長 翠、木下潤次、木下米子、後長寿馬子、伊藤辰雄、三島淳二

6. 今回の調査及び調査報告書作成に御協力いただいた方は次のとおりである。

今田昭二・田中迪亮・山崎順子（頃原町教育委員会）・山崎 修（加茂町教育委員会）、渡辺貞幸（島根大学法文学部）、澤下孝信（下関考古資料館）、藤積裕昌（三重県埋蔵文化財センター）、渡辺友千代（匹見町教育委員会）、稻村秀介（庄原市教育委員会）、泉 拓良（奈良大学文学部）、春成秀爾（国立歴史民俗博物館）、原田昌幸（文化庁美術学芸課）、手銭誠（人社町教育委員会）、千葉豊（京都大学埋蔵文化財調査研究センター）、安孫子昭二（東京都埋蔵文化財センター）、岡崎完樹（東京都埋蔵文化財センター）、藤積慎吾、野津 旭（仁多町教育委員会）、林 直樹（宮川村埋蔵文化財調査室）、大野 薫（大阪府教育委員会）、宮下健司（長野県立歴史館）、八重権純樹（静岡大学情報学部）

7. 掘図中の方位は、測量法による第III座標系の軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。

8. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

9. 本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

P（ピット）、S I（竪穴建物）、S B（掘立柱建物）、S D（溝状遺構）、S K（土坑）

10. 本書に掲載した遺物の実測・整理等は主として調査員が行い、大谷百合子、金森千勢子、和田初子、渡辺幸子、小野千歳、佐々木孝子、錦織美千恵、守屋かおる、藤原須美子、田中路子、石川真由美、天津文子、金坂恵美子、陶山佳代、加藤往子、馬庭志津子、吉岡朋子、福田市子、伊藤幸子、糸賀五月、勝部悠美、越智昌二の協力を得た。

11. 本書に掲載した遺物の写真撮影は広江耕史が行い、本書の執筆、編集は深田が行った。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	2
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境と下山遺跡の層序	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の概要	11
第1節 調査区の配置	12
第2節 1区の調査	12
第3節 2区の調査	12
第4章 第1黒色土・第1ハイカ上面の調査	15
第1節 1区・第1黒色土の調査	16
1. 第1黒色土の調査	16
2. 第1ハイカ上面の調査	30
第2節 2区の調査	33
1. 製鉄関連遺構の調査	33
2. 2区第2地点の調査	36
3. 盛土層の調査	38
4. 第1黒色土の調査	42
5. 第1ハイカ上面の調査	59
第5章 第2黒色土・第2ハイカ上面の調査	79
第1節 1区の調査	80
1. 第2黒色土の調査	80
2. 第2ハイカ上面の調査	86
第2節 2区の調査	89
1. 第2黒色土の調査	89
2. 第2ハイカ上面の調査	131
3. 2区第2地点の調査	161
第6章 第3黒色土・第3ハイカ上面の調査	163
第1節 1区の調査	164

1. 第3黒色土の調査	164
2. 第3ハイカ上面の調査	184
第2節 2区の調査	185
1. 第3黒色土の調査	185
2. 第3ハイカ上面の調査	193
3. 2区第2地点の調査	202
 第7章 ま と め	203
第1節 下山遺跡で検出された構造と遺物について	204
1. 第3黒色土	204
2. 第2黒色土	205
3. 第1黒色土	208
4. 二瓶山火山灰と出土遺物の関係	212
5. 縄文時代の農耕について	213
第2節 中國地方の土偶について	214
 第8章 自然科学分析	225
第1節 一瓶火山の噴出物とその年代	227
第2節 下山遺跡出土石斧の石材鑑定	237
第3節 下山遺跡出土サヌカイト製遺物および黒曜石製遺物の原材产地分析	241
第4節 下山遺跡のサヌカイト・安山岩類の分類と螢光X線分析結果について	261
第5節 下山遺跡集石土壤群の土壤分析	265
第6節 プラント・オパール分析による栽培植物の検出	269
 第9章 遺 物 観 察 表	279
第10章 図 版	344

挿 図 目 次

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 第1図 下山遺跡採集の「両性具有石器」 | 第36図 2区 第1黒色土出七遺物 8 |
| 第2図 下山遺跡と周辺の地形 | 第37図 2区 第1黒色土出土土偶・耳環・土製品 |
| 第3図 下山遺跡十層模式図 | 第38図 2区 第1黒色土出上石器 1 |
| 第4図 下山遺跡と周辺の遺跡 | 第39図 2区 第1黒色土出七石器 2 |
| 第5図 下山遺跡調査用グリッド設定図 | 第40図 2区 第1黒色土出土石器 3 |
| 第6図 1区 第1ハイカ上面遺構配置図 | 第41図 2区 第1黒色土出上石器 4 |
| 第7図 A-Bセクション十層図 | 第42図 2区 第1黒色土出七石器 5 |
| 第8図 1区 第1黒色土出土遺物 1 | 第43図 2区 第1黒色土出土弥生・土師器・須恵器・土製品 |
| 第9図 1区 第1黒色土出土遺物 2 | 第44図 2区 第1ハイカ上面遺構配置図 |
| 第10図 1区 第1黒色土出土遺物 3 | 第45図 2区 第1黒色土上面 S 102 |
| 第11図 1区 第1黒色土出土遺物 4 | 第46図 2区 S 102遺物出土状況 |
| 第12図 1区 第1黒色土山上遺物 5 | 第47図 2区 第1ハイカ上面 S 102出土遺物 |
| 第13図 1区 第1黒色土出土遺物 6 | 第48図 2区 第1ハイカ上面 S K群周辺出土遺物 |
| 第14図 1区 第1黒色土出土石器 1 | 第49図 2区 第1ハイカ上面 S K群配置図 |
| 第15図 1区 第1黒色土出土石器 2 | 第50図 2区 第1ハイカ上面 ピット内出土遺物 |
| 第16図 1区 第1黒色土出土石器 3 | 第51図 2区 第1ハイカ上面 S K33・34 |
| 第17図 1区 第1ハイカ上面 S 101 | 第52図 2区 第1ハイカ上面 S K33・34出土遺物 |
| 第18図 1区 第1ハイカ上面 S 101山上遺物 1 | 第53図 2区 第1ハイカ上面 S K35・40 |
| 第19図 1区 第1ハイカ上面 S 101出土遺物 2 | 第54図 2区 第1ハイカ上面 S K35出土遺物 |
| 第20図 2区 第1黒色土上面遺構配置図 | 第55図 2区 第1ハイカ上面 S K40出土遺物 |
| 第21図 2区 A-B C-Dセクション土層図 | 第56図 2区 第1ハイカ上面 S K36・37 |
| 第22図 2区 第2地点 第1黒色土出土遺物 | 第57図 2区 第1ハイカ上面 S K36・37出土遺物 |
| 第23図 2区 第2地点 トレンチ 1 北壁上層図 | 第58図 2区 第1ハイカ上面 S K38・39 |
| 第24図 2区 盛土層出土遺物 1 | 第59図 2区 第1ハイカ上面 S K38・39出土遺物 |
| 第25図 2区 盛土層出土遺物 2 | 第60図 2区 第1ハイカ上面 S K41・42 |
| 第26図 2区 盛土層出土石器 1 | 第61図 2区 第1ハイカ上面 S K41・42出土遺物 |
| 第27図 2区 盛土層出土石器 2 | 第62図 2区 第1ハイカ上面 S K42~46 |
| 第28図 2区 第1黒色土遺物出土状況 | 第63図 2区 第1ハイカ上面 S K47 |
| 第29図 2区 第1黒色土出土遺物 1 | 第64図 2区 第1ハイカ上面 S K43・44出土遺物 |
| 第30図 2区 第1黒色土出土遺物 2 | 第65図 2区 第1ハイカ上面 S K45・46出土遺物 |
| 第31図 2区 第1黒色土出土遺物 3 | 第66図 2区 第1ハイカ上面 S K47・48出土遺物 |
| 第32図 2区 第1黒色土出土遺物 4 | 第67図 1区 第2黒色土遺物出土状況 |
| 第33図 2区 第1黒色土出土遺物 5 | 第68図 1区 第2黒色土出土遺物 1 |
| 第34図 2区 第1黒色土出土遺物 6 | 第69図 1区 第2黒色土出土遺物 2 |
| 第35図 2区 第1黒色土出土遺物 7 | |

- | | | | | | |
|-------|----|-----------------|-------|----|-----------------------|
| 第70図 | 1区 | 第2黒色土出土遺物3 | 第108図 | 2区 | 第2ハイカ上面遺構配置図 |
| 第71図 | 1区 | 第2黒色土出土土製品 | 第109図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK群周辺出土遺物1 |
| 第72図 | 1区 | 第2黒色土出土石器 | 第110図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK群周辺出土遺物2 |
| 第73図 | 1区 | 第2ハイカ上面遺構配図 | 第111図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK群配置図 |
| 第74図 | 2区 | 第2黒色土上面遺構配置図 | 第112図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK49~52 |
| 第75図 | 2区 | 第2黒色土焼土群・遺物分布状況 | 第113図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK49・50・52出土遺物 |
| 第76図 | 2区 | 第2黒色土焼土群出土遺物 | 第114図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK53~60 |
| 第77図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物出土状況 | 第115図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK54~56・60上層 |
| 第78図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物1 | 第116図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK53~57出土遺物 |
| 第79図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物2 | 第117図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK58~60出土遺物 |
| 第80図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物3 | 第118図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK61~64 |
| 第81図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物4 | 第119図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK61~64出土遺物 |
| 第82図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物5 | 第120図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK65・66 |
| 第83図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物6 | 第121図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK65・66出土遺物 |
| 第84図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物7 | 第122図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK66出土遺物2 |
| 第85図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物8 | 第123図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK67~69 |
| 第86図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物9 | 第124図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK67・68出土遺物 |
| 第87図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物10 | 第125図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK70~76 |
| 第88図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物11 | 第126図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK72~75出土遺物 |
| 第89図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物12 | 第127図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK77・78 |
| 第90図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物13 | 第128図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK77・78出土遺物 |
| 第91図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物14 | 第129図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK79・80 |
| 第92図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物15 | 第130図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK79・80・84出土遺物 |
| 第93図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物16 | 第131図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK81~83 |
| 第94図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物17 | 第132図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK81・83出土遺物 |
| 第95図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物18 | 第133図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK85出土遺物 |
| 第96図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物19 | 第134図 | | 築造跡出土双耳壺 |
| 第97図 | 2区 | 第2黒色土出土遺物20 | 第135図 | 2区 | 第2ハイカ上面SK85・遺物出土状況 |
| 第98図 | 2区 | 第2黒色土双耳壺 | 第136図 | 2区 | 第2地点 第2黒色土出土遺物1 |
| 第99図 | 2区 | 第2黒色土注口土器・土製品 | 第137図 | 2区 | 第2地点 第2黒色土出土遺物2 |
| 第100図 | 2区 | 第2黒色土出土石器1 | 第138図 | 2区 | 第2地点 第2黒色土出土遺物3 |
| 第101図 | 2区 | 第2黒色土出土石器2 | 第139図 | 1区 | 第3黒色土上面遺構配図 |
| 第102図 | 2区 | 第2黒色土出土石器3 | 第140図 | 1区 | 第3黒色土上面焼土群・遺物分布状況 |
| 第103図 | 2区 | 第2黒色土出土石器4 | 第141図 | 1区 | 第3黒色土27号焼土 |
| 第104図 | 2区 | 第2黒色土出土石器5 | 第142図 | 1区 | 第3黒色土27号焼土山上遺物 |
| 第105図 | 2区 | 第2黒色土出土石器6 | 第143図 | 1区 | 第3黒色土29号焼土 |
| 第106図 | 2区 | 第2黒色土出土石器7 | | | |
| 第107図 | 2区 | 第2黒色土出土石器8 | | | |

- 第14図 1区 第3黒色土29・34・51・53号出土遺物
- 第15図 1区 第3黒色土43・45～49号焼土出土遺物
- 第16図 1区 第3黒色土SK86・87
- 第17図 1区 第3黒色土SK87山上遺物
- 第18図 1区 第3黒色土遺物出土状況
- 第19図 1区 第3黒色土山上遺物1
- 第20図 1区 第3黒色土山上遺物2
- 第21図 1区 第3黒色土出土遺物3
- 第22図 1区 第3黒色土山上遺物4
- 第23図 1区 第3黒色土出土遺物5
- 第24図 1区 第3黒色土出土遺物6
- 第25図 1区 第3黒色土山上石器1
- 第26図 1区 第3黒色土出土石器2
- 第27図 1区 第3黒色土出土石器3
- 第28図 1区 第3ハイカ上面遺構配置状況
- 第29図 2区 第3黒色土遺物出土状況
- 第30図 2区 第3黒色土上面遺物分布状況
- 第31図 2区 第3黒色土山上遺物1
- 第32図 2区 第3黒色土山上遺物2
- 第33図 2区 第3黒色土山上石器2
- 第34図 2区 第3黒色土出土石器3
- 第35図 2区 第3ハイカ上面遺構配置図
- 第36図 2区 第3ハイカ上面SK88～98
- 第37図 2区 第3ハイカ上面SK99～105
- 第38図 2区 第3ハイカ上面SK89出土遺物
- 第39図 2区 第3ハイカ上面SK106
- 第40図 2区 第3ハイカ上面SK106出土遺物
- 第41図 2区 第2地点 第3黒色土出土遺物
- 第42図 2区 第2地点 第3黒色土出土石器
- 第43図 各黑色土川土石器の石材の割合
- 第44図 中国地方の上偶出土遺跡
- 第45図 伝横田町出土土偶
- 第46図 中国地方出土土偶1
- 第47図 中国地方出土土偶2
- 第48図 中国地方における分銅形土偶の形態変化

図版目次

卷頭図版1 下山遺跡出土「屈折像土偶」	中: 2区 SK41セクション(北から)
卷頭図版2 「屈折像上偶」(手前)と復元模型(奥)	下: 2区 SK41(北から)
卷頭図版3 上: 下山遺跡調査前遠景	図版11 上: 2区 SK42(東から)
下: 下山遺跡遠景	中: 2区 SK43検出状況(東から)
卷頭図版4 上: 下山遺跡上層	下: 2区 SK43断面(東から)
下: 下山遺跡出土「双耳壺」(左)	図版12 上: 2区 SK44検出状況(東から)
築垣遺跡出土「双耳壺」(右)	中: 2区 SK44セクション(南から)
図版1 下山遺跡遠景(南西から)	下: 2区 SK46(南から)
図版2 下山遺跡遠景(北東から)	図版13 上: 2区 SK45(南から)
図版3 上: 下山遺跡 調査前遠景	中: 2区 SK47セクション(東から)
下: 下山遺跡2区土層	下: 2区 SK47(北から)
図版4 上: 1区 SI01遺物出土状況(北から)	図版14 上: 2区 SK43・44・46全景(南から)
中: 1区 SI01完掘状況(北から)	中: 2区 SK33~41・43~47全景
下: 2区 第1黒色土上面遺物出土状況	(北東から)
(北から)	下: 2区 第1ハイカ上面全景(南より)
図版5 上: 2区 第1黒色土土偶出土状況	図版15 上: 1区 第2ハイカ上面遠景(西から)
(東から)	中: 2区 第2黒色土焼土群検出状況
中: 2区 同上(北から)	(南から)
下: 2区 第1ハイカ上面SI02遺物出土	下: 2区 第2黒色土遺物出土状況
状況(東から)	図版16 上: 2区 第2ハイカ上面SK49~52
図版6 上: 2区 SI02完掘状況(北から)	(西から)
中: 2区 SK33セクション(南から)	下: 2区 SK49(西から)
下: 2区 SK34セクション(南から)	図版17 上: 2区 SK53~60(南から)
図版7 上: 2区 SK33・34(東から)	中: 2区 SK65検出状況(南から)
中: 2区 同上(西から)	下: 2区 SK61~65(西から)
下: 2区 SK35セクション(北から)	図版18 上: 2区 SK66セクション(南から)
図版8 上: 2区 SK35(北から)	中: 2区 SK66(東から)
中: 2区 SK36(右)37(左)セクショ	下: 2区 SK67~69検出状況(南から)
ン(西から)	図版19 上: 2区 SK69(東から)
下: 2区 SK36・37(北から)	中: 2区 SK70~78(東から)
図版9 上: 2区 SK38(左)・39(右)セクショ	下: 2区 SK80(北から)
ン(北から)	図版20 上: 2区 SK81(南から)
中: 2区 SK38・39完掘	中: 2区 SK82(右)83(左)セクショ
下: 2区 SK40セクション(北から)	ン(南から)
図版10 上: 2区 SK40(東から)	

- 下：2区 SK84
- 図版21 上：2区 第2ハイカ上面SK群遺景
(東から)
- 中：2区 同上(北から)
- 下：2区 SK85検出状況(東から)
- 図版22 上：2区 SK85セクション(南から)
- 中：2区 SK85(西から)
- 下：2区 第2ハイカ上面遺景(南から)
- 図版23 上：1区 第3黒色土SK群・焼土群検出
状況(北から)
- 中：1区 第3黒色土SK86検出状況
(南から)
- 下：1区 SK86セクション(南から)
- 図版24 上：1区 SK87検出状況(南から)
- 中：1区 SK87セクション(南から)
- 下：1区 29号焼土検出状況(南から)
- 図版25 上：1区 第3ハイカ上面ピット群検出状
況(南から)
- 中：1区 調査終了後全量(南西から)
- 下：2区 第3ハイカ上面SK88(南から)
- 図版26 上：2区 SK89(南から)
- 中：2区 SK90(南から)
- 下：2区 SK91(南から)
- 図版27 上：2区 SK92
- 中：2区 SK93
- 下：2区 SK94
- 図版28 上：2区 SK97
- 中：2区 SK98
- 下：2区 SK99
- 図版29 上：2区 SK100
- 中：2区 SK101
- 下：2区 SK102
- 図版30 上：2区 SK105
- 中：2区 SK106
- 下：2区 SK88~105遺景(東から)
- 図版31 上：下山遺跡採集両性只有石器
下：1区 第1黒色土出土遺物
- 図版32 上：1区 第1黒色土出土遺物
- 下：1区 同上
- 図版33 上：1区 第1黒色土出土遺物
- 下：1区 同上
- 図版34 上：1区 第1黒色土出土遺物
- 下：1区 同上
- 図版35 上：1区 第1黒色土出土石器
- 下：1区 第1黒色土出土石器
- 図版36 上：1区 第1黒色土出土石器
- 下：1区 同上
- 図版37 上：1区 第1ハイカ上面SI01出土遺物
- 下：1区 同上
- 図版38 上：1区 第1ハイカ上面SI01出土石器
- 下：2区 第2地点 第1黒色土出土遺物
- 図版39 上：2区 盛土層出土遺物
- 下：2区 同上
- 図版40 上：2区 盛土層山上石器
- 下：2区 同上
- 図版41 上：2区 第1黒色土出土遺物
- 下：2区 同上
- 図版42 上：2区 第1黒色土出土遺物
- 下：2区 同上
- 図版43 上：2区 第1黒色土出土遺物
- 下：2区 同上
- 図版44 上：2区 第1黒色土出土遺物
- 下：2区 同上
- 図版45 上：2区 第1黒色土出土遺物
- 下：2区 第1黒色土出土土偶・耳環・土
製品
- 図版46 上：2区 第1黒色土出土土偶・耳環・土
製品
- 下：2区 第1黒色土出土石器
- 図版47 上：2区 第1黒色土出土石器
- 下：2区 同上
- 図版48 上：2区 第1黒色土出土石器
- 下：2区 同上
- 図版49 上：2区 第1黒色土出土遺物
- 下：2区 同上
- 図版50 上：2区 第1ハイカ上面SI02出土遺物

	下: 2 区 同上		
図版51	上: 2 区 第1ハイカ上面ビット内山上遺物 下: 2 区 第1ハイカ上面SK群周辺・SK33出土遺物	上: 2 区 第2黒色土山上遺物 下: 2 区 同上	図版67
図版52	上: 2 区 第1ハイカ上面SK35出土遺物 下: 2 区 第1ハイカ上面SK40出土遺物	上: 2 区 第2黒色土山上遺物 下: 2 区 同上	図版68
図版53	上: 2 区 第1ハイカ上面SK40山上遺物 下: 2 区 第1ハイカ上面SK36・37出土遺物	上: 2 区 第2黒色土山上遺物 下: 2 区 同上	図版69
図版54	上: 2 区 第1ハイカ上面SK38・39出土遺物 下: 2 区 第1ハイカ上面SK41・42出土遺物	上: 2 区 第2黒色土山上遺物 下: 1 区 同上	図版70
図版55	上: 2 区 第1ハイカ上面SK43出土遺物 下: 2 区 第1ハイカ上面SK44出土遺物	上: 2 区 第2黒色土山上遺物 下: 2 区 同上	図版71
図版56	上: 2 区 第1ハイカ上面SK45・46出土遺物 下: 2 区 第1ハイカ上面SK46出土遺物	上: 2 区 第2黒色土山上遺物 下: 2 区 同上	図版72
図版57	上: 2 区 第1ハイカ上面SK47出土遺物 下: 2 区 第1ハイカ上面SK48出土遺物	上: 2 区 第2黒色土山上遺物 下: 2 区 同上	図版73
図版58	上: 1 区 第2黒色土出土遺物 下: 1 区 同上	上: 2 区 第2黒色土出土遺物 下: 2 区 同上	図版74
図版59	上: 1 区 第2黒色土出土遺物 下: 1 区 同上	上: 2 区 第2黒色土出土遺物 下: 2 区 同上	図版75
図版60	上: 1 区 第2黒色土出土石器 下: 2 区 第2黒色土燒土群出土遺物	上: 2 区 第2黒色土出土遺物 下: 2 区 同上	図版76
図版61	上: 2 区 第2黒色土出土遺物 下: 2 区 同上	上: 2 区 第2黒色土出土石器 下: 2 区 同上	図版77
図版62	上: 2 区 第2黒色土出土遺物 下: 2 区 同上	上: 2 区 第2黒色土出土石器 下: 2 区 同上	図版78
図版63	上: 2 区 第2黒色土出土遺物 下: 2 区 同上	上: 2 区 第2黒色土出土石器 下: 2 区 同上	図版79
図版64	上: 2 区 第2黒色土出土遺物 下: 2 区 同上	上: 2 区 第2黒色土出土石器 下: 2 区 同上	図版80
図版65	上: 2 区 第2黒色土出土遺物 下: 2 区 同上	上: 2 区 第2黒色土出土石器 下: 2 区 同上	図版81
図版66	上: 2 区 第2黒色土出土遺物 下: 2 区 同上	上: 2 区 第2黒色土出土石器 下: 2 区 同上	図版82
			上: 2 区 第2ハイカ上面SK群周辺山上石器 下: 2 区 同上
			上: 2 区 第2ハイカ上面SK49・50・52出土遺物 下: 2 区 第2ハイカ上面SK53～57出土

	遺物	上出土遺物
図版85	上：2区 第2ハイカ上面S K58~60出土 遺物 下：2区 第2ハイカ下面S K61~64出土 遺物	上：1区 第3黒色土43・45~48号焼土出 土遺物 下：1区 第3黒色土S K87出土遺物
図版86	上：2区 第2ハイカ上面S K65・66出土 遺物 下：2区 第2ハイカ上面S K66出土遺物	上：1区 第3黒色土出上遺物 下：1区 同上
図版87	上：2区 第2ハイカ上面S K67・68出土 遺物 下：2区 第2ハイカ上面S K72~75出土 遺物	上：1区 第3黒色土出土遺物 下：同上
図版88	上：2区 第2ハイカ上面S K77・78出土 遺物 下：2区 第2ハイカ上面S K79・80・84 出土遺物	上：1区 第3黒色土出土石器 下：1区 同上
図版89	上：2区 第2ハイカ上面S K81・83出土 遺物 下：2区 第2ハイカ下面S K85出土双耳 壺（上から）	上：2区 第3黒色土出土遺物 下：2区 同上
図版90	上：2区 第2ハイカ上面S K85出土双耳 壺（横から） 下：2区 同上（下から）	上：2区 第3黒色土出土石器 下：2区 同上
図版91	上：2区 第2地点 第2黒色土出土遺物 下：2区 同上	上：2区 第3黒色土出土石器 下：2区 第3ハイカ上面S K89・106出 土遺物
図版92	上：2区 第2地点 第2黒色土出土遺物 下：1区 第3黒色土27号焼土出土遺物	上：2区 第2地点 第3黒色土出土遺物 下：2区 第2地点 第3黒色土出土石器
図版93	上：1区 第3黒色土27号焼土出土遺物 下：1区 第3黒色土29・34・51・53号燒	上：2区 第2地点 第3黒色土出土石器 下：2区 第2地点 同上

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

志津見ダムは、斐伊川・神戸川治水計画の一環として建設される洪水調節川のダムである。昭和47年の集中豪雨により、斐伊川と神戸川が大洪水を引き起こし、出雲平野周辺地域や松江市街地に大きな被害をもたらした。この災害により、斐伊川と神戸川の抜本的な治水計画が検討され、両河川を一体とした治水事業が計画されたのである。

ダムは神戸川の上流に位置する飯石郡頃原町志々地区に建設され、湛水地域は頃原町大字角井、志津見、八神地域にまたがり、面積は230haに及ぶ。この地域内には多くの埋蔵文化財の存在が推定されたことから、島根県教育委員会は頃原町教育委員会が進めていた町内の遺跡分布調査事業に同調し、昭和63年にダム建設予定地内の分布調査を行った。結果、志々地区で150ヶ所にのぼる埋蔵文化財が確認され、ダム建設予定地には44か所の遺跡と6か所の遺跡推定地が存在することが判明した。

また、これと同時にダム建設によって消えゆく民俗文化財について昭和63年から2カ年で渡り調査が行われ、その結果は平成2年度に公刊されている¹⁰⁾。

埋蔵文化財の発掘調査は、建設省（現国土交通省中国地方整備局）より委託を受け平成元年度から調査を開始している。その後の発掘調査及び範囲確認調査により、ダム湛水地域の他、生活再建地や道路付替工事など関連事業地内で31ヶ所の遺跡が調査の対象となり、平成13年度の調査終了段階で29遺跡の調査を完了している。

下山遺跡は、飯石郡頃原町大字角井1242ほかに所在する周知の遺跡で、ダム湛水地域と国道184号線の付替予定地に含まれている。調査は事業に先立ち、緩斜面に広がる7023m²を調査対象地とし、平成7年度から2カ年で渡り調査を行った。

第2節 調査経過

下山遺跡は神戸川左岸の丘陵状緩斜面に存在する。遺跡の発掘調査は平成7年4月20日に着手し、途中、冬季の調査休止期間や緊急に発掘を行った殿淵山毛宅前鉄跡の調査を挟みながら、平成8年12月26日の終了まで2カ年を要した。

遺跡の発見は古く、昭和31年に遡る。水田耕作中に偶然、縄文時代のものと思われる両性具有石器¹¹⁾が発見されたことによる（第1図）。その後、頃原町では昭和63年から平成元年にかけて町内の埋蔵文化財詳細分布調査を進めており、その際に石器出土地を下山遺跡として登録し、一般に周知されることになったのである。また、頃原町志々地区は古くからたら製鉄が盛んに行われた地域であるが、文献史料には角井村下山鉄山の記載があり、周辺から鉄滓等も表採されたことから、この付近に製鉄遺構が存在することも当初から推測されていた。従って遺跡地図には「下山遺跡」と「下山鉄跡」の2ヶ所が記されている¹²⁾。

遺跡の調査前は一部の宅地を除き水田及び畠地が広がっており、丘陵斜面は壠田状にかなり平坦に削平されていた。かなり広大な面積なので、本調査に先立って遺跡の範囲確認のためトレンチ調査を行うことから始めた。その結果、遺物や遺構が確認された範囲が大きく2ヶ所に区分されたため、平坦面の東側を1区、西側を2区とした（第2図参照）。また、このトレンチ調査で2区の調査区東端付近から製鉄炉とみられる焼土面が確認された。なお、遺跡には黒ボク上を挟んで三瓶山火山灰（ハイカ）が3層堆積していることが確認でき、遺跡の基本層序は表土—第1 黒色土層—第1 ハイカ層—第2 黒色土層—第2 ハイカ層—第3 黒色土層—第3 ハイカ層であることが明らかとなっ

た。最下層の第3黒色土層からも遺物が出土したことから、調査は火山灰を掘り下げて行うことになった。雪に悩まされながらも1区の第1ハイカ層上面で弥生時代前期の竪穴住居1棟を検出するなどし、12月20日をもって平成7年度の現地での調査を終えた。

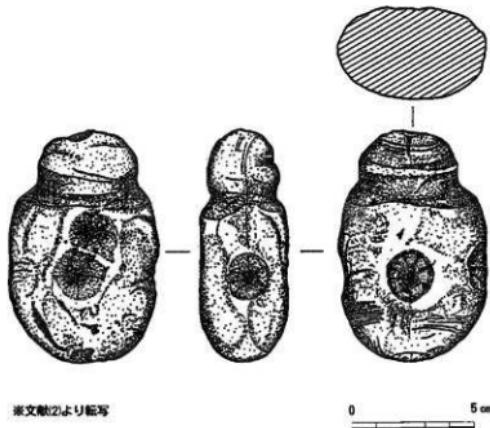
翌平成8年度は4月20日より現地調査を開始し、1区の続きと2区の掘り下げを平行して行った。途中、2区の第1ハイカ層を第2ハイカ層と取り違え、それまでに出上したすべての遺物の注記を書き直すなどのアクシデントもあったが、7月には2区の第1黒色土層から東北地方からの搬入品とみられる「屈折像土偶」が出土し、大きな話題を集めめた。

その後、1区では縄文時代早期前葉の押型土器や集石炉等を検出。2区では第1ハイカ上面で立石を伴う集石遺構を16基、さらに第2ハイカ上面では集石土壤を33基、第3ハイカ層上面では落し穴を18基検出するなど、多量の土器類とともにほぼ縄文時代を通じて生活の痕跡を確認することができた。

一方、2区の製鉄関連遺構についても、黒色土の掘り下げと同時進行で調査を行った。製鉄炉は2基重なって検出され、いずれもやや小規模ながら床釣構造をもつものであった。これが文献に記載されている「下山鉄山」に相当する可能性も考えられる。また製鉄炉周辺からは排滓場や炉壁胎土の採掘跡とみられる大型土坑、炭窓状遺構などが検出された。また製鉄炉の機能や性格、原料等について検討できるよう排滓場から製鉄関連遺物の一定量の取り上げも行った。

なお、調査成果を地域に還元する活動も併せて行っている。8月14・15日には頸原町生涯学習センターで土偶を一般公開、10月5日には現地説明会も開催し、交通が不便な立地にもかかわらず100名以上の参加者があった。

現地調査は12月で終了したが、報告書の作成に向けて遺物の整理を平成9年度以降も引き続き行った。特に製鉄関連遺物についての分類・検討作業を重点的にを行い、これらの成果は前刊である『下山遺跡(1)－製鉄関連遺構の調査－』で詳細に報告している。この他にも縄文時代の穀物栽培を明らかにすべく、遺跡の各上層からプラントオバール試料の採取なども行った。



第1図 下山遺跡採集の「両性具有石器」 S=1/2



第2図 下山遺跡と周辺の地形 S=1/2000

第1章（註）

- (1) 島根県教育委員会「志津見の民俗」「志津見ダム民俗文化財調査報告書」1990
- (2) 山崎 修「頃原町下山遺跡出土の石器について」『八重立つ風土記の丘』No.112 1992
- (3) 頃原町教育委員会『頃原町埋蔵文化財詳細分布調査報告（1）志々地区』1989

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境と下山遺跡の層序

中国山地に源を発する神戸川は、優美な姿で知られる三瓶山（標高1126m）の東麓を北流し、日本海に流れ下る。下山遺跡はその神戸川の中流域に位置しており、島根県飯石郡頃原町大字角井に所在する。角井地域は現在は頃原町に属しているが、1889（明治22）年の町村制施行では飯石郡志々村とされていたところで、1957（昭和32）年に旧頃原町と合併して頃原町に編入され現在に至っている¹⁰⁾。

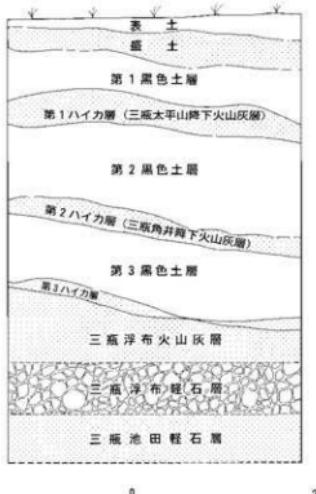
下山遺跡は神戸川にその支流である角井川が流れ込む地点に位置しており、南西向きの谷状緩斜面に當まれている。遺跡の周辺の地形は宅地や耕地で改変されているが、遺跡の立地する緩斜面の四方は起伏量400~200mの中起伏山地が重なり、谷状地形の出口付近も狭長である。従って、遺跡を俯瞰するとあたかも盆地状の地形をなしており、川沿いからは遺跡を望むことができない。調査前は耕作地であったため開墾により広く平坦面が形成されてはいたが、現状の周辺地形からみて本来はかなりの急斜面が続いていたのではないかと想像される。

また、下山遺跡は今から約10万年前から約3600年前まで噴火活動を繰り返した三瓶山の東約5kmに位置しており、その火山灰や火碎流など三瓶山由來の堆積物や黒ボク土壌が見られる。従って下山遺跡の基本的な層序は、上層から「表土」「盛土」「第1黒色土層」「第1ハイカ層」「第2黒色土層」「第2ハイカ層」「第3黒色土層」「第3ハイカ層」「三瓶浮布火山灰層」「三瓶池田降下軽石層」となっている。「ハイカ」とは、地元で一瓶山の火山灰を指す呼称で便宜上土層名として用いており、地学的には第1ハイカ層は三瓶太平山火山灰、第2ハイカ層は一瓶角井火山灰と呼ばれ、その年代は¹⁴C年代で第1ハイカ層が

3530+100~3710±130、第2ハイカ層が4780±100と推定されている。なお、頃原町志津見の板屋Ⅲ遺跡¹¹⁾では、第3ハイカ層の下層で「第4黒色土層」が検出されているが、下山遺跡では確認できなかった。これは遺跡が谷状緩斜面に立地していることから流出したと考えられる。また下山遺跡の火山灰層は層状に堆積しておらず、同様の理由から周辺に降下した火山灰が2次的に堆積したものであることが指摘されている¹²⁾。

その他の火山灰については、第3ハイカ層は第3黒色土上層部でアカホヤ灰層準があることから約1万年前~6300、浮布火山灰層・浮布降下軽石層は約1.56万年~1万年前、池田降下軽石層は約3万年前~4万年前と考えられている¹³⁾。

ところで、下山遺跡では2区の南東端部で池田降下軽石層が地表に露出している範囲がある。板屋Ⅲ遺跡では表土下約7mで池田降下軽石層が確認されることから、これは以前、丘陵状の高まりだった部分が平坦に削平されたために露出したと考えられる。



第3図 下山遺跡土層模式図

製鉄炉がこの露出した池田降下軽石層に掘り込まれていることから、製鉄炉を構築するため意図的に削平されたものである可能性が高い。

第2節 歴史的環境

前述したように、頓原町志々地区は150か所以上の遺跡が確認されている^⑨。近年の志津見ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査でこの地域の歴史の一端が解明されつつあり、特に縄文時代遺跡と製鉄関連遺跡については県内でも有数の遺跡分布密度と規模を誇っている。

『出雲國風土記』によれば志々地区は「飯石郡波多郷」に属する。波多郷を流れる「波多小川」からは砂鉄が取れるといった記述があり、この地域周辺で古代から製鉄が行われていたことを臭わせている。また、神戸川沿いには「志都見徑」が通り、政ある時には臨時に「剣」が置かれたと記されている。この志津見の「剣」は大字志津見の印明劍神社跡付近に比定されており、この地域が古くから交通の要所だったことを伺わせる^⑩。

なお、この地域の遺跡は山間に開けた砂礫段丘など僅かな平坦面を利用しているため、時期的にかなり長期に渡って営まれた複合遺跡が多い。これは地形的に起伏に富んだ山地と渓谷が入り組み、平坦面が限られるという地理的制約によるところが大きい。以下、頓原町及び周辺地域の主な遺跡を時代ごとに取り上げ、この地域の歴史的環境を概観してみたい。

縄文時代

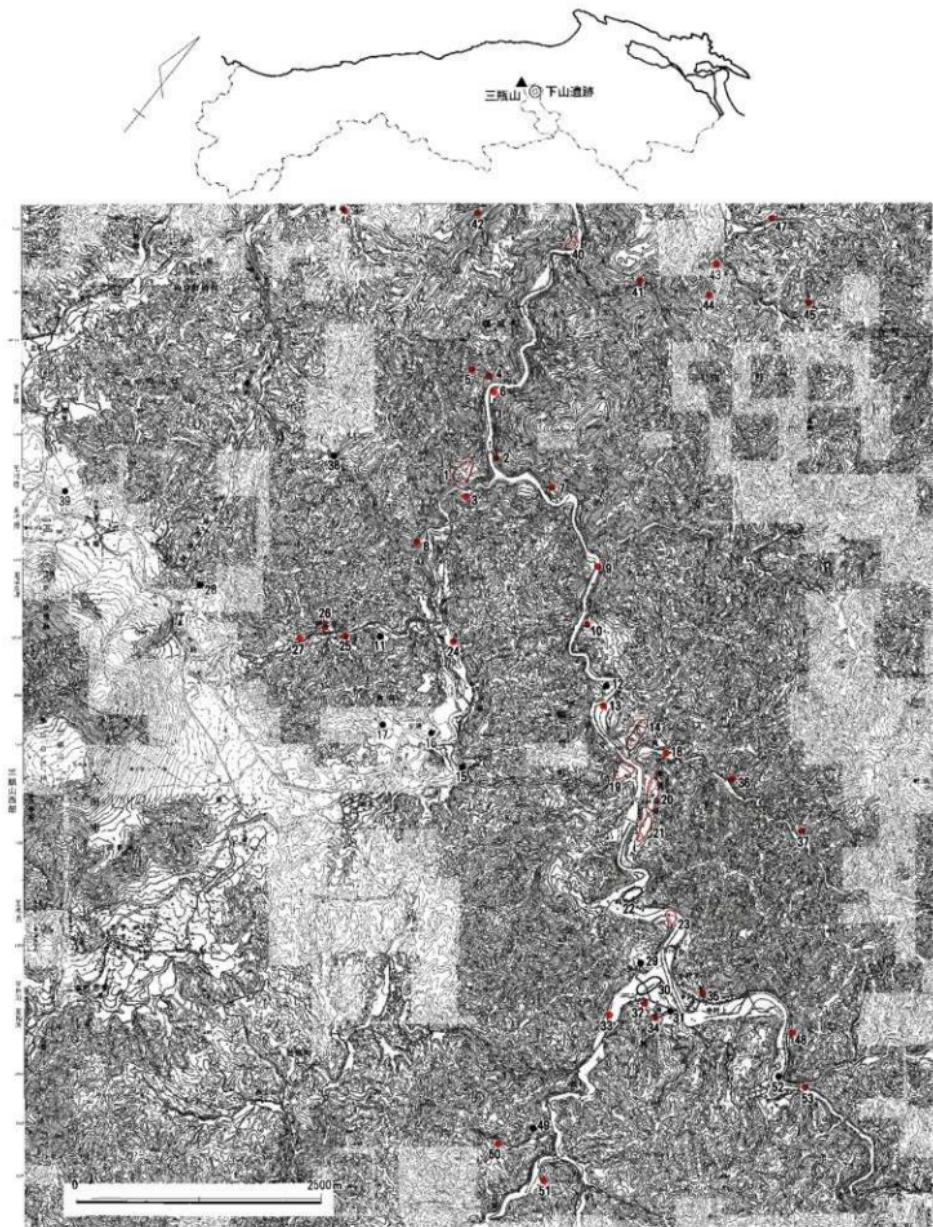
頓原町及び周辺地域においては、旧石器時代の遺跡は見つかっていない。現在のところ最古の遺物は板屋Ⅲ遺跡で出土しており、草創期末～早期初頭の表裏条痕土器が検出されている。なお、板屋Ⅲ遺跡は縄文時代の遺構・遺物と三瓶火山灰が層位的に初めて確認された遺跡である。第3黒色土層が縄文時代草創期末～前期末、第2黒色土層が前期末～後期前葉、第1黒色土が後期中葉以降の遺構面・遺物包含層であることが明らかになっており、周辺の遺跡を調査する際のひとつの基準となっている。

周辺の代表的な縄文時代遺跡としては、五明田遺跡^⑪、森遺跡^⑫、門遺跡^⑬、貝谷遺跡^⑭、そして下山遺跡などがあげられる。このうち五明田遺跡では後期初頭～前葉の竪穴住居や磨消縄文土器が良好な状態で多量に発見され、この地域の拠点的性格を持つ集落跡と考えられる。また、下山遺跡は板屋Ⅲ遺跡に継いで縄文時代の早期以降の遺構・遺物が層位的に確認された遺跡である。その他注目すべき遺構・遺物として後期の土偶が五明田遺跡、門遺跡、下山遺跡で検出されている。このうち下山遺跡の土偶は東北地方からの搬入品とみられる「屈折像土偶」^⑮と考えられ、当地域の縄文文化を知る上で貴重な発見となった。

弥生時代

弥生時代の遺構・遺物は後期のものが多いが、前期まで遡るものは森遺跡、五明田遺跡、板屋Ⅲ遺跡、下山遺跡で検出されている。下山遺跡では前期後半の竪穴住居跡が、板屋Ⅲ遺跡では前期後半の配石遺構群が検出されている。中期は森遺跡、板屋Ⅲ遺跡、門遺跡、神原遺跡^⑯などで確認されており、中期後葉の広島県北部を中心に展開する塙町式系上器や、流水文が施される大形窯が出土している。後期には森遺跡で環濠をもつ集落が検出されている他、碧玉製管玉を141点副葬した木棺墓などが注目される。

古墳時代



第4図 下山遺跡と周辺の遺跡 S=1/50000

表1 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	備考
1	下山遺跡	製鉄遺跡・集落跡	製鉄炉2・縄文時代集落・配石遺構群など
2	殿淵山毛宅前鉄跡	製鉄遺跡	製鉄炉1
3	椎乳山鉄跡	製鉄遺跡	
4	戸井谷尻遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉1・人鍛冶場1
5	戸井谷遺跡	製鉄遺跡	
6	長老畠遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉1
7	大横鉄跡	製鉄遺跡	製鉄炉2・鍛冶炉5
8	獅子谷遺跡	製鉄遺跡	鍛冶炉12
9	丸山遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉1
10	貝谷遺跡	製鉄遺跡・集落跡	製鉄炉・縄文時代集落など
11	伊比谷遺跡	遺物散布地	
12	後平遺跡	遺物散布地	
13	徳原遺跡	製鉄遺跡	
14	板屋Ⅲ遺跡	製鉄遺跡・集落跡	製鉄炉2・精錬鍛冶炉2・縄文～奈良時代集落など
15	杉戸遺跡	遺物散布地	
16	角井遺跡	遺物散布地	
17	堂ノ前遺跡	横穴墓	横穴墓1
18	円谷尻遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉
19	門遺跡	製鉄遺跡・集落跡・古墳	製鉄炉1・鍛冶炉4
20	神原Ⅱ遺跡	製鉄遺跡・集落跡	鍛冶炉2・縄文～古墳時代
21	神原Ⅰ遺跡	集落跡	縄文～古墳時代集落など
22	小丸遺跡	集落跡	古墳～奈良時代集落など
23	中原遺跡	製鉄遺跡・古墳	人鍛冶場1・横穴式石室1など
24	向原遺跡	製鉄遺跡	
25	伊比谷1号鉄跡	製鉄遺跡	
26	伊比谷2号鉄跡	製鉄遺跡	
27	伊比谷3号鉄跡	製鉄遺跡	
28	桥ヶ峠遺跡	遺物散布地	
29	谷川遺跡	集落跡	縄文・弥生・上師器等
30	森遺跡群	集落跡	弥生～奈良時代集落など
31	五明田遺跡	集落跡	縄文時代集落など
32	十居ノ上新遺跡	製鉄遺跡	
33	坂根鍛冶跡	製鉄遺跡	
34	段原鍛冶跡	製鉄遺跡	
35	度雲寺鉄跡	製鉄遺跡	
36	円谷鉄跡	製鉄遺跡	
37	弓谷奥鉄跡	製鉄遺跡	
38	獅子谷遺跡	遺物散布地	
39	大水原遺跡	遺物散布地	
40	棲原遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉2・精錬鍛冶炉1・鍛冶炉2
41	保井谷鉄跡	製鉄遺跡	
42	柳瀬鉄跡	製鉄遺跡	
43	梅ヶ谷尻鉄跡	製鉄遺跡	製鉄炉2
44	梅ノ木谷鉄跡	製鉄遺跡	
45	堂の本鉄跡	製鉄遺跡	
46	漸越鉄跡	製鉄遺跡	
47	木谷鉄跡	製鉄遺跡	
48	鉢原鉄跡	製鉄遺跡	
49	三代木遺跡	遺物散布地	
50	三代木鉄跡	製鉄遺跡	
51	大歳鉄跡	製鉄遺跡	
52	比丘尼塚占墳	古墳	横穴式石室1
53	落合精錬所跡	製鉄遺跡	精錬所跡(近代)

古墳時代前期の遺構は板屋Ⅲ遺跡、門遺跡で弥生時代後期から続く竪穴住居がいくつかみられる。中期はあまり目立った遺構はみられないが、小丸遺跡²⁹と下山遺跡で中期後半の竪穴住居がいくつか知られるのみである。後期後半になると遺構数は増加し、森遺跡、板屋Ⅲ遺跡、門遺跡、神原遺跡、小丸遺跡などで集落が営まれている。また方形竪穴住居の壁沿いに作り付けの竈が設けられるのが特徴で、竈が付かない住居が一般的な半野部と対照的である。

また古墳や横穴墓も各地域で造られている。八神地域では横穴式石室を内蔵した比丘尼塚古墳、中原古墳³⁰が知られ、志津見地域では門1・2号墳、角井地域では常ノ原横穴墓が知られている。

奈良・平安時代

古墳時代後期以降継続して集落が営まれているものが多い。また、時期がやや不明瞭ながら森遺跡、門遺跡からは規則的で大型の柱穴をもつ掘立柱建物が検出されている。特に門遺跡のものは志都見の「剣」に関する施設や倉庫である可能性も考えられている。

中世

頼原町では古代に遡る製鉄関連遺跡は現在のところ確認されていないが、隣接する掛合町の羽森第3遺跡で古墳時代後期の製鉄炉が検出されている³¹。志々地区では現在52ヶ所の製鉄関連遺跡が確認されているが、実数はさらに多いものと考えられる³²。このうち江戸時代の高殿鉋成立以前とみられるものは製鉄遺跡が16か所、精錬鍛冶炉遺跡が4か所知られている。製鉄炉はすべて箱形であるが、地下構造は本床状遺構のみをもつもの（門遺跡1号炉、板屋Ⅲ遺跡1号炉）、本床状遺構の両側に小舟状遺構をもつもの（板屋Ⅲ遺跡4号炉、弓谷尻遺跡1号炉）の2形態に分類される。

またこの地域では平安時代末～室町時代にかけての精錬鍛冶炉がまとまって確認されている。板屋Ⅲ遺跡2・3号炉はその初源的なもので、半地下式堅型炉を精錬鍛冶炉用に改良したものであり、この時期に近世の大鍛冶場に近い機能をもった作業場が成立していたことが明らかになった。その他、門遺跡2号炉、戸井谷尻遺跡6号炉³³、佐田町植原遺跡V区1号炉³⁴でも確認されている。

近世

高殿鉋成立後の遺跡としては、志々地区で鉋跡が29ヶ所、大鍛冶場が9ヶ所知られている。このうち発掘調査されたものとしては、殿端山毛宅前鉋跡³⁵、長老畠遺跡³⁶、丸山遺跡³⁷、大槻鉋跡³⁸、下山遺跡、弓谷尻鉋跡³⁹があり、いずれも本床・小舟を備えた本格的な床鉋構造が確認されている。

大鍛冶場跡は高殿鉋に付属するものと、単独で立地するものの2者が確認されている。前者は大槻鉋跡、神原Ⅱ遺跡、佐田町植原鉋跡、後者は中原遺跡、戸井谷尻遺跡、獅子谷遺跡⁴⁰が知られている。特に獅子谷遺跡では12基の鍛冶炉が検出されている。

第3章 調査の概要

第1節 調査区の配置

第1章でも述べたように、下山遺跡では範囲確認調査の結果、遺跡の範囲を1区と2区に分けて調査を行った。合計面積は7,023m²であるが、1つの遺構の調査が終了すると下層の遺構・遺物の有無を確認するため試掘をし、出土すれば重機で火山灰を除去し下層の発掘を行うという手順をとっている。従って実際の調査面積はかなり広大なものになるだろう。ここでは、簡単に全体の調査成果を紹介してみたい。

調査は、調査区全体に国上座標系による基準点を設け、10m間隔に南北にA・B……P、東西に1・2……16というグリッドを設定した。遺物は、その交点の名称（例えば13L）で取り上げた（第5図）。

第2節 1区の調査

遺跡の立地する谷状緩斜面の出口付近である北東側を1区とする。調査面積は4,847m²、調査区西端と東端の標高差は約11mを測る。調査前の地形は水田等の開墾により削平されており、平坦面がテラス状に形成されていた。

検出された主な遺構は、第1ハイカ層上面で弥生時代前期の竪穴住居1棟、第2ハイカ層上面でピット群、第3黒色土層上面で焼土面28基、第3ハイカ層上面でピット群が検出されている。主な遺物としては、第1黒色土層で弥生前期土器、第2黒色土層で分銅形土偶、第3黒色土層で黄島式の押型文などが出土している。

第3節 2区の調査

谷状緩斜面の南西側を2区とする。面積は2,176m²、調査区西端と東端の標高差は約15mを測る。1区と同様に削平を受けており、特に調査区東側半分は削平・盛土によりテラス状の平坦面が幅広く形成されている。また東端付近は丘陵が平坦に削平され三瓶池田降下軽石層が露出している。1区に比べ火山灰・黒色土が比較的厚く堆積しており、表上から第3ハイカ層まで最深部で約5mを測る（第21図参照）。

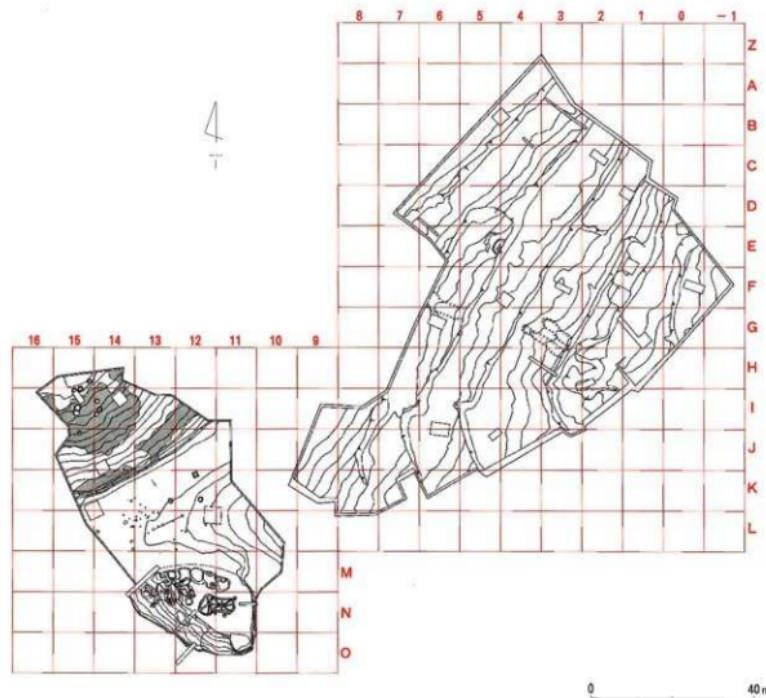
検出された主な遺構としては、三瓶池田降下軽石層露出部上面で製鉄炉2基・土坑20基・溝状遺構1基・炭窯状遺構1基、第1黒色土層上面で杭列状遺構1基・粘土貼土坑11基、第1ハイカ層上面で古墳時代中期後半の竪穴住居1棟・集石土坑16基、第2黒色土層上面で焼土面25基、第2ハイカ層上面で集石土坑36基、第3黒色土層上面で焼土面1基、第3ハイカ層上面で落し穴19基が検出されている。

主な遺物として、第1黒色土で彦崎K2式～宮流式の縄文土器・屈折像土偶、第2黒色土層で中津式・福田K2式・縁帶文系上器・双耳壺や石棒状石器、第3黒色土層で爪形文・押引沈線文・黄島式・神宮寺式の押型文土器などが検出されている。

なお、2区の第1黒色土上面や製鉄関連遺構の調査については前刊「下山遺跡（1）-製鉄関連遺構の調査-」で詳細に報告している⁹。

第2・3章（註）

- (1) 島根県教育委員会「志津見の民俗」「志津見ダム民俗文化財調査報告書」1990
- (2) 角田徳幸「板屋Ⅲ遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5」1996島根県教育委員会
- (3) 松井整司氏の御教示による。
- (4) 松井整司「三瓶火山の噴出物とその年代」「板屋Ⅲ遺跡（付編）」1998
- (5) 頼原町教育委員会『頼原町埋蔵文化財詳細分布調査報告（1）志々地区』1989
- (6) 加藤義成『修訂出雲国風土記研究』1981
- (7) 頼原町教育委員会『五明田遺跡』1991
- (8) 島根県教育委員会「森遺跡・板屋Ⅰ遺跡・森脇山城跡・阿丹谷让堂跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1」1994島根県教育委員会
- (9) 内田律夫「門遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3」1996島根県教育委員会
- (10) 神柱靖彦「貝谷遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書16」2002島根県教育委員会
- (11) 深田一浩「島根県頼原町下山遺跡出土の屈折像土偶」「考古学雑誌」第81巻第4号1996
- (12) 田原孝史「神原Ⅱ遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13」2002島根県教育委員会
- (13) 伊藤智・伊藤徳広「小丸遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14」2002島根県教育委員会



第5図 下山遺跡調査用グリッド設定図 S=1/1200

- (14) 角田達幸「中原遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」1999島根県教育委員会
- (15) 田中道亮「羽森第3遺跡」1998掛合町教育委員会
- (16) 角田達幸「中原遺跡（付編）」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6」1999島根県教育委員会
- (17) 目次譜一・寺尾 令「戸井谷伝遺跡・長老塚遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9」2001島根県教育委員会
- (18) 宮本正保「複原遺跡・谷川遺跡・殿瀬山毛宅前鉄跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4」1997島根県教育委員会
- (19) (18) 同じ
- (20) (17) 同じ
- (21) 勝部智明「大槻鉄跡・丸山遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10」2001島根県教育委員会
- (22) (21) 同じ
- (23) 1998年度頃原町教育委員会発掘調査
- (24) 東山信治「殿瀬山遺跡・獅子谷遺跡（1）」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書15」2002島根県教育委員会
- (25) 深田 浩「下山遺跡（1）」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7」2000島根県教育委員会

第4章 第1黒色土・第1ハイカの調査

前章で述べたように、下山遺跡は1・2区に区別され、それぞれ第1～3黒色土及び第1～3ハイカ層上面の調査を行っている。ここからは、層位を「第1黒色土・第1ハイカ」、「第2黒色土・第2ハイカ」、「第3黒色土・第3ハイカ」に分け、層位ごとの調査結果を1区・2区の順で記述していきたい。第1黒色土では、縄文時代後期中葉（彦崎K2）から古墳時代後期までの遺物が検出され、第1ハイカ上面では、1区で弥生時代前期の竪穴建物、2区で古墳時代中期の竪穴建物や縄文時代後期の集石遺構群が検出された。

第1節 1区の調査

1区は谷部の北東側に位置し、標高262～276m前後の斜面に立地する。調査区は南側がすさまる三角形を呈している。調査前の地形は水田等の開墾により、緩斜面はテラス状に7段に削平されていた。削平された段では、第3黒色土までが剥ぎ取られ崖錐性堆積物である礫屑が露出し、さらに剥ぎ取った土砂による盛土で平坦面が形成されていた（第7図参照）。また、各ハイカ層は20cm前後の厚さで堆積していたが、斜面に立地しているため完全に流失している範囲もみられ、そういう部分は黒色土の区別が困難であった。以下、第1黒色土、第1ハイカ上面の順に概要を追っていく。

1. 第1黒色土の調査

精査の結果、第1黒色土の上面では削平のためか遺構は検出されず、そのまま掘り下げを行った。遺物はおもに北側に分布しており、縄文時代の遺物を中心に須恵器、土師器、弥生土器、縄文土器（後期中葉～晩期）やスクレイバー、磨製石斧、打製石斧、磨石、蔽石、石鍤など多種多様な遺物が出土している。

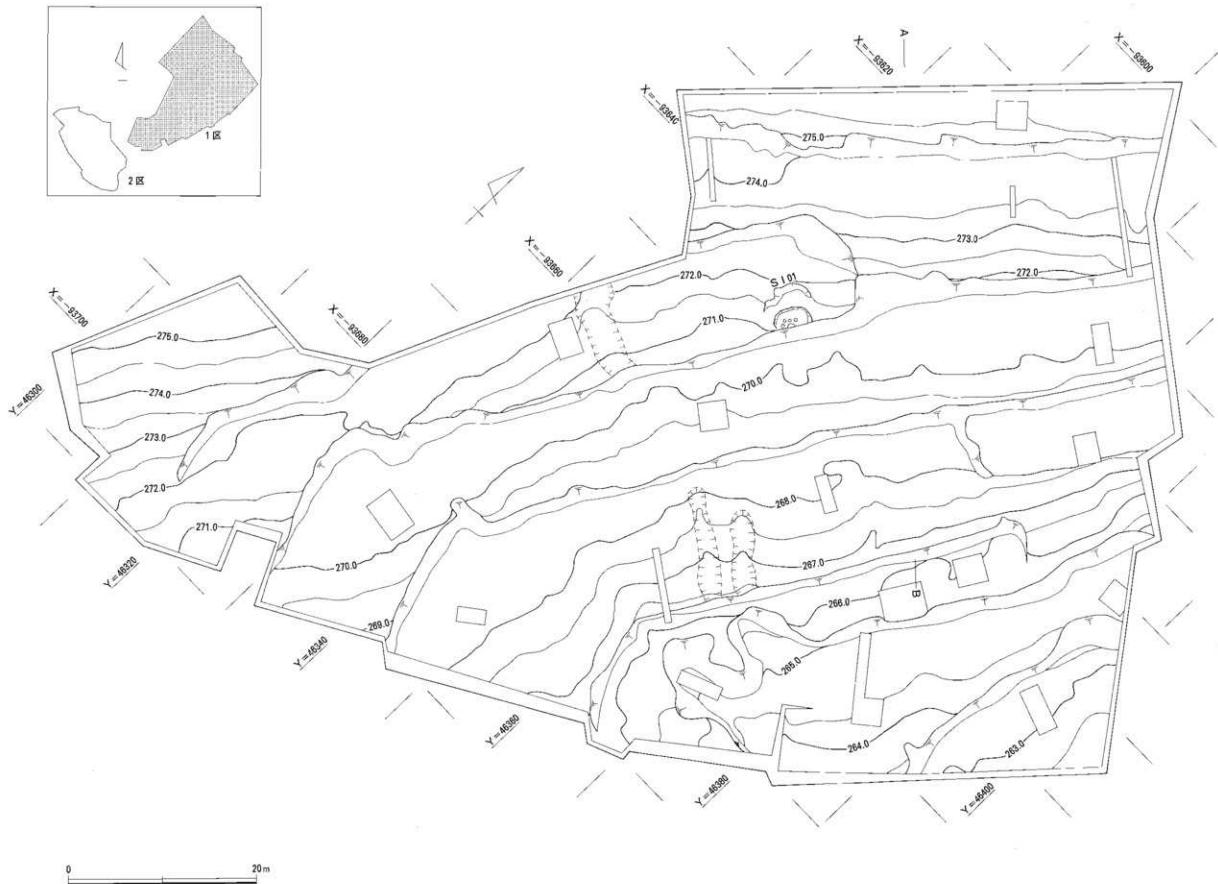
第1黒色土出土遺物（第8～16図）

第8～10図は縄文土器である。

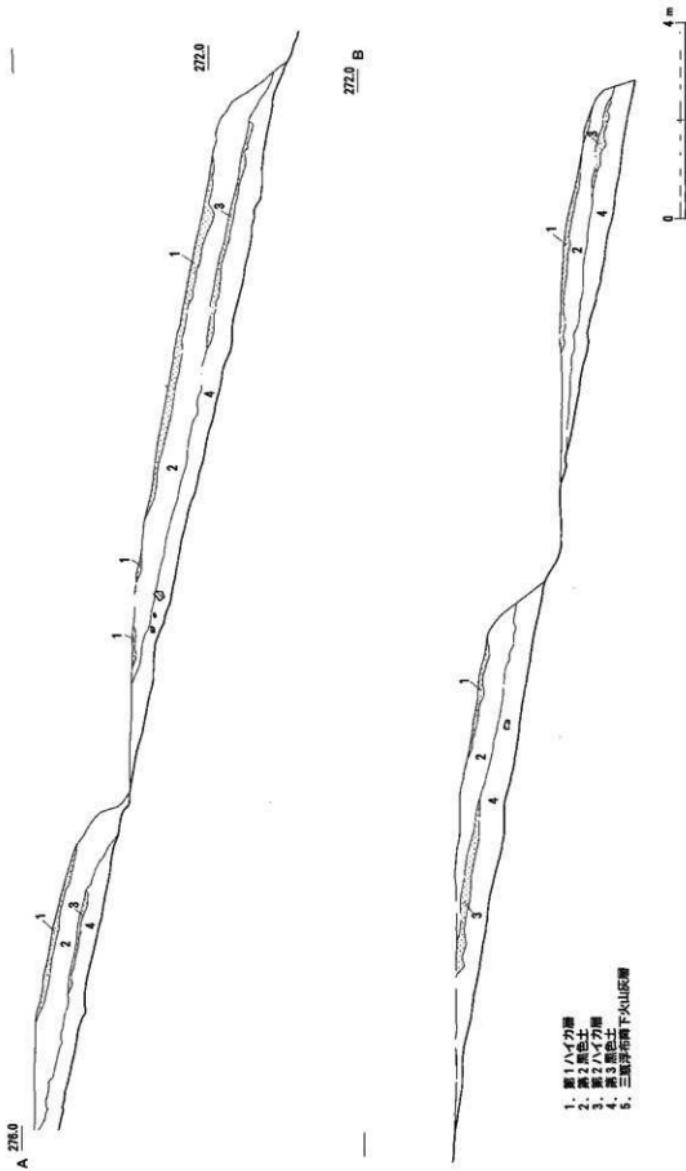
1～3は縄文が施される浅鉢である。1は口縁が外反し、先端部を若干欠くが端部外面を肥厚さ



調査前の下山遺跡



第6図 1区 第1ハイカ上面遺構配図 S=1/400



第7図 1区 A-Bセクション土層図 S=1/100

せ縄文が施されている。肩部は縄文を施した後、ナメ方向に3状の沈線が施される。口縁は波状口縁になる気配もみられ、頸部外面と内面は丁寧なミガキが施される。2は口縁が鉢状に広がるもので、口縁端部から2cm下がった範囲に沈線と縄文が施される。内面調整はナデである。3は肥厚する口縁と胴部に段をもつもので、それぞれ肥厚部に縄文が施される。調整はナデである。

これらは縦帯文系の十器とみられ、時期は後期中葉と考えられる。

4~11は口縁外間に凹線・沈線が施された浅鉢・深鉢である。4・5はくの字に屈曲する口縁をもち、4は外面に凹線文と凹線間に刻目文が、5は沈線と沈線下に刻目状の連続刺突文が施される。4口縁以下には巻貝によるとみられる条痕がみられる。器種は両者とも浅鉢とみられる。6・7は小片であるが、凹線文と凹線間に刻目文が施されている。8~11は波状口縁を呈する深鉢とみられる。外面に凹線文と巻貝による扇状圧痕文が施される。10は凹線間に刻目文がみられる。

これらの十器は元住吉山II式から宮滝式に相当し、時期は後期後葉～末とみられる。

12は無文の深鉢であるが、頸部と副部の境を段がみられる。13は頸部がヨコ方向の強いナデにより短くくびれる深鉢である。内外面に貝殻条痕ナデが施される。14は口唇部に刻みをもつ無文粗製深鉢である。15は頸部が屈曲し、口縁が大きく外反する粗製深鉢である。頸部に焼成後の穿孔がみられる。調整は内面が2枚貝条痕、外面がケズリ・ナデが施される。

16は器種は不明だが、胴部外面に円形突起を貼り付け、その上に細かい刺突が施されたものである。

17~19は沈線文・刺突文をもつ文深鉢である。17は口縁が大きく外反し、口縁直下に断面三角形の突帯が貼り付けられる。口縁内外面にヘラ描き沈線が口縁に平行して2条施され、外面にはタテ方向に垂下する3条の沈線も施される。18・19は口縁が緩やかに外反し、18には口縁内面に、19は頸部内面と肩部外面に押引き状の連続刺突文が施される。

これらの土器で時期が特定できるものとしては、13が滋賀甲III式、17~19が谷尻式に相当するとみられ、13が晩期前葉、17~19が晩期中葉と考えられる。

20・21・23~26は無文の深鉢である。口縁が緩やかに外反するもの(21・26)と垂直気味に立ち上がるもの(20・23・24・25)がある。23は内外面ともミガキが施され、精製の深鉢である可能性がある。他はいずれも条痕・ナデ調整の粗製深鉢である。

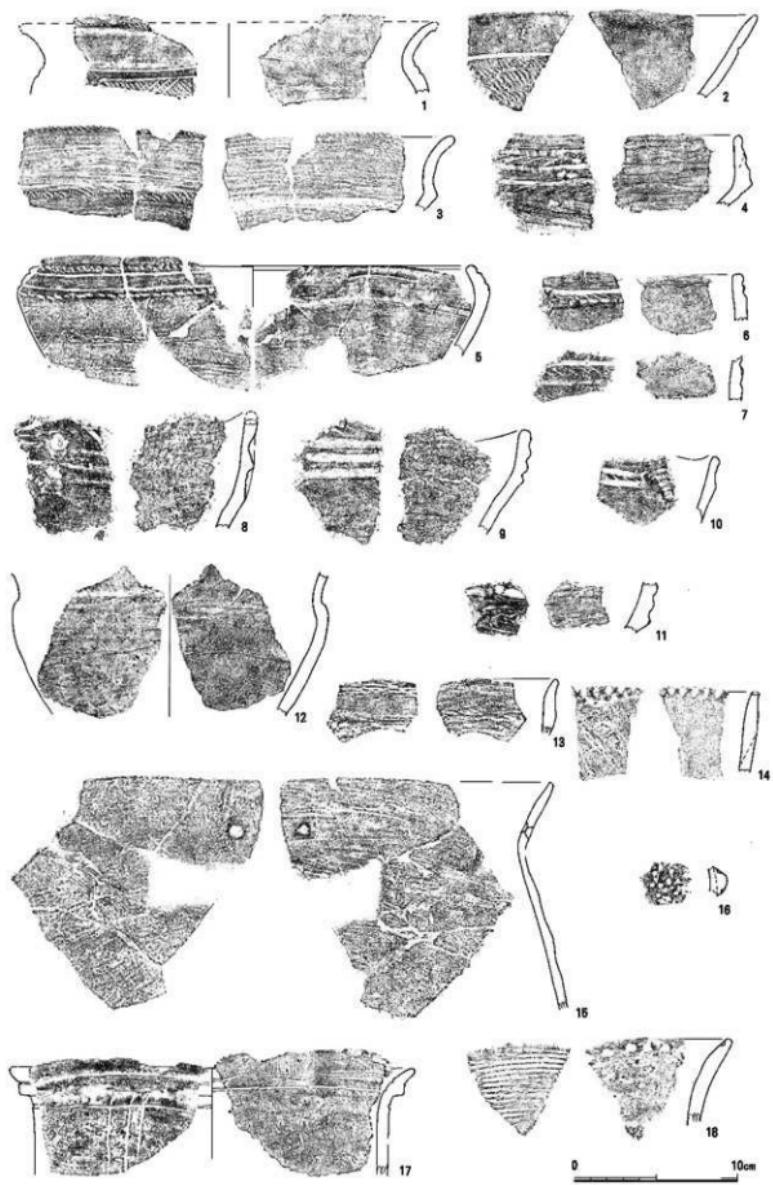
22は内面に断面三角形状の突帯が貼り付けられた粗製深鉢である。内外面とも条痕調整である。

28は内外面ともミガキが施される無文精製土器で、口縁外側が肥厚する。

これらの時期の特定は難しいが、22は板屋II遺跡¹¹では第2黒色土、神原I遺跡¹²では第1黒色土から検出される上器である。

27・29~42は突帯文土器である。27・29は突帯・口縁端部にキザミをもたないものである。28・30~33は突帯・口縁端部の両方にキザミをもつもので、34~40は突帯にキザミをもつが、口縁端部にはキザミをもたないものである。器形はいずれも頸部がくびれるタイプとみられるが、36は口縁が内湾しそのまま底部に至るものかもしれない。41・44は2条突帯の胸部である。前池式～沢田式に相当するとみられ、これらの時期は晩期後葉である。

第10図43~57は浅鉢とみられるものである。43~48は四線文・沈線文をもつ浅鉢である。43~47は口縁外面に2条、内面端部付近に1条の凹線文をもつものである。いずれも口縁が大きく外反し、43・44は巻貝による扇状圧痕文が施される。48は口縁が端部にかけて細く尖り、外面に不揃いの沈

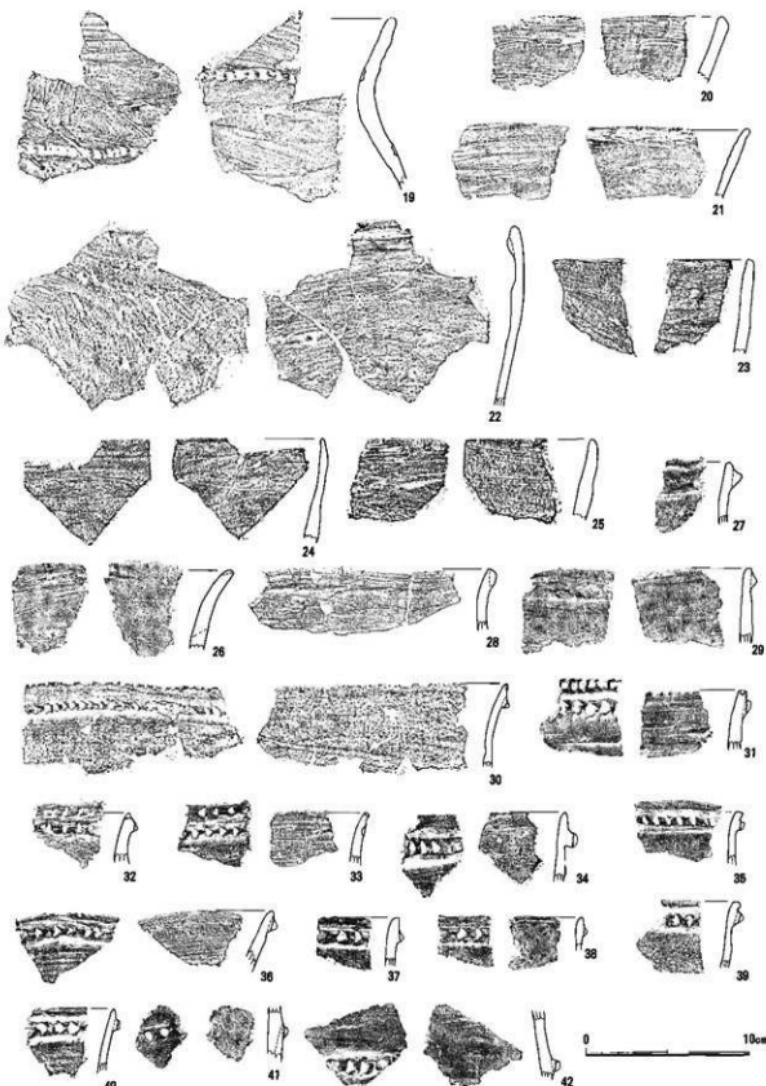


第8図 1区 第1黑色土出土遺物 1 S=1/3

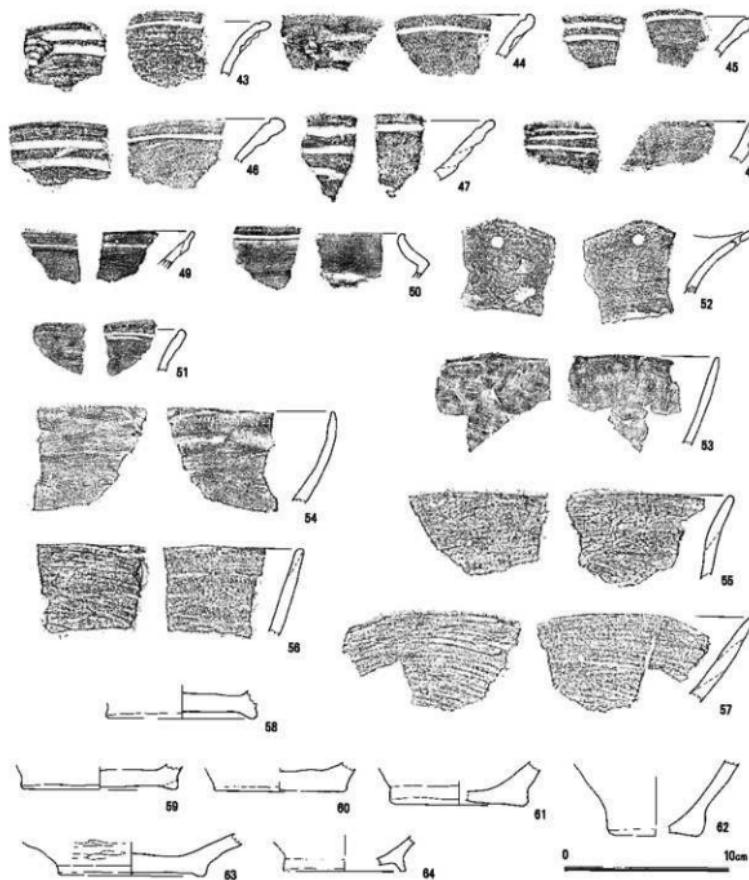
線が3条施される。

これらの土器は宮滝式の特徴をもつものであり、時期は後期末と考えられる。

49~53は黒色磨研系の無文精製浅鉢である。49は頸部が屈曲し短い口縁をもつものである。50は



第9図 1区 第1黑色土出土遺物 2 S=1/3



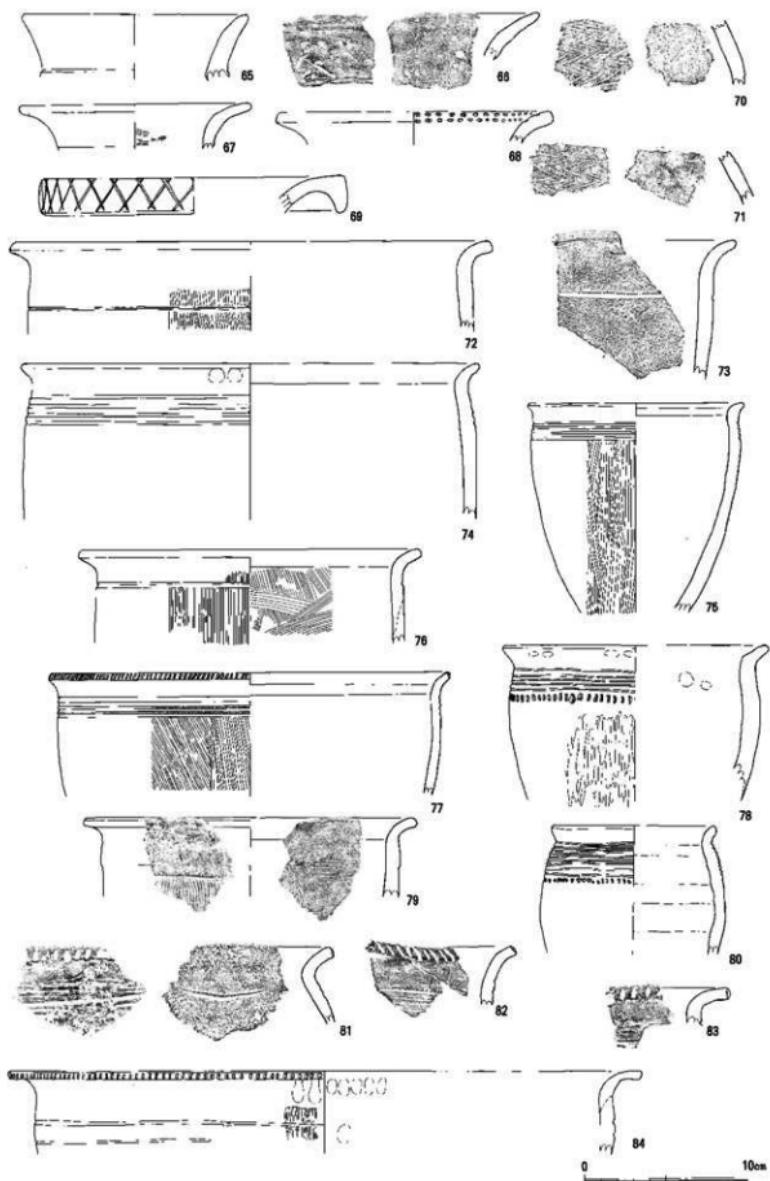
第10図 1区 第1黑色土出土遺物3 S=1/3

肩部が「く」の字に屈曲し、口縁が短く立ち上がるるものである。外面に沈線が1条施される。51は口縁が外反し、端部は若干肥厚する。内面に不塗いの沈線が2条施される。52は口縁が大きく波状口縁になり、平面形が方形を呈する方形浅鉢の波頂部である。波頂部下方に焼成前の穿孔がみられる。

これらは、いずれも尖帯文期に特徴的な浅鉢と考えられ、時期は晩期後葉とみられる。

53~57は無文の精製浅鉢である。いずれも丁寧なミガキが施され、口縁が内湾気味に立ち上がるるもの(53・54)、外反するもの(55)、逆ハ字状に立ち上がるもの(56・57)がある。

58~64は底部である。低い高台状になるもの(59・63)、平底になるもの(60)、上げ底状になる



第11図 1区 第1黑色土出土遺物 4 S=1/3

もの（61）、厚い台状になるもの（62）、高台状になるもの（64）がある。63・64は浅跡とみられる。これらの時期の特定は難しいが、後期中葉～晩期のものであることはいえる。

第11～12図は弥生時代前～中期の土器である。

65～69は壺の口縁部である。65～67は口頭部境に段をもつが、66はハケ状工具による押圧、67は段のかわりに沈線により表現している。68は口縁内面に竹管状工具による連続刺突文が2条施されている。69は口縁が大きく朝顔状にひらくもので、口縁端部は下方に拡張する。拡張部外面上にはヘラ状工具による斜格子文が施されている。

これらの時期は、65～67が松本岩雄氏^⑤による編年I-2様式に相当し前期前半期、68がI-3様式に相当し前期後半期、69がIII-1～2様式に相当し中期中葉とみられる。

70は壺の胸部で、貝殻腹縁による羽状文が施されている。前期中葉とみられる。

72～92は壺であり、これらはいずれも口縁が緩く外反する形態をもつものである。頭部や外面の文様は、段のみもつもの（79）、1条の沈線をもつもの（72・73・76）、2～4条の沈線をもつもの（74・75・77・78）、5条以上の沈線をもつもの（80）、櫛描沈線のもの（86・87・88）、無文のもの（89～92）などに大別できる。その他、列点文と組み合わされたもの（85）や、沈線直下に半截竹管による連続刺突文が施されているもの（78・80）もある。また口縁端部に刺突状のキザミをもつものや（77・81～84）、斜格子状のキザミをもつもの（86・87）がある。口縁の形態は総じて単純であるが、86・90のように緩いものや、92のように口縁が逆L字状に屈曲し平坦面を呈するものもある。

これらの時期は、72・73・76・79は松本編年I-2様式に相当し前期前半期、74・75・77・78・80～85はI-3～4様式に相当し前期後半期、86～88はII-1様式に相当し中期前葉、89～92がIII-1様式に相当し中期中葉とみられる。

93は甕用蓋である。大井部が底状に肥厚し平坦面をもつ。94は鉢である。口縁は逆ハ字状にひらき、端部は肥厚して面をもち、外面に沈線が1条施されている。調整は内面にハケメが施される。いずれも前期後半期のものとみられる。

95～102は底部である。いずれも母手で平底を呈するものである。調整は95～97・100～102が内外面ハケメまたはナデで、98・99は内外面ともミガキである。時期の特定は難しいが、前者は甕、後者は壺の底部と考えられる。

第13図は弥生時代後期以降の遺物である。

103～105は弥生時代後期の土器である。いずれも複合口縁を呈し、口縁端部は上下にやや肥厚する。外面には凹線文が施されている。松本編年V-2様式に併行するとみられ後期中葉に相当する。

106は単純口縁の土師器甕である。胴部が張って頭部がすぼまり、口縁は緩やかに外反することから古墳時代後期前半期のものとみられる。

107は土師器の椀である。底部にヘラケズリ痕がみられる。古墳時代後期のものであろう。

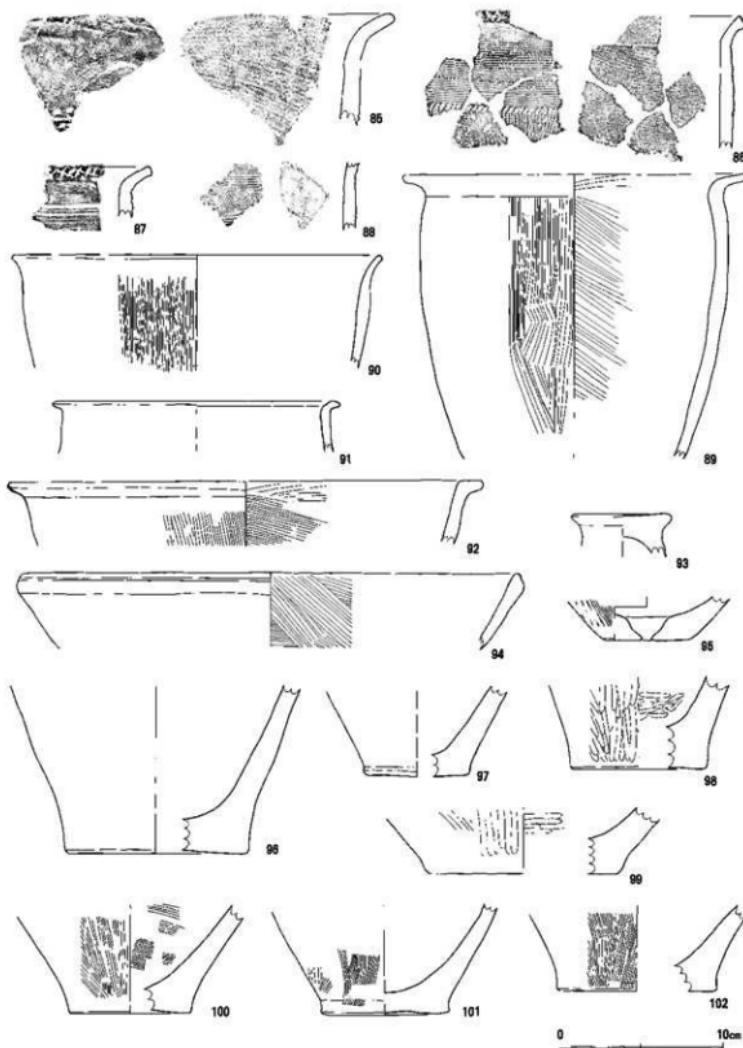
108は土師質土器の壺である。底部に回転糸切り痕が残る。9世紀後半～10世紀代とみられる。

109～111は須恵器である。109は壺蓋で、口縁端部外面にハケ状工具でナデたようなキザミがみられる。110は短頸壺で、胴部下方には回転ヘラケズリ痕が残る。111は壺の口縁である。これらの

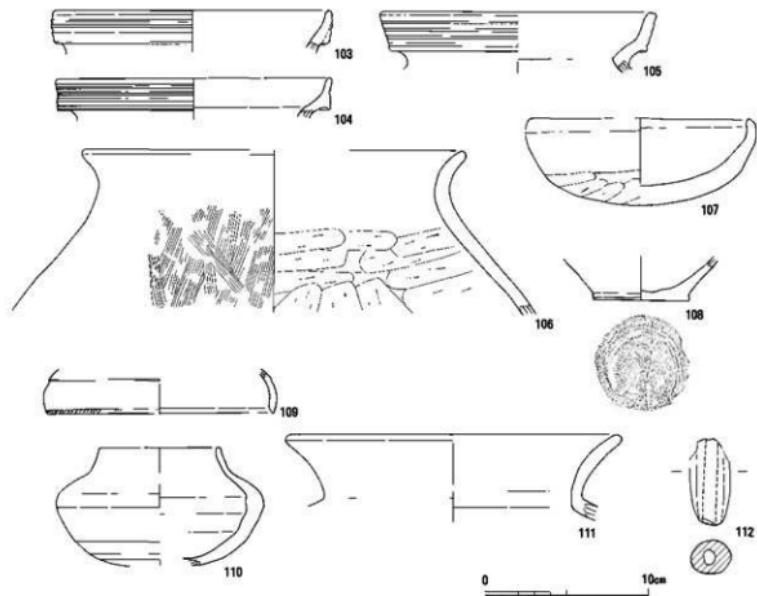
遺物は古墳時代後期後半以降のものである。

112は十鍾である。端部を欠くが、長さ5.4cm、幅2.5cmを測る。

第14~16図は石器である¹⁶。



第12図 1区 第1黒色土出土遺物 5 S=1/3

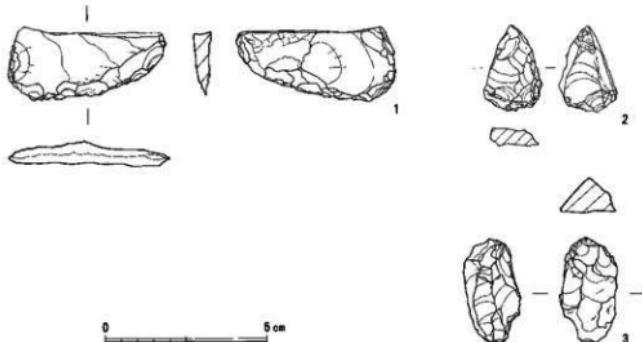


第13図 1区 第1黑色土出土遺物 6 S=1/3

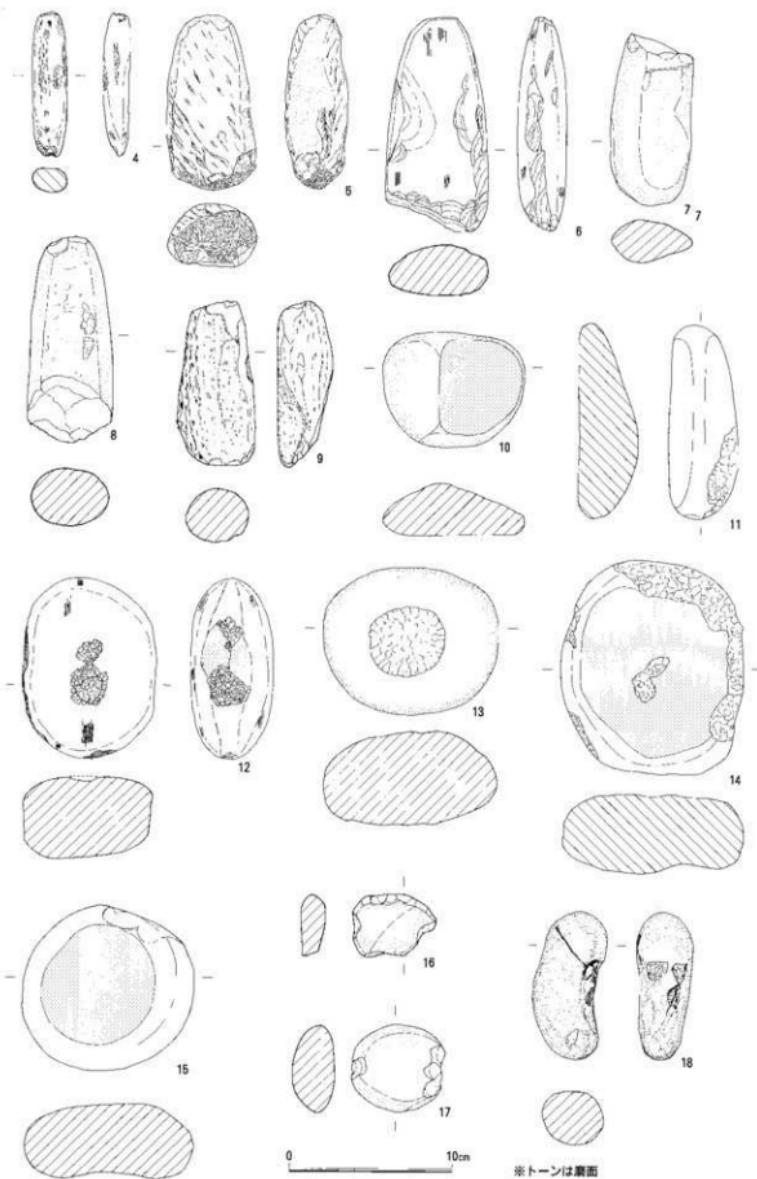
第14図は剥片石器である。1はサヌカイト製のスクレイパーである。不定形な横長剥片の弧状になった一部を、両側から加工して刃部としている。長さ3.5cm・幅6.5cm・厚さ0.7cmを測る。

2・3は楔形石器である。2は平面形は三角形を呈し、短辺が刃部となっている。長さ2.4cm・幅1.7cm・厚さ5mmを測る。石材は黒曜石。3は断面が三角形状を呈する細長い剥片である。刃部は一部欠損する。長さ4.3cm・幅2.3cm・厚さ1.5cmである。石材は安山岩B。

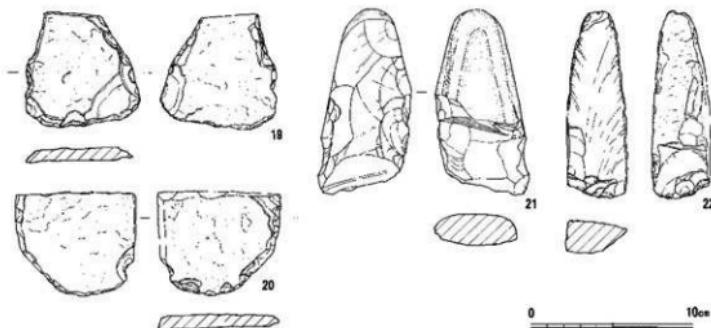
第15・16図は礫石器である。4～9は磨製石斧で6点出土しているが、6を除きすべて石材は緑



第14図 1区 第1黑色土出土石器 1 S=2/3



第15図 1区 第1黒色土出土石器 2 S=1/3



第16図 1区 第1黑色土石器3 S=1/3

色岩である。4は刃部が欠損しているが、小型で細長い石製状のものである。長さ8.9cm・幅2.1cm・厚さ1.6cmを測る。5は乳棒状を呈し、先端部に細かい敲打痕が残る。種別は敲石であるが、その形態は本来、磨製石斧だったのである、折損品を敲石に転用したものと考えられる。長さ10.8cm・幅5.4cm・厚さ3.8cmを測る。6はやや平たい形状で、刃部を欠くものである。両側面に研磨痕が残る。長さ13.1cm・幅6.3cm・3.1cmを測る。石材は安山岩である。7は乳棒状を呈し、先端部を欠くものである。調整痕などがみられず。石斧にはみうけられない。石材は石斧として利用される緑色岩であり、いわば石斧の素材品というべきものであろう。長さ10.6cm・幅5.0cm・厚さ3.3cmを測る。8は刃部を欠くが、両側面が研磨調整されており磨製石斧とみられる。長さ13.0cm・幅5.0cm・厚さ3.6cmを測る。9も刃部を欠く。全面に粗い敲打調整痕が残る。長さ10.1cm・幅4.6cm・厚さ4.3cmを測る。

10～15は磨石・敲石類である。総数30点出土しているが、使用痕の明瞭な6点を図化した。主に角のとれた川原石を利用しておらず、12・14は両方の機能を備えている。10は平坦な一面を磨り面として使用している。石材は花崗閃緑斑岩。11は乳棒状を呈し、先端から側面にかけて敲打痕が残る。石材は凝灰岩。12は両側面と正面に溝みと敲打痕があり、片側面には磨り面もみられる。石材は花崗閃緑斑岩。13は両面に敲打痕が残るものである。石材は閃綠岩。14はやや扁平な石の中央に溝み、側面に敲打痕が巡る。片面は磨り面としても使用されている。花崗閃緑岩製。15は円形を呈し片面のみに磨り面がみられる。安山岩製。

16・17は石鎚である。いずれも円錐の短辺を2か所打ち欠いている。16は流紋岩製、17は斑れい岩製である。

18はC字を呈する乳棒状の石であるが、岩脈を頭部に見立てた右棒状石製品と考えられる。内湾面に研磨調整痕がみられ、多少の整形が施されている。長さ9.0cm・幅3.9cm・厚さ3.4cmを測る。石材は凝灰岩である。

第16図19～22は打製石鎚であり、4点出土している。19・20は刃部で基部を欠損する。扁平な形態で、刃部から両側面にかけて加工痕が残る。石材は両者とも安山岩である。21は基部で刃部を欠くものである。両側面に加工が施されている。石材は砂質片岩である。22はほぼ完形とみられ、細長い形状を呈する。長さ11.5cm・幅3.6cm・厚さ2.0cmを測る。石材は安山岩質凝灰岩である。

2. 第1ハイカ上面の調査

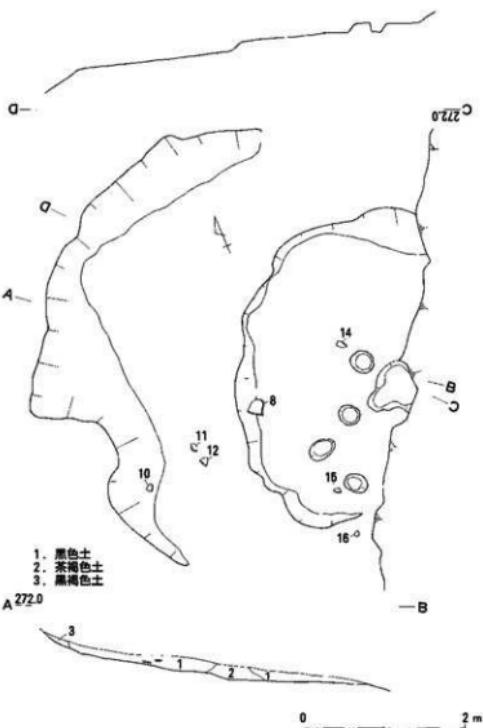
下山跡のみならず、志津見ダム周辺の調査で遺構が検出されるのはハイカ層の上面である場合が大半である。これは遺構が意図的にハイカ層に掘り込まれているのではなく、黒色土層では遺構内堆積土も黒色土であるため、非常に発見しにくいくことに起因していると考えられる。従って、本来は黒色土中から遺構が掘り込まれているが、ハイカ層まで掘り下げてようやく検出できた事例も多く含まれているとみられる。

さて、1区の第1ハイカ上面で検出された遺構は、後述する堅穴建物 S I 01のみである（第6図参照）。広い調査区の割に検出できたのは堅穴建物1棟だけなのは奇妙な印象を受ける。S I 01と同時期の遺物は第1黒色土から多数出土していることから、上記の理由や後世の削片により消滅した遺構も何例かあったかもしれない。

S I 01 (第17図)

調査区の中央付近からやや北寄りの、標高271mに位置で検出された堅穴建物である。遺存状況は東側半分が削平により消失しており良好でないが、斜面に主軸が平行するように掘り込まれているようだ。平面形は不整な丸方形を呈しており、規模は長さ3.8m、深さは20cm前後の浅い堀方である。床面からは柱穴とみられる4点のピットが検出されたが、建物が建つような並びを示していない。床面中央では不整な円形を呈する径60cmのピットが検出されており、屋内炉と考えられる。

また、S I 01の西側1.5mの位置には建物を取り囲むような段差がみられるが、これは建物を構築する際に斜面を平坦に加工した痕跡と考えられる。なお、建物内の堆積土は基本的に第1黒色土である。



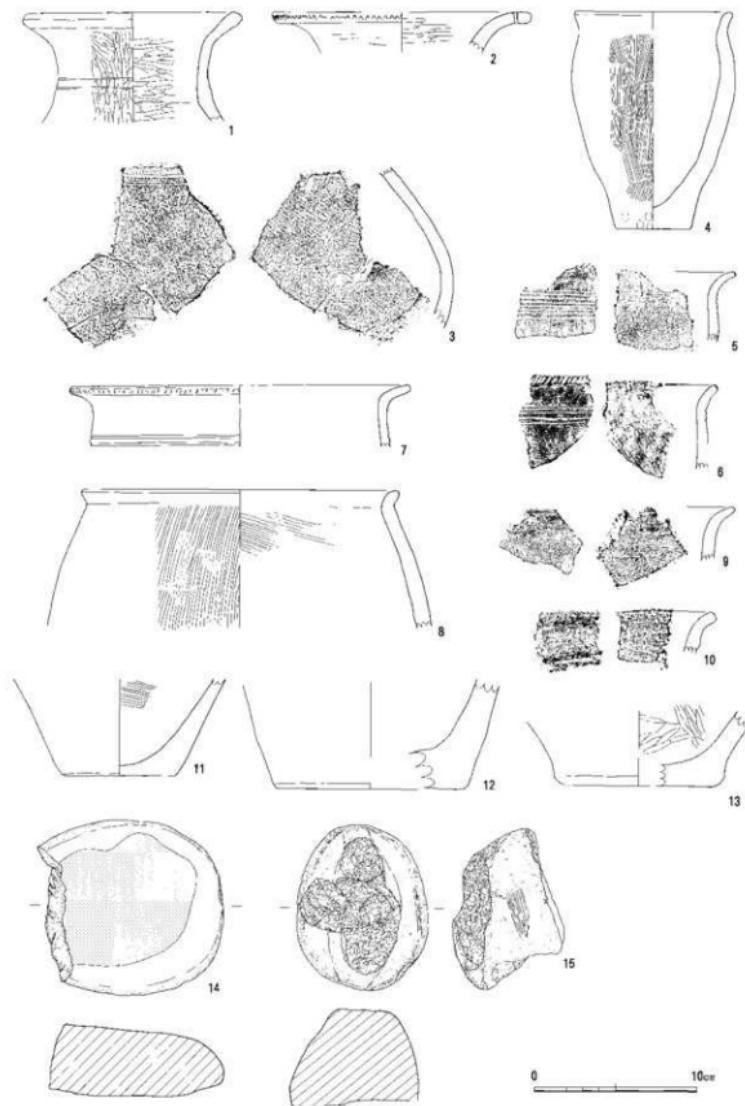
第17図 1区 S I 01平面図 S = 1/60

S I 01出土遺物 (第18・19図)

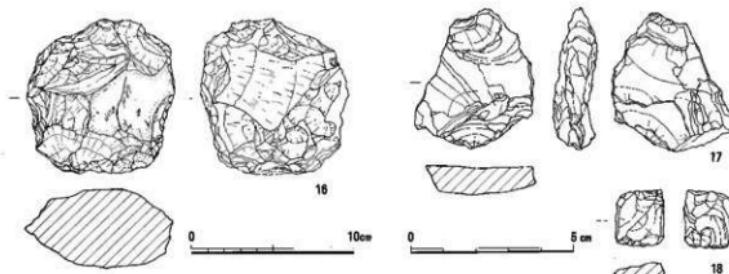
床面や堆積土から18点の遺物が出土している。

1～3は煮である。1は頭部にヘラ描き沈線が2条施され、調整は内外面とも丁寧にミガキが施されている。2は口縁端部に面をも

ち、刺突文が施される。また焼成前のタテ方向の穿孔もみられる。3は肩部から胴部にかけての破片であり、肩部に2条のヘラ描き沈線が施されている。



第18図 1区 第1ハイカ上面S 101出土遺物 S=1/3



第19図 1区 第1ハイカ上面S101出土石器 16はS=1/3、17・18はS=2/3

4～7・9・10は壺である。4は小型の完形品で、頸部がすぼまり口縁は緩やかに外反する。5～7は胴部外面に数条の沈線が施されるが、5は4条単位のクシ描きが2条施され、6はヘラ描き沈線が4条、7は2条確認できる。9は縱方向の細かいハケメが施される。加工段で出土した10は、頸部にハケ状工具による押圧でつくり出した段がみられる。

8は床面から検出された短頸の壺である。球形の胴部をもち、口縁は短く屈曲する。

11～13は底部で、11・12は建物外の出土である。13は内面にミガキが施され、壺の底部とみられる。

14～15、第19図は石器である。14は床面で出土した安山岩製の磨石で、片面に磨り面が残る。15は玄武岩製の敲石で、大部分が欠損しているが側面に細かい敲打痕がみられる。床面から出土している。16は建物外で出土した円錐である。剥離面がほぼ全面にみられ、石核であろうか。石材は安山岩Cである。17・18は楔形石器で、17は不整形な形状を呈し、上下端部に刃部がみられる。18は長さ1.8cm・幅1.4cmの小型品ではば方形を呈するものである。上下端部に刃部がみられる。石材は両者とも流紋岩△である。

これらの時期は概ね松本編年I-3～4様式に相当し、弥生時代前期後半期と考えられ、S101は志津見ダム内の他遺跡はおろか県内でも類例のほとんどない弥生前期の竪穴建物に比定される。

第2節 2区の調査

2区は遺跡が立地する谷状緩斜面の南西側に立地する。調査区は方形を呈し、中央付近は後世の開墾等により斜面がテラス状に削平されている。この削平された段では三瓶浮布火山灰上面までが剥ぎ取られ、さらにその剥ぎ取った土砂で南東側を埋め立て、平坦面が広く形成されていた。この埋め立てた土砂の層を調査では「盛土層」と称し(第21図の1~4層にあたる)、2区の基本層序は「表土」—「盛土層」—「第1黒色土層」—「第1ハイカ層」・・・となる。なお、盛土層からは縄文中期から弥生時代後期までの幅広い時期の遺物が混在して出土している。

また、調査区の南端部では近世のたたら製鉄炉が2基重なって検出され、周辺からもそれに関連するとみられる遺構が数多く検出されている。この範囲を「2区第2地点」とした。さらに調査区全面からも近世以降とみられる遺構・遺物が検出されている。これらの製鉄関連遺構については前巻である『下山遺跡(1) - 製鉄関連遺構の調査 -』で報告したが、ここで簡単に概要をまとめてみたい。

1. 製鉄関連遺構の調査

(1) 遺構の配置

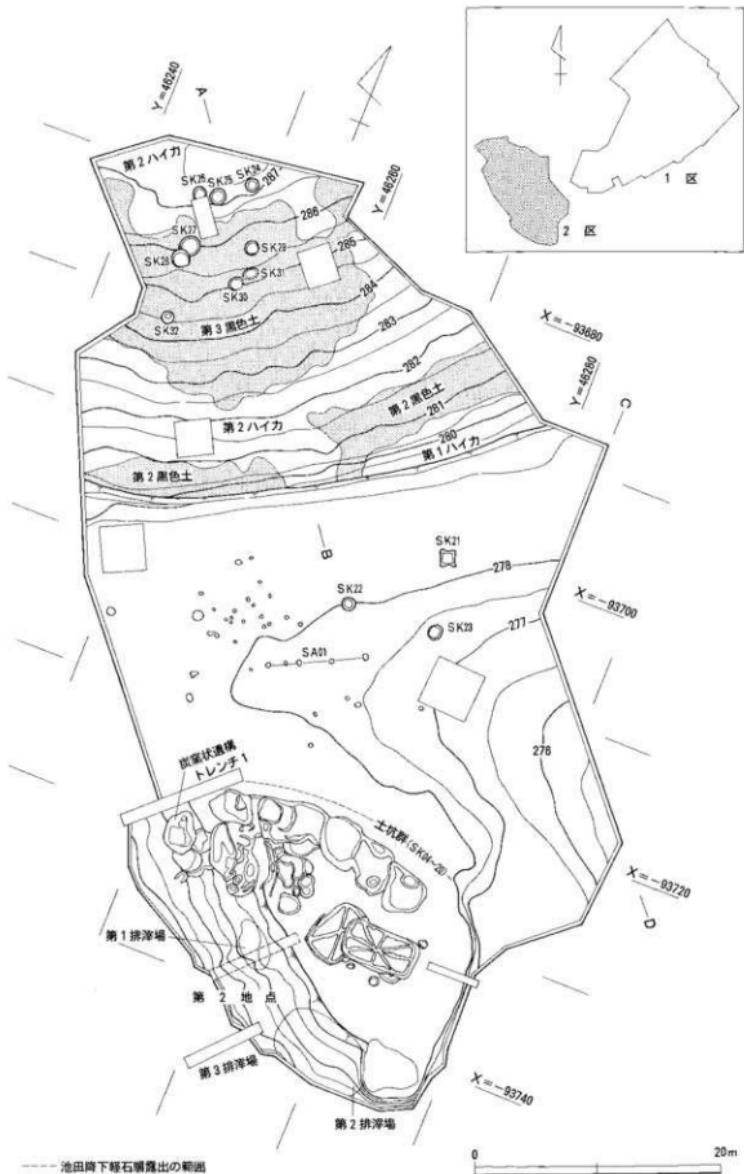
調査区南端部の2区第2地点では三瓶池田軽石層が露出しているがそれを掘り込むかたちで製鉄炉が2基、土坑群が20基(S K01~20)、溝状遺構1基(S D01)が検出され、南側の斜面からは排水場が3か所、炭窯状遺構が1基検出された。また、調査区中央部では盛土層及び第1黒色土層上面から柱列が1基(S A01)、粘土貼土坑3基(S K21~23)が検出された。その他、調査区の西端部の斜面頂部付近では第2ハイカや第3黒色土が露出おり、それを掘り込むかたちで粘土貼土坑が9基(S K24~32)検出された。

(2) 各遺構の様相

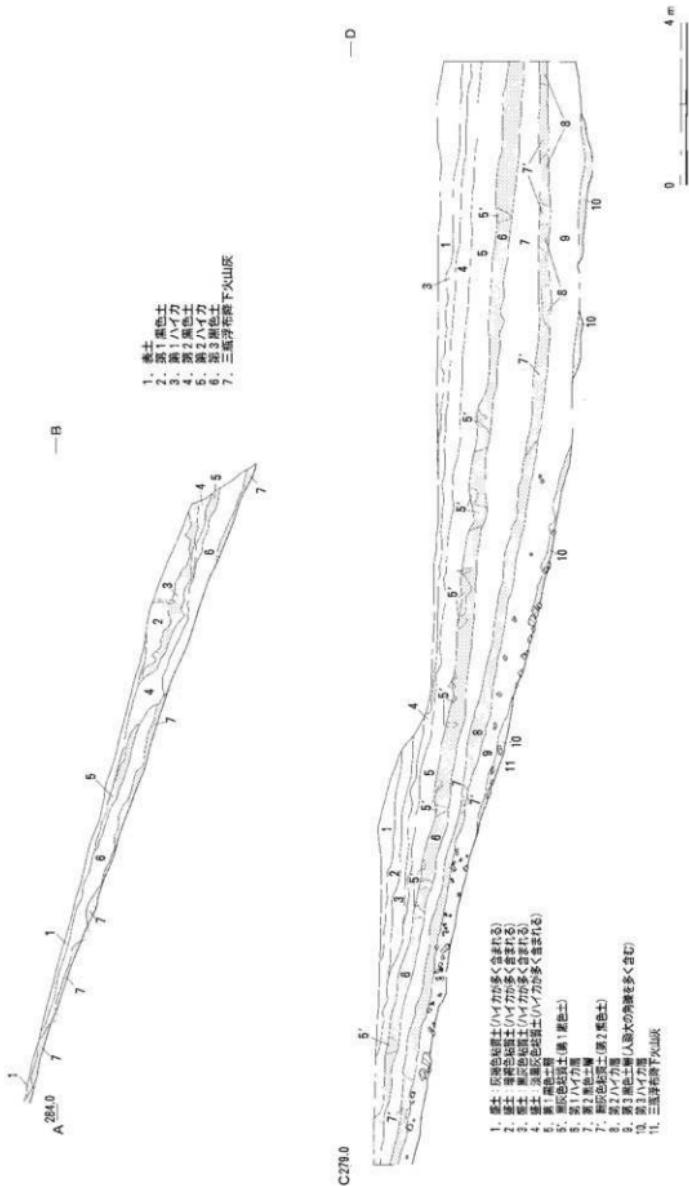
1号製鉄炉：2号炉を掘り込んで造成されている。小舟基底部が残しており、規模は長さ6.2m・



2区検出 1号製鉄炉



第20図 2区 第1黑色土上面遺構配置図 S=1/400



第21図 2区 A-B C-Dセクション土層図 S=1/120

幅3.8m・深さ1mを測る。時期は熱残留磁気測定で1705±10の年代が示された。

2号製鉄炉：1号炉に先行する製鉄炉である。主軸を南北方向にあわせており、規模は長さ5.2m・幅3.6m・深さ0.6mを測る。小舟基底部以下の残存で、時期は熱残留磁気測定で1690±20の年代が示された。製鉄関連遺物の分析により、両者は赤目砂鉄を原料とした銑鉄主体の製鉄炉であったと推測される。

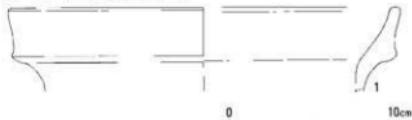
土坑群（SK01～20）・溝状遺構：製鉄炉の周囲で3基、西側で17基（SK04～20）検出された。特に西側のものは直径4m大・深さ2m大と規模が大きいものが連なっている。これらは製鉄炉や地下構造を構築する際に使用する、粘土の採掘坑である可能性が高い。

粘土貼土坑（SK21～32）：形状は方形と円形の2種類あり、規模は概ね直径1m前後・深さ10cm前後を測る。それぞれ粘土を側～底面に貼るものと、底面のみに貼るものに分けられ、側～底面に貼るものは桶の痕跡がみられる。

柱列（SA01）：4点のピットがほぼ等間隔で並んでおり、全長8.5m・柱間2.7m・深さ約30cmを測るものである。

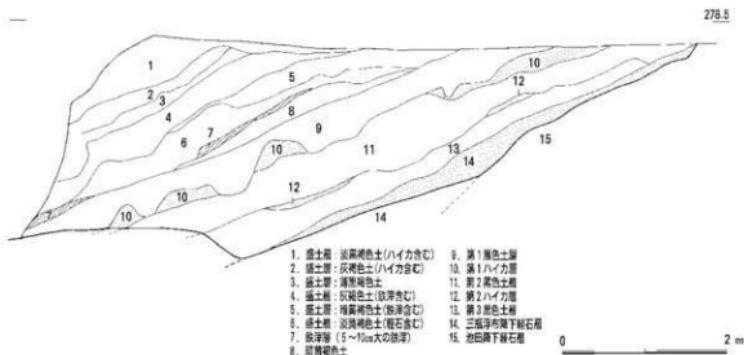
炭窯状遺構：長軸を斜面に平行して掘り込まれ、楕円形を呈する。底面が3段に掘り込まれ、西壁面には石組みもみられる。内部に天井の崩落とみられる粘土層が堆積しており、底面から焼上面や炭が検出されたことから炭窯状の遺構と推測される。炭の¹⁴C年代測定の結果はmodernであった。

2. 2区第2地点の調査

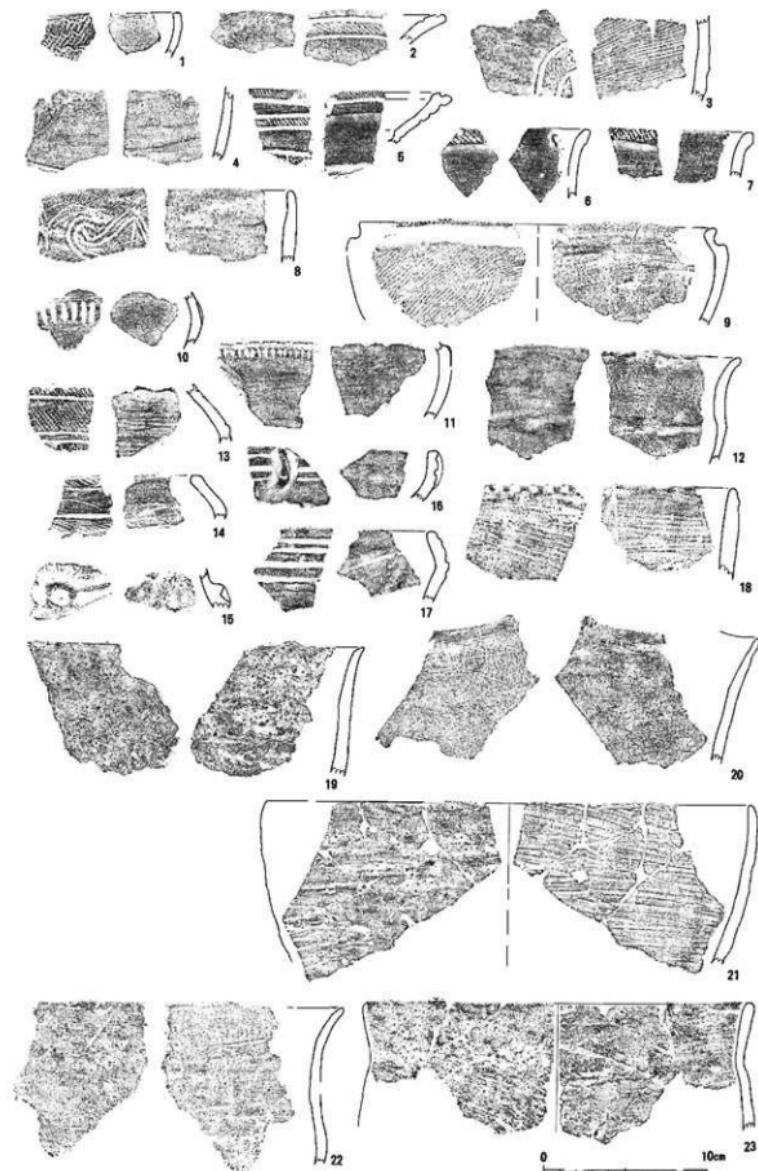


第22図 2区第2地点 第1黑色土出土遺物 S=1/3

2区第2地点は上述したように製鉄関連遺構が検出された範囲である。製鉄炉の南側は斜面になっており、その斜面のトレント調査を行った。結果、上層には後世の盛土層や（第23図の1～6層）鉄滓が厚く堆



第23図 2区第2地点 トレント1北壁土層図 S=1/60



第24図 2区 盛土層出土遺物 1 S=1/3

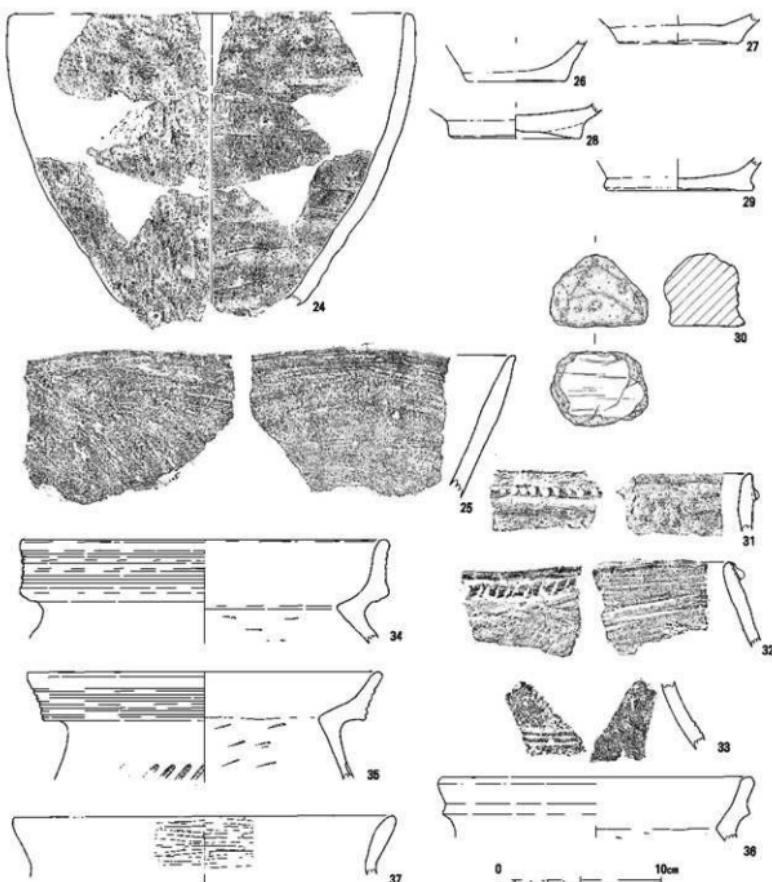
積していたが、2区の他の範囲と同様に第1～3黑色土がハイカを挟んで層位ごとに検出された。各黑色土からは縄文土器等が多数出土しており、この2区第2地点についても、以後層位ごとの概要を述べたい。

第1黑色土出土遺物（第22図）

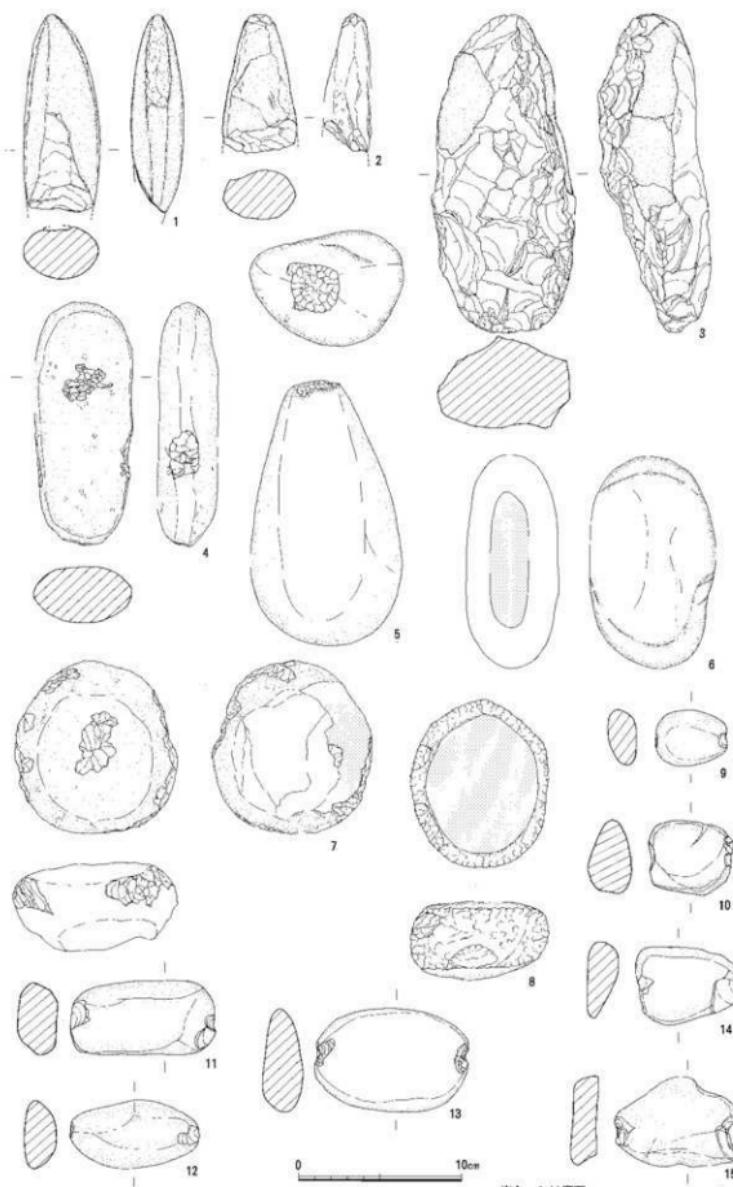
複合口縁を呈する甕が1点のみ出土した。器壁は厚く、端部は丸くおさまる。弥生時代後期後葉とみられる。

3. 盛土層の調査

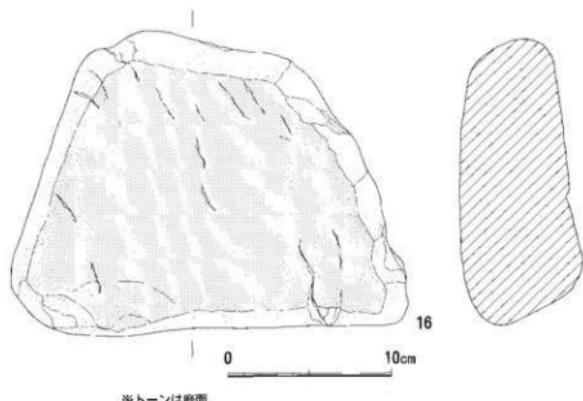
前述したように、盛土層は後世に斜面を平坦に削平した際の造成上である。第1～3黑色土の遺



第25図 2区 盛土層出土遺物 2 S=1/3



第26図 2区 盛土層出土石器 1 S=1/3



第27図 2区 盛土層出土石器2 S=1/3

物が混在しており、中には鉄滓も含まれる。層位的には第1黒色土の上方に堆積しており、明確に区別することができた。

盛土層出土遺物（第24～27図）

第24～25図は土器類である。1は繩文地の薄手の土器である。口縁は内湾しており、口縁に沿って波状の沈線が3条施されている。中期前葉とみられる。

2～5は磨消繩文が施される土器である。2は口縁が大きく外反し、内面に直線状の磨消繩文が施文されている。内外面とも丁寧に磨かれており、浅鉢と考えられる。3・4は深鉢で渦巻き状の文様が施されている。4は沈線内にも列点状の刺突が施され、焼成後穿孔もみられる。5は浅鉢で、口縁が肥厚し内面には段がある。文様は細く、内外面とも丁寧にミガキが施されたものである。これらは後期初頭とみられる。

6・7・12は口縁が緩やかに外反し、外面を肥厚させるものである。6・7は外面肥厚部に繩文が施文され、頸部と内面にはミガキが施される。12は無文で、調整はナデである。これらは後期前葉とみられる。

8は直立する口縁をもち、外面に2条単位の沈線が渦巻き条に施されるものである。繩文はみられない。時期は後期前葉期であろう。

9～11は浅鉢で、9は頸部がくびれ口縁が肥厚し、胴部と肥厚部に原体の細い繩文が施される。10・11は肩～胴部片であるが、肩部が若干肥厚しキザミが施されるものである。調整は内外面とともにミガキである。いずれも後期前葉とみられる。

13・14は口縁がすぼまり、注口土器と考えられるものである。13は沈線間に原体の細い繩文が施文され、14は連弧状の沈線とキザミが施される。いずれも後期中葉とみられる。

15は彎形土器の肩部とみられる。肩部と頸部の境に段をもち、方形の浮文が貼り付けられる。双耳壺であろうか。

16・17は屈曲する口縁をもつもので、口縁に平行して巻き貝による凹線が3～4条施される。16は垂下隆帯がJ字状に貼りけられる。いずれも後期後葉である。

18～25は無文土器である。18～24は粗製深鉢で、18は口縁端部にキザミが施される。19・20は口縁が緩やかに外反し、20は波状に口縁である。調整は内面ともナデ。21は器形は鉢形で、焼成後穿孔がみられる。22・23は頸部が屈曲するもので、22は口縁が緩やかに外反、23は短く立ち上がる。24は頸部をもたない砲弾型を呈するものである。25は内外面に粗いミガキが施され、無文の精製浅鉢とみられる。これらの時期の特定は難しいが、概ね後～晚期のものであろう。

27～29は底部である。平底（26・27）と高台状になる（28・29）ものがある。

30は粘土焼結塊である。長さ4.5cm・幅6.0cm・厚さ4.5cmである。

31・32は突帯文土器である。いずれも突帯に刻み目をもち端部は丸くおさめられ、32は刻み目が細く浅いものである。晚期後葉である。

33～36は弥生土器である。33は壺の肩部とみられ、頸部境に段をもち、沈線が2条施される。時期は松本編年I～3様式に相当し前期後半期とみられる。34～36は複合口縁を呈するものである。いずれも厚手で、34・35は擬凹線が施され、35は肩部にハケ状工具による刺突文が施される。36は無文で端部は丸くおさまる。後期中～後葉のものであろう。

37は単純口縁の甕である。内外面にミガキが施される。

第26・27図は石器である。

1・2は磨製石斧である。いずれも乳棒状を呈し刃部を欠損するが、側面には敲打調整痕や研磨痕がみられる。1は基部が尖り、長さ12.2cm・幅3.2cm・厚さ3.1cmを測る。石材は安山岩。2は側面の敲打後研磨調整が顕著である。長さ8.5cm・幅4.6cm・厚さ3.0cmを測る。石材は緑色岩である。3は表裏面に調整剥離痕、側面には自然面を残す大型の礫である。形態的には石斧の未製品と考えられる。長さ19.5cm・幅8.8cm・厚さ3.7cmを測る。石材は安山岩である。

4～8は磨石・敲石類である。4～6は乳棒状を呈するもので、4は扁平で表面と側面に1ヶ所ずつ敲打痕がみられる。長さ15.0cm・幅6.0cm・厚さ3.4cmを測る。花崗閃緑岩製。5はすばまる先端部に敲打痕がみられる。長さ16.3cm・幅9.1cm・厚さ6.8cmを測る。閃緑岩製。6は片側長辺に細長い磨り面がみられる。長さ13.0cm・幅7.7cm・厚さ5.5cmを測る。花崗閃緑岩製。7・8は円礫であり、7は表面中央と側面に敲打痕が巡る。側面には磨り面もみられる。8は表面全面に磨り面が、側面全面に細かい敲打痕が残る。花崗斑岩製。

9～15は石錐である。いずれも不整な梢円形・方形を呈し、短片に2ヶ所打ち欠きがみられるものである。石材は9・12が安山岩、10・11は凝灰岩、13がひん岩、14が斑鰐岩、15が流紋岩である。

16は台石である。扁平で平面形は不整な台形を呈し、表面は使用されて平滑である。長さ24.1cm・幅18.6cm・厚さ7.3cmを測る。石材は閃緑岩である。

4. 第1黒色土の調査

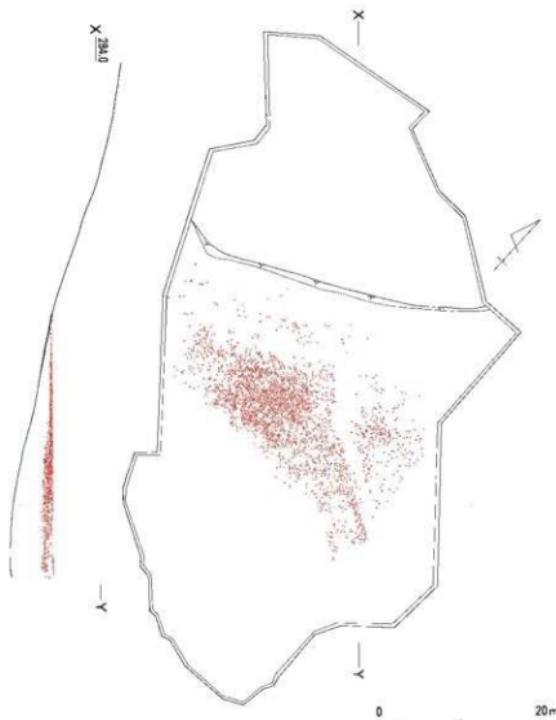
第1黒色土は、調査区の北西側の斜面部では流出したため検出されておらず、遺物はすべて中央の平坦面で検出されたものである（第20図参照）。遺物は縄文後期中葉～弥生～中世まで幅広くみられる。

第29～36図は縄文土器である。

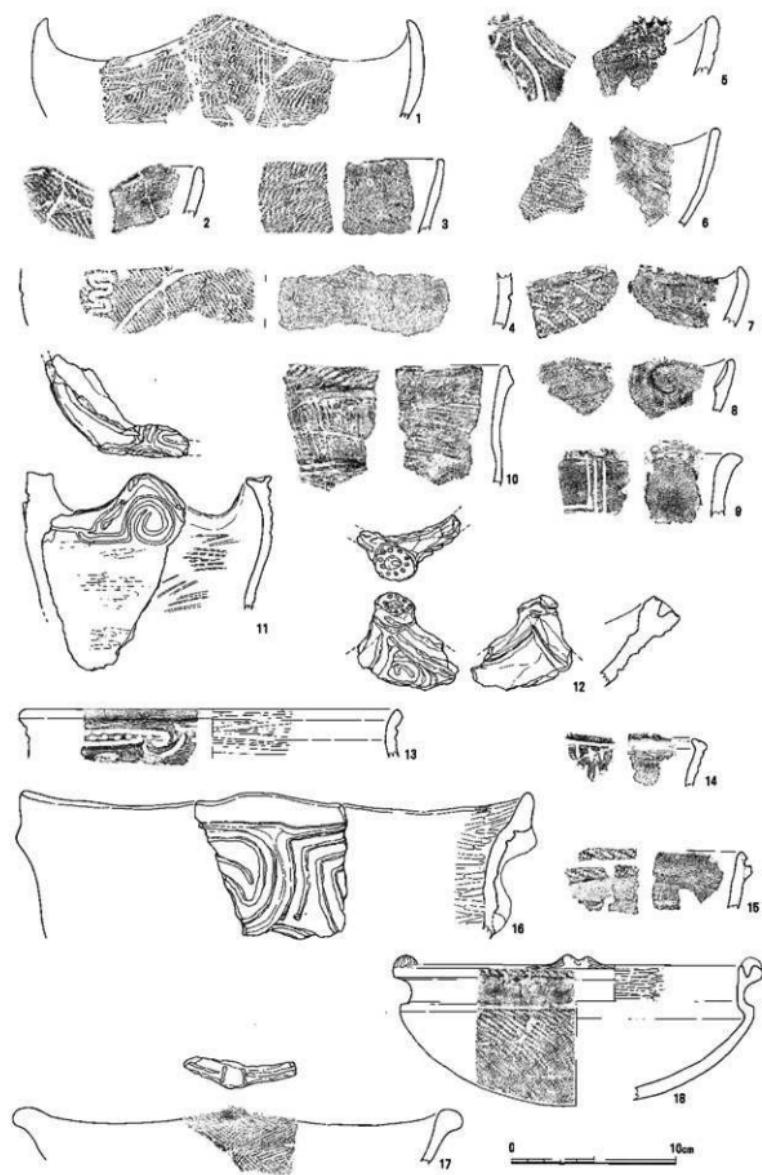
1～4・6は縄文地の上器である。1・2・6は波状口縁を呈するもので、1は口縁に沿って3条単位の沈線を施した後、タテ方向にも3条の沈線を施している。また、波頂部から垂下するように径の小さい半截竹管文が連続して施文される。2は口縁に沿って沈線が1条施されているが、沈線は波頂部で途切れている。3は平口縁で器壁は薄い。4は胴部片で向きは不明だが、器壁は厚く、太い連続したS字状の沈線が施されるものである。これらは形式は不明であるが、後期中葉のものであろうか。

5は磨消縄文が施され、波状口縁を呈するものである。形式的には後期前葉のものであり、下層のものが上層に露出したとみられる。

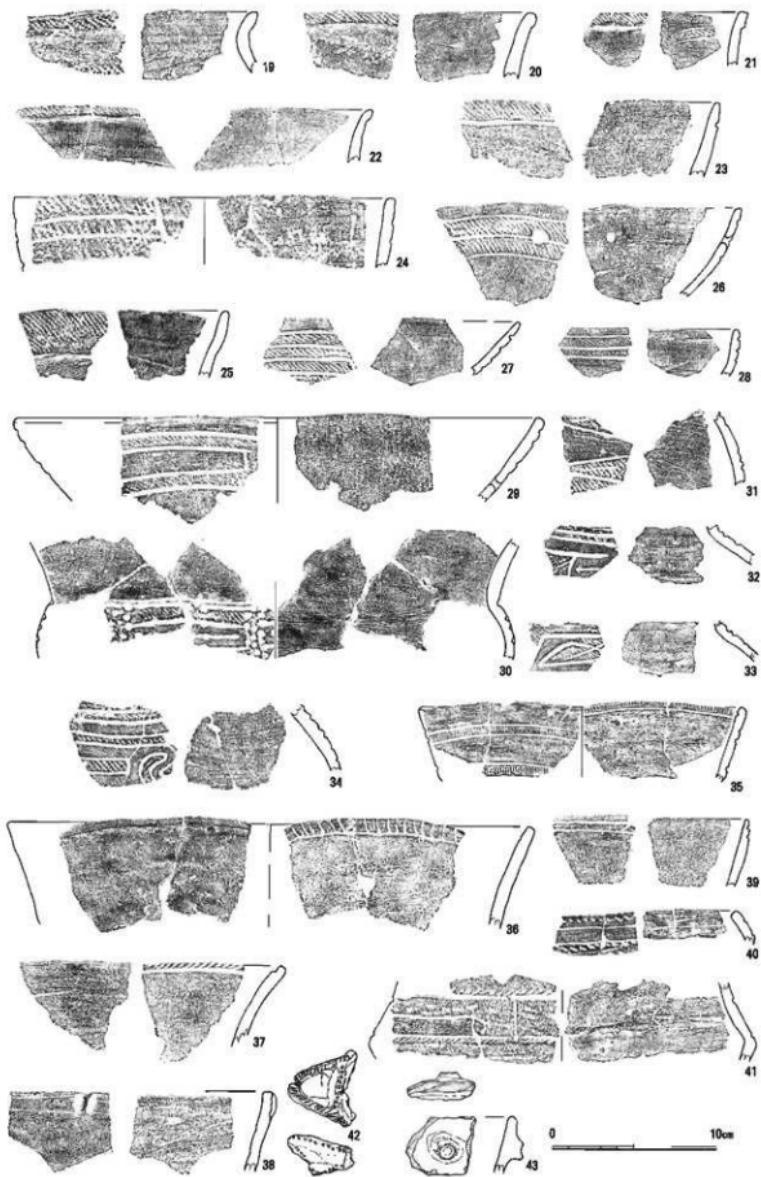
7・8は波状口縁を呈するものだが、7は外面に縄文原体をそのまま押しあてたものである。8



第28図 2区 第1黒色土遺物出土状況 S=1/600



第29図 2区 第1黑色土出土遺物 1 S=1/3



第30図 2区 第1黒色土出土遺物 2 S=1/3

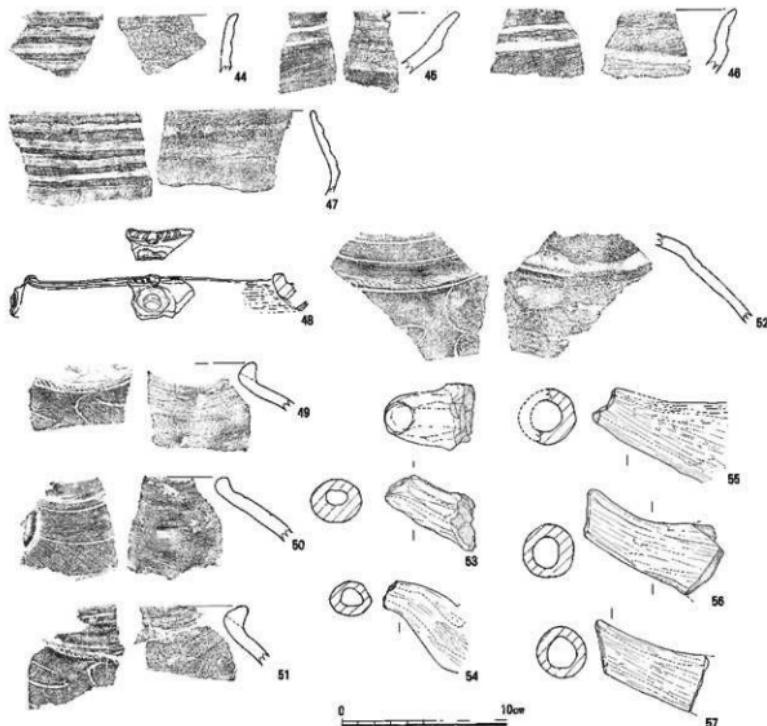
は内面波頭部に、細い粘土紐を渦巻き状に貼り付けている。後期中葉であろうか。

9～15・17は口縁が肥厚するものである。9は頸部にタテ方向の3条の沈線が施される。10は頸部が若干すばまり、口縁外面の肥厚帯に縄文が施される。11・12は波状口縁を呈し、11は2条単位の沈線がJ字状に描かれる。12は波頭部が円形に肥厚し、端部外面の中央に穿孔、その周囲に刺突が施される。13は半口縁で頸部は短い。鍵状に沈線が施され、沈線間にキザミもみられる。14は内面に口縁が肥厚し、外面にタテ方向の連続刺突が施される。15は口縁が外面に肥厚し、沈線と縄文が施されるものである。17は縄文地のもので、口縁端部に沈線が施される。いずれも後期中葉のものであろうが、15は形態的には後期前葉のものである。

16は形式不明のものである。口縁は波状を呈し端部外面は肥厚する。波頭部からJ字状に垂下する隆帯をもち、隆帯に沿って太い沈線が施される。内面調整はミガキである。

18はほぼ完形に復元できた浅鉢である。頸部が屈曲し、口縁は短く立ち上がる。胸部と口縁の肥厚部に原体の細い縄文が施される。後期中葉とみられるが古い要素をもつものである。

19～22は口縁外面が肥厚するもので、肥厚範囲は狭く帶状になる。肥厚部に縄文が施され、19は頸部が短く、21は内面にも帶状の磨消縄文が施されるものである。後期中葉とみられる。



第31図 2区 第1黒色土出土遺物 3 S=1/3

23～34は磨消繩文が施される土器だが、細い直線的な沈線で区画され、口縁も肥厚しないものである。25～29は内外面にミガキが施され、鉢形を呈する浅鉢と考えられる。30～34は肩部片である。30は肩部が張り、頸部はくびれ口縁が外反する器形をもつものである。31～33は内外面に丁寧なミガキが施され、壺型土器の肩部である可能性もある。これらは後期中葉の四元式の特徴をもつものである。

35～41は直線的な沈線やキザミ、刺突が施されるものである。35～38・40は沈線間にキザミが施され、うち35～37は口縁端部内面に沈線とキザミが施される。38は口縁から短く垂下する隆帯がつく。39は口縁端部が細く尖り、2条の沈線が施される。40はくの字に屈曲する口縁をもち、端部は角張っている。列点状の刺突が施される。41は肩部がくの字に屈曲し、沈線間に擬繩文が施されるものである。42は口縁頂部が三角形状に突出するもので、その形状はあたかも小型の方形浅鉢を呈するものである。縁部にキザミと列点状の連続刺突文が施されている。これらは彦崎K2新段階～元住吉山II式に比定されるもので、後期中～後葉に比定される。

43は形式不明なものであるが、口縁直下に乳頭状の突起が貼り付けられる。

44～47は口縁外面に巻き貝による凹線文が施されるものである。44は口縁が直立し、45・46は頸部がすぼまり口縁が短く外反するものである。浅鉢であろうか。47は薄手で頸部がくの字に屈曲するものである。これらは宮流式に相当し、後期後葉に比定される。

48～52はすぼまる口縁をもつ鉢形の土器である。48は注口土器で、口縁端部外面には帶状の繩文が施される。49～52は沈線間に巻き貝による擬繩文が施されるものである。49～51は口縁が上方に短く屈曲するもので、52は肩部から口縁にかけて段をもつ。これらは彦崎K2式の新段階に相当するとみられ、後期中葉に比定される。

53～57は注口土器の注口部である。先端にかけて緩やかに湾曲するもの（53・54）と、直線的に反るもの（55・57）がある。54～57は丁寧にミガキが施されている。

第32図58は沈線をもつ深鉢である。頸部が屈曲し、口縁が外反する器形をもつ。口縁端部は若干肥厚し、上端部に面をもつ。肩部外面に1条の沈線が連弧状に施され、中央に押文圧がみられる。岩田IV類に近い特徴をもち、晚期前葉とみられる。

59・60は屈曲する頸部をもつものである。59は頸部に強いナデがみられるものである。60は薄手で口縁がくの字に屈曲する。内外とも丁寧にナデ調整が施され器面は平滑である。

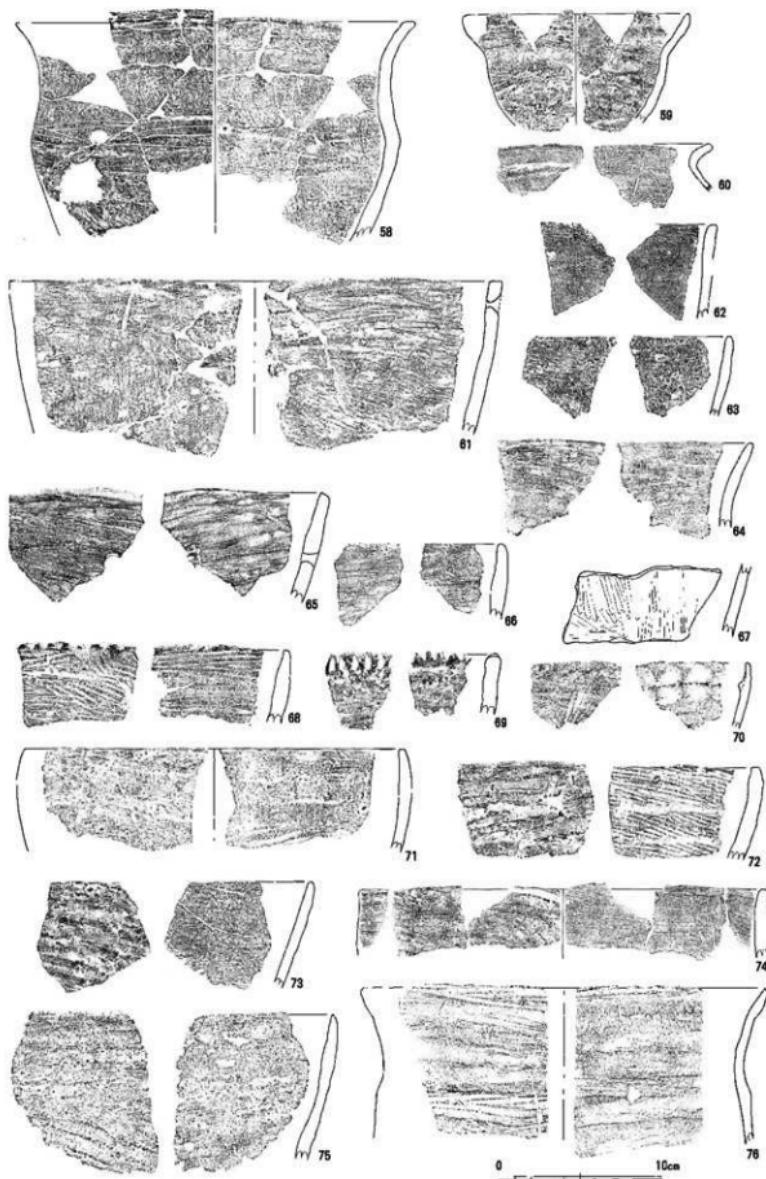
61～67は内外面にミガキが施される精製土器で、62～66は浅鉢と考えられるものである。精製土器の肩部で、外面にタールが付着する。

68・69は口縁端部にキザミをもつ粗製深鉢である。調整は68が貝殻条痕、69がナデである。

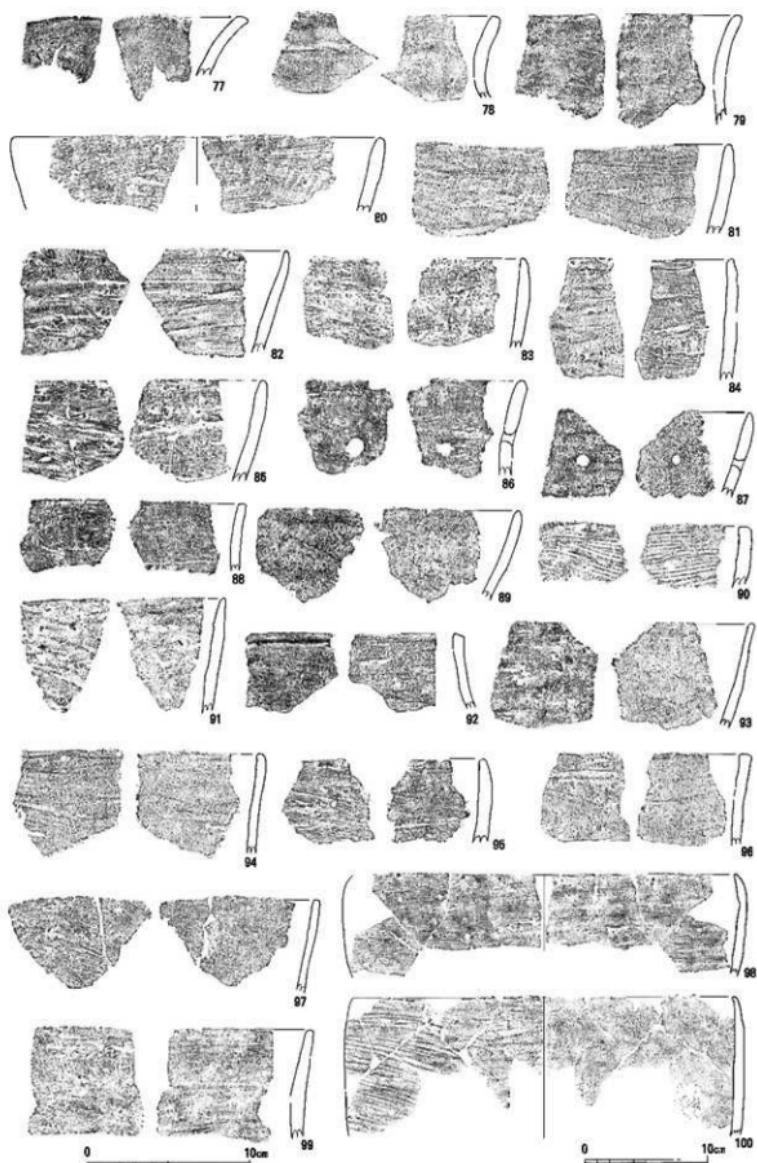
70は口縁内面が肥厚する薄手の粗製深鉢である。

71～100は無文粗製深鉢である。器形は頸部がくびれ口縁が外反するものと、頸部をもたず砲弾形を呈するものがあるとみられるが、多くは小片で区別は難しい。うち76は頸部がくびれ口縁が外反するもので、復元口径21.5cmを測る。器壁は薄手で外面は条痕、内面はナデが施される。調整は条痕、ミガキ、ケズリ、ナデなどがみられるが、77・78は内外面とも比較的丁寧にナデ調整が行われ、口縁が大きく外反するものである。86・87は焼成後穿孔が施されている。

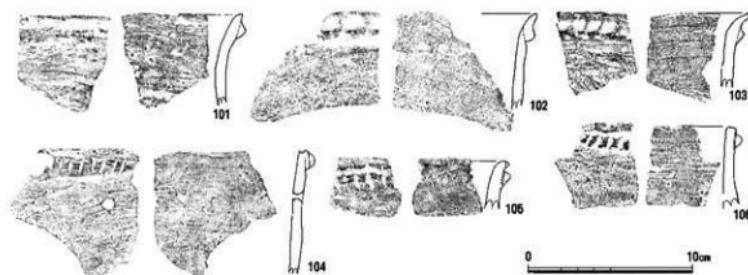
第34図は突帯文土器である。101は口縁端部や突帯に刻み口がないものである。102は口縁外面の端部上方に突帯が貼り付けられている。103・105は口縁端部が外面に屈曲しており、103は端部に



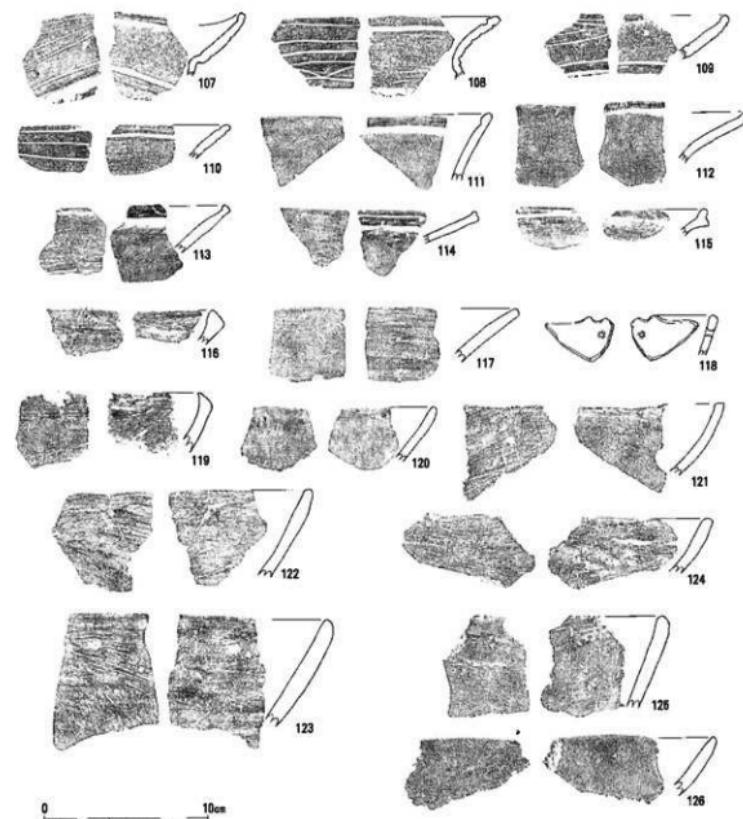
第32図 2区 第1黑色土出土遺物 4 S=1/3



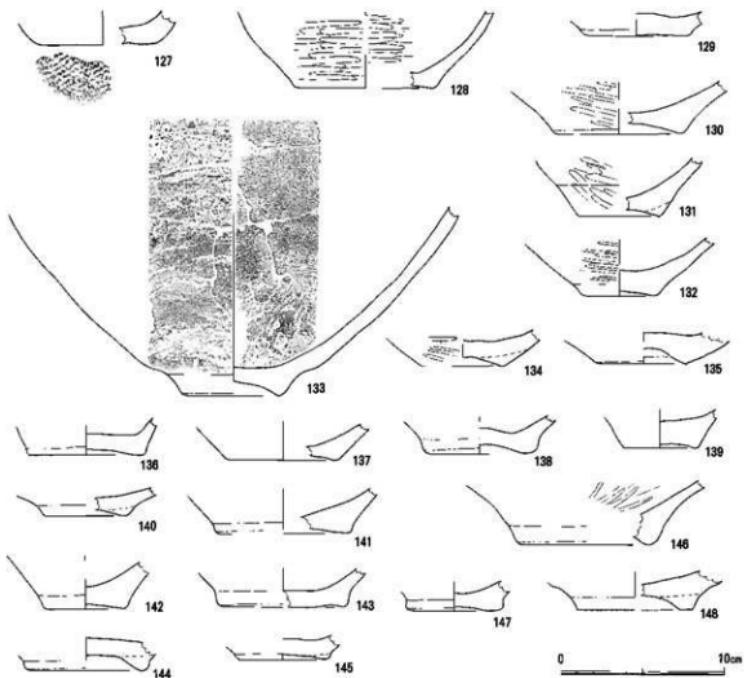
第33図 2区 第1黒色土出土遺物 5 $S = 1/3$ (98・100は $S = 1/4$)



第34図 2区 第1黑色土出土遺物 6 S=1/3



第35図 2区 第1黑色土出土遺物 7 S=1/3



第36図 2区 第1黒色土出土遺物8 S=1/3

キザミが施されていない。104は端部を欠くが、突帯に細い刻み口が施される。106は突帯には刻み目がみられるが、口縁端部にはみられないものである。時期はいずれも晩期後葉に比定される。

第35図は浅鉢である。

107~110は黒色磨研系の有文精製浅鉢である。107は波状口縁を呈するもので、外面に山形沈線文が施され、口縁内面には段をもつものである。108~110は平口縁で、口縁に沿って沈線が3~6条の沈線が施される。これらは晩期前半期のものと考えられる。

111~116は口縁が屈曲する無文精製浅鉢である。いずれも平口縁とみられ、111は口縁内面に、114・115は端部外面に沈線が施される。115は口縁がくの字に屈曲し、116は口縁内面が大きく肥厚するものである。これらは晩期後半期のものと考えられる。

117~126は無文精製浅鉢で、いずれも平口縁で橈形を呈するものである。118は薄手で、口縁に突起が二つ付く。122~126は厚手で端部も丸くおさめられるものである。

第36図は底部である。

平底になるもの（127~129）、上げ底になるもの（130~141）、台状になるもの（142~143・146・147）、高台状になるもの（144・145・148）がある。127は底面に編布痕が残るものである。128・130~132・134はミガキが施され、浅鉢の底部と考えられるものである。143・146も内面にミガキ

が施される。浅鉢であろうか。133は胸部が張る割に底径が小さいものである。

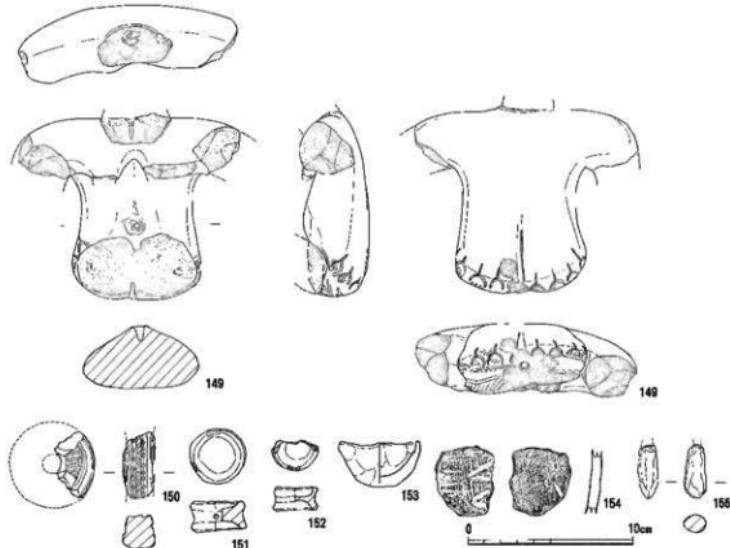
第37図は土製品である。

149は十偶である。2区の中央平坦面の下層から、四凸式～彦崎K2式の土器(30-34・35、31-52)を伴い検出された。頭部や四肢・乳房を欠き、胴体部のみの残存であるが、現状で長さ11.4cm・肩幅13.9cm・腰部幅7.9cm・最大厚4.1cmを測る。張り出した腹部や乳房の痕跡は明確に妊娠像を表現しているとみられる。腹部と背部の中央には穿孔が施され、背中には隆起帶による背筋の表現もみられる。また肩をいからせる反面、背中は緩やかに丸みを帯びている。

四肢の剥離面をみると、頸部は前寄りに付き、芯棒痕もみられる。右腕は下方に、左腕はヨコ方向にのびる気配がある。さらに脚部の剥離面が体の全面にあることから、この十偶は首を前に突き出し、座して手足を屈曲させ何らかのポーズをとる、いわゆる「屈折像土偶」¹⁹相当すると考えられるものである。

文様は腰～背部に直線状の沈線区画による磨消繩文が施され、腰部には鋸歯状沈線文ともいべき逆Y字状の刺突が連続して施文される。また表面は丁寧に研磨され平滑に仕上げられている。

この十偶の最大の特徴は腰を曲げて座った表現がみられることであり、腕を組み立膝で座るタイプの屈折像土偶第1類に比定されるものである。1992年の集録²⁰では、屈折像土偶は全国で81点出土しているが、ほとんどは東北地方に分布しており、関東地方で7点、西日本では和歌山県瀬戸遺跡でそれらしいのが1点川上しているにすぎない。本土偶の姿勢や文様は、「ほうづえをつくボーズ」が有名な福島県上岡遺跡出土土偶²¹に非常に類似しており、本土偶は東北地方で製作され、何らかの理由でこの地に運び込まれた可能性が非常に高いといえるものである。



第37図 2区 第1黑色土出土土偶、耳環、土製品 S=1/3

150～152は耳環である。150は大型でドーナツ状を呈するもので、復元すると直径5.3cm・厚さ2.1cmを測るものである。表裏面には沈線と繩文、側面には繩文と沈線内には連続刺突文が施されている。151・152は小型で鼓形を見するものである。151は完形品で側面に穿孔がみられ、径3.4cm・高さ1.8cmを測る。152は径2.8cm・高さ1.5cmを測るものである。

153は手握土器である。指頭圧痕が顯著にみられ、口径4.8cm・器高2.7cmを測る。

154は土器片を再利用した上製円盤である。表面には条線や鋸齒状の刺突がみられる。

155は性格不明の棒状土製品である。長さ3.3cm・幅1.2cmを測り、先端部が蛤刃状に平坦に尖るものである。上偶の腕部片とも考えられなくもないが、定かではない。

第38～42図は石器である。

第38・39図は剥片石器である。1～38は石鐵で、大きさは概ね長さ2cm前後・幅1.5cm前後を測る。形態はすべて無茎鐵で、基部の抉りや鐵身の形状でいくつか分類できる。欠損品が多いが、抉りが深く、鐵身が二等辺三角形状で直線的な形態をもつもの（1・2・6・7・15・24・26・28）、基部から鐵身にかけて角度を鋭角にするもの（5・11・25）、抉りが浅く、鐵身が丸みをおび内湾するもの（3・8・12～14・16・17・21・35）、鐵身部が平基に近いもの（10・29・31・32・34・37）に分類できる。石材は、17・21・24・27がサヌカイトで、18が安山岩、他はすべてサヌカイトである。

39はタテに半分に割れているが、先端が尖っており石錐とみられるものである。長さ2.7cm・幅0.8cm・厚さ0.5cmを測る。サヌカイト製とみられる。

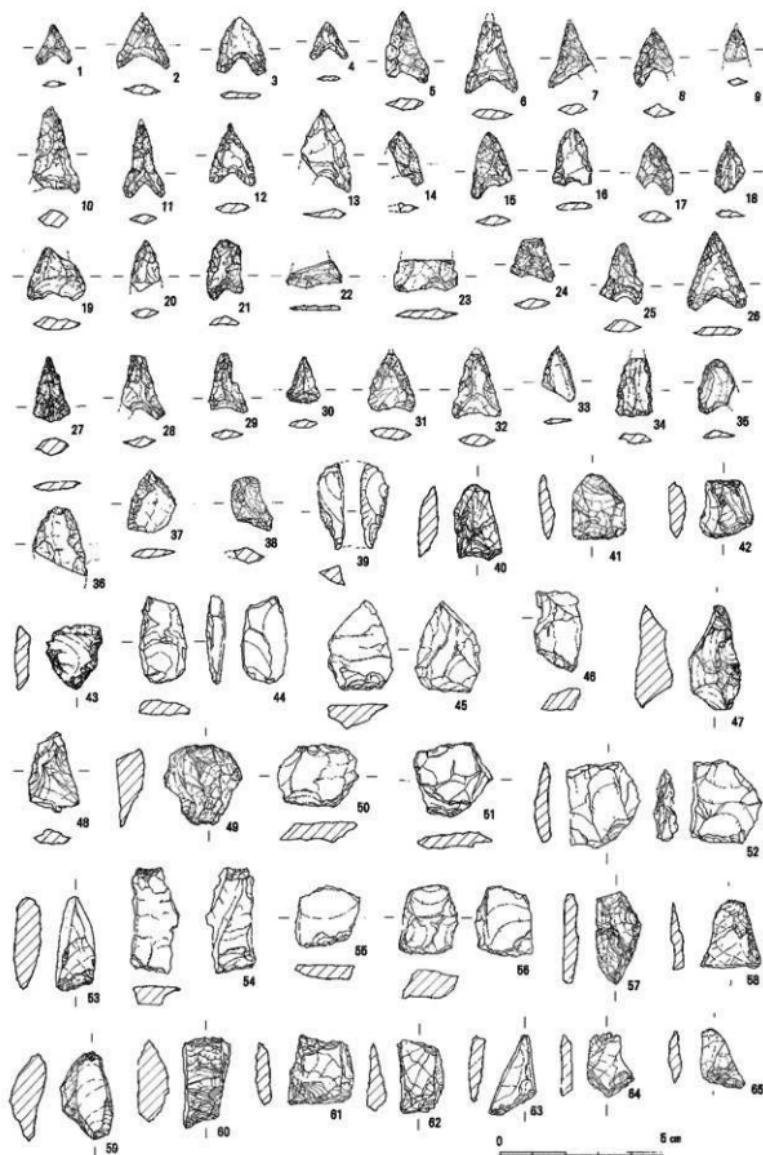
40～82は楔形石器とみられるものであり、43点出土している。多くは長方形状を呈し、上下端部に刃部がつき、つぶれ痕が認められるものであるが、刃部がナナメになるもの（43・46・63）、長辺側につくもの（47・57・67・71）などがある。82は比較的形の整った台形状を呈するもので、長さ3.5cm・幅2.1cm・厚さ1.0cmを測る。石材は、40～42・48・49・53・57・58・60～68・70・71・73・75～78がサヌカイト、43・47・59が黒曜石、44・46・50～52・55・56・69・74・79・80・82が安山岩類、45・72が流紋岩、81がデイサイト、54が風化のため不明瞭であり、石鐵と比較してバラエティにとんでいる。

83～87はスクレイバー類である。83は直線状の長辺に刃部がつき、片方の長辺には抉りがみられるものである。長さ4.0cm・幅3.1cm・厚さ1.0cmを測る。84は扁平な剥片の片面に大きな剥離面が残り、短辺側に直線状に刃部が加工される。長さ6.8cm・幅3.6cm・厚さ0.6cmを測る。85は扁平な剥片で、表裏面に大きな剥離面がみられる。刃部は片側の長辺に湾曲気味につく。長さ6.3cm・幅4.0cm・厚さ0.6cmを測る。86は台形状に加工されたもので、板状を呈する。長辺に直線状の刃部がつき、両側面には抉りが施される。長さ6.2cm・幅7.6cm・厚さ0.6cmを測る。87は小型の三角形を呈するもので、2辺に刃部がつく。長さ2.9cm・幅3.9cm・厚さ0.5cmを測る。これらの石材はいずれも安山岩Cであり、特に84～86は穂摘具とも推測されるものである。

88はサヌカイト製の剥片で、細長く断面台形を呈するものある。両短辺が側面部に切断面がみられ、本来板状に加工された石材の端部片と考えられる。長さ6.9cm・幅2.1cm・厚さ2.6cmを測る。

第40～41図は疊石器である。

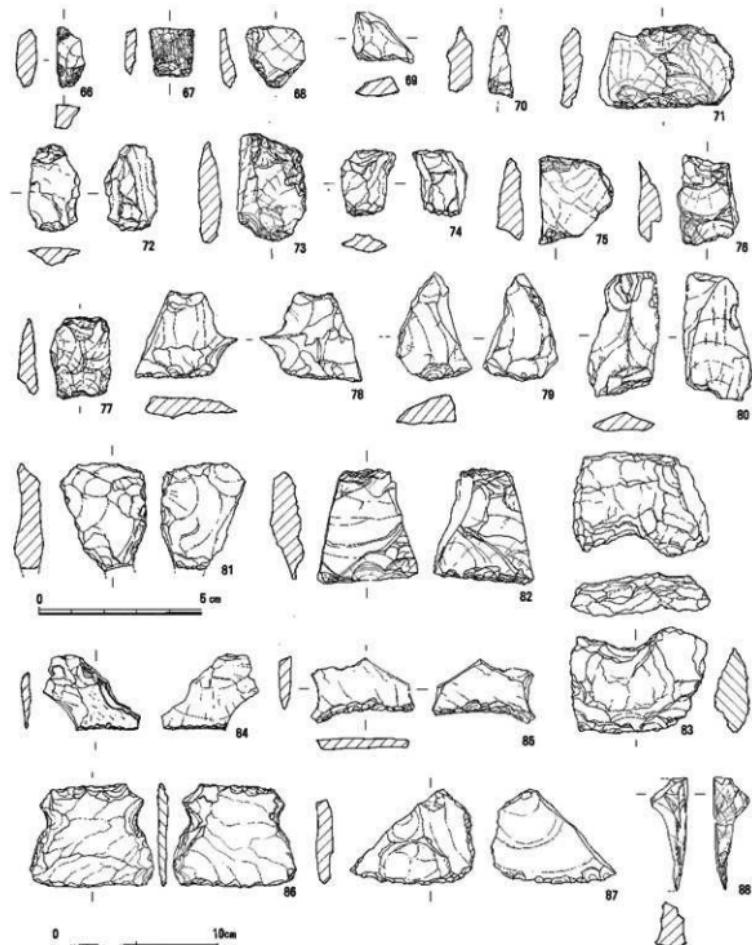
89～98は磨製石斧である。89～91は比較的小型で、板状な右鑿状を呈するものである。90・91は



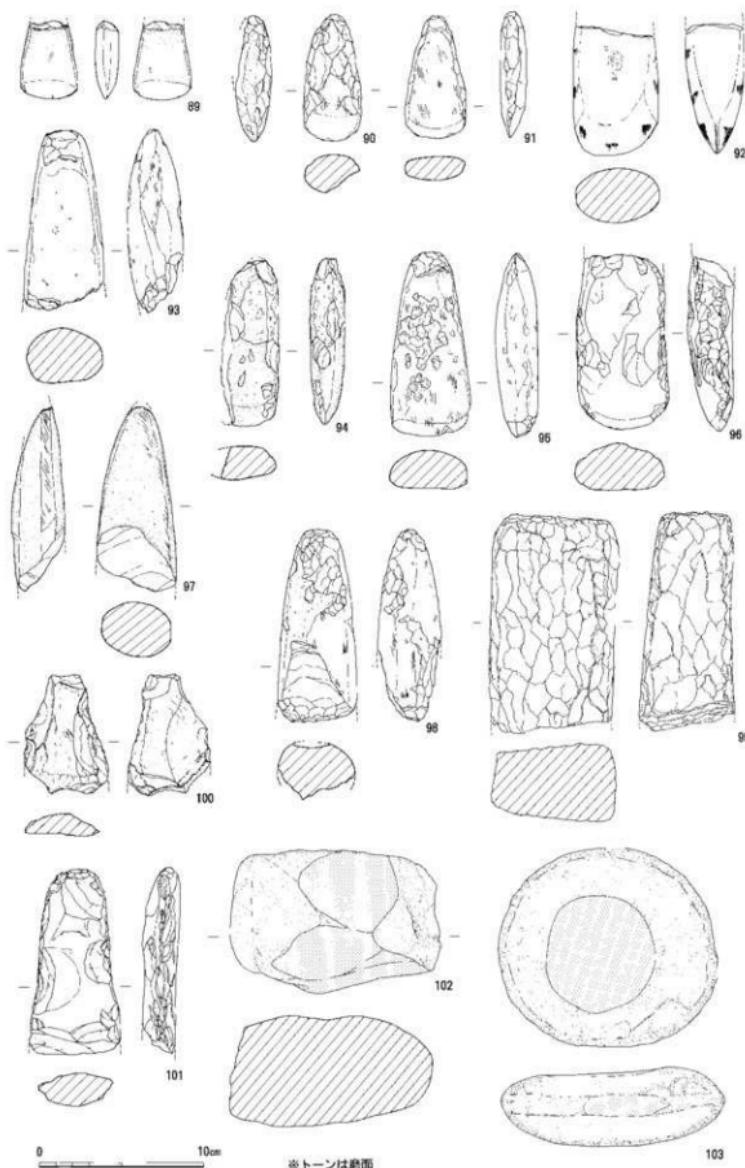
第38図 2区 第1黑色土出土石器 1 S=2/3

完形品で、90は長さ7.8cm・幅3.5cm・厚さ2.3cmを測る。91は表面に研磨痕がみられ、長さ7.5cm・幅3.7cm・厚さ1.5cmを測る。92・96は基部を欠くものである。92は刃部は丸みを帯び、両凸刃である。93・97・98は刃部を欠くものであり、側面に研磨痕が残る。94はやや扁平な形状で基部に敲打痕、刃部に研磨痕が残る。95は完形品で、やや扁平な形状である。全面に渡り研磨痕が顕著である。長さ11.3cm・幅4.9cm・厚さ2.3cmを測る。これらの石材は、92が安山岩、97は玄武岩で他はすべて緑色岩である。

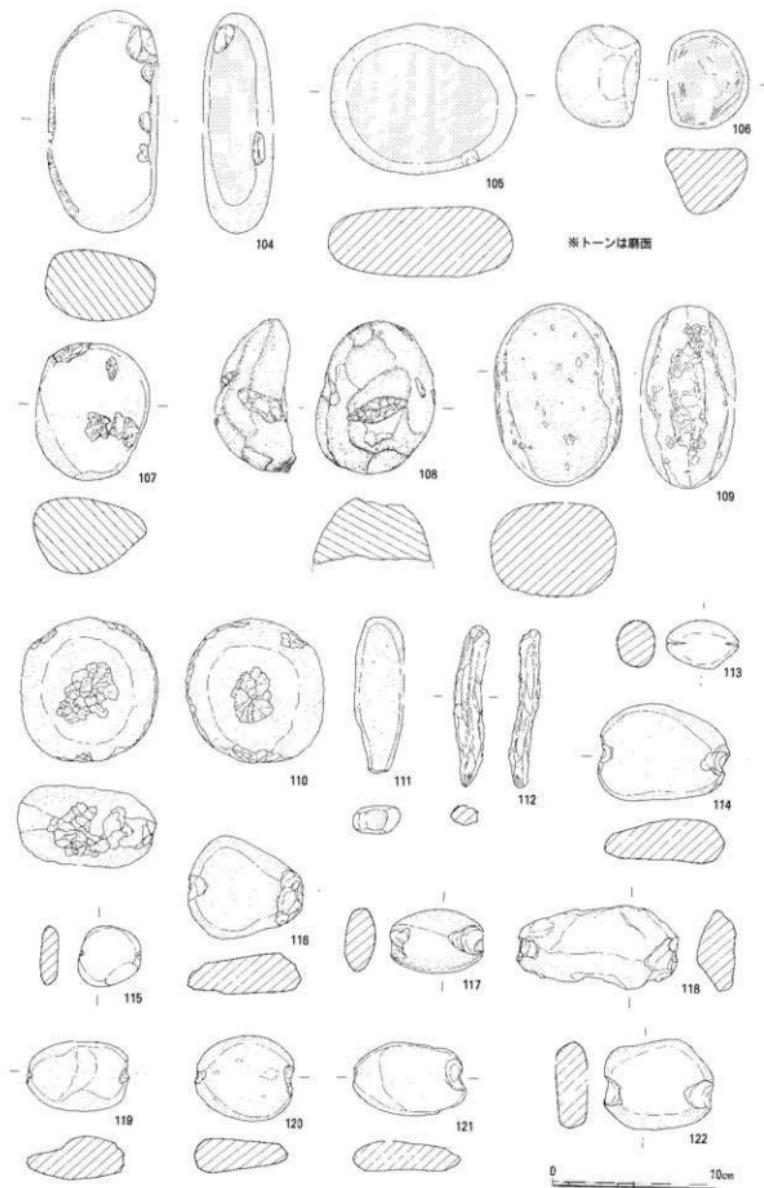
99は長方体を呈するもので、縁辺に細かな剥離調整がみられるものである。何らかの未製品を考



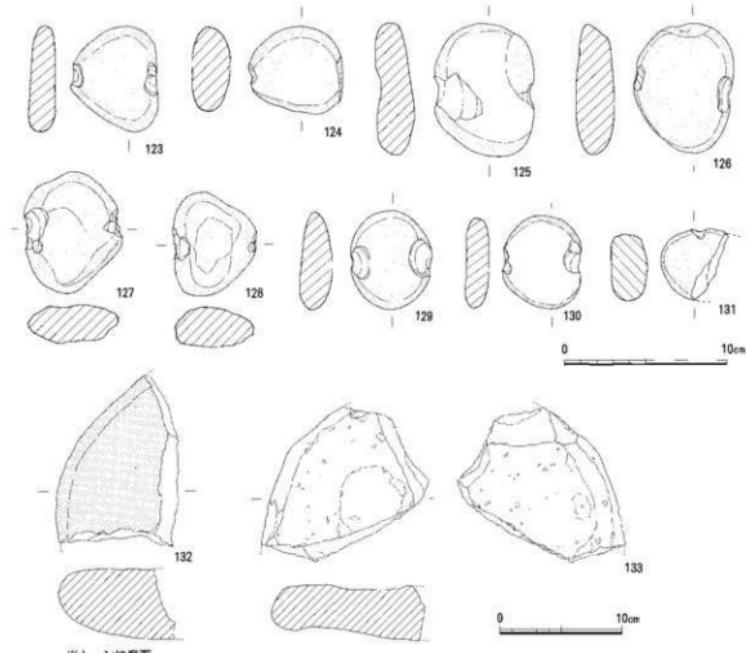
第39図 2区 第1黒色土出土石器2 66~83・87はS=2/3 84~86・88はS=1/3



第40図 2区 第1黒色土出土石器 3 S=1/3



第41図 2区 第1黑色土層出土石器 4 S=1/3



第42図 2区 第1黒色土層出土石器 5 123~131はS=1/3、132・133はS=1/4

えられるが、定かでない。石材はデイサイトである。現状で長さ13.4cm・幅8.0cm・厚さ4.8cmを測る。

100・101は打製石鎌と考えられるものであり、いずれも刃部を欠損している。101は扁平で表裏面に大きな剥離面を残すが、側部を細かく仕上げられたものである。現状で長さ11.4cm・幅5.4cm・厚さ2.1cmを測る。石材は100が安山岩、101が黒色片岩である。

102~111は磨石・敲石類である。102は角礫状のもので、表面と側面に磨り面があり湾曲している。103~110は円礫状のものである。103~106は磨石で、表面と側面に磨り面があるもの（103）、側面のみにあるもの（104）、表面のみにあるもの（105）、丸い形態の一側面にあるもの（106）に分けられる。107~109は磨り面と敲打面が両方みられるものである。108と110は敲石で、110は表裏面にも窪みがみられるものである。111は扁平な棒状を呈するものである。細くなる先端部に磨り面がみられる。長さ9.6cm・幅3.1cm・厚さ1.7cmを測る。これらの石材は、103・105が閃緑岩、104・105が火山隕凝灰岩、106・107が斑臘岩、108が花崗閃綠岩、109がデイサイト、110が花崗閃綠岩、111が安山岩である。

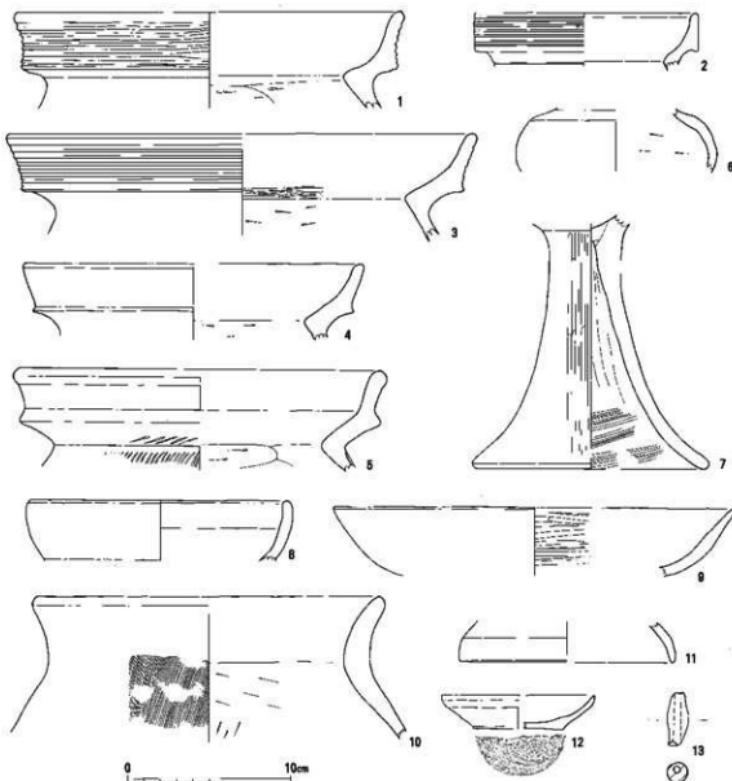
112は湾曲する棒状を呈し、先端部が尖るものである。先端には削痕がみられることから何らかの刺突具と考えられ、錐状石器としておく。長さ9.8cm・幅1.6cm・厚さ1.3cmを測る。石材は網雲母片岩である。

113～131は石鎚である。113は切れ目石鎚である。ラグビーボール状を呈し、両端部に切れ目が入る。長さ4.3cm・幅3.0cm・厚さ2.9cmを測り、石材は細粒閃緑岩である。114～131は楕円形を呈する円錐で、両短辺を打ち欠くものと（114～124）、両長辺を打ち欠くもの（125～130）に区別される。石材は114・116・117・120・124・126・129が閃緑岩、115・125・131が花崗岩、118・119・121が安山岩、122がひん岩、123が斑臘岩、127が石英斑岩、130はディサイト質凝灰岩である。

132・133は台石である。133は表裏面が使用面で、両面は緩やかに窪んでいる。石材は132が閃緑岩、133がひん岩である。

第43図は弥生時代以降の遺物である。

1～5は複合口縁を呈する甕である。1～3は外面にクシ状工具による擬凹線が施されるものである。4・5は無文のもので、5は口縁端部が肥厚し、頸部に連続刺突が施される。1～3は弥生時代後期中葉、4は後期後葉、5は古墳時代前期前葉のものと考えられる。



第43図 2区 第1黒色土出土 弥生・土師器・須恵器・土製品 S=1/3

6は小型丸底壺の肩～胴部片である。7・8は高坏である。7は長い脚部で外面にミガキが施される。9は坏部で内面にミガキが施され、口縁は丸みを帯びて立ち上る。いずれも古墳時代前期であろうか。8・10は単純口縁の土師器甕である。8は口縁が丸みを帯びて立ち上り、10は外反する。8は古墳時代中期、10は後期以降とみられる。

11は須恵器の坏蓋である。古墳時代後期後半とみられる。12は上師質上器皿である。底部に回転糸切り痕が残り、鎌倉期のものとみられる。13は土鍤である。長さ3.4cm・幅1.4cmを測る細長いものである。

5. 第1ハイカ上面の調査

(1) 道構の配置状況（第44図）

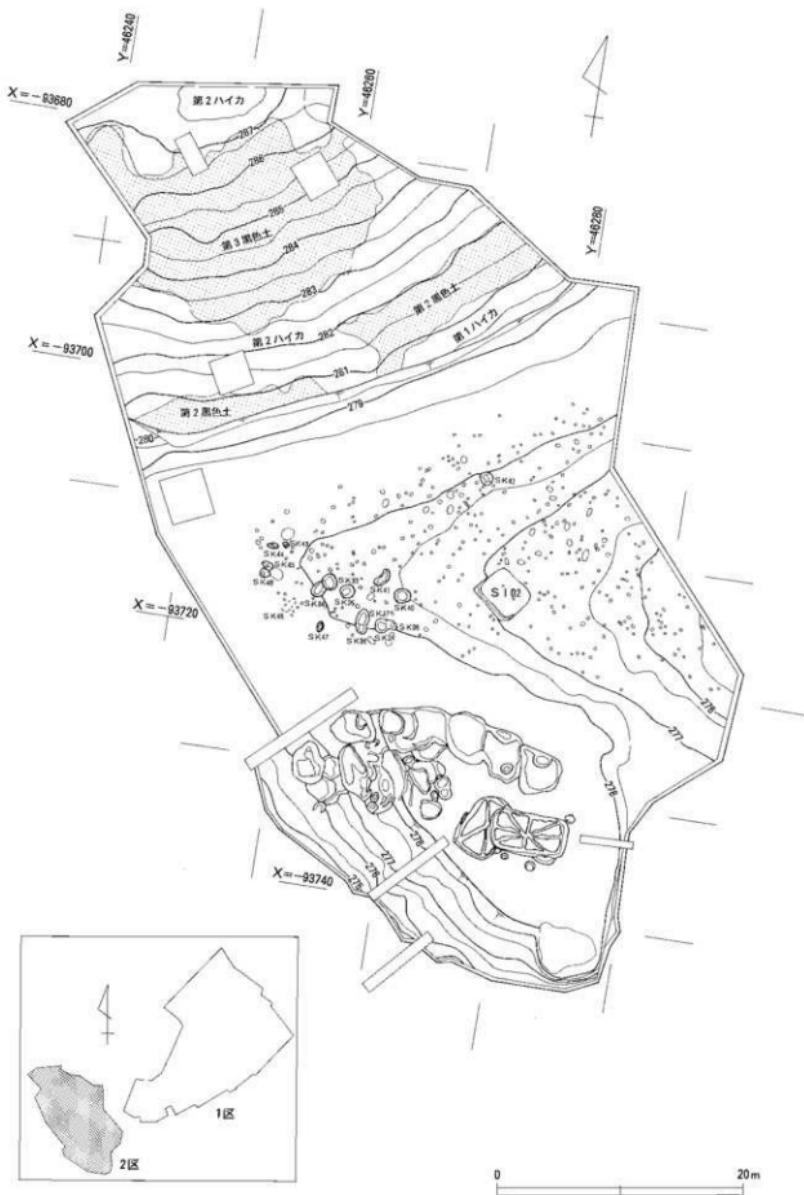
第2調査区は、その地形から大まかに調査区北西側の斜面部と、調査区南東側の平坦部に分けることができる。斜面部は斜面の勾配がおよそ 20° を測るが、第1ハイカ層は斜面部下方端部を除き流失している。一方平坦部は、ほぼ全面にハイカ層が堆積していた。後世の削平もあり1200mに渡り平面が広がっており、中央付近では谷状地形が南東方向に向かって広がる気配をみせている。

道構は平坦部に集中して検出されている。黒色土を掘り下げていく途中で、まず平坦部のほぼ中央付近で堅穴住居S I 02が検出された。また、平坦部の谷状地形が始まる付近では、ハイカ層に掘り込まれた土坑が集中して16基検出された。この土坑群は、土坑内に長細い石を立てたり、横倒しにしたものと、直径1m前後の土坑内に人頭大の礫が集められたものに区別できる。前者を「立石土坑」、後者を「集石土坑」と称している。

なお、平坦部の谷状地形内のほぼ全面で、多数のピットが検出されている。これらは、不整形で浅く、道構の並びを示すものも検出できなかったので、これらには柱穴でないものも含まれていると考えられる。



集石土坑の調査風景



第44図 2区 第1ハイカ上面遺構配置図 S=1/400

(2) 穹穴建物

S I 02 (第45・46図)

前述したように、S I 02は平坦部のほぼ中央付近で検出された。第44図では建物が第1ハイカ上面に掘り込まれたように表現しているが、本来は第1黒色土の上面から掘り込まれていたと推測されるものである。遺構内堆積土と黒色土が区別できず、ハイカ層付近まで掘り下げてようやく床面を認識したというのが実際である。

S I 02は北東側が流失しているが、南壁が高さ30cmほど残存しており、東壁から西壁にかけて壁帶溝が巡っている。

床面形はやや隅丸方形を呈しており、南側では一辺の長さがおよそ3.5mを測るものである。床面には粘土が貼られた痕跡は確認できなかったが、踏み固められたように表面は平滑であった。

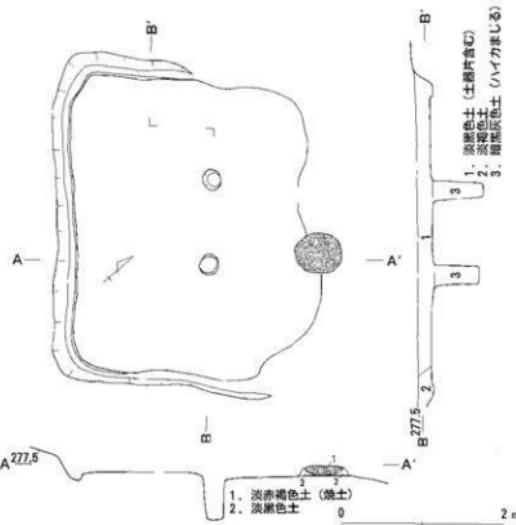
床面からは柱穴とみられるピットが2点検出されている。ピットは径25cm・深さ55cmを測り、ピット間はおよそ1mを測る。柱列を床面の方向にあわせ、ほぼ中央に位置することから、S I 02は2本柱の穹穴建物であったと考えられる。また、床面の北端では、焼土面が検出された。焼土面は長さ58cm・幅48cmの楕円形を呈するもので、比熱のため赤化している。なお、この焼土面は床面より15cm高い位置で検出されており、床面に土を盛って火を使用したと推測される。

遺物は床面から検出され、残りのよい南壁付近や北側に集中していた。

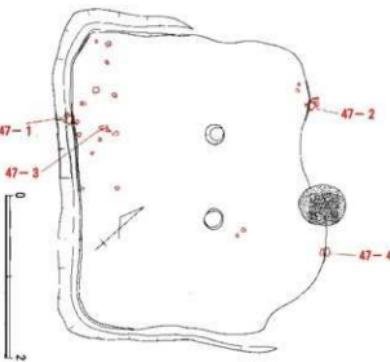
S I 02出土遺物 (第47図)

いずれも土師器で、1～3は単純口縁の甕である。頸部がすぼまり口縁が逆「ハ」字状にひらくもので、器形は肩部が張り胴部が球状を呈するものとみられる。

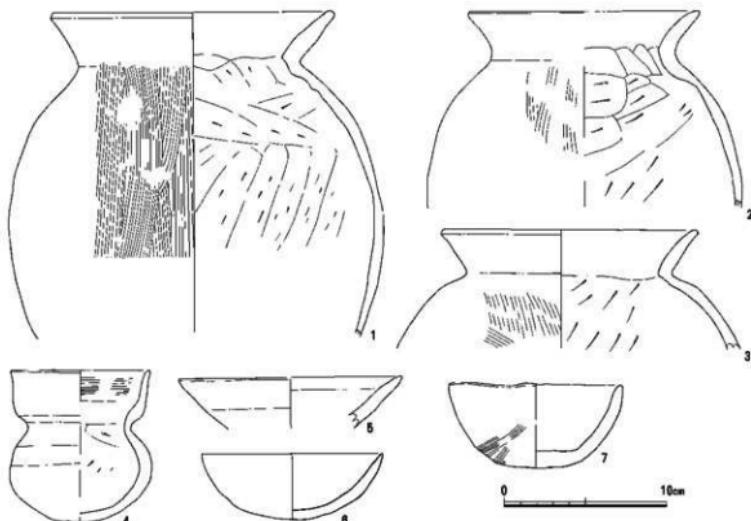
4はほぼ完形の小形丸底甕である。口縁は複合口縁がだれた形状で、端部にかけて直立する。口縁内面にはヨコ方向のハケメが施されている。口径と胴部径はほぼ同じで、口径8.5cm、器高9.4cm



第45図 2区 第1黒色土上面 S I 02 S=1/60



第46図 2区 S I 02遺物出土状況 S=1/60



第47図 2区 第1ハイカ上面S101出土遺物 S=1/3

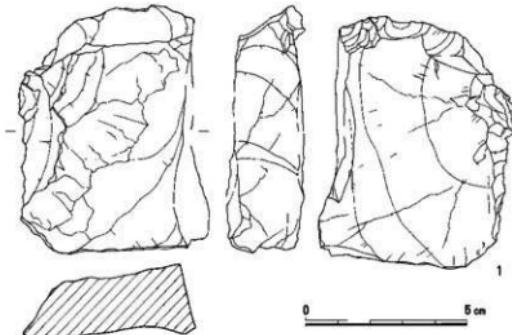
を測る。

5は高環の坏部と考えられる。6・7は环であり、7は指頭圧痕が明瞭で、外面底部にはハケメが施されている。

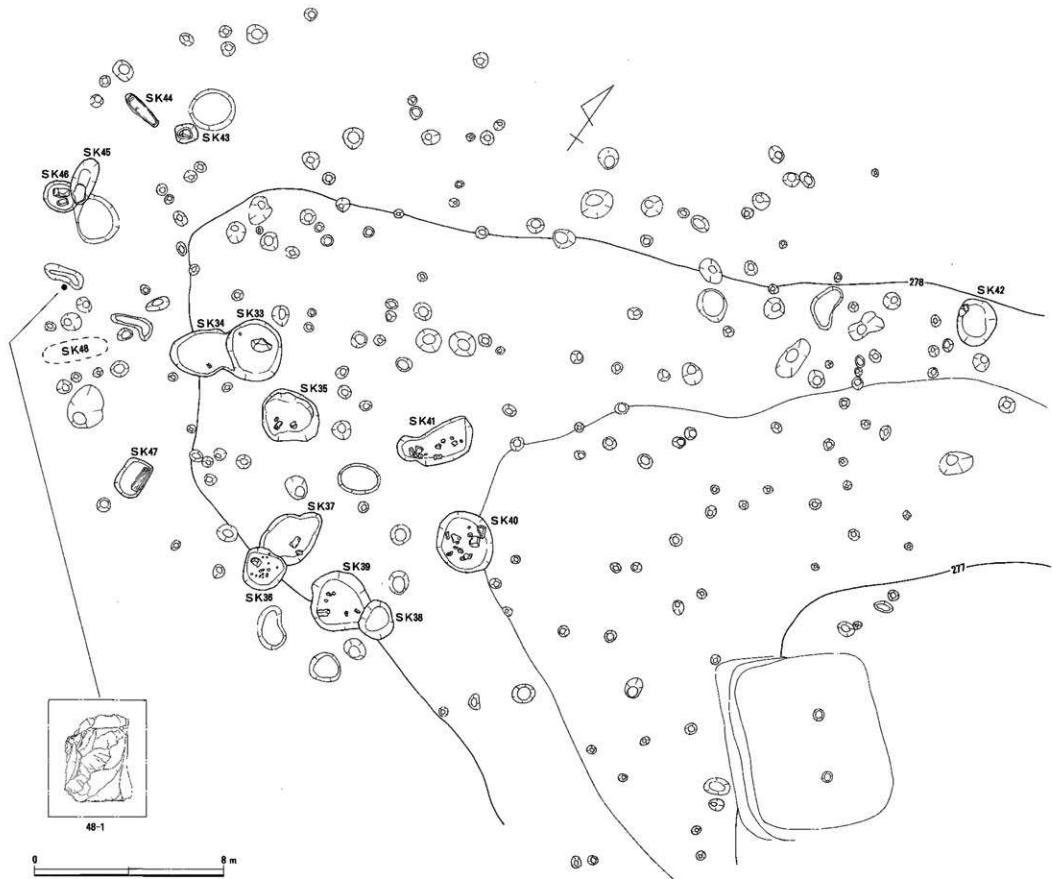
これらの時期は甕の形態や小型丸底壺の存在、須恵器がみられないことなどから古墳時代中期後葉と考えられる。

(3) 土坑(第49図)

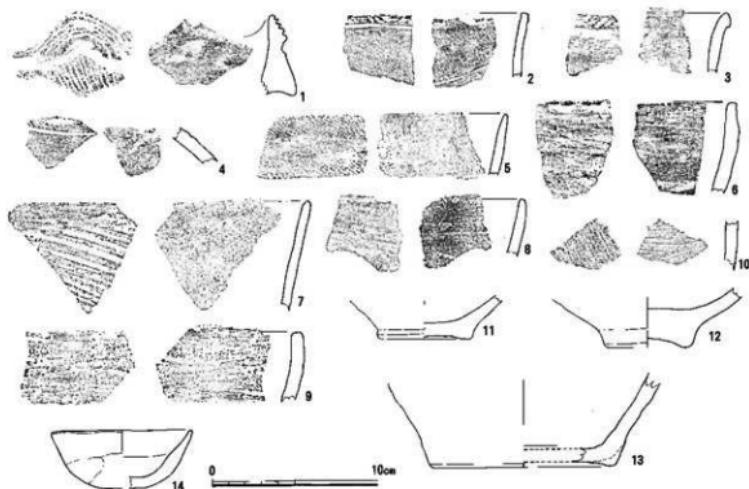
土坑群は前述したように「集石土坑」と「立石土坑」に区別される。「集石土坑」は10基検出され、うち9基は径2m前後の環状に配置されるものである。なお、SK42だけは環状土坑から北側



第48図 2区 第1ハイカ上面SK42出土遺物 S=2/3



第49図 2区 第1ハイカ上面SK群配置図 S=1/80



第50図 2区 第1ハイカ上面ピット内出土遺物 S=1/3

~10m離れた位置で検出された。

「立石上坑」は「集石上坑」のすぐ西側で6基検出され、2.2m前後の間隔をあけて弧状に配置されているようだ。ただし、SK48はハイカ上面調査時には検出できず、ハイカ上面の調査終了後、重機によるハイカ除去中に検出されたものである。従って正確な土坑の位置は、実際には特定できない。しかしながらSK46とSK47の間がかなり空いており、等間隔でピット等のない範囲から考えると、第49図の波線で示す位置が想定されるものである。また「立石上坑」は、長さ1m前後の柱状石を上坑内に立てたもの（SK43・46）と、上坑内に横倒しになって検出されたもの（SK44・45・48・49）に区別される。

S K群周辺出土遺物（第48図）

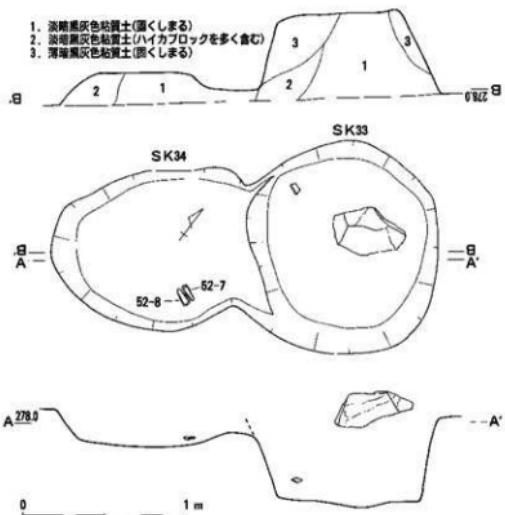
1は、SK45・46とSK48の中間付近で検出されたものである。各面に細かな加工痕はなく、表裏面や側面に大きな剥離面がみられ、板状の素材剥片というべきものである。長さ7.5cm・幅5.8cm・厚さ1.7cmを測り、石材は玉髓である。

第1ハイカ上面ピット内出土遺物（第50図）

第50図第1ハイカ上面ピット内から検出された土器である。

1は口縁が上下に幅広く肥厚する深鉢の波頂部である。肥厚部外面に横方向の太い沈線が施され、沈線上方に入り組み状のクシ描き条線、沈線下方にナナメ方向のクシ描き条線が施される。崎ヶ鼻式に比定されるものである。

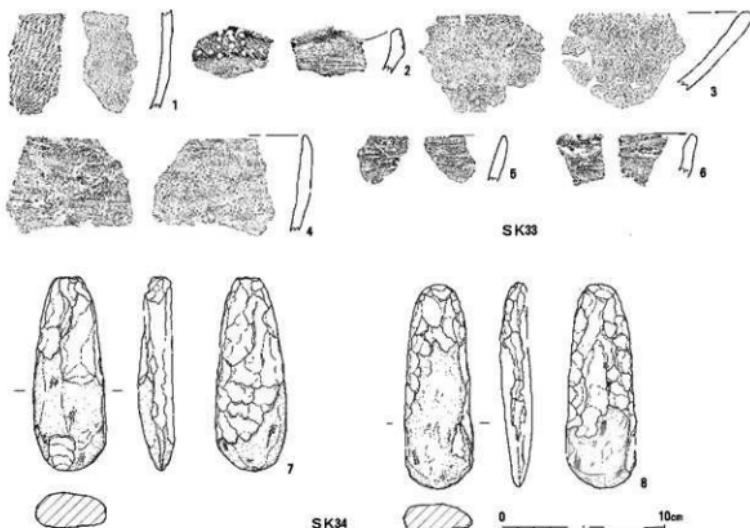
2・3は平口縁の端部外面に帯状の縄文が施される上器である。2は口縁が肥厚せず沈線が施されるもので、3は端部外面が帯状に肥厚し、彦崎K1式に比定される。



第51図 2区 第1ハイカ上面SK33・34 S=1/30

のものがある。

14は小型の橢形土器である。表裏面に指頭圧痕が明瞭にみられる。



第52図 2区 第1ハイカ上面SK33・34出土遺物 S=1/3

4は壺形土器の肩部片で、沈線間に二枚目による刺突が施される。丁寧に磨かれており、注口土器と考えられる。彦崎K2式に比定される。

5は外面縄文地の土器で、頸部は縄文をナデ消されている。器壁は薄手で、口縁も尖り気味に収まる。凹凸～彦崎K2式のものであろうか。

6～10は無文である。6・7・9・10は粗製深鉢で、外面調整はナデ(6)や貝殻条痕(7・10)、ケズリ(9)などがみられる。8は外面にミガキが施され、楕形の浅鉢と考えられる。

11～13は底部である。平底状のもの(11・13)と上げ底状(12)

これらのうち、1・3は第2黑色土にみられる土器である。ピット底面を掘りすぎて、下層の上器を検出したと考えられる。

S K33・34 (第51図)

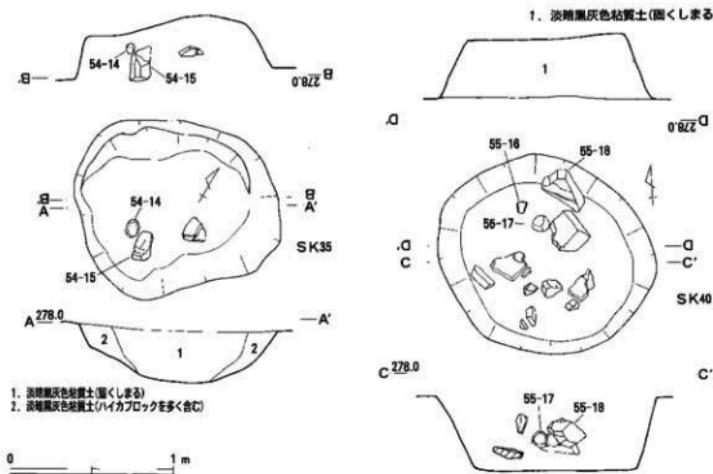
環状を呈する集石上坑群の西端で検出された上坑である。2基重なっており、七層の切りあいではSK34の北東側をSK33が掘り込んでいるようにみられた。規模は全体で長さ236cm、幅はSK33が132cm、SK34が99cm、深さはSK33が52cm、SK34が20cmを測る。形態はSK33が円形で逆台形に深く掘り込まれているのに対し、SK34は稍円形で浅いという違いがみられる。

出土遺物として、SK33からは堆積土の上面で長さ51cm・高さ22cmの角礫が検出され、下層から上器片が数点検出された。SK34では土器片はみられなかったが、東側隅から磨製石斧が2点刃部を連えた状態で並んで検出された。

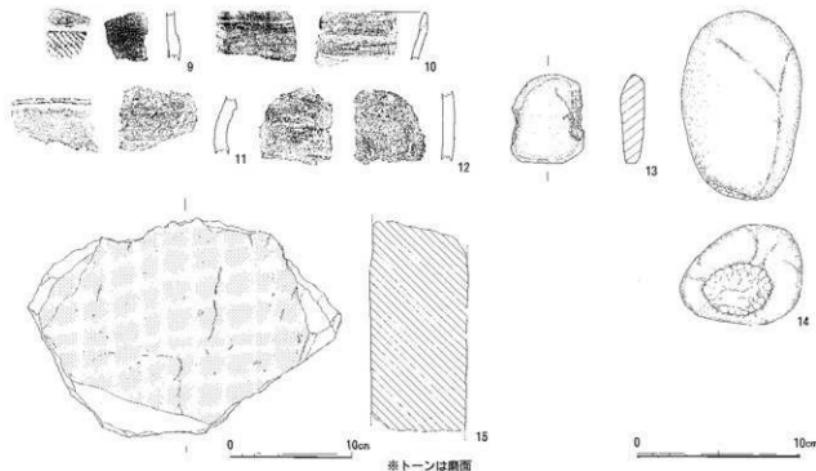
S K33・34出土遺物 (第52図)

1～6はSK33出土遺物である。1は外面縄文地の胴部片とみられる。2は口縁外表面が帶状に肥厚する上器の波頂部である。肥厚部内外面に原体の細い縄文が施され、波頂部から3条の列点文が垂下する。3～6は無文上器である。3は内外面にミガキが施され、楕形を呈する浅鉢とみられる。4～6は粗製深鉢で、いずれも調整は内外面ともナデである。これらの上器は有文土器の特徴から、おおむね縄文時代後期中葉と考えられるものである。

7・8はSK34出土遺物である。いずれも磨製石斧であり、形状は扁平で基部から刃部にかけて緩やかに広がっている。7は長さ11.9cm・幅4.4cm・厚さ2.2cmを測り、刃部には使用痕・側部と裏面に敲打調整痕がみられる。8は長さ12.5cm・幅4.3cm・厚さ1.7cmを測り、側部から裏面にかけて細かな敲打・剥離調整痕がみられる。両者ともほぼ同形態のもので、石材は7がひん岩、8が緑色岩である。



第53図 2区 第1ハイカ上面SK35・40 S=1/30

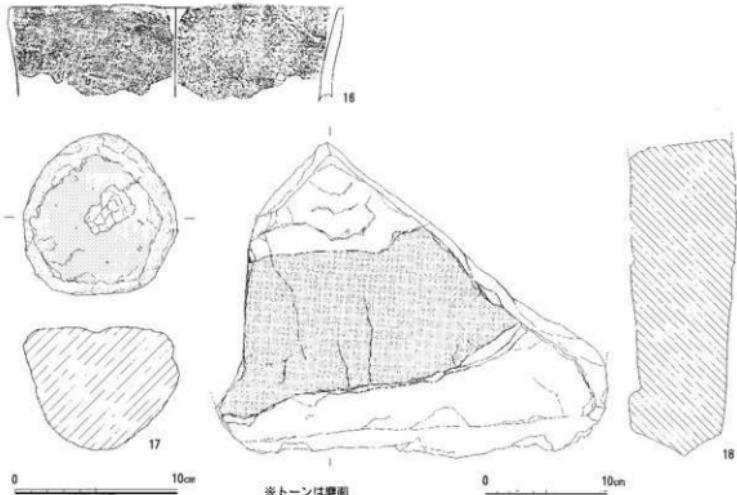


第54図 2区 第1ハイカ上面SK 35出土遺物 9~14はS=1/3、15はS=1/4

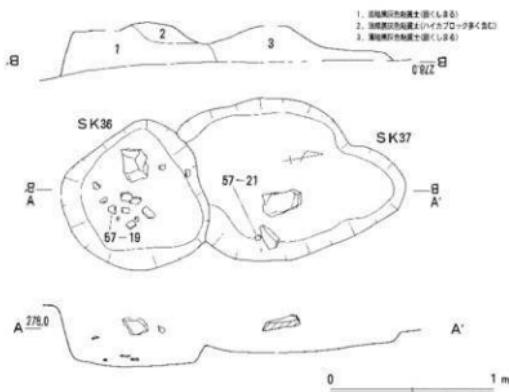
S K 35 (第53図)

S K 33の東側に隣接する土坑である。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長さ128cm・幅112cm・深さ31cmを測り、底面は湾曲している。

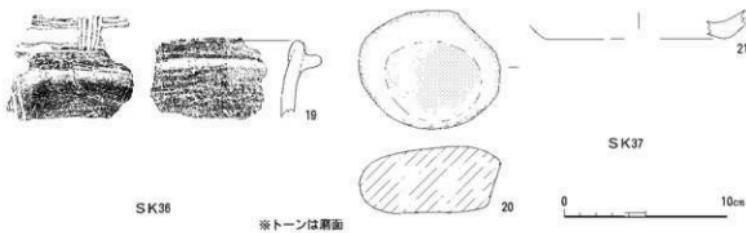
出土遺物としては、土器片や磨り石、台石などがみられるが、台石は土坑内に直立した状態で検



第55図 2区 第1ハイカ上面SK 40出土遺物 S=1/3



第56図 2区 第1ハイカ上面SK36・37 S=1/30



第57図 2区 第1ハイカ上面SK36・37出土遺物 S=1/3

出された。

S K35出土遺物 (第54図)

9～12は土器である。9は胴～頸部片で、境に段がみられるものである。胸部には織文が施され、頸部や内面にはミガキが施されている。縁帶文土器の浅鉢と考えられるが、第1黒色土で出土するものより若干古い様相をもつものである。10・12は粗製深鉢である。いずれも調整はナデである。11は頸部片とみられるが、上端部に横走る沈線と隆起帯がみられる。

13～15は石器である。13は石錘で、両長辺に抉りが施されるものである。石材はアブライト質花崗岩。14は敲石で、乳棒状を呈する先端部に敲打面がみられる。花崗斑岩製。15は直立した状態で検出された台石である。角張った形状の上面に磨り面がみられ、表面は平滑である。安山岩製。

S K40（第53図）

S K40は環状を呈する集石土坑群の東側に位置する。平面形は不整な円形を呈し、長さ138cm・幅121cm・深さ38cmを測る。逆台形状に掘り込まれ、底面は平坦である。

出土遺物には土器片や磨石、台石の他、多数の角礫が混じっていた。台石は土坑の壁面に寄りかかった状態で検出されている。

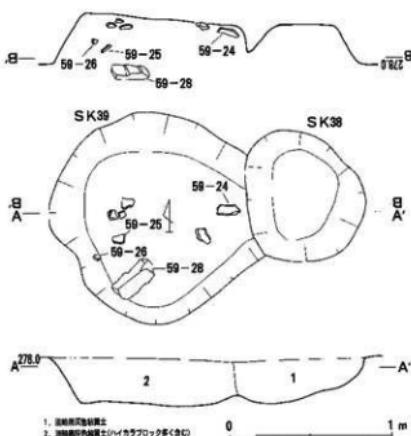
S K40出土遺物（第55図）

16は粗製深鉢の口縁である。調整は内外面ともナデである。

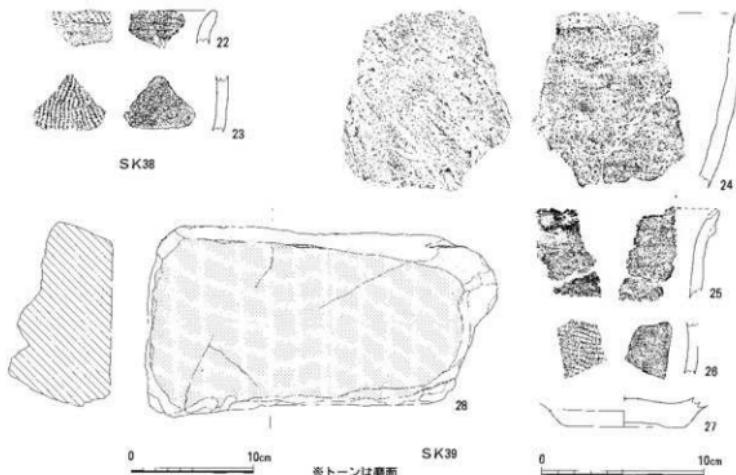
17は磨石である。円礫の1面が磨られて平坦なっている。中央には敲打痕がみられ窪んでいる。石材は黒雲母花崗岩。18は台石である。扁平な角礫で、表面に使用面が認められる。17とセットで使用されたものであろうか。

S K36・37（第56図）

環状を呈する集石土坑群の南端で検出された。南北方向に平行して2基重なっており、土層の切り合からS K36がS K37の南側を掘り込んでいる。規模は全長318cm、幅はS K36が139cm、S K37が150cm、深さはS K36が40cm、S K37は32cmを測る。形態はS K36が円形、S K37が梢円形を



第56図 2区 第1ハイカ上面SK36・39 S=1/30



第59図 2区 第1ハイカ上面SK38・39出土遺物 S=1/3 (28はS=1/4)

呈しており、同じく切り合っているSK33・34と同様の特徴がある。

いずれも土器片などの他、扁平な角礫が上方から検出されている。

S K36・37出土遺物（第57図）

19・20はSK36出土遺物である。19は口縁に粘土帯を貼り付け大きく拡張するものである。拡張部には沈線が施され、ミガキが施される頸部にも垂下する沈線がみられる。20は磨石で、扁平な角礫の表面に磨り面がみられる。石材は黒雲母花崗岩である。

21はSK37の出土遺物で、底部の小片とみられる。

これらのうち、19は明らかに後期前葉の特徴をもち、第1黑色土ではみられない土器である。底面で出土しているので、SK36は床面を深く掘りすぎて下層の遺物を検出した可能性が高い。

S K38・39（第58図）

環状を呈する集石土坑群の南西端に位置する。東西方向に平行して2基重なっており、東側がSK38、西側がSK39である。土層の切り合いからみて、SK38がSK39の東端部を掘り込んでいるようだ。規模は全長292cm、幅はSK38が125cm、SK39が196cm、深さはSK38が39cm、SK39が42cmを測る。形態はSK38が円形を呈し、SK39が不整な楕円形を呈している。

SK38の出土遺物には土器片が含まれているが、他の土坑にみられるような角礫は検出されていない。SK39からは土器片の他、台石が堆積上面から出土している。

S K38・39出土遺物（第58図）

22・23はSK38出土遺物である。22は口縁部の小片である。口縁端部外面が帶状に肥厚し、繩文が施されている。四元式並行期のものとみられる。23は胴部片で、外面に繩文、内面にミガキが施される。縄文土器の浅鉢の胴部とみられる。

24～28はSK39出土遺物である。24は粗製深鉢である。端部は尖り気味に納められ、内外面の調

整はナデである。25は口縁外面に粘土帶を貼り付け肥厚させるものである。肥厚帶には指頭圧痕がみられる。26は外面に繩文、内面にミガキが施されるもので、縁帶文土器の浅鉢の洞部と考えられる。27は底部である。平底状を呈する。28は上面で検出された台石である。表面が使用面とみられ平滑である。石材はアブライト質花崗岩である。

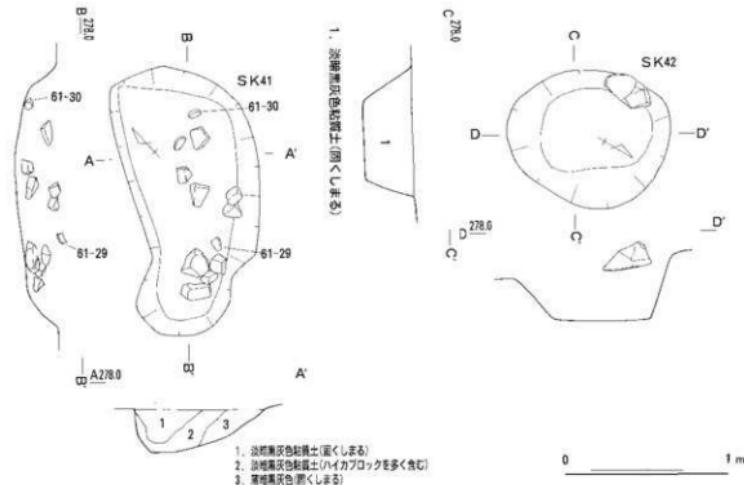
S K41 (第60図)

環状を呈する集石七坑群の北端部で検出された十坑である。形態は長い楕円形を呈しており、規模は長さ166cm、最大幅84cm、深さ26cmを測る。しかし、土坑の西側で円形の堀方が楕円状に角度を変える箇所があり、円形の十坑と楕円形の十坑が重なっている可能性が多分にあるが、土層観察では切り合ひを確認できなかった。

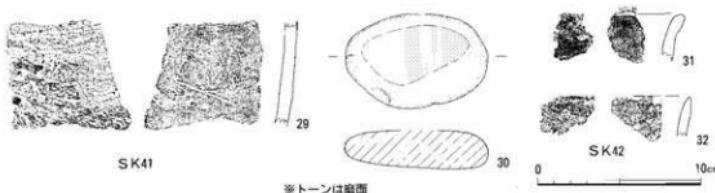
遺物は土器片の他、底面から磨石が出土している。また角礫が多数、特に東端部を中心に検出されている。

S K41出土遺物 (第61図)

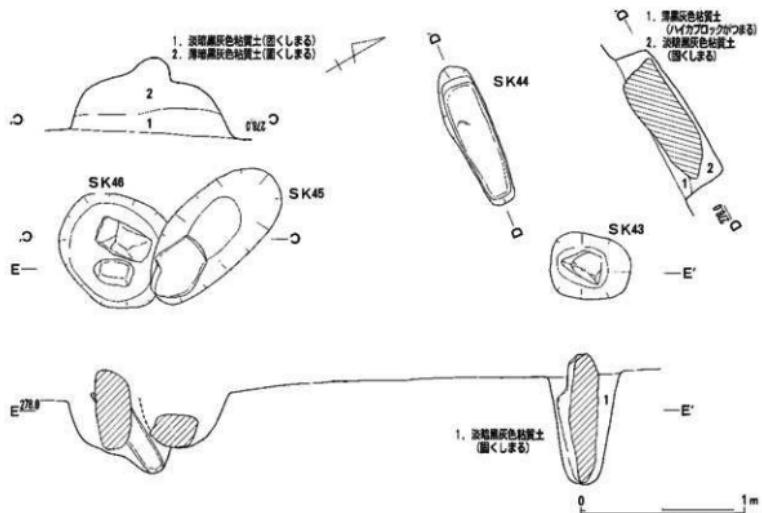
29は粗製深鉢の胴部片である。内外面とも調整はナデである。30は磨石である。扁平な円礫で、



第60図 2区 第1ハイカ上面SK41・42 S=1/30



第61図 2区 第1ハイカ上面SK41・42出土遺物 S=1/3 (C-9)



第62図 2区 第1ハイカ上面SK43~46 S=1/30

表面に磨り面がみられる。石材は閃綠岩である。

S K42 (第60図)

環状を呈する集石上坑群から、北方へ10m離れた位置で検出された上坑であり、1基だけ単独で存在する。平面形は不整な椭円形を呈し、規模は長さ101cm、幅88cm・深さ30cmを測る。また底面は平らで、逆台形状に掘り込まれるものである。

出土遺物として土器片が2点みられるが、堆積土上層の壁際で長さ30cmの角礫が検出されている。

S K42出土遺物 (第61図)

31は口縁端部外側が帯状に肥厚するもので、肥厚部に縄文が施されている。四元式並行期のものとみられる。32は粗製深鉢の口縁部とみられ、内外面の調整はナデである。

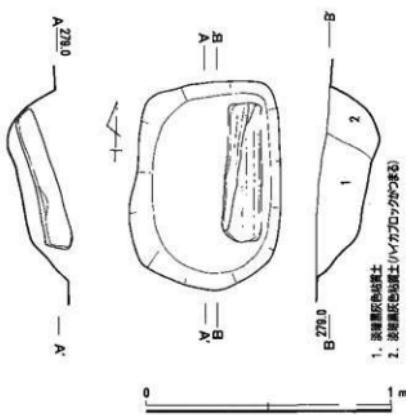
S K43 (第62図)

S K43～S K48は「立石上坑」である。

S K43は弧状を呈する立石上坑群の北端に位置する。上坑は平面形は不整な隅丸方形で、長さ50cm・幅40cmを測る。上坑上面検査時から立石が14cmほど頭部を出していたが、土坑内を掘り下げても立石の全体が現れず、思い切って土坑断面を立ち割ることにした。その結果、当初の予想に反して長さ約80cmの長細い石が検出されたのである。土坑の深さは67cmを測り、底部は第1ハイカ層を突き抜けて第2黒色土まで達していた。

S K43出土遺物 (第64図)

33は上坑内で立てられていた石である。図の左側が先端部にあたる。長さ81.2cm・幅22.4cm・厚



第63図 2区 第1ハイカ上面SK47 S=1/30

さ17.3cm・重さ34.5kgを測り、先端部は逆「コ」の字状を呈し幅広だが、底部端部にかけて細く尖っていく。裏面はほぼ平坦だが、表面は平坦でなく、先端から底部にかけて緩やかな弧状を呈している。先端部や右側面、底部端部の何カ所かに打ち欠きがあり、表面と左側面に顕著な磨り面がみられる。かなり長期的に使用されたとみられ、特に直線状を呈する左側面は、ところどころ波打つような段状になっている。従ってこの立石は、大型の台石・砥石ともみることができるものである。石材は閃緑岩である。

SK44（第62図）

SK43の西側40cmの位置で検出された土坑である。SK43と同様、上面検出時から横倒しになつた右が踏出しており、精査の結果、右を囲むように土坑の掘方が検出された。土坑は非常に細長い形状で、東西方向に平行して掘り込まれている。土坑の長辺は右のすぐ際に掘方があり、石の大きさに合わせて土坑を掘り込んだと考えられる。土坑の規模は長さ92cm・幅30cm・深さ30cmを測るものである。底面は平坦で逆台形状に掘り込まれている。

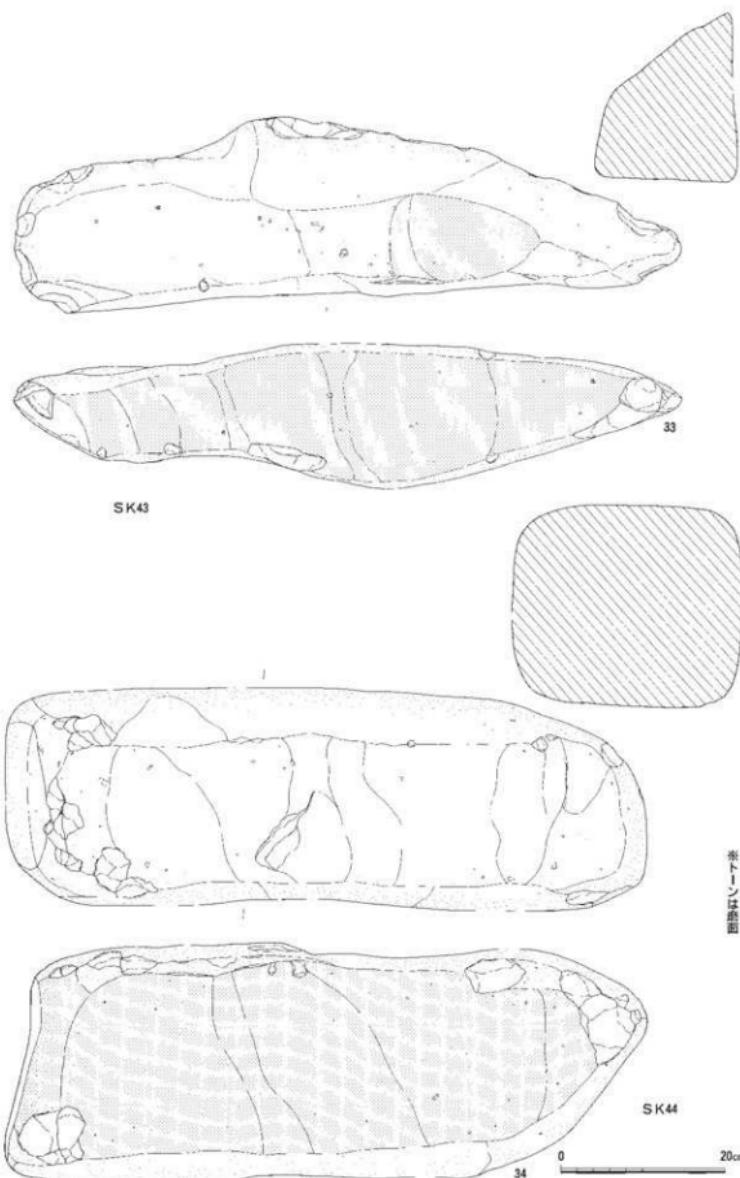
SK44出土遺物（第64図）

34が、図の左側を西に向かう上坑内に横倒しになつた右である。立石群の中で最も大型のもので、長さ78.8cm、幅29.1cm、厚さ27.8cm、重さ108.9kgを測る。ほぼ長方体を呈する形状であるが、右側端部は上下からすばり尖っている。また、SK43と同様に、石の左側面の全面が磨り面になっている。かなり使い込まれたとみえ、磨り面は波打つような段状を呈しており、大型の台石・砥石とみることもできる。しかし、土坑内では磨り面を上面に据えていないことから、土坑に据えて台石として使用したとは考えがたい。石材は閃緑岩である。

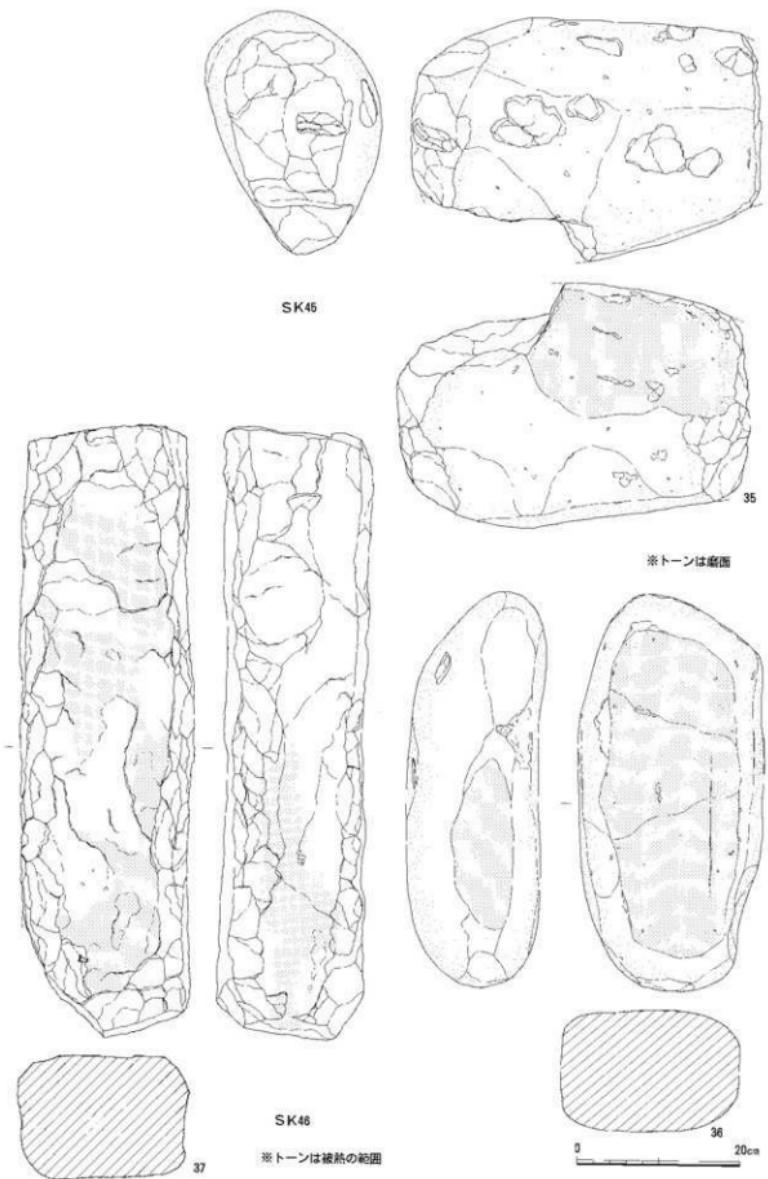
SK45・46（第62図）

SK44からほぼ南方2mの位置で検出された2基の土坑である。2基重なつて検出されており、上層の切り合いからSK45がSK46の北端部を掘り込んでいるとみられる。SK45は南北方向に細長い楕円形を呈する上坑で、規模は長さ102cm・幅50cm・深さ30cmを測るものである。土坑の南側で、右が横倒しになつた状態で検出されている。

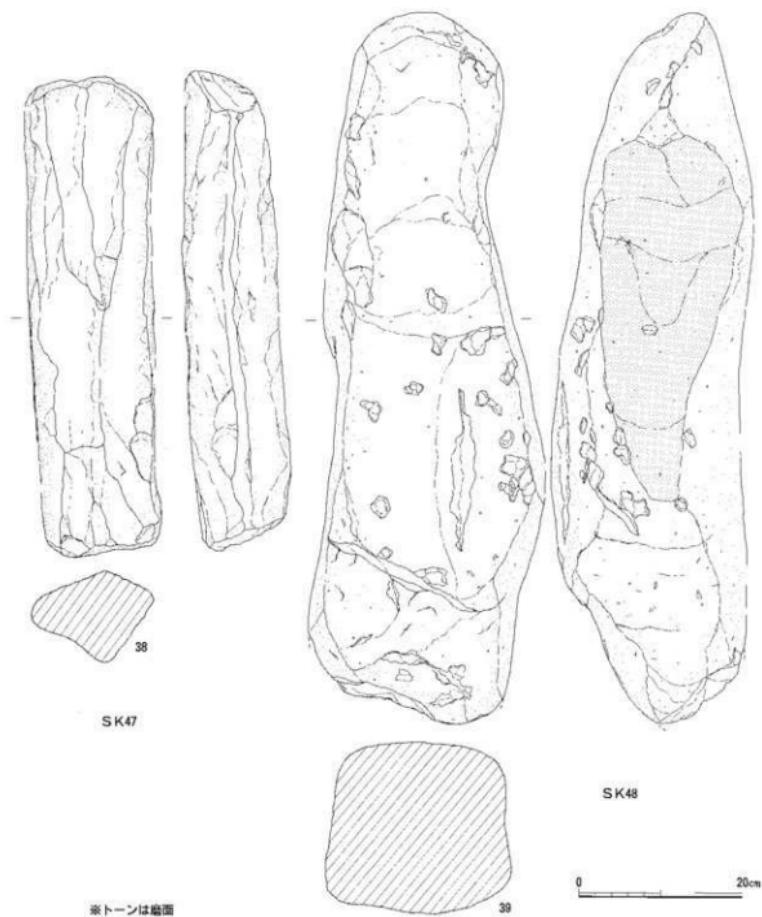
SK46は不整な凹形を呈する土坑で、規模は長さ78cm・幅66cm・最大深45cmを測る。土坑内からは右が2点検出されている。両者とも土坑上面検出時から先端部がおよそ20cmほど突出していた。1点はほぼ直立した状態で、もう一点はナメにのびた状態で検出された。



第64図 2区 第1ハイカ上面SK43・44出土遺物 S=1/6



第65図 2区 第1ハイカ上面SK45・46出土遺物 S=1/6



第66図 2区 第1ハイカ上面 S K47・48出土遺物 S=1/6

35はS K45内で南側に向かって横倒しになっていた石である。長さ42.8cm・幅30.5cm・厚さ20.5cm・重さ34.5kgを測る。楕円形を呈する石であるが、右端部は平坦に加工されている。一方、左側端部は丸みを帯びるように加工が施され、さらに、あたかも男性器を模したようなタテ方向に長さ7cmの溝が掘られている。従って、本来は右端部を底面し、上坑内で立っていた可能性が考えられる。また、裏面には磨り面も認められた。石材は安山岩質火山疊凝灰岩である。

36・37はS K46内で立っていた石である。36は図の向きで直立していたもので、長さ48cm・幅22.9cm・厚さ14.8cm・重さ29.9kgを測る。扁平な楕円形を呈し、表面と左側面に磨り面がみられ、台石・砥石としての機能が考えられるものである。石材は閃緑斑岩である。

37はナメにのびていた石で、他の石と異なり角柱状を呈するものである。長さ74.8cm・幅21.1

cm・厚さ25.0cm・重さ51.0kgを測る。各面の縁部には剥離痕がみられるが、意図的な加工痕なのかは判別できなかった。何らかの未製品ではなく、柱状節理の岩石かもしれない。また、比熱のため赤色化する範囲もみつけられた。何らかの祭祀で使用されたものであろうか。石材は花崗斑岩である。

S K47（第63図）

弧状を呈する立石土坑群の南東端に位置する十坑である。南北方向に沿った梢円形を呈し、長さ130cm・幅92cm・深さ34cmを測る。形態や規模的には集石上坑群に類似しているが、十坑内から長い石が検出された。石は上坑の東壁沿いに横倒しの状態で検出されている。

S K47出土遺物（第66図）

ほぼ長方形状を呈する石で、断面形は菱形を呈する。長さ62.4cm・幅15.3cm・厚さ11.1cm・重さ14.7kgを測り、立石群の中では最も小型のものである。ただ、石の長さに対し上坑が浅く、石が本来立っていたとは考えにくい。また加工痕や磨り面など使用痕は確認できなかった。石材はひん岩である。

S K48

前述したように、重機によるハイカ層除去作業中に石が横倒しの状態で検出され、他の立石群と同様に十坑内に石が納められていたと考えられるものである。石の検出地点から、十坑は第49図のようにS K46とS K47の中間に位置していたと想定される。石の大きさからみて、長さ1m弱の梢円形の土坑と考えられる。

S K48出土遺物（第66図）

立石群の中で最も長大な形状で、長さ87.3cm・幅26.8cm・厚さ23.5cm・重さ71.8kgを測る。断面形は長方形を呈し、右側面に顕著な磨り面がみられる。磨り面はかなり使い込まれたとみられ、強く凹んでいる。そのため、平面形はくねくね曲がってのびる形状を示している。S K44出土のものと同様、大型の台石・砾石としての機能をもつと考えられる。

以上、「集石上坑」と「立石土坑」の概要を述べたが、その性格等については論じることは後章に譲ることにする。

第5章 第2黒色土・第2ハイカの調査

第2黒色土・第2ハイカ上面は、下山遺跡の第1～3黒色土を通じて最も多数の遺物が出土した層である。遺物の時期幅は中期前葉（船元）～後期前葉（彦崎K1）と、各黒色土では最も短い期間であり、さらに大半は後期初頭～前葉に集中している。明確な住居跡こそ検出できなかったが、この時期、下山遺跡においては周辺の生産活動が最も活発になったことを伺わせる。ただし1区では遺物は少なく、2区において大量に出土した。

第1節 1区の調査

第1ハイカ上面の調査終了後、トレンチ調査で下層の遺物分布状況を確認した。その結果、調査区の南西側では遺物が検出されず、調査区の北東側を中心に第2黒色土の調査範囲を確定した。面積は2,694m²で、第1黒色土調査区のおよそ半分となった。

1. 第2黒色土の調査

後世の削平による加工面が3段に渡ってみられるが、北東部を中心に遺物が分布している（第67図参照）。遺物は縄文時代後期のものを中心に、土製品・磨石・敲石・石鍤・台石などが検出された。土製品には土偶など注目すべき遺物も含まれている。

第2黒色土出土遺物（第68～72図）

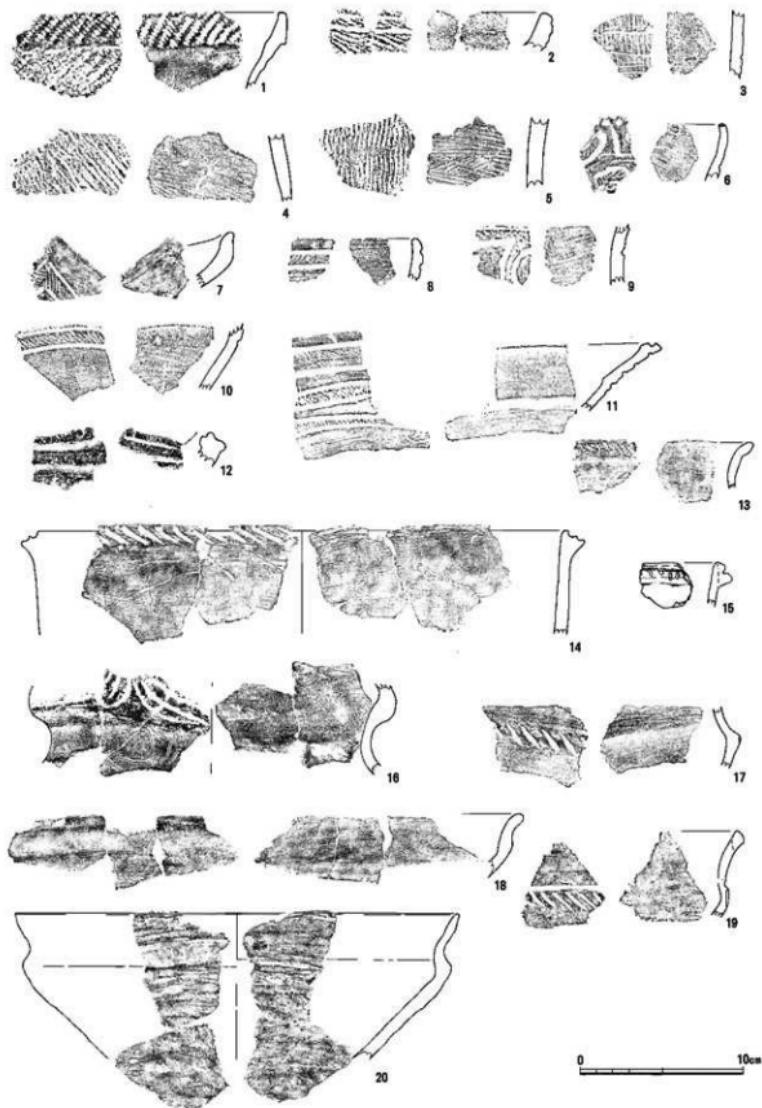
第68～70図は縄文土器である。

1は縄文地の土器である。口縁端部は先端を外側に折り返したように肥厚している。外面全面に原体の太い網文が施され、口縁内面も若干肥厚させ網文が施されている。器壁は薄手で、緩やかなキャリバー状を呈する平口縁とみられる。

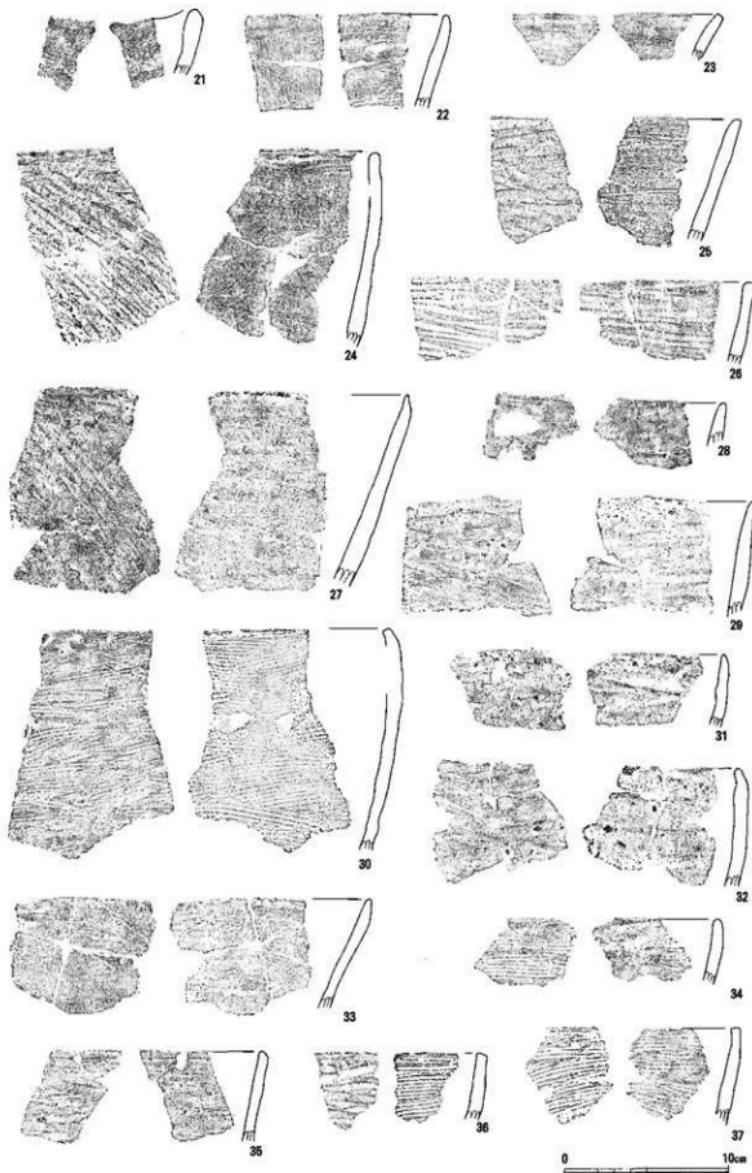
2～5は燃糸文が施された土器で、文様は1条おきに深くなる特殊なものである。2は口縁部で、



第67図 1区 第2黒色土遺物出土状況 S=1/600



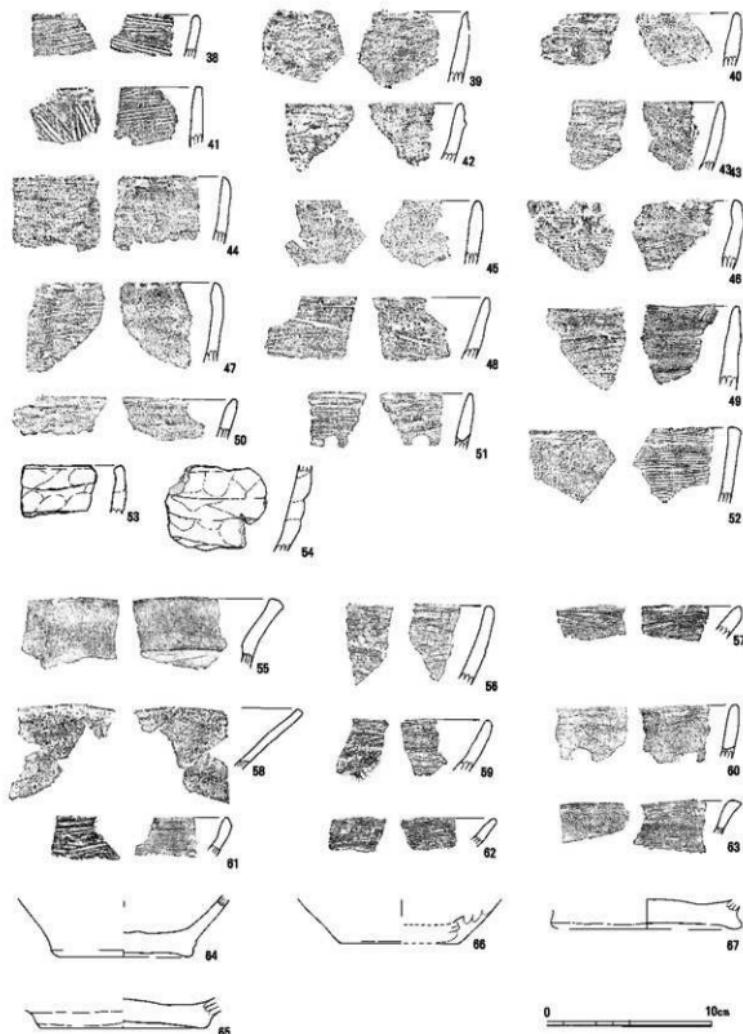
第68図 1区 第2黑色土層出土遺物 1 S=1/3



第69図 1区 第2黑色土層出土遺物 2 S=1/3

器壁が厚く、口縁に平行して太めの沈線文が3条施されるものである。3もヨコ方向の沈線が施されている。

これらの遺物は小破片のため時期の限定は難しいが、1は船元I～II式、2～5が里木II式の様相をもつものと思われる。従って時期は1が中期前葉、2～5は中期後葉とみられる。



第70図 1区 第2黑色土層出土遺物 3 S=1/3

6～11は磨消繩文が施される深鉢・浅鉢である。6～9は深鉢で半口縁（6・8）と波状口縁（7）があるが、口縁の残存部が少ない6は波状口縁の可能性が高いものである。10は小片だが内外面とも丁寧にミガキが施され、浅鉢と考えられる。11は幅狭の繩文帯をもつ浅鉢で、口縁端部が屈曲気味に若干肥厚し、内面には段をもつ。

これらの遺物は後期初頭に位置づけられるものであるが、11は比較的新しい様相をもつものである。

12～16は縁帶文系の深鉢であり、いずれも頸部は無文で、文様は口縁に集約されている。波状口縁（12・16）と半口縁（13～15）のものがあり、外面が肥厚する。13は端部がそれほど肥厚せず、繩文が施されている。12・16は沈線、14・15はキザミが施される。

これらの時期は後期前葉に相当する。

17～20は有文・無文の精製浅鉢である。いずれも頸部がくびれ、口縁が緩やかに外反するものである。口縁端部は外側に若干肥厚しており、17・19は肩部にキザミが施される。

これらは縁帶文十器に伴う浅鉢と考えられ、後期前葉に位置づけられる。

第69図・第70図38～54は無文粗製深鉢である。いずれも破片が小さく、口径を復元できるものはない。器形も胴部がくびれ緩やかなキャリバー状を呈するものと、砲弾型のものに区別できると思われるが、区別はできなかった。口縁形態にあまり変化はないが、27のように外傾するものと30のように内傾気味に直立するものがある。なお、21は波状口縁を呈するものである。調整は、ナデ、ケズリ、条痕、ミガキなどがみられる。51には焼成後の穿孔がある。

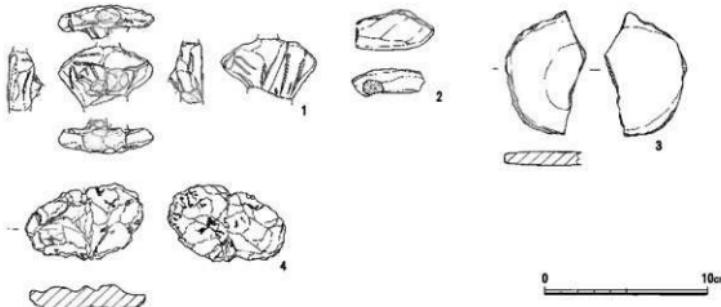
53・54は粘土紐の積上げ痕が明瞭なものである。粘土紐の幅は1.5cm前後を測る。53は口縁部で、54と同一個体とみられる。内外面とも指頭圧痕がみられ器面を調整するような気配がなく、意図的にこのように仕上げられたものとみられる。

55～63は無文の浅鉢で、いずれも内外面にミガキが施されている。55は内面に段をもち、口縁は外傾する。63も55と同タイプとみられる。56～62は楕形を呈し、60には焼成後の穿孔がみられる。

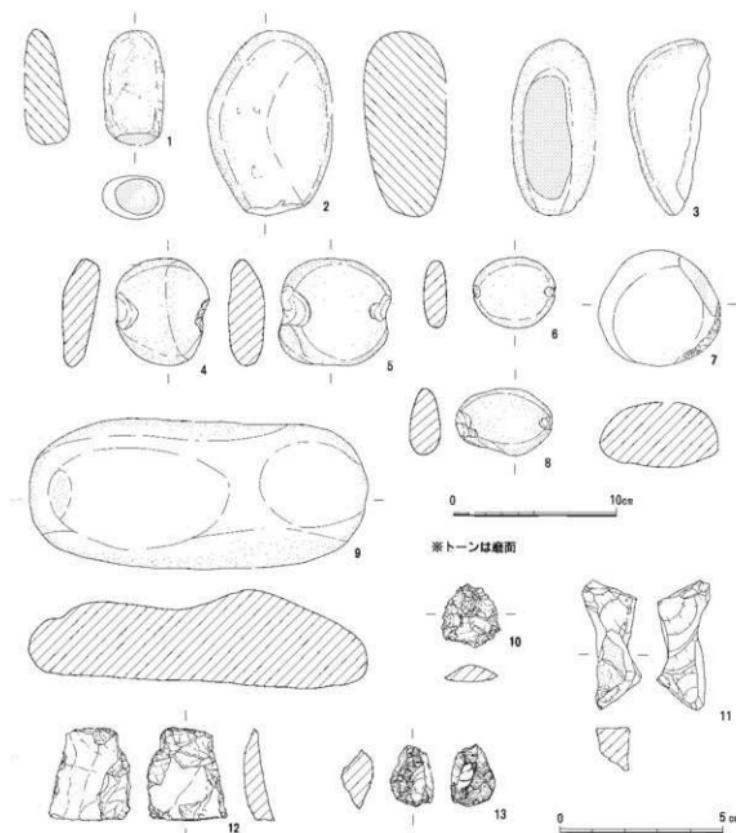
64～67は底部である。66は外面にミガキが施され、浅鉢の底部と考えられる。

第71図は十製品である。

1は土偶である。小型の板状を呈し胴部がくびれ四肢が省略される、いわゆる「分銅形土偶」⁸に



第71図 1区 第2黒色土層出土土製品 S=1/3



第72図 1区 第2黒色土出土石器 1~9はS=1/3、10~13はS=2/3

相当するものである。下半部を欠くが胴部は扁状を呈し、左右の端部が若干内側に傾く。長さ3.7cm・幅5.8cm・厚さ1.5cmを測る。緩やかな弧を描く上端部にも剥離痕がみられ、本来は頭部が付いていたとみられる。胴部には左乳房を欠くが、乳房が突起で表現され、中央には沈線による正中線が確認できる。また、表裏面にひっかいたような不揃いな刺突が施されている。「分銅形土偶」は志津見ダム地内遺跡では、他に五明田遺跡でも出土している。

2は性格不明の七製品である。向きも不明であるが、板状で縁辺部は緩やかな弧状を呈している。形態的には分銅形土偶の下半部に類似するが、文様もみられず不明瞭な点が多いものである。

3は上製円盤である。土器片を再利用している。

4は粘土焼結塊である。長さ7.3cm・幅4.9cm・厚さ1.5cmを測る。

第72図は石器である。

1～9は磨石器である。1～3・7は磨石・敲石類である。1は乳棒状を呈するもので、片側の端部に磨り面がみられる。長さ7.0cm・幅3.7cm・厚さ2.7cmを測り、石材は花崗岩である。2も1と同様に乳棒状のもので、端部に磨り面がみられる。長さ11.3cm・幅7.6cm・厚さ4.9cmを測り、石材はひん岩である。3は楕円形の川原石が破損したもので、片側面に磨り面がみられる。長さ10.6cm・幅4.8cm・厚さ4.7cmを測る。石材は玄武岩である。7は円形で平たい川原石で、側面に磨り面と敲打痕がみられる。長さ7.5cm・幅7.1cm・厚さ4.0cmを測る。石材は花崗斑岩である。

4～6・8は石錘である。いずれも楕円形を呈する円錐で、4は長辺、他は短辺の2ヶ所を打ち欠いたものである。石材は4が花崗岩、5は花崗閃緑斑岩、6が流紋岩、8が安山岩である。

9は台石である。楕円形を呈し、底部は平らで使用面は湾曲している。長さ20.8cm・幅9.0cm・厚さ5.9cmを測る。石材は流紋岩質凝灰岩である。

10～13は剥片石器である。10は黒曜石製の石鎌である。平基無茎鎌で、鎌身部は丸みを帯びている。長さ1.9cm・幅1.8cm・厚さ0.5cmを測る。

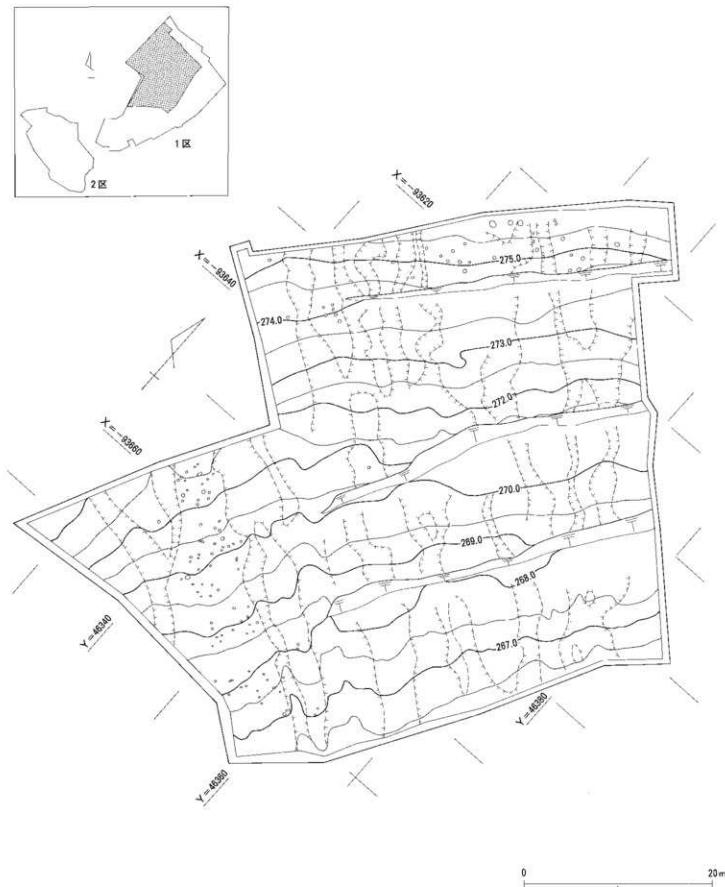
11は石核である。各面に剥離面がみられ、断面形は台形を呈する。黒曜石製で、長さ4.0cm・幅1.8cm・厚さ1.3cmを測る。

12・13は楔形石器である。12は上端部が欠損するが、両長辺に加工が施され形状は方形を呈する。現状で長さ2.9cm・幅2.5cm・厚さ0.7cmを測る。サヌカイト製である。13は裏面に自然面が残るものである。上下端部が刃部であり、つぶれ痕が認められる。長さ1.9cm・幅1.3cm・厚さ0.9cmを測る。黒曜石製である。

2. 第2ハイカ上面の調査

第2ハイカ上面では、明確な遺構を検出することができなかった。調査区の北西壁周辺と南壁周辺でピットが多数検出されているが、これらは不整形で浅く遺物も出土していない。建物の並びを示ないので、遺構でないものも含まれていると考えられる。ただ、2区と比較して遺物出土数がかなり少ないので、この時期の生活面は2区周辺が主体だったのかもしれない。

また、調査区の北西方向から南東方向に向かって、溝状になった地形が十数条のびている。これは第2ハイカ層が、雨水などで浸食されたために形成されたものであり、溝内では第3黑色土が露出している。



第73図 1区 第2ハイカ上面造構配図 S=1/400

第2節 2区の調査

第1ハイカ上面の調査終了後、下層の遺物分布状況を確認するためトレンチ調査を行った。その結果、第1黒色土の調査区と同様の範囲で遺物が検出されたため、そのまま第1黒色土の調査区を踏襲して第2黒色土の調査を行った。

1. 第2黒色土の調査

第2黒色土は、調査区の平坦部ではほぼ前面に厚く堆積していた。斜面部では下方にのみ堆積し、斜面部上方は流出しており、第2ハイカ層やさらに下層の第3黒色土が露出していた。なお、第1黒色土上面と比較して、平坦部の谷状地形が徐々に明確になってきている。

第1ハイカ層の除去は主に重機を使用して行ったが、平坦部では第2黒色土の上面から焼土面が多数検出された。焼土面の調査終了後、第2黒色土の掘り下げを行ったが、各調査区・各黒色土層を通じて最も多くの遺物出土量がみられ、コンテナに換算して80箱分を数える。さらに第2ハイカ上面でも、集石土坑が36基検出されるなど遺構数も最も多かった。第2黒色土は上下をハイカ層に挟まれて、期間にしておよそ1000年と各黒色土中で最も短い時期幅である。にかわらず、最も多数の遺物・遺構が検出された土層であり、さらに遺物の大半は後期初頭～前葉に集中している。この時期において、下山遺跡周辺で最も生産活動が活発に行われたと想定できる。

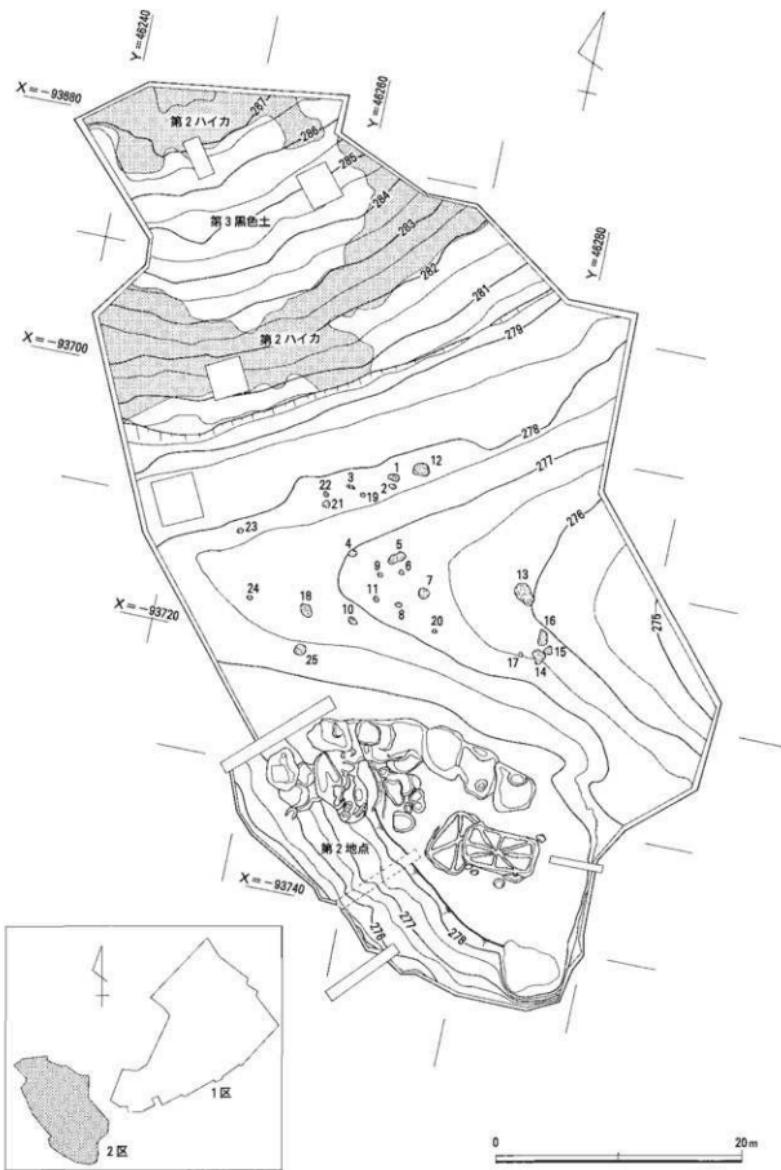
(1) 遺構の配置状況(第74図)

第2黒色土上面では、前述したように平坦部から焼土面が総数25面検出された。焼土面は標高にして278～276.5mの範囲に沿って分布しており、俯瞰すると馬蹄形を呈している。

焼土面という明確な生活の痕跡が検出されたので、本来は堅穴建物なども存在していたことも想定された。数度に渡り黒色土上面の精査を行ったが、黒色土と遺構内堆積土の区別がつかなかったためか検出できなかった。従って、この焼土面が屋外であるか屋内炉であるかの判別はできてい



第2黒色土の調査風景



第74図 2区 第2黑色土上面遺構配置図 S=1/400

ない。

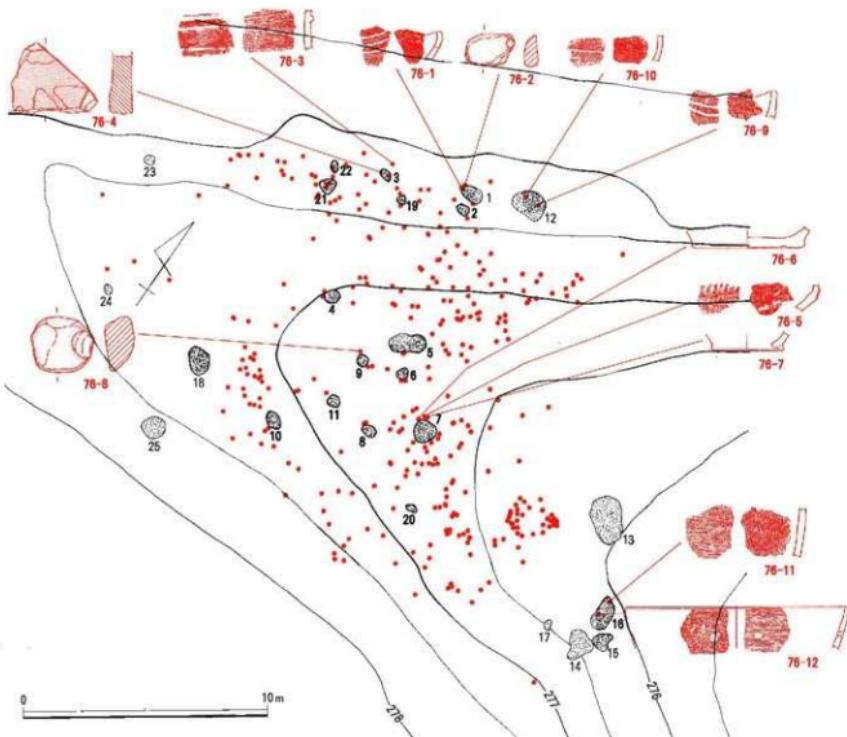
なお、1区の第2黑色土の上面では焼上面が全くみられず、この時期の居住域は2区周辺であったことが想定される。

(2) 焼土群周辺の遺物の分布状況（第75図）

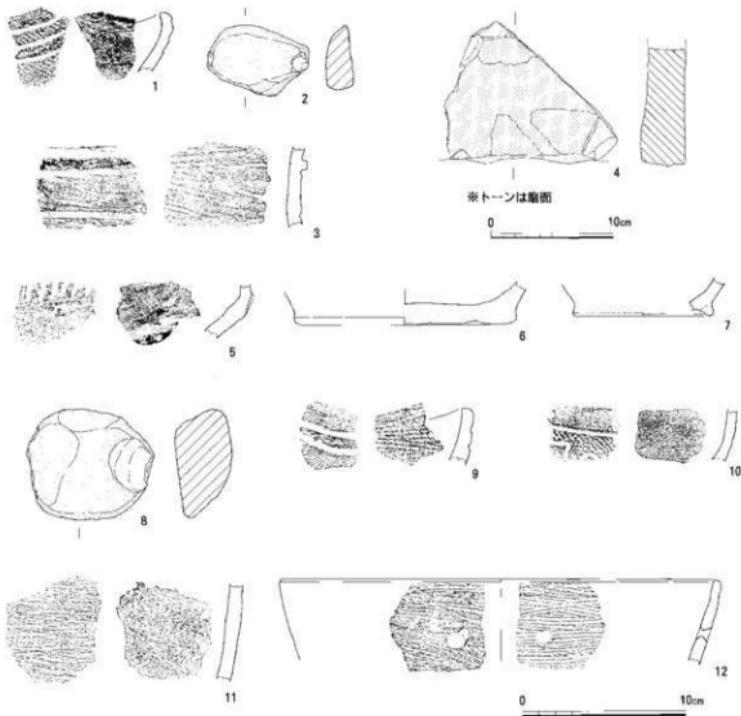
各焼上面の周辺では遺物が比較的多数分布しており、焼土面と遺物の広がりを確認することで生活範囲の復元を試みた。結果、遺物は各焼土面やその周辺に集中して出土しており、屋外炉か屋内炉であるかの区別は別として、各居住域とみることができる。

(3) 各焼土面と出土遺物

焼上面は25面みられるが、いずれも黒色土が比熱のため明確に赤色化したものである。個別の詳細は省くが、大きさは概ね径1～2mの不整な橢円形を呈するものである。焼上に石組みや下層に土坑状の掘り込みを伴うものはみられなかった。遺物は土器の小片や石材剥片が多く、焼土



第75図 2区 第2黑色土焼土群・遺物分布状況 S=1/200



第76図 2区 第2黒色土上面焼土群出土遺物 S=1/3 (4はS=1/4)

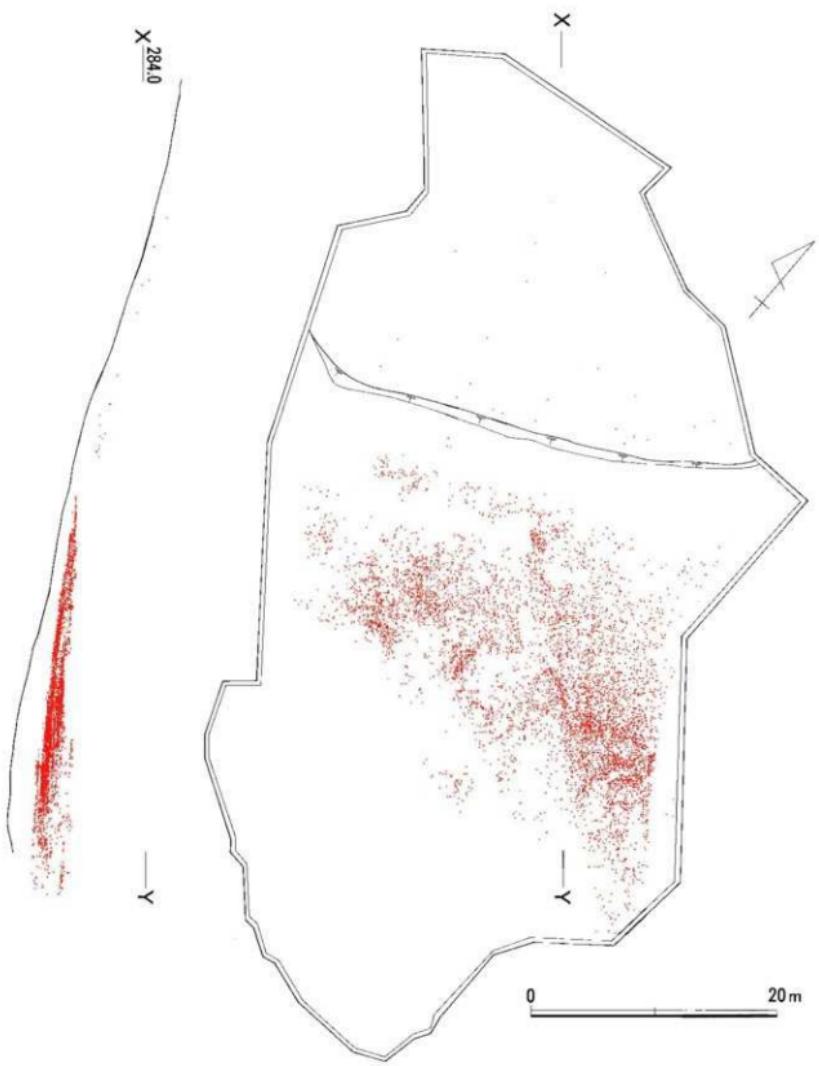
面から出土し形が明瞭なものを記載する。

焼土面出土遺物 (第76図)

1・2は3号焼土から出土したものである。1は磨消繩文が施され、波状口縁を呈する深鉢とみられる。繩文は口縁に沿って横走し、内面にはミガキが施される。中津Ⅲ式に相当し、後期初頭に比定されるものである。2は石錐である。楕円形を呈し、短辺に打ち欠きがみられる。長さ5.6cm・幅4.0cm・厚さ1.6cmを測るものである。

3・4は3号焼土から出土したものである。3は器壁が厚く、ヨコ方向に突帯が付き、突帯を挟んで太い沈線が施されている。沈線が下方にもみられる。調整は内外とも貝殻条痕である。4は台石である。半分以上欠損しているとみられるが、扁平な角礫状を呈し、表面は使用されて平滑である。長さ13.8cm・幅11.4cm・厚さ3.6cmを測る。

5～7は7号焼土上出遺物である。5は浅鉢の肩部片とみられる。肩部は若干肥厚し、タテ方向に刻み目が施されている。頸部境には段がみられる。縁帶文期の浅鉢とみられる。6・7は底部である。6は器壁が厚く平底であり、7は器壁が薄手で、底部は高台状を呈するものである。



第77図 2区 第2黑色土遺物出土状況 S=1/400

8は9号焼土から出土したものである。楕円形を呈する石錐で、短辺に打ち欠きがみられるが左側部は細かく敲打されている。長さ7.8cm・幅7.8cm・厚さ3.4cmを測るものである。

9・10は12号焼土出土遺物である。いずれも磨消繩文が施され、9は波状口縁を呈し、深鉢と考えられる。10は内外面のミガキが「寧で」器形も屈曲する気配があることから、口縁が強く内湾する浅鉢の可能性がある。いずれも中津Ⅲ式に相当する。

11・12は16号焼土出土遺物である。11は器壁が厚く、外面に1条ごとに深くなる撫糸文が施されている。里木Ⅱ式に相当するとみられる。12は粗製深鉢のL口縁で、内外面とも顯著な貝殻条痕が施される。焼成後穿孔もみられる。

(4) 第2黒色土出土遺物の分布状況(第77図)

出土遺物は黒色土が厚く堆積している平坦部に集中している。平坦部に堆積した第2黒色土の厚さは、最も厚いところで90cmを測るが、それでもほとんど隙間なく遺物が検出されている。

分布状況を俯瞰してみると、平坦部ほぼ全面から隙間のないほど遺物のドットがみられる。しかしながら詳しく述べると、径2~3mの円形に遺物が検出されない範囲がかなり日に付き、それも分布範囲の縁辺に多くみられるようだ。これは平坦部谷状地形の縁辺に相当することから、或いは住居跡である可能性がある。

第2黒色土出土遺物(第78~107図)

第78図は縄文地の土器である。

1~23は外面に原体の太い繩文が施される土器である。器壁は絶じて厚手である。

1~4は口縁部である。1は口縁が丸みを帯びながら直立する。口縁に沿って2条の太い凹線が施される。2・3は口縁が内湾しており、いわゆる「キャリバー状」を呈する口縁をもつとみられるものである。2は口縁に沿って凹線が施され、3は凹線はみられないが口縁端部にも繩文が施される。4は小片であるが、2と同様の特徴をもつものである。

5・6は凹線や沈線が施されるものである。5は細片であるが、円弧状の凹線が施されている。

6は内湾する器形をもち、下方から上方にかけて肥厚していく。上方にヨコ方向の沈線が2条みられる。キャリバー状口縁の頸部とみられる。

7・8・10~13・16は器壁が1.2cm前後と厚く、原体の太い繩文が施されるものである。9は器壁が内湾しており頸部片と考えられるが、繩文は非常に粗いものである。19~23は器壁が7mm前後と比較的薄手で、繩文は細く密に施されるものである。

24~34は文様が1条おきに深くなる撫糸文が施されるものである。

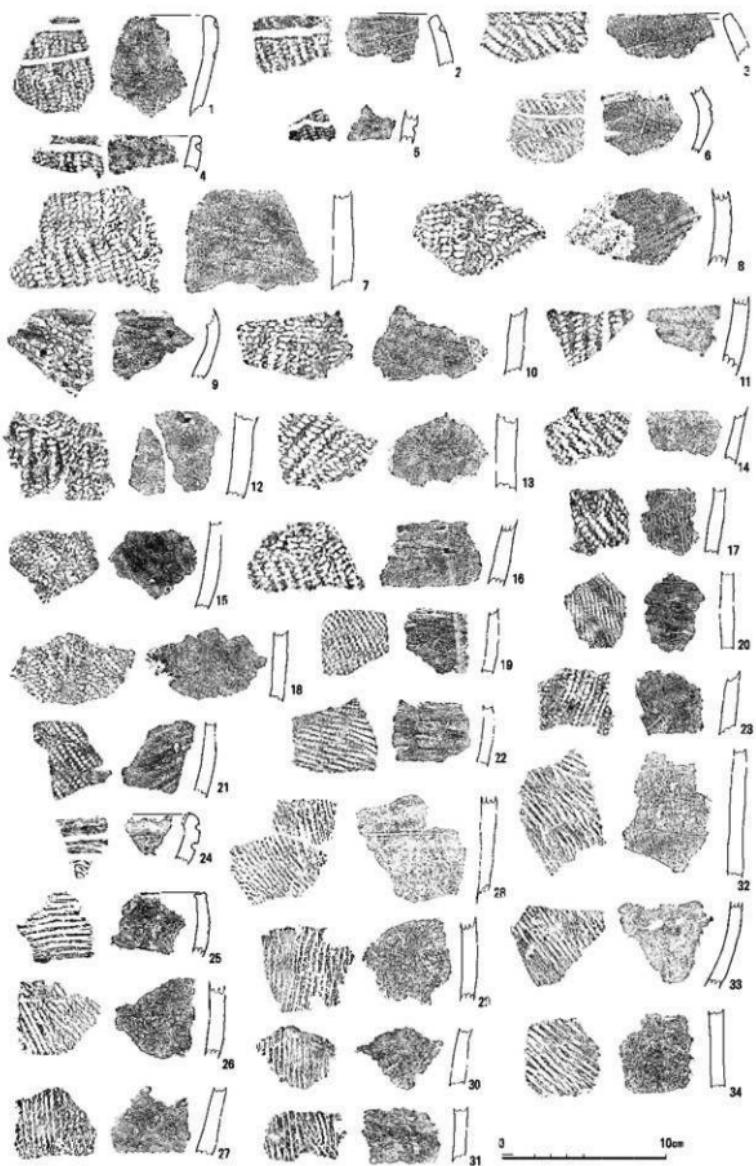
24・25は口縁部である。24は口縁端部が内傾し、口縁に沿って2条の凹線がみられる。25は口縁が丸みを帯びながら直立する。沈線はみられないが、撫糸文はヨコ方向に施されている。

26~34は胴部片であるが、器壁は1cm前後と厚手のものである。

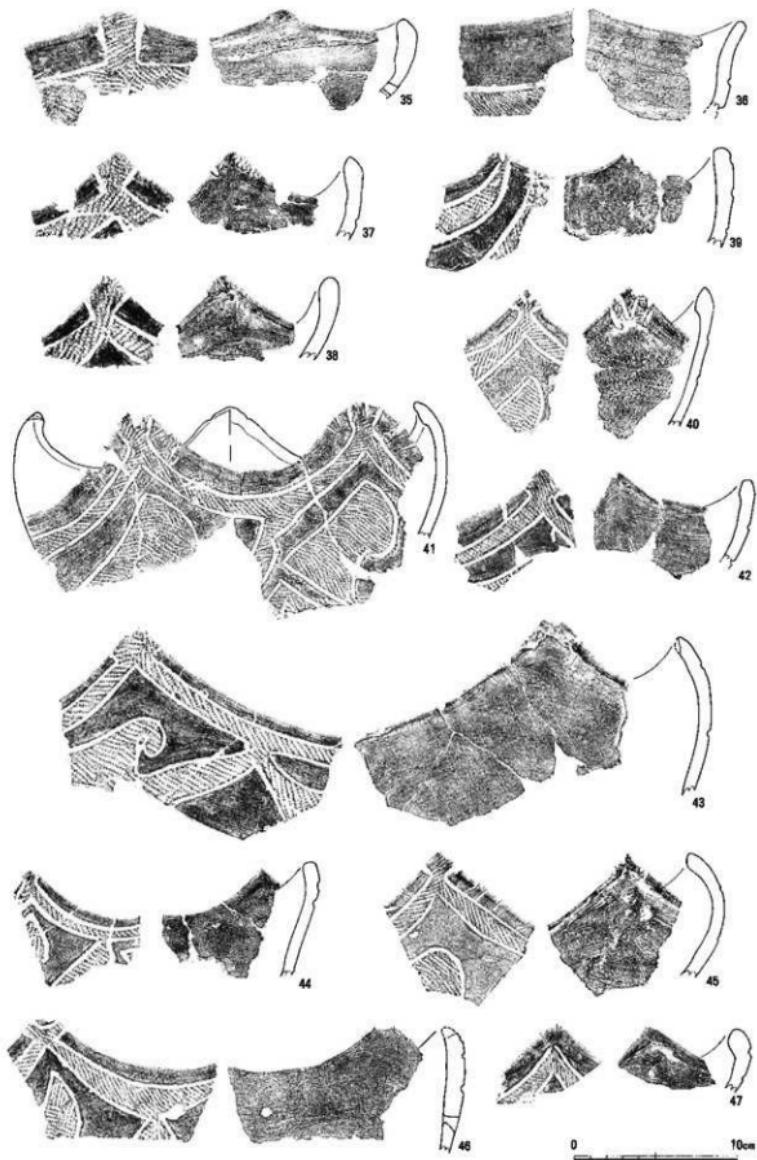
これらは、1~23は船元Ⅰ~Ⅲ式に並行するとみられ繩文時代前葉~中葉、24~34は里木Ⅱ式に並行するとみられ中期後葉に相当するとみられる。

第79~83図は磨消繩文が施されるものである。

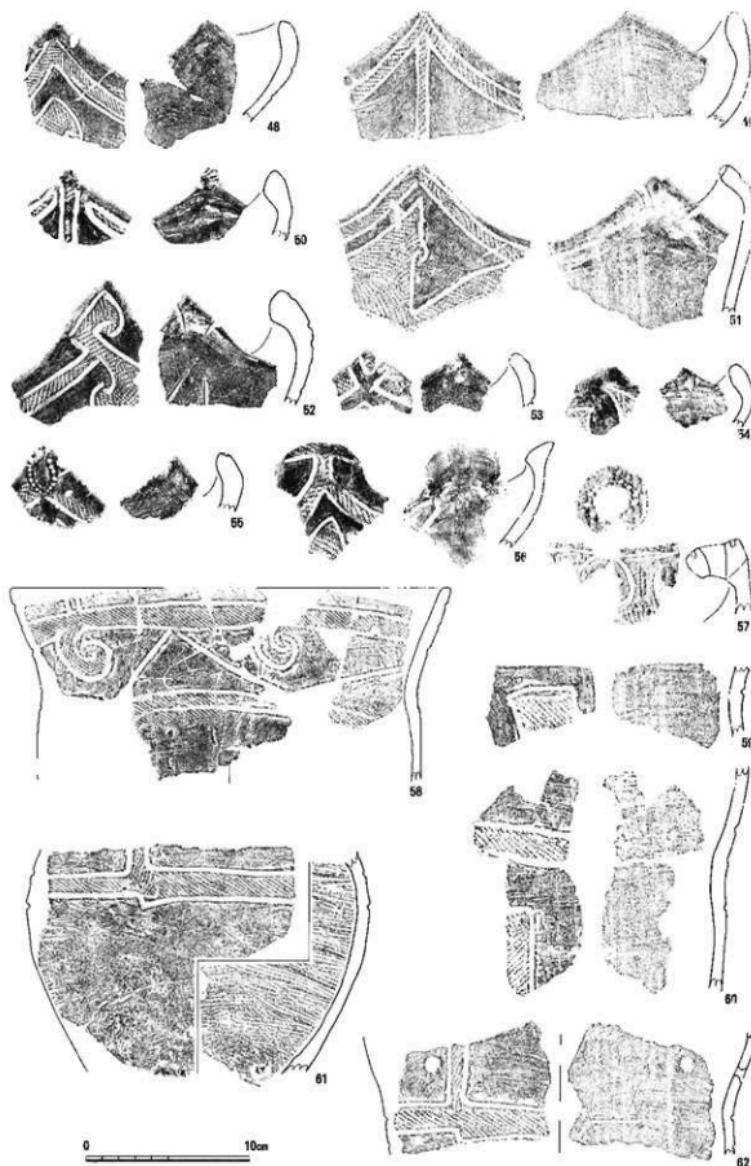
第79図・第80図48~56は波状口縁を呈する深鉢である。35・36は比較的大い沈線で幅広の磨消繩



第78図 2区 第2黑色土出土遺物 1 S=1/3



第79図 2区 第2黑色土出土遺物2 S=1/3



第80図 2区 第2黑色土出土遺物3 S=1/3

文が施されるものである。波状口縁も角度があまり強くなく、縄文も縁部から少し離れた位置に施されている。35は口縁は内湾気味に直立するが、36は外反している。

37~38・40~46はほぼ同様の文様構成をもつもので、波頂部から口縁に沿って「人」字状に縄文帯が施され、40・41・43~46は波頂部下に鉤状「J」字文がみられる。口縁が内湾するもの(41・43・45)と直立気味にひらくもの(37~40・42・44・46)がある。40~46は波頂部の文様が「X」字状に施されている。

39は波頂部からの縄文帯が「ノ」字状に施されるものである。

47~51は口縁に沿った縄文帯が波頂部に接しないものである。47・48・51は逆「V」字状、49は「↑」字状、50は「↑」字状であるがタテ方向の縄文帯と口縁に沿った縄文帯が繋がらないものに分類できる。48は波頂部下に鉤状「J」字文がみられるが、49にはみられず、51は「J」字が退化した鉤条の沈線にとどまっている。

52は波頂部直下に鉤状「J」字文が施されるものである。

53は、46の「X」字状文様帶の縄文と磨消部が逆転したものである。

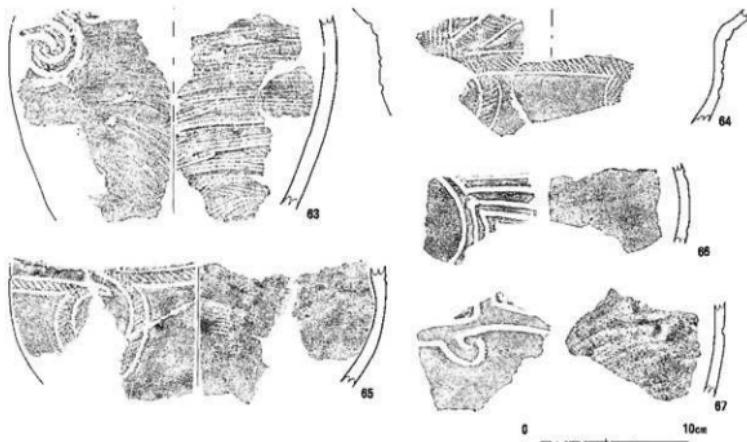
54の文様は、鉤状「J」字の文様帶の縄文と磨消部が逆転したかのようである。55は波頂部下に揃内状の沈線がみられ、沈線内に列点文が施されている。

56・57は波頂部が三角形状を呈さないものである。56は波頂部が緩やかな弧状を呈するが、文様構成は40・41と同様とみられる。57は筒状口縁を呈し、端部には円形に列点文が深く施されている。調整はミガキでなく、ナデが施されるものである。

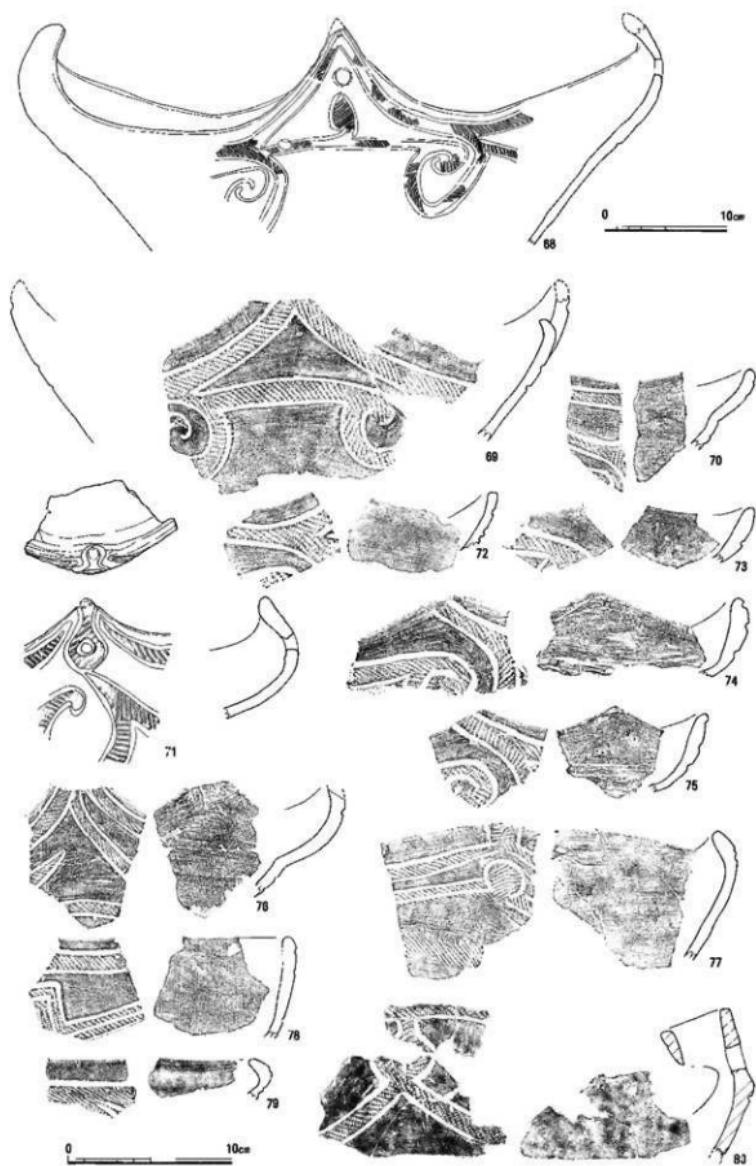
58は平口縁の深鉢である。横位の帶縄文から垂下する渦巻き状「J」字文と、「ハ」字状の沈線が交互に配置されているようだ。

59~67は深鉢の胸部片である。

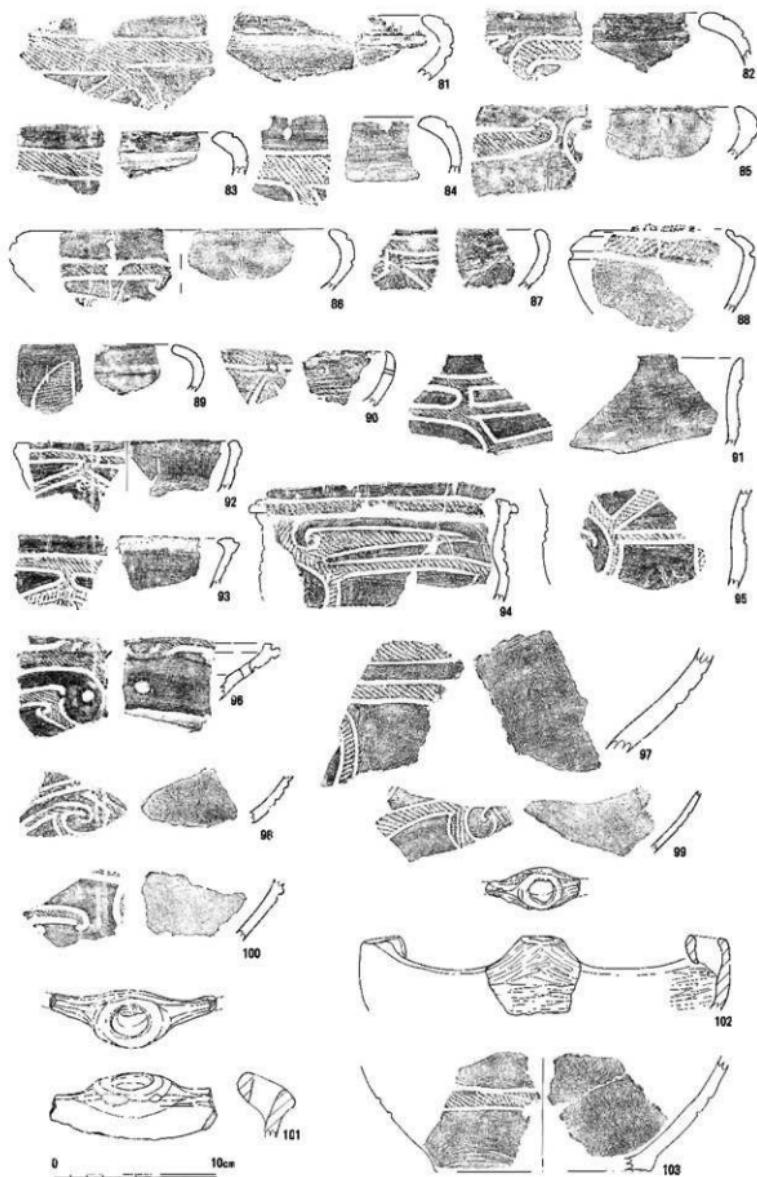
59・60は太い沈線の磨消縄文が施されるもので、文様帶も幅広である。印象的には35・36と同系



第81図 2区 第2黒色土出土遺物4 S=1/3



第82図 2区 第2黑色土出土遺物 5 S=1/3 (68はS=1/4)



第83図 2区 第2黑色土出土遺物 6 S=1/3

統である感がある。61・62は横位の縄文帯と、垂下する帶縄文が交差するものである。61は内面に貝殻条痕が顯著である。61は胴部下半部、61は頸部片とみられる。

62は胴部に渦巻き状の磨消縄文が施される。内面には貝殻条痕がみられ、形態も61とよく似ているものである。64・65は胴部に渦巻き状「J」字文が施されるものである。

66・67は縄文が施されないものである。66は3条単位の沈線による、渦巻き状「J」字文が施されるとみられる。67はJ字文が退化した印象の文様である。

第82・83図は浅鉢である。

68～77は波状口縁を呈するもので、いずれも内外面のミガキが顯著に施されている。68・69はほぼ同形態・同文様のものであるが、68は復元口径45cmを測る大型のものである。68は口縁が強く外反するのに対し、69は直立気味に立ち上がる。いずれも波底部直下に渦巻き状「J」字文が施され、68は波頂部下に焼成前穿孔と鉤状「J」字文がつく。

70・72～75は口縁が内湾せず、直立気味にひらくものである。波状口縁も角度が緩やかで、波頂部下に渦巻き状「J」字文が施されている。70のように内面に明瞭に段をもつとみられる。70・73・74は縄文帯に赤色顔料が塗布されている。

71は強く内湾する口縁をもち、波頂部下に渦巻き状「J」字文が施されるものである。

76は角度の強い波状口縁を呈し、内面に段をもつものである。波頂部から帶縄文が3条垂下し、縄文帯には赤色顔料が塗布されている。

75は波状口縁の角度が緩いもので、口縁端部も緩やかに内湾する。波頂部下に円形の磨消縄文が施され、下方の縄文帯には沈線が施されていない。

78は平口縁の浅鉢で、口縁はボウル状に直立するものである。3条単位の沈線に磨消縄文が施されている。

80は筒状突起をもつ浅鉢である。突起部縁辺に沿って縄文帯が施され、「人」字状に垂下する。突起外面には焼成前穿孔がみられるものである。

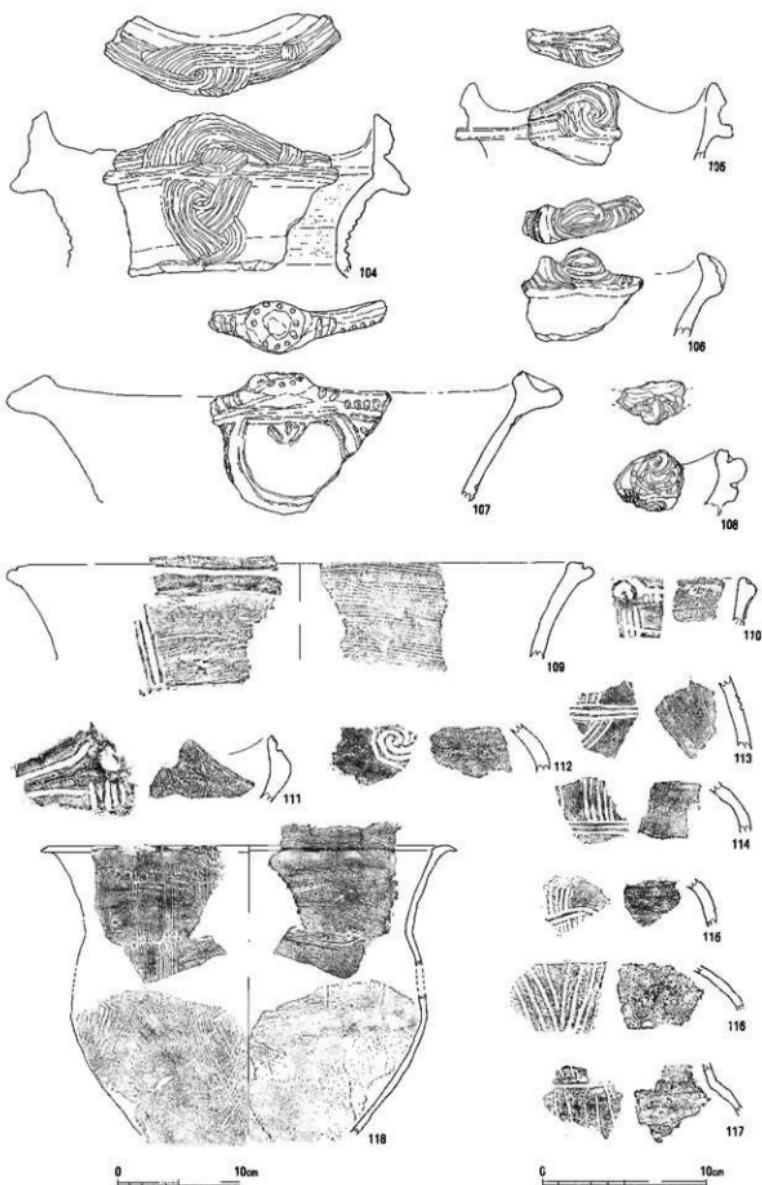
79～87・89は平口縁であるが、強く内湾する口縁をもつ浅鉢である。79～87はいずれも口縁に沿って帶縄文が施されるが、82・85は途切れおり、端部を渦巻き状におさめている。81・84は横位の縄文帯が幅広で、ナナメ方向にも垂下している。85は焼成前穿孔の痕跡があり、穿孔に沿って縄文が施されている。89は小片であるが、横位の縄文帯はみられず、鉤状「J」字文が施されているとみられる。

88は小型の鉢形を呈する浅鉢で、復元口径8cmを測る。頸部外面に幅広の縄文帯が施され、内面は貝殻条痕が顯著なものである。

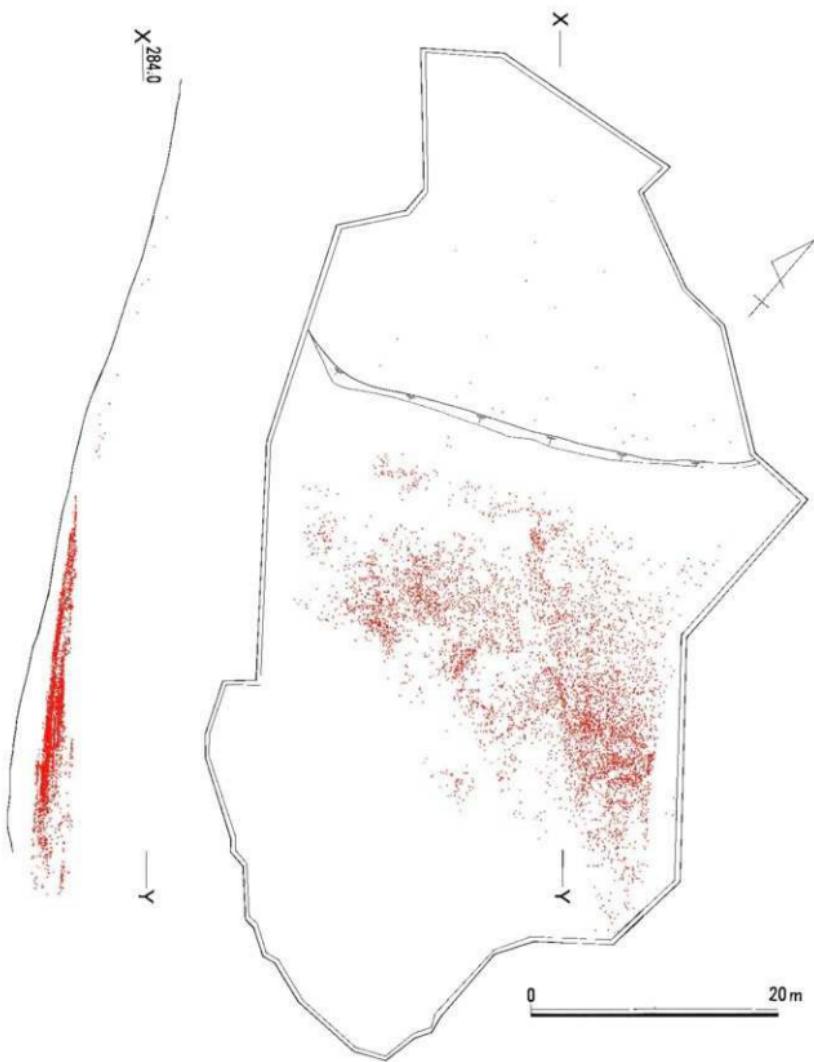
90はボウル形を呈するもので、横位の縄文帯の沈線内に小型の貫通孔がみられる。

91～96は口縁が肥厚し、縄文帯の幅が5mm前後と細いものである。

91は口縁が直立気味に立ち上がり、端部外面が若干肥厚し、93は内面に屈曲している。いずれも退化した渦巻き状「J」字文が施され、92は復元口径13cmと小型のものである。94は鉢形を呈し、復元口径は14cmと小型なものである。口縁端部が内面に若干屈曲し、外面に突帯が付けられるものである。突帯外面に縄文が施され、そこから渦巻き状「J」字文が垂下する。復元口径は14cmと小型のものである。95は94と同タイプの胴部片とみられる。96は口縁が逆「ハ」字状にひらき、内面に段をも



第84図 2区 第2黒色土出土遺物 7 S=1/3 (118はS=1/4)



第77図 2区 第2黑色土遺物出土状況 S=1/400

8は9号燒土から出土したものである。楕円形を呈する石錐で、短辺に打ち欠きがみられるが左側部は細かく敲打されている。長さ7.8cm・幅7.8cm・厚さ3.4cmを測るものである。

9・10は12号燒上出土遺物である。いずれも磨消繩文が施され、9は波状口縁を呈し、深鉢と考えられる。10は内外面のミガキが丁寧で、器形も屈曲する気配があることから、U縁が強く内湾する浅鉢の可能性がある。いずれも中洋Ⅲ式に相当する。

11・12は16号燒上出土遺物である。11は器壁が厚く、外面に1条ごとに深くなる撚糸文が施されている。里木Ⅱ式に相当するとみられる。12は粗製深鉢の口縁で、内外面とも頗るな貝殻条痕が施される。焼成後穿孔もみられる。

(4) 第2黒色土出土遺物の分布状況(第77図)

出土遺物は黒色土が厚く堆積している平坦部に集中している。平坦部に堆積した第2黒色土の厚さは、最も厚いところで90cmを測るが、それでもほとんど隙間なく遺物が検出されている。

分布状況を俯瞰してみると、平坦部はほぼ全面から隙間のないほど遺物のドットがみられる。しかしながら詳しく観察してみると、径2~3mの円形に遺物が検出されない範囲がかなり目に付き、それも分布範囲の縁辺に多くみられるようだ。これは平坦部谷状地形の縁辺に相当することから、或いは住居跡である可能性がある。

第2黒色土出土遺物(第78~107図)

第78図は繩文地の土器である。

1~23は外面に原体の太い繩文が施される土器である。器壁は総じて厚手である。

1~4は口縁部である。1は口縁が丸みを帯びながら直立する。U縁に沿って2条の太い凹線が施される。2・3は口縁が内湾しており、いわゆる「キャリバー状」を呈する口縁をもつとみられるものである。2は口縁に沿って凹線が施され、3は凹線はみられないが口縁端部にも繩文が施される。4は小片であるが、2と同様の特徴をもつものである。

5~6は凹線や沈線が施されるものである。5は細片であるが、円弧状の凹線が施されている。

6は内湾する器形をもち、下方から上方にかけて肥厚していく。上方にヨコ方向の沈線が2条みられる。キャリバー状口縁の頸部とみられる。

7~8・10~13・16は器壁が1.2cm前後と厚く、原体の太い繩文が施されるものである。9は器壁が内湾しており頸部片と考えられるが、繩文は非常に粗いものである。19~23は器壁が7mm前後と比較的薄手で、繩文は細く密に施されるものである。

24~34は文様が1条おきに深くなる撚糸文が施されるものである。

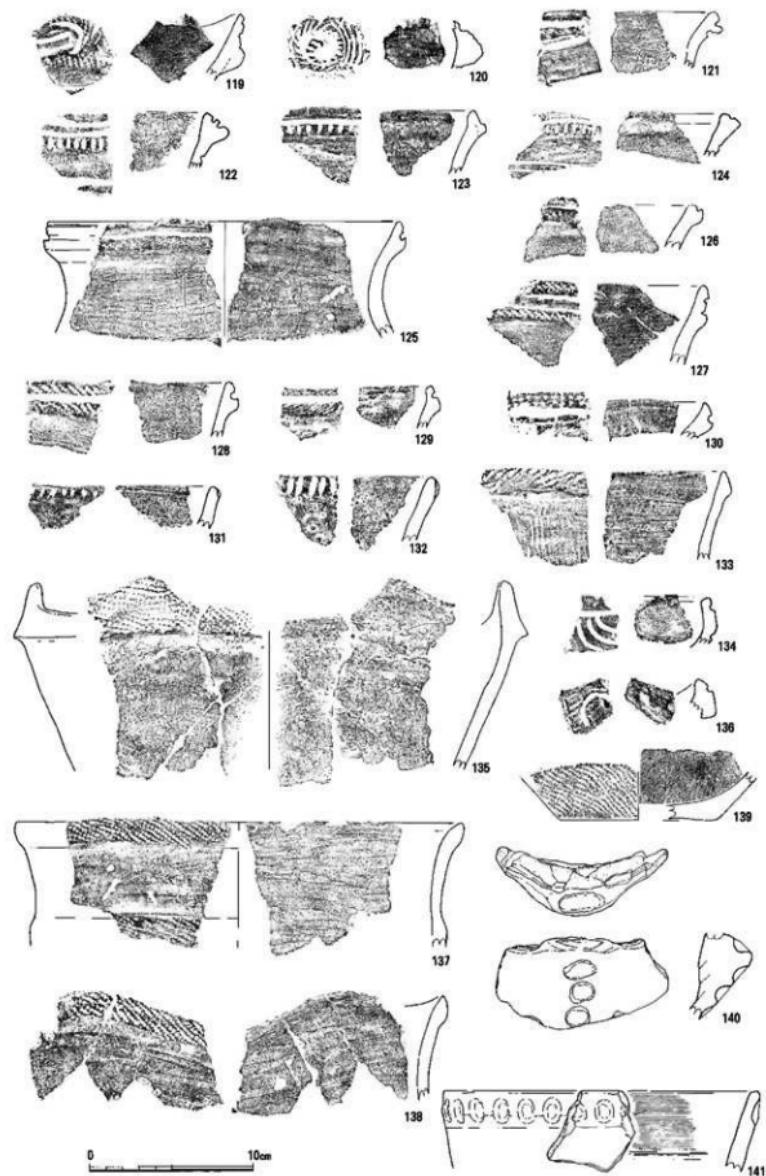
24~25は口縁部である。24は口縁端部が内傾し、口縁に沿って2条の凹線がみられる。25は口縁が丸みを帯びながら直立する。沈線はみられないが、撚糸文はヨコ方向に施されている。

26~34は胴部片であるが、器壁は1cm前後と厚手のものである。

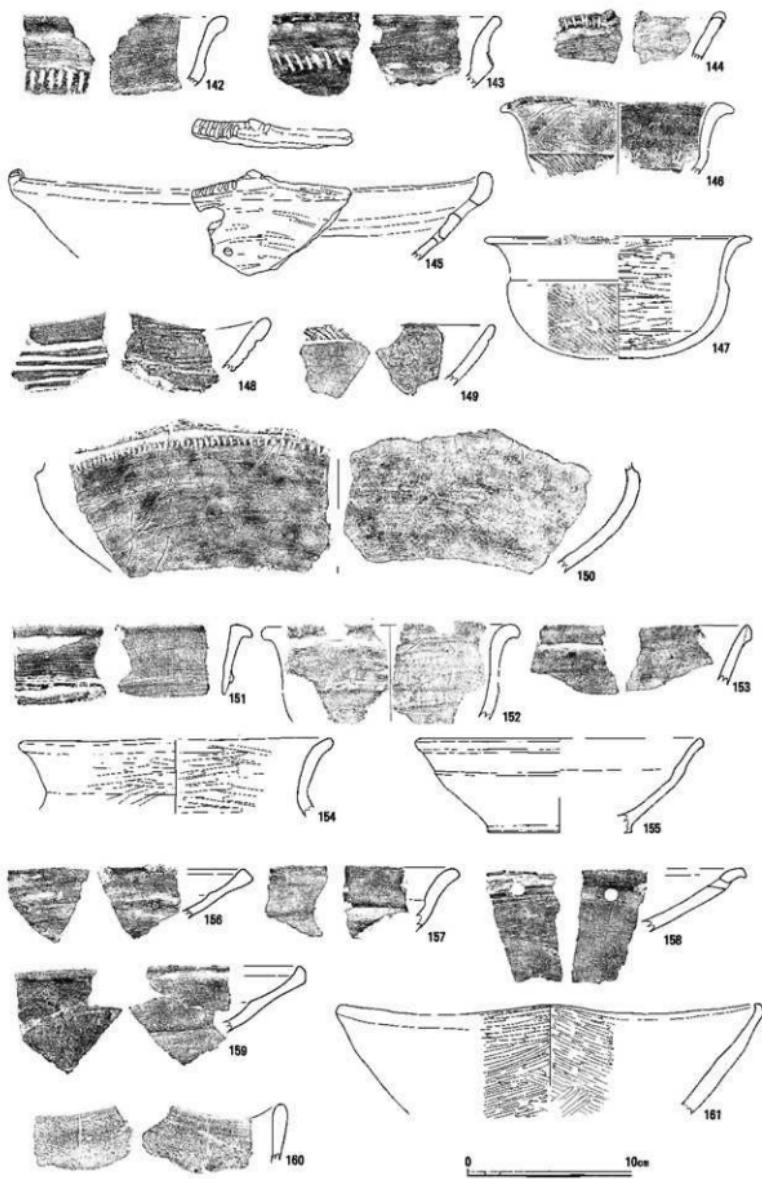
これらは、1~23は船元Ⅰ~Ⅲ式に平行するとみられ繩文時代前葉~中葉、24~34は里木Ⅱ式に平行するとみられ中期後葉に相当するとみられる。

第79~83図は磨消繩文が施されるものである。

第79図・第80図48~56は波状口縁を呈する深鉢である。35~36は比較的大い沈線で幅広の磨消繩



第85図 2区 第2黑色土出土遺物 8 S=1/3



第86図 2区 第2黑色土出土遺物 9 S=1/3

つものである。口縁は内面上方に肥厚し、端部外面に沈線が施されている。渦巻き状「J」字文の中心に穿孔がみられる。

97~100は胴部片であるが、内外面にJ字形のミガキが施され浅鉢と考えられるものである。97は器壁が厚手で、大型品と考えられる。98・99は器壁が薄手で、98は縄文帯の幅も狭いものである。いずれも渦巻き状「J」字文がみられる。100は縄文帯の幅に反して沈線が太いもので、縄文帯に赤色顔料が塗布されている。

101・102は無文で筒状突起がつくものである。いずれも内外面に顯著なミガキがみられ、筒部の径は101が2.5cm、102が1.5cmを測る。

103は底部であるが、ミガキが顯著なため浅鉢と判断した。下方に縄文帯が1条みられる。復元底径12.8cmを測る大型品である。

これらの時期であるが、深鉢類はおむね中津Ⅲ式に比定されるものである。35・36・59・60は沈線が太く、縄文帯の幅広の広いので古相の特徴をもつが中津Ⅲ式に含まれるものであろう。

浅鉢類は68~90は縄文帯が幅広く中津Ⅲ式並行のものとみられるが、91~96は口縁が肥厚し、縄文帯の幅が狭いことから、福田K2古段階期、または柳浦俊一氏の提唱する島1式¹⁰に並行するとみられる。

第84~86図は縄帶文土器である。

104・105は口縁が上方に大きく発達し、ヨコ方向にも鈍状にのびるものである。104は頸部が外反し、口縁は角度を変えてほぼ垂直にのびている。波状口縁を尾し、復元口径21cmを測る。幅2cm前後、6条単位の沈線が波頂部で入り組んでおり、そのまま頸部にも垂下して胴部に繋がる様相を呈する。内面には丁寧なミガキが施されている。105は頸部から口縁にかけて緩やかに繋がっており、復元口径14.5cmを測る若干小型のものである。104と同様、波頂部で沈線が入り組んでいるが、頸部は無文のようである。

106は口縁が「く」の字状に内湾するものである。口縁外側が帯状に肥厚するが、104・105のように鈍状にはならない。口縁に半円形の突起がつき、キザミ状の沈線が施されている。

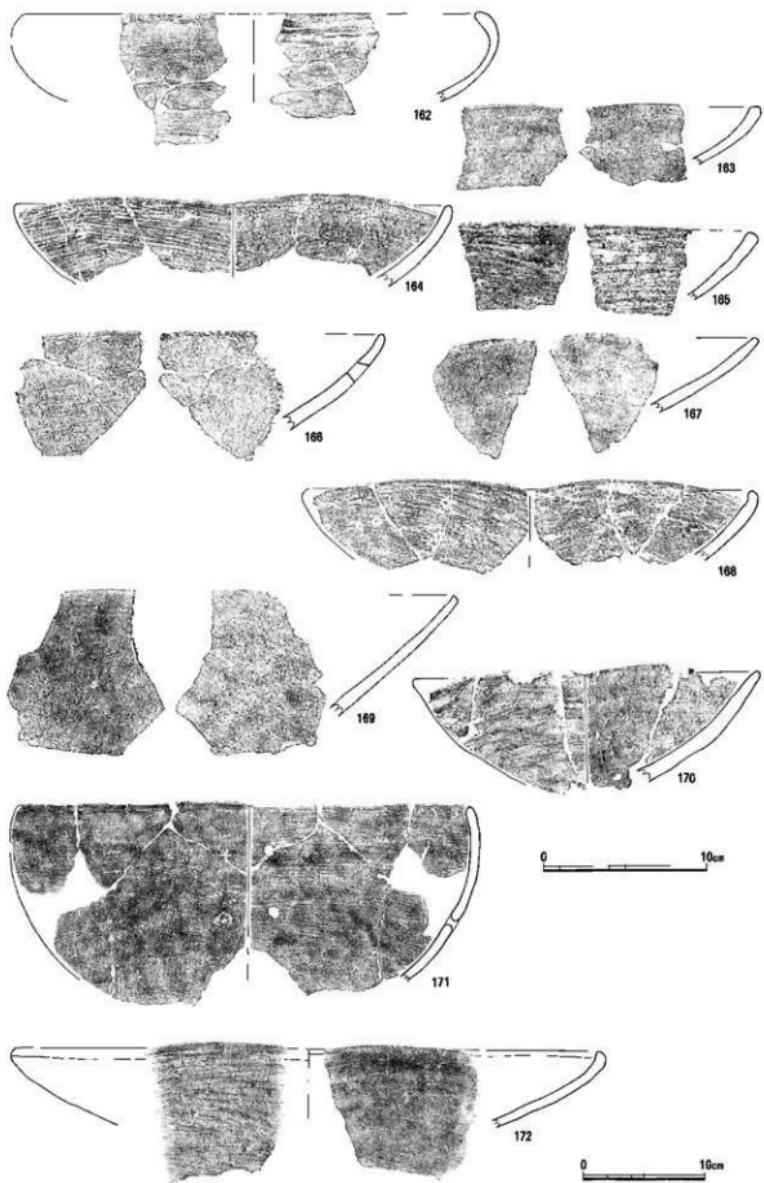
107は口縁外側が帯状に肥厚し、刻み目が施されるものである。半口縁に筒状の突起がつくが、筒部は空洞ではなく、中央は浅く凹んでいる。筒部の凹みを囲むように列点が施され、頸部にも渦巻き状の太い沈線が施されている。

108は口縁波頂部の破片である。口縁は若干内傾し、外側が肥厚する。沈線が渦巻き状に施文され、沈線内には列点文が施される。また、肥厚部の下方縁辺には縄文が施され、内面はミガキが顯著である。

109・110は口縁がヨコ方向に帯状に肥厚するものである。109は口縁端部には沈線が施されるのみで、頸部にも垂下する2条の沈線がみられる。復元口径36cmを測る大型のもので、頸部外側には貝殻条痕後ナデが、内面には貝殻条痕がみられる。110は若干の波状口縁を呈し、波頂部外側に半円弧状の沈線が施される。頸部にも垂下する沈線がみられる。

111は波状口縁を呈し、口縁は短く「く」の字状に内湾している。波頂部は尖り気味で、波頂部下に穿孔がみられる。頸部にも垂下する4条単位の沈線がのびるようだ。

112~117は縄帶文土器の肩~胴部片とみられるものである。いずれも数条単位の沈線がみられる



第87図 2区 第2黑色土出土遺物10 S=1/3 (172はS=1/4)

ものである。112は3条沈線が渦巻き状に入り組んでいる。113～115は2～3条単位の横位する沈線と、4～5条単位のナナメ方向の沈線が交差するものである。

118は同一個体とみられる頸部片と胴部片を図上復元したものである。器壁は比較的薄手で、調整も粗い。頸部がくびれ口縁が外反し、端部が外面に扁曲気味に肥厚する形態である。復元口径は32.4cmを測る。文様は、口縁端部には施されず、頸部と胴部に不揃いな条線状の沈線が垂下してみられるものである。

119・120は口縁が上方に拡張し、波状口縁を呈するものである。いずれも波頂部にあたり、119は2条の沈線が渦巻き状に入り組み、口縁下方が大きく肥厚し繩文が施されている。120は外面が突起状に肥厚して渦巻き状沈線が施され、沈線間に刻み目が施される。

121～124・126は口縁が上方と下方に若干肥厚し、端部はナナメに面をもつものである。121は外面に横走する深い沈線が2条施され、そのため沈線間は尖端状を呈する。沈線間に繩文が施されている。122～124は沈線と刻み目が施されるものである。122・124は頸部にも横走する沈線が施されている。126は繩文と細めの沈線が施されている。

125・127は口縁が上方に肥厚するもので、2条の沈線と、口線上縁辺と下縁辺に繩文が施されている。125は復元口径21cmを測るものである。

128～133は口縁外面が帯状に肥厚するものである。128・129は太い沈線と繩文が施され、130は沈線と沈線上方には2列の連続点文が施されている。131・132は外面にタテ方向の刻み目が施され、燃りの緩い繩文のみが施されている。

134は口縁が「く」の字に内湾し、外面に横走する沈線とナナメ方向の3条の沈線が施されている。

135は波状口縁を呈し、口縁は上方に肥厚するものである。波頂部は丸みをもち、外面に原体の太い繩文が施されている。

136は口縁が上方と下方に短く肥厚するもので、渦巻き状の沈線と繩文が施されている。

137・138は口縁外面が帯状に肥厚するものである。137は平口縁で、頸部が無文で、口縁肥厚部外面と胴部に繩文が施されている。肩部と頸部境には明確に段をもつ。138は波状口縁であるが、形状がよく似ており、同一個体の可能性もある。

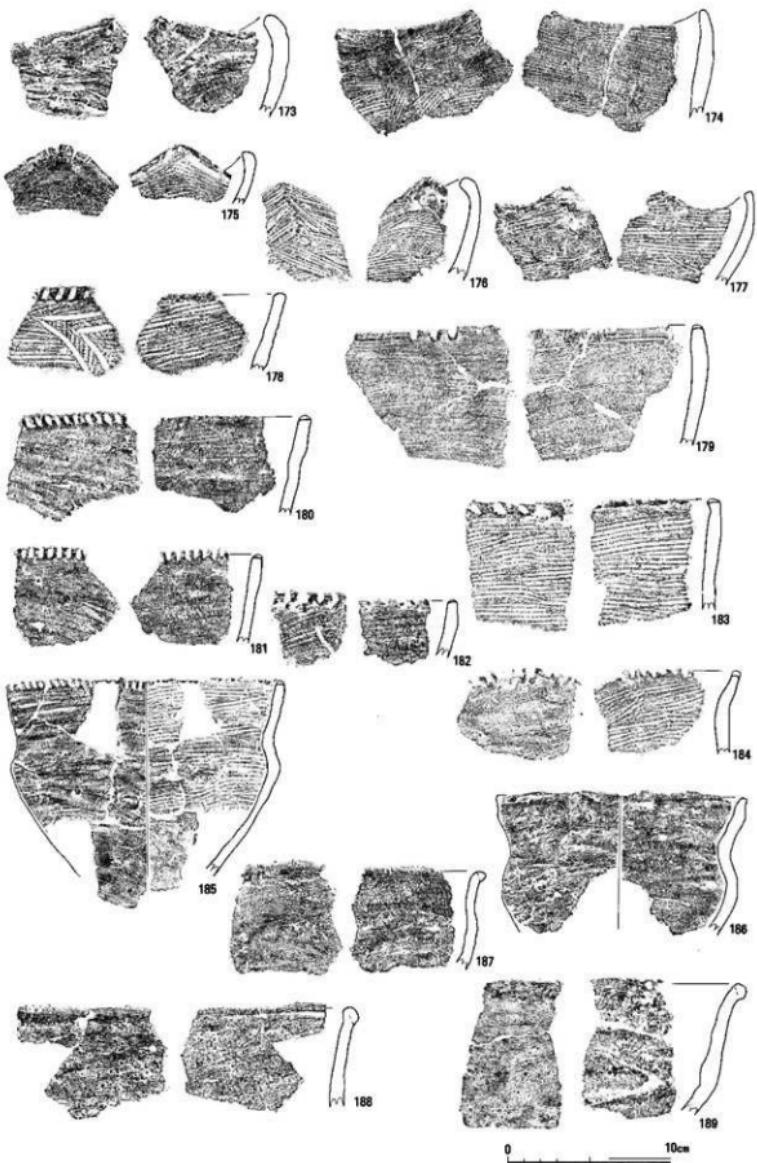
139は底部である。外面に原体が比較的太い繩文が施され、135・137・138のようなタイプの底部とみられるが、内面には丁寧にミガキが施されており、浅鉢の底部である可能性もある。

140・141は繩文や沈線を持たない上器である。いずれも半口縁だが、140は筒形の低い突起がつき、その部分は内面に大きく肥厚している。筒部は中央が浅く凹んでおり、外面には指頭圧による不整形な凹みが筒部から垂下している。141は口縁が肥厚せず、口縁に沿って指頭圧痕がヨコ方向連続して施文されるとみられる。内面には板状工具でなでたとみられる浅い条痕がみられる。いずれも形式不明の土器である。

第86図は浅鉢である。ほとんどは内外面に顕著なミガキが施されるものである。

142・143は頸部がくびれ口縁が外反し、端部が帯状に肥厚するものである。口縁や頸部は無文だが、肩部にタテ方向の刻み目が施される。

144・145は帯状に肥厚する口縁に刻み目をもつものである。口縁は波状口縁を呈するが、波頂部は短く突起する。145は径1.3cmの焼成前穿孔があり、内面には段がつく。



第88図 2区 第2黑色土出土遺物11 S=1/3

146・147は口縁肥厚部と肩部に、原体の細い繩文が施されるものである。頸部は無文で、肩部境には明瞭な段をもち、口縁は外反気味に肥厚する。

148は波状口縁を呈し、口縁外面が帶状に肥厚し、その下方に口縁に沿って沈線が6条施されるものである。沈線内に赤色顔料が残着している。

149は口縁が肥厚せず、ボウル形を呈する浅鉢である。端部外面に帶状に繩文が施されている。

150は復元径36.5cmを測る大型のもので、肩部が若干肥厚し刻み目が施されるものである。142・143の大型のものとみることができる。

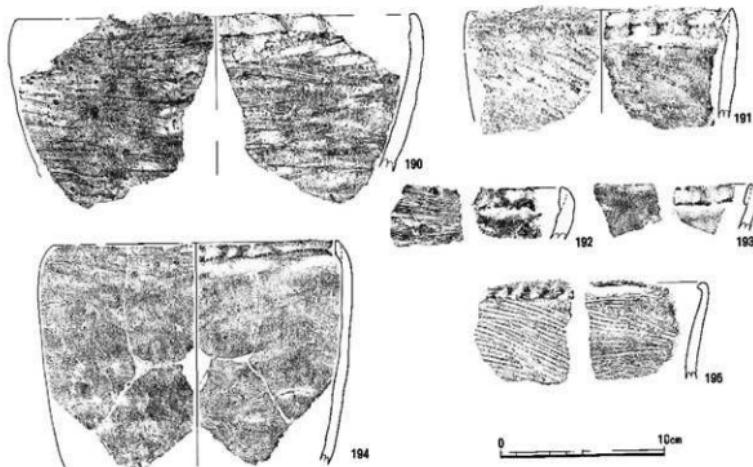
151～161は無文のものである。

151・152は146・147と同形態を呈するものである。153・154は口縁外面が帶状に肥厚するものである。155は小型の楕形を呈するものである。頸部が若干くびれ、口縁外面が帶状に肥厚している。復元口径17cm・器高5.7cmを測る。156・158・159は口縁が逆「ハ」字状にひらき、内面に段をもつものである。157は口縁が外反し、内面に段をもつ。160・161は波状口縁を呈するものである。161は口縁端部が上方に短く肥厚し、全体を俯瞰すると方形形状を呈するものである。

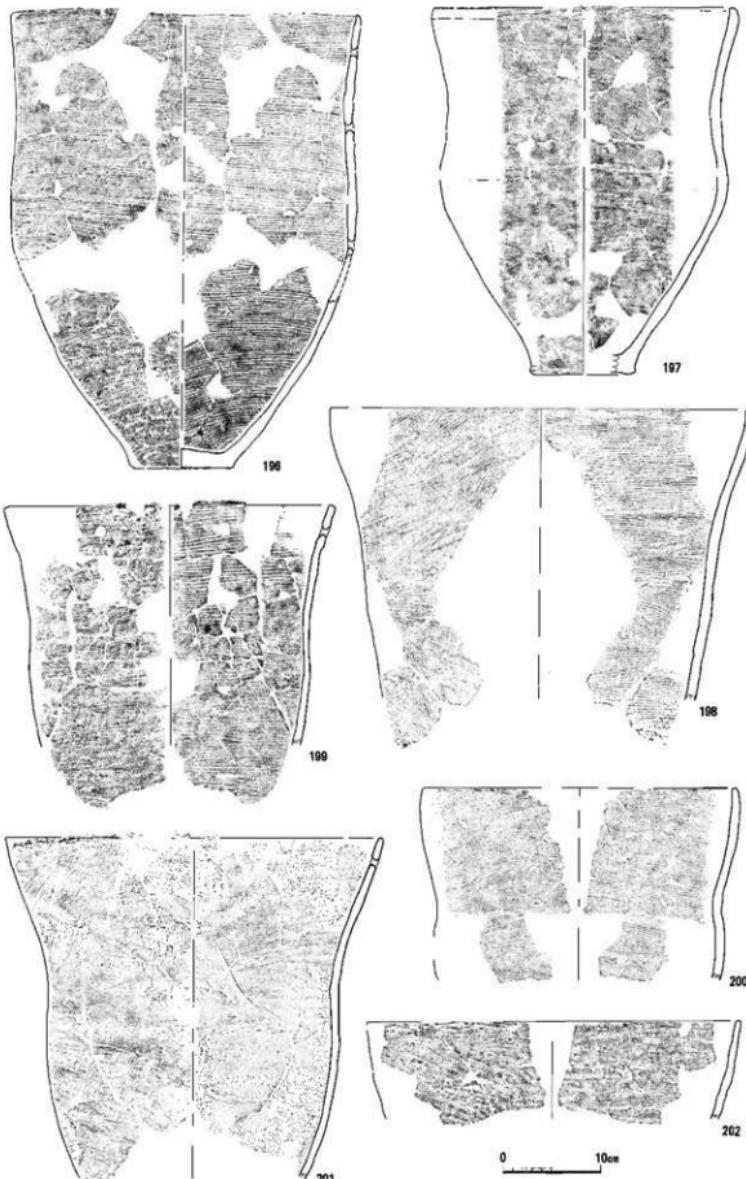
これらの時期は、概ね彦崎K1式、崎ヶ鼻式に並行するものとみられる。浅鉢の142・143・150などは、成立期の縁帶文土器である布勢式土器に伴うものである可能性がある。

第87図は無文の精製浅鉢である。

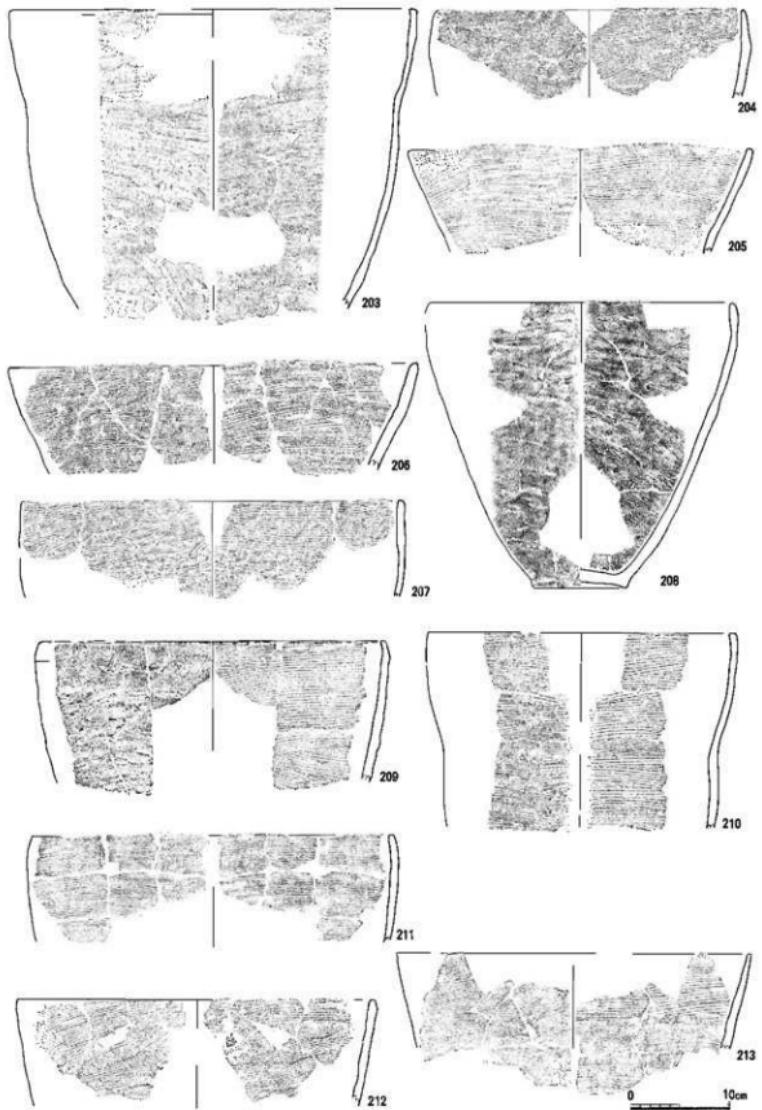
162は体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁が強く内傾するものである。復元口径は27.3cmを測る。163～170は体部が内湾気味に立ち上がり楕形を呈する浅鉢である。164は外面に貝殻条痕が施された後、ミガキが施されるようだ。復元口径は26.4cmを測る。166は径1.3cmの焼成前穿孔がみらる。168は内外面に丁寧なナデが施されたもので、口縁端部が若干屈曲する。復元口径は26.8cmを測る。170は器壁が厚手で、体部が若干屈曲するものである。復元口径は20.7cmを測る。



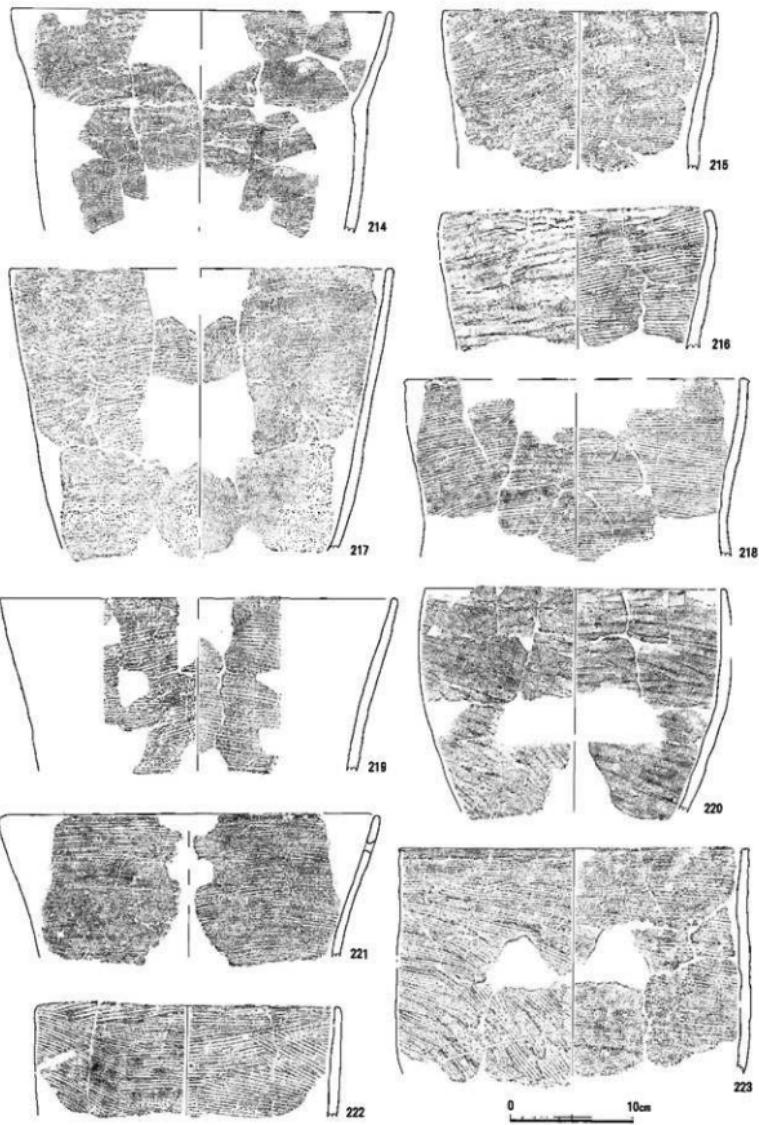
第89図 2区 第2黒色土出土遺物12 S=1/3



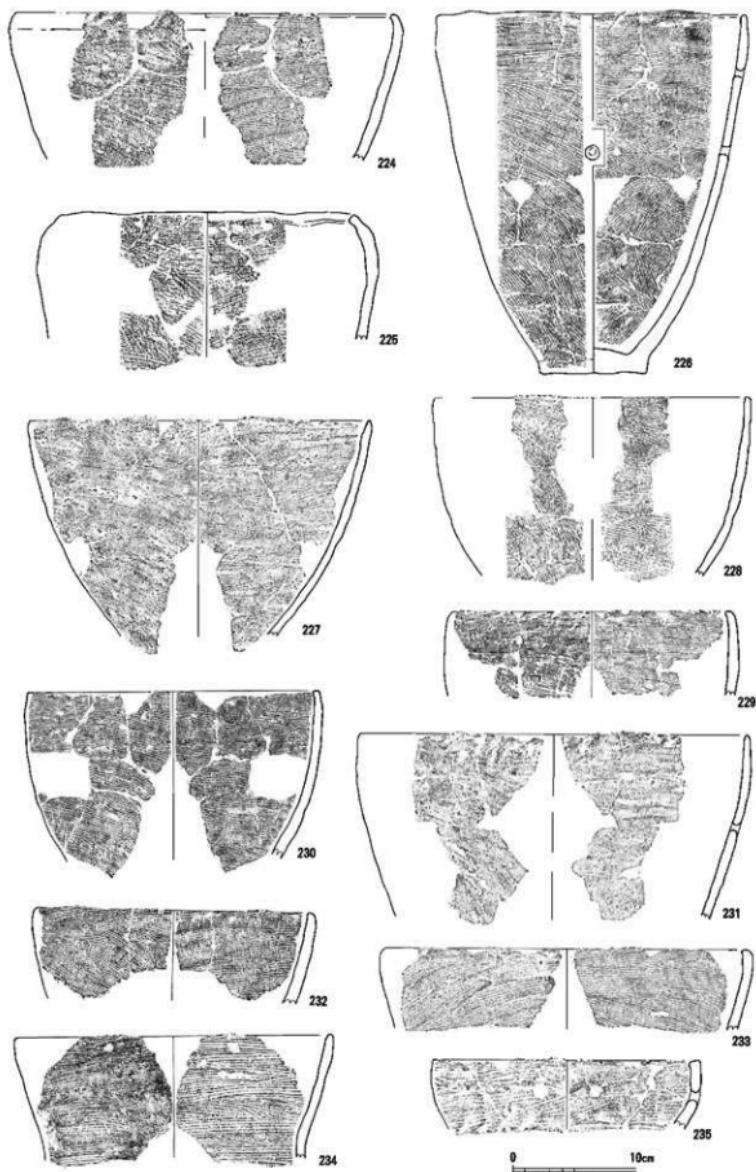
第90図 2区 第2黑色土出土遺物13 S=1/5



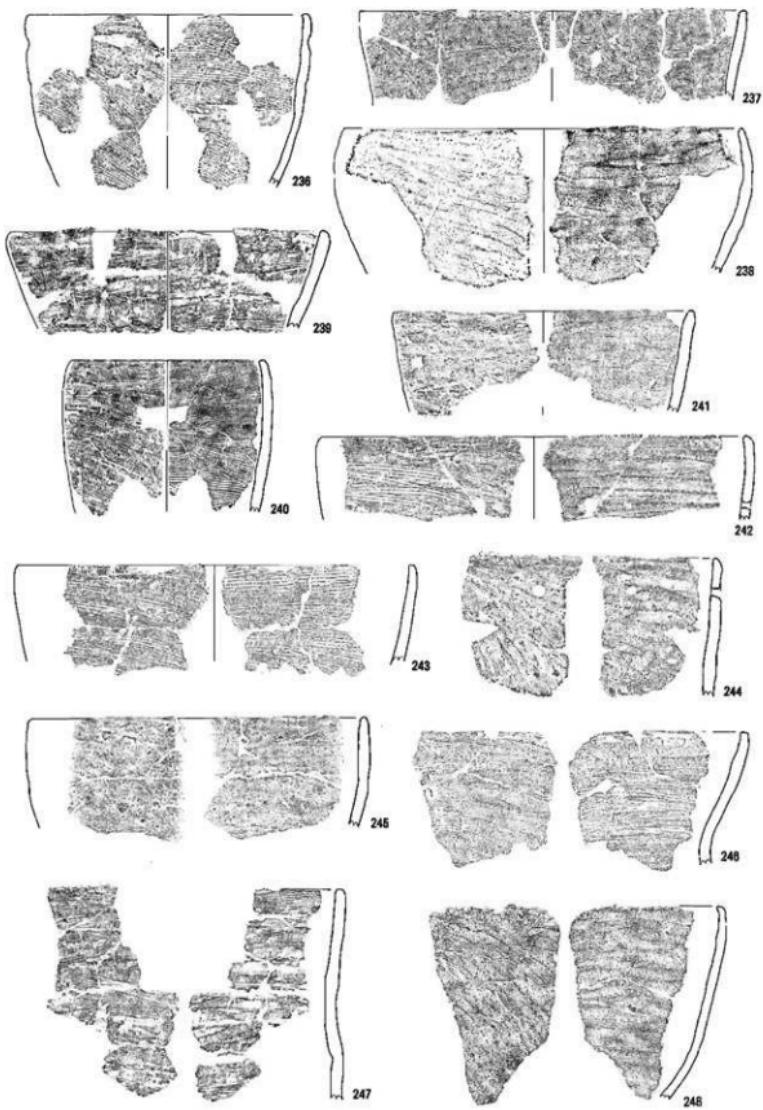
第91図 2区 第2黑色土出土遺物14 S=1/5



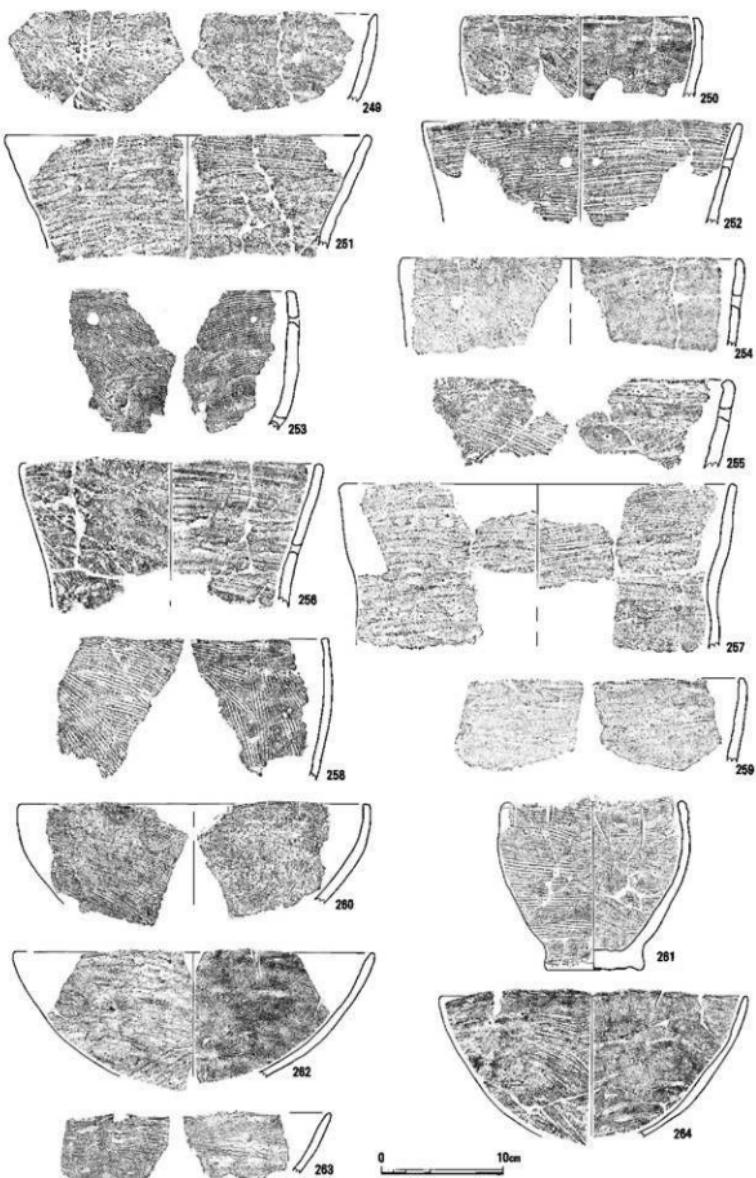
第92図 2区 第2黒色土出土遺物15 S=1/4



第93図 2区 第2黑色土出土遺物16 S=1/4



第94図 2区 第2黑色土出土遺物17 S=1/4



第95図 2区 第2黑色土出土遺物18 S=1/4

171はボウル形を呈し深身のある浅鉢である。胴部に焼成後穿孔が2穴タテに並んでいる。復元口径は36.2cmを測る。

172は浅身の皿形の浅鉢である。体部は逆「ハ」字状にひらき、口縁端部が直立する。復元口径は46.7cmを測る広口なものである。

第88～95図は粗製上器である。

第88図173～177は波状口縁を呈する深鉢である。口縁が内湾するもの（173・175～177）と直立気味に立ち上がるるもの（174）がある。調整は173がナデで、174～177は貝殻条痕がみられる。

178は有文の粗製深鉢である。平口縁とみられるが、口縁端部に刻み目が施される。内外面に貝殻条痕を施した後、外面に沈線に挟まれた帶縄文が施文されている。

179～185は口縁端部に刻み目が施される十器である。179はキザミが3条のみ施されている。180～183は口縁が直立するもので、184は口縁が端部にかけて若干外反している。185は小型の深鉢で、底部がすぼまり頸部がくびれ、口縁は外反気味に立ち上がる器形をもつ。内外面に貝殻条痕が施され、復元口径は16.5cmを測る。

186は185と同規模・同形態のものであり、復元口径14.7cmを測る。器壁は厚手であり、内外面ナデ調整で端部にキザミはみられない。

187～189は口縁外面が帯状に肥厚するものである。いずれも調整はナデである。

第89図は口縁端部内面が肥厚するものである。190・191は突帯が断面一角形状を呈するものであり、指頭圧痕が明瞭にみられる。192～194は口縁に沿って帯状に突帯を貼り付けるものである。突帯の断面は方形である。195は端部を内面に折り曲げて肥厚させるものである。190～194は調整は内外面ともナデで、器形は砲弾型を呈するとみられる。195は口縁が外反気味に立ち上がり、調整は内外面とも貝殻条痕である。

第90～95図は無文の粗製上器である。内外面に煤が付着するものが多く、主に煮炊きに使用されたことが伺える。

第90・91図は口径が30cm以上の大型の粗製深鉢である。196・197は全形がわかるもので、いずれも頸部がすぼまり、口縁が緩やかに外反する器形である。196は口径35cm・器高46.6cm・底径10cm、197は口径30.3cm・器高38cm・底径10cmを測る。調整はいずれも内外面とも貝殻条痕で、底部は平底になるとみられる。196は体部に焼成後穿孔が4穴みられる。

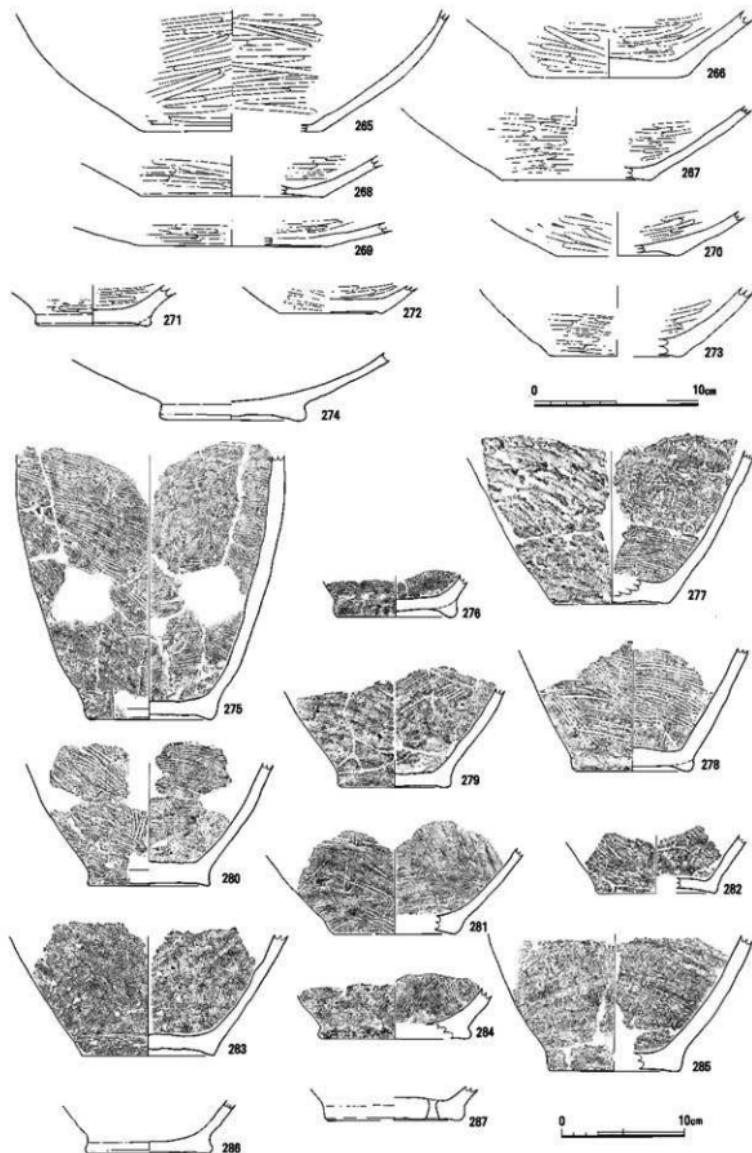
概ね頸部や胴部がくびれる器形で、内外面とも貝殻条痕である例が多いとみられるが、208のように頸部をもたず、底部から口縁にかけて緩やかにひらく「砲弾型」のものも少數ながら含まれるようだ。208は全形がわかるもので、口径30.8cm・器高29.4cm・底径9.6cmを測る。底部は高台状であり、内外面の調整はナデである。

第92～94図249～259・261は口径が30cm以下の粗製深鉢を中心とするものある。

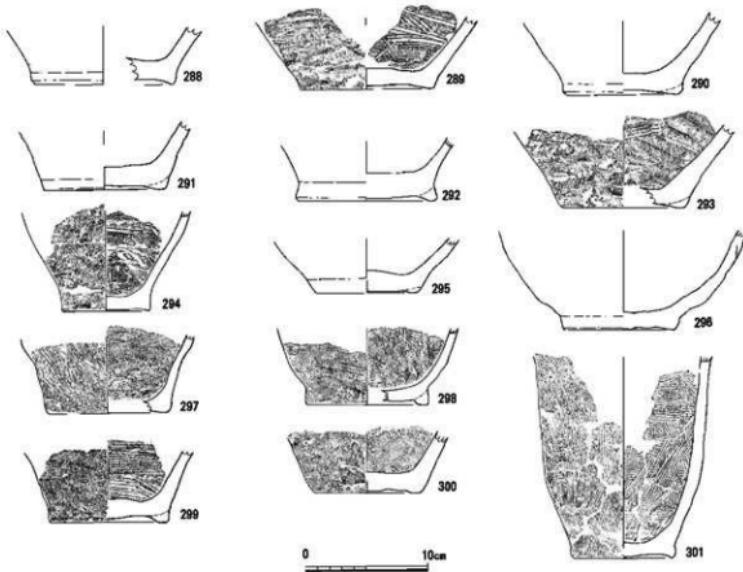
216・224・225は口縁が内湾するもので、216は調整は外面がナデ、内面が貝殻条痕である。

217は器形が口縁にかけて逆「ハ」字状に直線的にのびるもので、口縁付近は貝殻条痕後ケズリが施されている。

220・227・231・238・248は208と同様に器形が砲弾型を呈し、内外面にナデ調整が施されるものである。231・238は大型品で、口径は30cmを超える。



第96図 2区 第2黑色土出土遺物19 265~274はS=1/3、275~287はS=1/4



第97図 2区 第2黒色土出土遺物20 S=1/4

226は全形がわかるもので、口径25cm・器高29.6cm・底径18.8cmを測る。器形は砲弾型を呈するあまり丸みをもたないものである。調整は内外面とも貝殻条痕である。

240は筒形の細い器形をもつ。口径は15.6cmを測る。

261は小型の深鉢である。口径19.5cm・器高14cm・底径7.8cmを測る。器形は砲弾型で、底部は台状に厚く平底である。内外面の調整は貝殻条痕である。

262~264はボウル形の粗製浅鉢である。260は調整が外面は貝殻条痕、内面はナデである。262・264は調整はナデであるが、内外面に煤が付着するものである。煮炊きに使用されたのであろうか。

以上のように、後期前半期の粗製深鉢は、概ね「頸部があるもの」と「砲弾型」の2タイプがあり、頸部があるものは条痕調整、砲弾型のものはナデ調整で仕上げられる例が多い。底部はいずれも丸底ではなく、平底が中心であると考えられる。

第96・97図は底部である。

第96図265~274は内外面ともミガキがJ寧に施されており、精製浅鉢の底部と考えられるものである。265・266・273は器壁が厚手で、形状はボウル形を呈するとみられるもので、底部は平底である。267~270は器壁が薄手で逆「ハ」字状に体部がひらくものである。うち269は器高が低く、浅身の皿形を呈するとみられる。底部はいずれも平底である。271・274は底部が台状に厚くなるものである。

275~301は粗製深鉢の底部と考えられるものである。平底で台状を呈するものが多いが、縁辺に

新土紐が貼り付けられ高台状を呈するもの（276・278・293・295・298・299）も含まれる。275・301は肩部があまり張り出さず、器形が筒状を呈するものである。287は底部にタテ方向の焼成後穿孔がみられる。

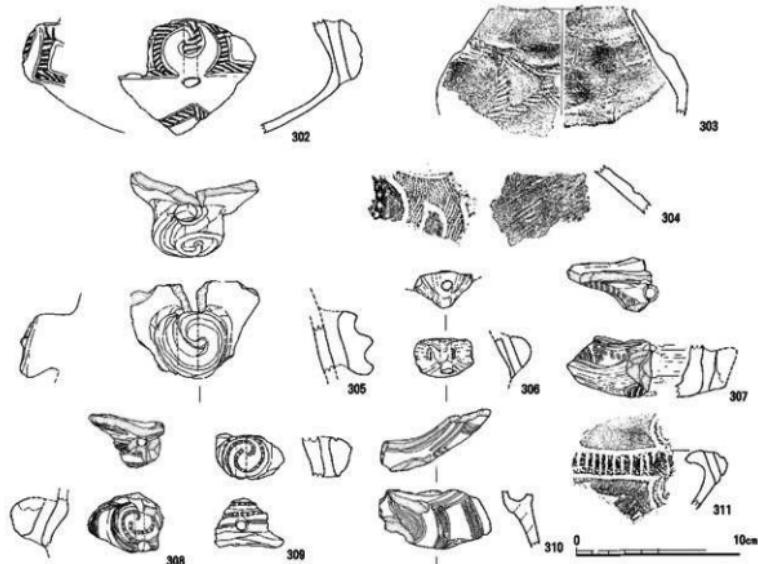
第98図は双耳壺である。双耳壺特有の肩部の相対する突起部がみられないものも、双耳壺としている。突起部にはいずれもタテ方向の穿孔が施されている。

302～304・307は磨消繩文が施されるものである。302は突起部の破片である。肩部が張り出さず、肩部が屈曲してそのまま口縁につながる器形とみられる。突起部は円形を呈し、外面には「J」字文が垂下する。303は肩部に突起部がみられないが、丁寧なミガキが施され双耳壺の可能性が高いと考えられる。302と同様、肩部から口縁に直線的につながる器形である。肩部外面に沈線がなく幅の狭い磨消繩文が施されている。304は肩部片とみられるものである。繩文帯の幅が広く、沈線内に列点文が施されている。307は小片であるが、肩部の張りは弱いものとみられる。

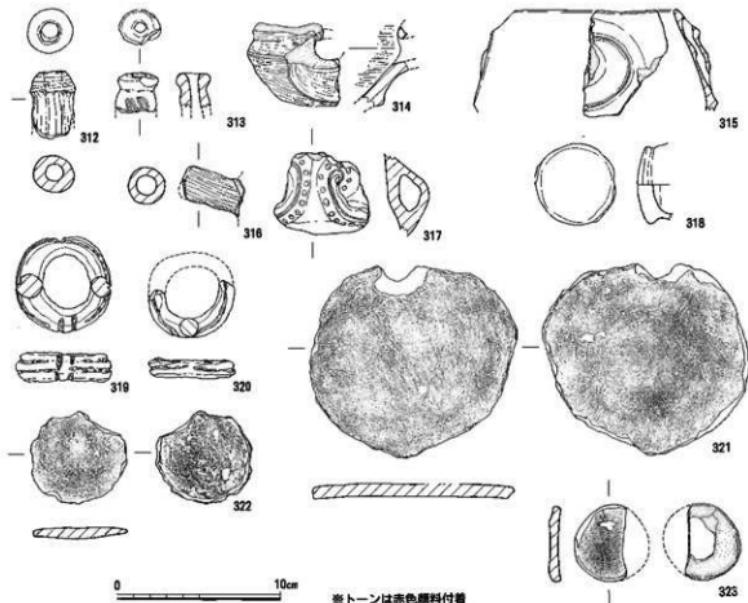
305・306は無文のものである。305は円形の突起部が把手状に大きくなり出するが、肩部が張り出さない。突起部外面に渦巻き「J」字状に突帯が貼り付けられている。

308・309は突起部が乳頭状にせり出するもので、外面に渦巻き状の細い沈線が施され、沈線内に列点文が施される。

310は壺形土器の肩部片であり、外面に3条単位の沈線が施される。肩部に橋状把手のような突起がつく痕跡がみられる。注口土器の可能性もある。



第98図 2区 第2黑色土出土双耳壺 S=1/3



第99図 2区 第2 黒色土注口土器・土製品 S=1/3

311は肩部が屈曲してそのまま口縁になる無頸のものである。肩部が張り、刻み目が施されている。鉢形土器の可能性もある。

第99図313～317は注口土器である。

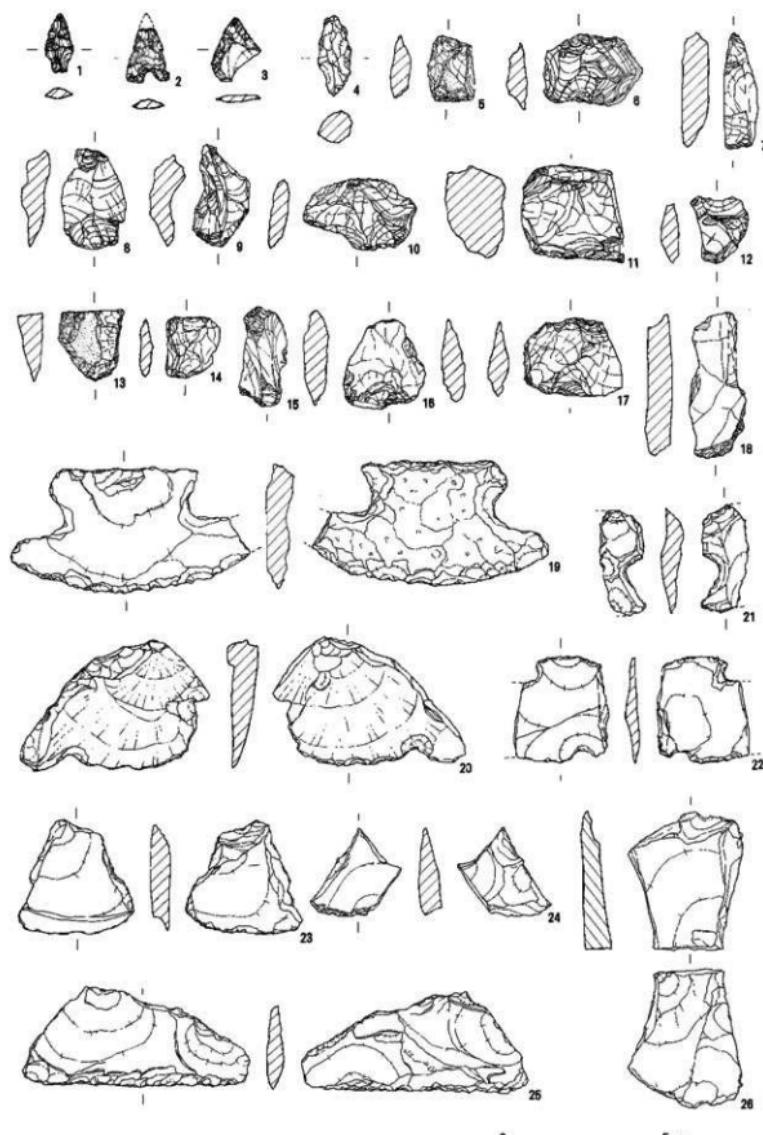
312・313・316は注口部である。312は先端に段をもち、男根状を呈するものである。全面に丁寧なミガキが施されている。径は2.5cmを測る。313は端部がくびれ、先端部が肥厚するものである。渦巻き状の沈線が2条施されている。径は2.1cmを測る。316は直線的にのびるもので、外面に赤色顔料が付着している。径は2.2cmを測る。

314・315・317は副部である。314・315は丁寧にミガキが施される調整や胎土、色調がよく似ており、同一個体とみられるものである。肩部が張り出さず、洞部とL1縁が直線的につながる器形である。317は壺形土器の胸部である。注口部はみられないが、橋状把手がつくことから双耳壺ではなく注口土器と判断した。把手部に列点文が施されている。

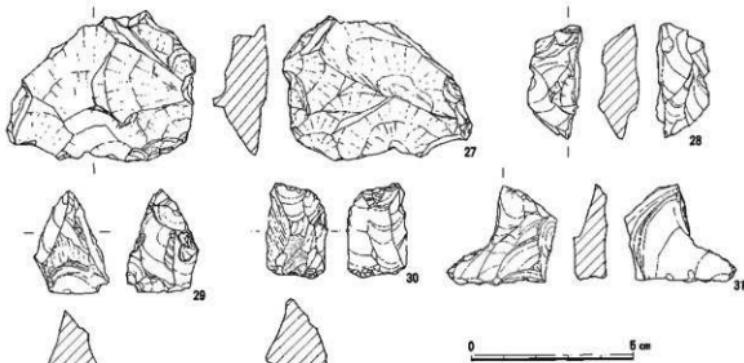
318は器種不明のものである。円形で、外面は丸みを帯びており、底部にしては薄手である。壺形土器の胸部であろうか。

第99図319～320は土製品である。

319・320は耳環である。ドーナツ形を呈し、側面に2条の沈線と沈線内に列点文が施されている。完形の319は径6cm・厚さ1.4cmを測るものである。



第100図 2区 第2黑色土出土石器 1 S=2/3



第101図 2区 第2黒色土出土石器2 S=2/3

321～323は十製円盤である。いずれも七器片を再利用したものとみられる。321は大型で不整形なものであるが、径12～13cm・厚さ1.2cmを測る。322・323は小型のもので、径5cm前後、厚さ8mm前後を測るものである。

第100・101図は剥片石器である。石材はサヌカイトのものが多い。

1～3は石鐵であるが、3点のみの出土である。1は茎のつくタイプとみられる。長さ1.8cm・幅0.9cm・厚さ0.3cmを測る。2は凹基無茎鐵である。鐵身は二等辺三角形を呈するとみられる。長さ1.7cm・幅1.3cm・厚さ0.3cmを測る。3は基部が欠損するが、鐵身部は平基に近いものとみられる。長さ2.0cm・幅1.5cm・厚さ0.3cmを測る。石材はいずれも黒曜石である。

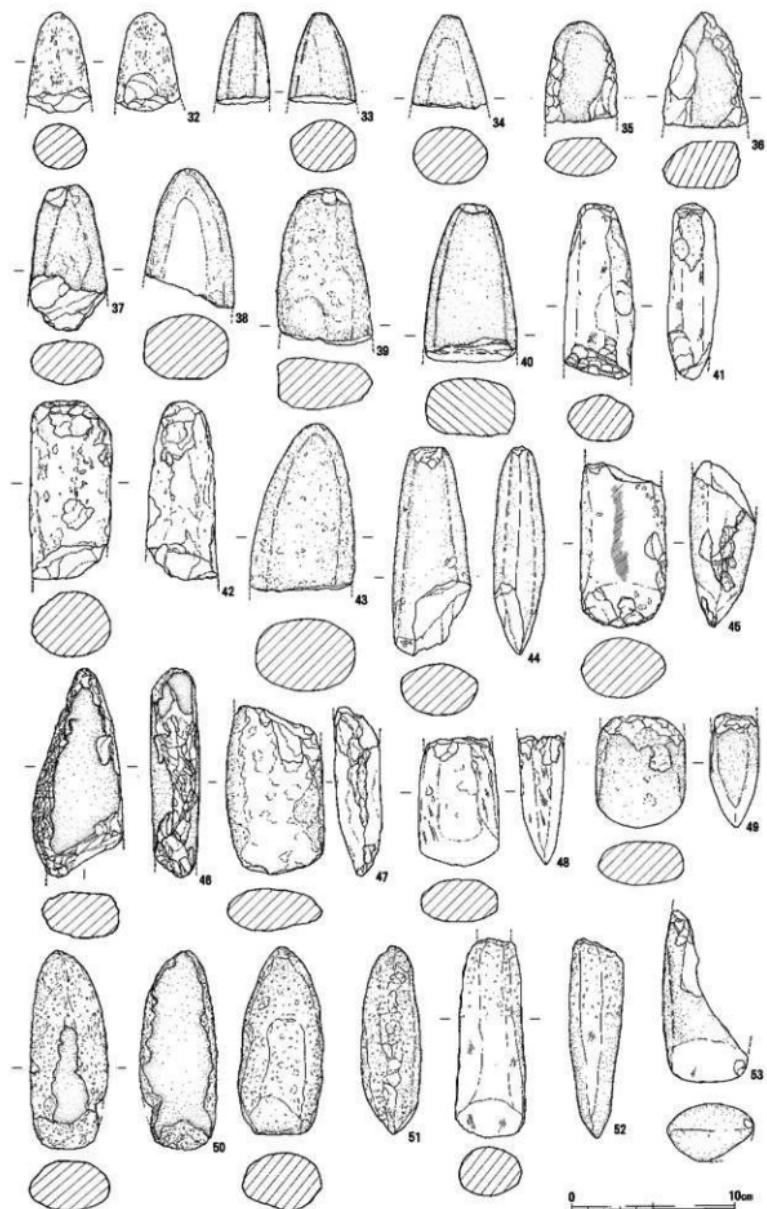
4は細身の形状で、石錐と考えられる。長さ2.5cm・幅1.0cm・厚さ0.9cmを測る。石材は黒曜石である。

5～18は楔形石器である。14点出土した。多くは長方形状を呈するが、短辺に刃部がつくもの(5・7～9・12～16・18)と長辺につくもの(6・10・17)がある。石材は5・7・10・11・13・14・16～18がサヌカイト、6・8・9・12・15が黒曜石である。

19～26はスクレイバー類である。19・21・22は基部に抉りが施されるものである。19は比較的形が整ったもので、半円形の刃部をもち、基部には両側から抉りが施されている。長さ3.9cm・幅7.3cm・厚さ0.8cmを測る。21は側部の破片である。本来は長方形状を呈するものとみられ、両長辺に刃部がつく。幅3.3cm・厚さ0.6cmを測る。22も長方形状を呈するものの側部とみられ、両長辺に抉りがナメに向かい合って施されている。幅3.3cm・厚さ0.4cmを測る。石材はいずれもサヌカイトである。

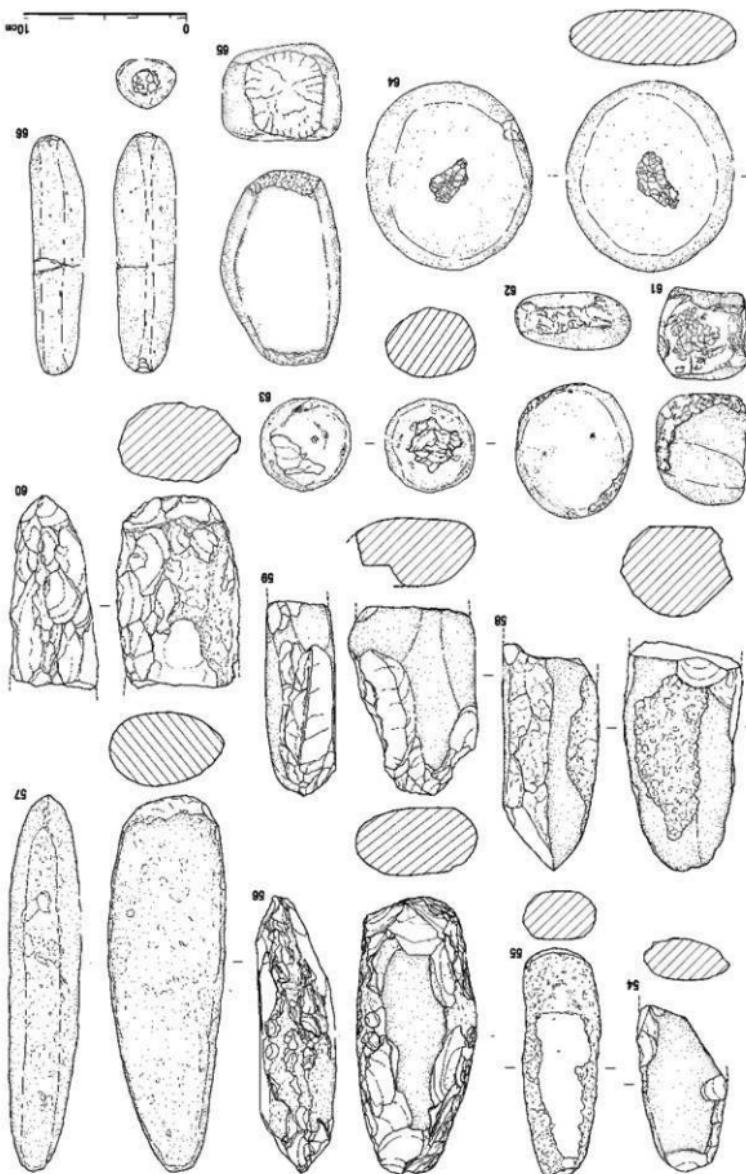
20・23・24・26は不整形な形状を呈するものである。20は一角形状を呈する大ぶりな剥片である。下辺に刃部が加工されている。長さ5.6cm・幅4.0cm・厚さ0.9cmを測る。23・26は台形状を呈し、長辺に刃部が加工される。23は長さ3.5cm・幅3.5cm・厚さ0.5cmを測り、26は長さ3.5cm・幅4.2cm・厚さ0.8cmを測る。石材はいずれもサヌカイトである。

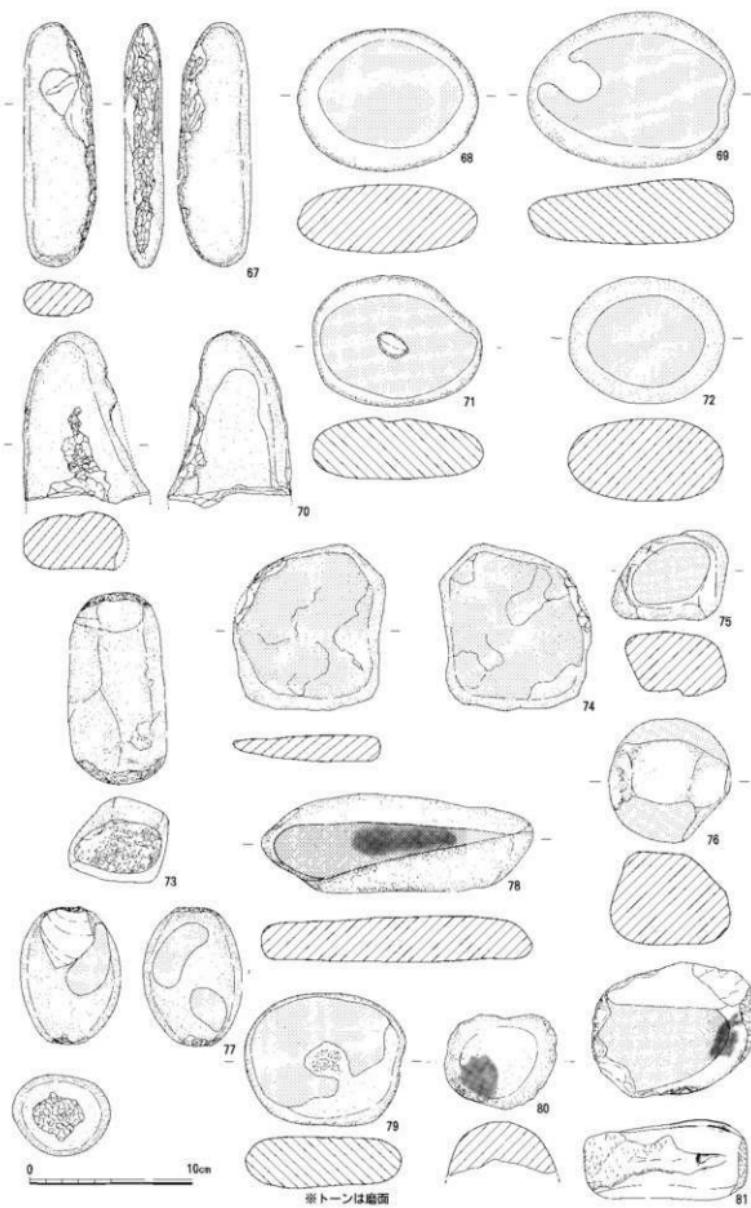
25は長方形状を呈し、長辺一辺に刃部が加工されている。長さ6.9cm・幅3.1cm・厚さ0.5cmを測る。



第102図 2区 第2黑色土出土石器実測図3 S=1/3

第103圖 2區 第2層出土石器實測圖 4 S=1/3





第104図 2区 第2黑色土出土石器実測図5 S=1/3

石材はサヌカイトである。

27~31は2次加工がみられず、石核の残核片とみられるものである。いずれも大ぶりな剥離面を残している。27は比較的大型のもので、長さ6.1cm・幅4.6cm・厚さ1.7cmを測る。石材は27がサヌカイト、28~31が黒曜石である。

第102~107岡は礫石器である。

32~57は磨製石斧である。22点出土しているが、欠損品が多い。石材はバラエティに富んでいるが緑色岩の占める割合が高い。

32~43・46・54は某部片である。乳棒状を呈し、総じて側面を加工して端部を尖らせるものが多い。側面の調整は細かい敲打によるもの（32・33・39・41・42・43）と研磨によるもの（33・38・40）、剥離によるもの（35・36・46・57）、調整のみられないもの（37）がある。38は表面に紙面とみられる非常に平滑な面があり、赤色顔料が付着している。39・43は全面に細かい敲打痕がみられる。46は側面に細かい剥離がみられるが、表裏面に自然面を残しており、未製品と考えられるものである。54は扁平な形状で表裏面に自然面を残すことから未製品と考えられる。石材は32・37・41・42が緑色岩、33・35・36・40・54が安山岩、38が閃綠岩、39・43が玄武岩、46が流紋岩である。

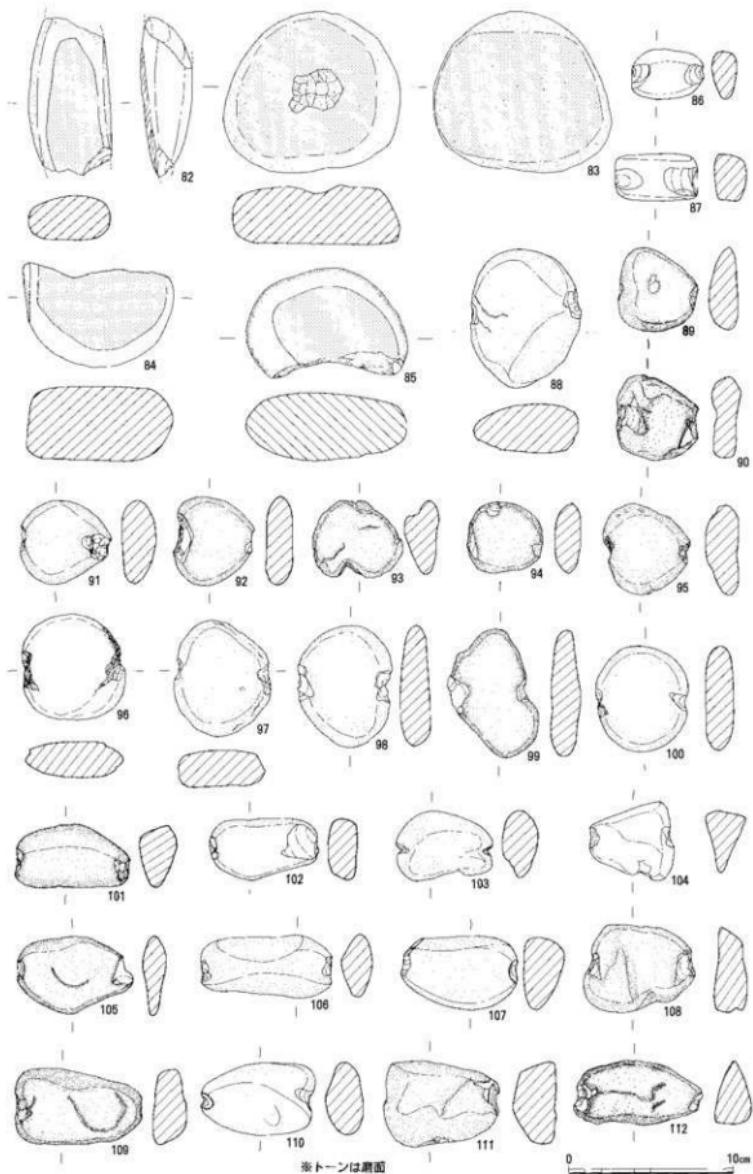
44は刃部の大半を欠くが、ほぼ全形がわかるものである。刃部は両面から加工され、蛤刃状を呈している。長さ12.8cm・幅4.7cm・厚さ3.2cmを測る。石材は緑色岩である。

45・47~49・53は刃部片である。45は刃部に剥離面がみられるが、使用時の欠損によるとみられる。また表面が砥石状に平滑であり、赤色顔料が付着している。刃部幅は4.8cmを測る。47は側面に敲打調整痕が明瞭であるが、刃部には研磨調整された痕跡がない。未製品とみられる。48・49・53は蛤刃状に明瞭に刃部がつくものである。刃部幅は48が4.7cm、49は5.2cm、53が4.8cmを測る。石材は45が安山岩、47が玄武岩、48・49が緑色岩、53が安山岩である。

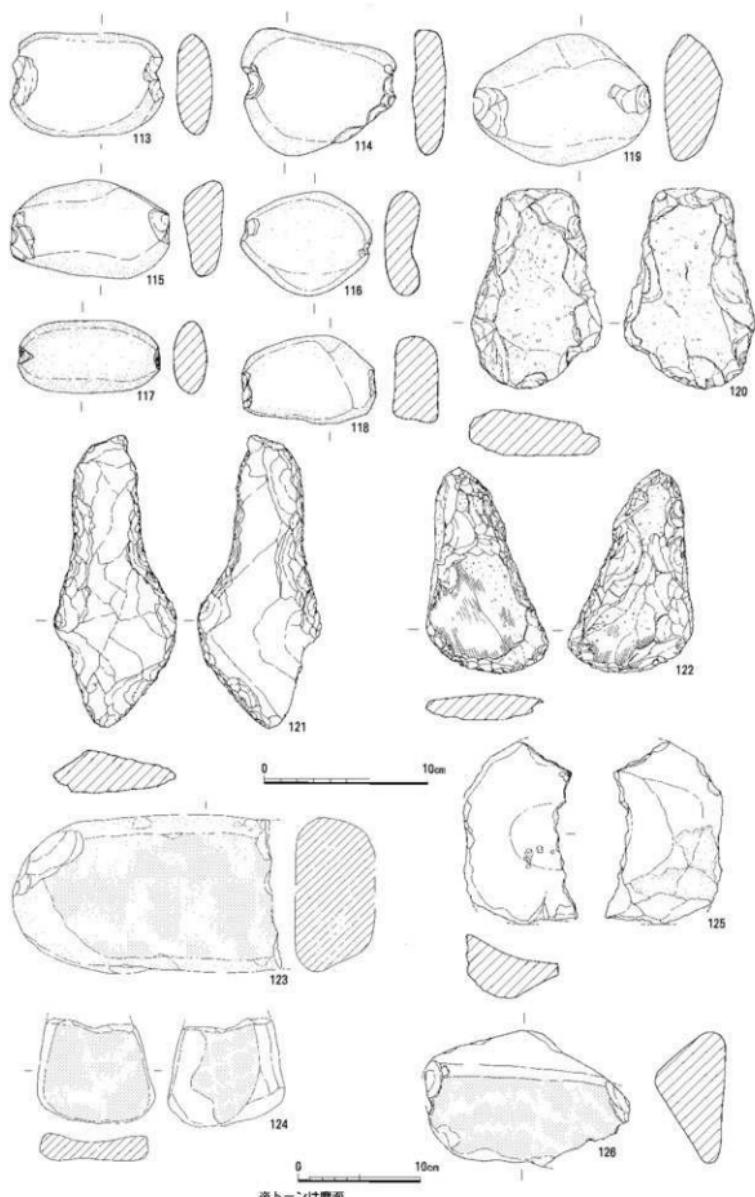
50・51・55は全形がわかるものであるが、刃部がまだ研磨されていない未製品である。50・55は両側面と刃部に細かな敲打調整痕がみられ、表裏面に自然面を残すものである。磨製石斧の製作過程が伺える資料である。55は他と比較して扁平で側部が張らない細身のものである。50は長さ12.2cm・幅4.7cm・厚さ3.2cm、55は長さ14.2cm・幅4.6cm・厚さ3.0cmを測る。51も裏面に一部自然面が残っている。長さ11.6cm・幅5.2cm・厚さ3.6cmを測る。石材は50が玄武岩、51が安山岩である。

52は基部の先端を若干欠くとみられるものである。他と比較して、側面が張らず直線状を呈する細身な形状である。長さ12.1cm・幅4.1cm・厚さ3.3cmを測る。刃部幅も4.0cmと比較的狭いものである。石材は緑色岩である。

56~60は磨製石斧の未製品とみられるものである。56は表裏面に自然面を残し、側面と刃部に大ぶりな剥離面がみられる未製品である。側面には調整剥離後に敲打調整が施されている。長さ17.0cm・幅7.4cm・厚さ4.1cmを測る。石材は安山岩である。57は最も大型の完形品であるが、刃部が加工されておらず、全面に敲打痕がみられるものである。長さ23.1cm・幅7.1cm・4.5cmを測り、石材は閃綠斑岩である。58は乳棒状を呈し両側面に剥離調整がみられるが、自然面を残す表面に敲打調整痕がみられるものである。基部であろうか。長さ14.3cm・幅7.0cm・厚さ5.5cmを測り、石材は玄武岩である。59は扁平な礫の端部に大ぶりな剥離面がみられるものである。基部を意識した未製品であろうか。長さ11.5cm・幅7.8cm・厚さ4.2cmを測り、石材は玄武岩である。60は右側面に剥離面



第105図 2区 第2黑色土出土石器実測図 6 S=1/3



第106図 2区 第2黒色土出土石器 7 113~122はS=1/3、123~126はS=1/4

と敲打痕がみられ、左側面には自然面を残すものである。先端部は両面から剥離が施され、刃部を意識したものとみられる。長さ11.6cm・幅7.3cm・厚さ4.9cmを測り、石材は安山岩である。

61~85は磨石・敲石類である。

61・65・73は角柱状を呈するもので、65・73は両端部に敲打痕がみられる。63・75・76は不整形な球状を呈するものである。63は表面に窪み状に敲打痕がみられる。75は赤色顔料が付着している。

62・64・68・69~72・79・80・83・85は径10cm前後の扁平な円盤である。側面のみに敲打痕がみられるもの（62）、表面に窪み状に敲打痕がみられるもの（64・70・71・79・83）、磨り面のみみられるもの（68・69・72・80・85）に分けられる。うち80には赤色顔料が付着している。66は棒状を呈するものである。両端部に敲打痕がみられ、特に下端部には焦げ目がみられる。67・82は扁平で細長い円盤である。67は側面に細かい敲打痕がみられる。長さ15.0cm・幅4.5cm・厚さ2.2cmを測る。82は両端部が欠損するが表面に磨り面がみられるものである。74・78・81・84は扁平な角盤である。74は表裏面、78・81・84は表面に磨り面がみられ、78は赤色顔料が付着している。77は乳棒状を呈するものである。両端部に敲打面、表裏面に磨り面がみられ赤色顔料が付着している。

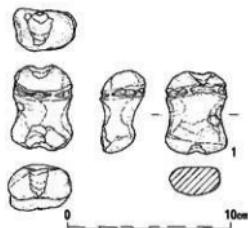
これらの石材は、61・73が流紋岩、65・69・76・80・81・82が閃緑岩、63・67がデイサイト、75が火山礫凝灰岩、である。62・72・77が安山岩、64がアブライト、68が玄武岩、71が花崗岩、79が花崗斑岩、66・83・84が凝灰岩、74・78・85が花崗閃緑岩である。

86~119は石錘である。大小様々な形態があるが、いずれも橢円形状を呈し、短辺に打ち欠きがみられるもの（86~94・96・101~119）と長辺にみられるもの（95・97~100）がある。石材は86・87・89・94・101~103・105・106・109・112・114が安山岩、88が花崗閃緑岩、90・93・99・118・119が流紋岩、92が凝灰岩、95が石英斑岩、96がデイサイト質凝灰岩、97が花崗斑岩、98がデイサイト、100・108・111がひん岩、104・115・117が閃緑岩、107が斑れい岩、110が花崗閃緑岩、113が玄武岩、116が花崗閃緑斑岩である。

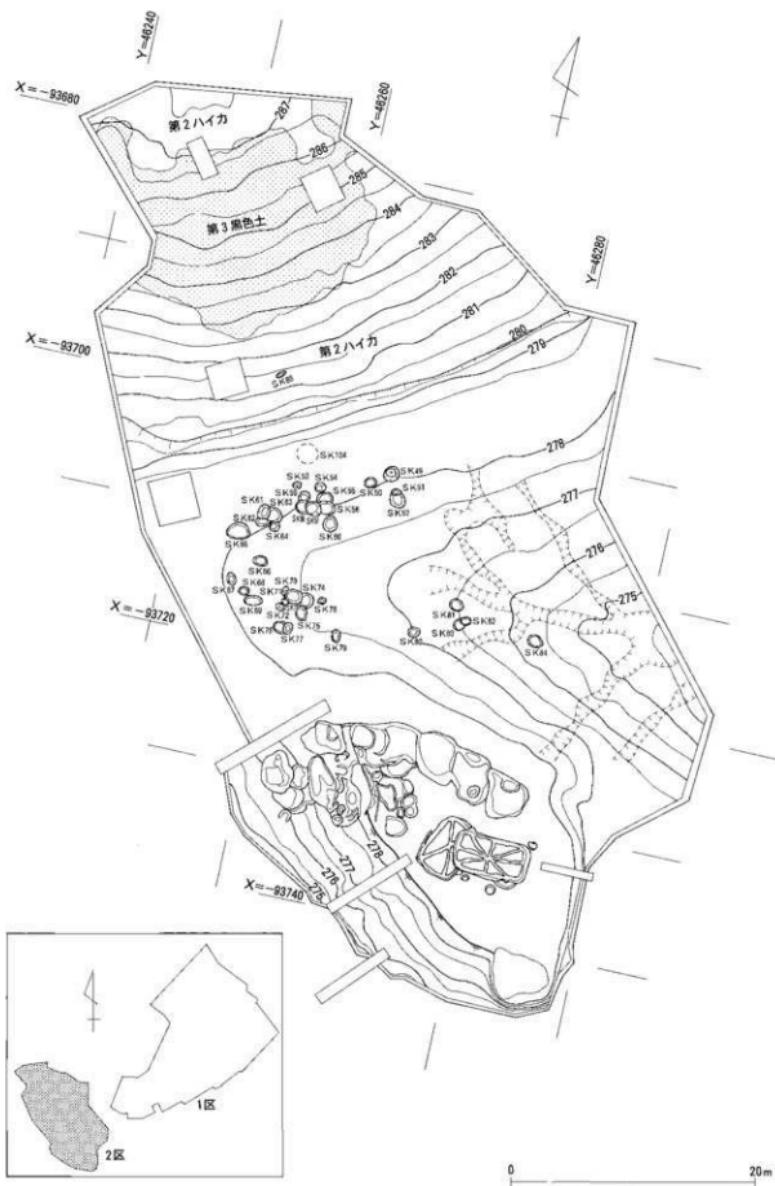
120~122は打製石鎌とみられるものである。120は側面に大ぶりな剥離面が残り、未製品とみられる。121は基部が細く刃部にかけて広がり、刃部先端は尖るものである。扁平で側面に細かい剥離面がみられる。長さ17.9cm・幅7.5cm・厚さ2.6cmを測る。122は扁平で台形状を呈するものである。刃部は弧状に加工されている。長さ13.0cm・幅8.5cm・厚さ2.8cmを測る。石材は120が安山岩、121が玄武岩、122が流透岩である。

123~126は台石・石皿類である。123は扁平で細長い形状で、表面に使用面が認められる。124は小型の石皿で、表裏面が使用されて中央が窪んでいる。125は石皿で半分残存しているものとみられるが、中央は使用されて大きく窪んでいる。126は三角形状を呈するもので斜面に使用面が認められ、赤色顔料が付着する。石材はひん岩である。

第107図は側部がくぼみ、分銅形を呈する小型の石器である。石の張り出した部分に沿って脈が巡っており、あたかも男根状を呈するものである。両端部に打ち欠きが施され、石棒状石製品といえる。長さ5.2cm・幅3.8cm・厚さ1.8cmを測り、石材は花崗斑岩である。



第107図 2区 第2黒色土出土石器 S=1/3



第108図 2区 第2ハイカ上面遺構配置図 S=1/400

2. 第2ハイカ上面の調査

(1) 遺構の配置状況（第108図）

第2ハイカ層は、調査区のはば全面に堆積しているが、斜面部の中央付近から上方にかけては流失しており、第3黒色土が露出している。遺構は第1ハイカ上面と同様に平坦部に集中しており、平坦部で土坑が36基（SK49～84）、斜面部下方で1基（SK85）検出された。なお、調査時には検出できなかったが、平坦部の後世の加工段付近でSK104が第3ハイカ上面で検出されている（第6章P197～199参照）。このSK104は内部から縄文時代後期初頭～前葉の遺物が多数出土しており、本来第2ハイカ層に掘り込まれたと考えられる上坑である。従って、この土坑も合わせ、第2ハイカ上面で検出された上坑は総数38基となる。

平坦部で検出された36基の土坑は、内部に人頭大の礫を含むものが多く、形態も第1ハイカ上面で検出された「集石土坑」と非常に類似している。上坑の位置は平坦面の南西側に集中し、谷状地形の標高278m付近に沿って立地するという特徴をもつ。また、上坑群もいくつかのグループに分けられるようだ。下山遺跡2区では、第2ハイカ上面と、第1ハイカ上面に連続して「集石土坑群」が形成されたといえる。なお、第2ハイカ上面では、第1ハイカ上面で検出された「立石土坑群」は検出されていない。

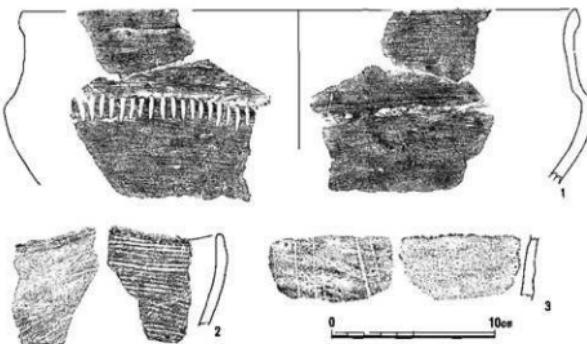
斜面部下方で検出された土坑（SK85）は、平坦部の土坑群と異なり集石はみられないが、底面からほぼ完形の双耳壺が出土した。

また、平坦部の中央付近から東方に向かって、溝状になった地形が数条集まってのびている。これは第2ハイカ層が雨水などで浸食されたために形成されたものであり、溝内では第3黒色土が露出している。第1ハイカ上面ではみられなかった地形であり、土層を掘り下げる度に、平坦部の谷状地形が深さを増していることが伺える。

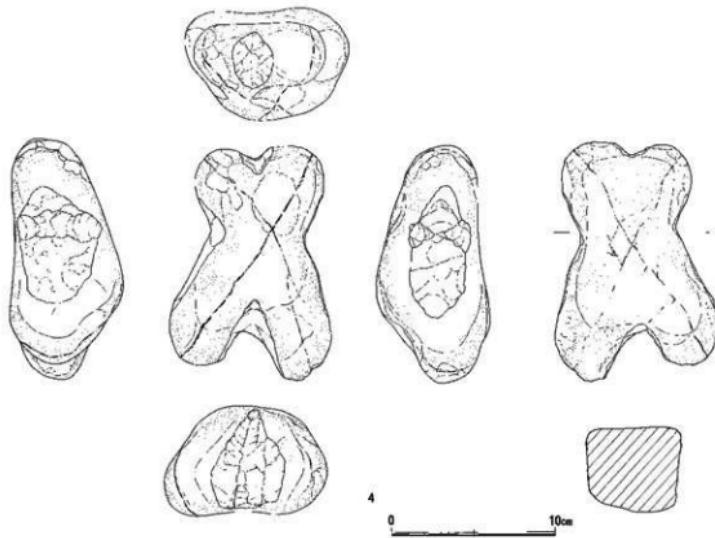
なお、第2ハイカ上面からは土坑以外の遺構はみられなかった。



第2ハイカ上面検出集石土坑群



第109図 2区 第2ハイカ上面出土遺物1 S=1/3

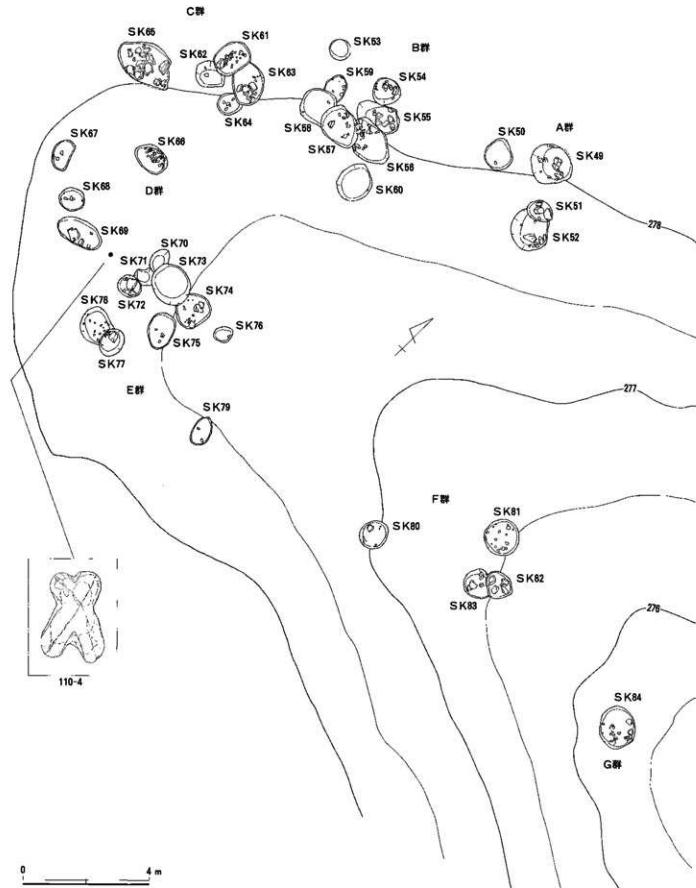


第110図 2区 第2ハイカ上面集石土坑出土遺物2 S=1/3

第2ハイカ上面出土遺物（第109図）

1は斜面部で検出されたものである。内外面とも丁寧なミガキが施される浅鉢で、復元口径は33.8cmを測る。肩部が若干肥厚し、タテ方向に刻み目が施されている。頸部はすばり口縁は内傾気味に立ち上がり、端部外面は帯状に肥厚するが文様はみられない。彦崎K1式並行期の浅鉢とみられ、時期は後期前葉に比定される。

2・3は七坑群周辺で出土したものである。2は無文粗製深鉢である。波状口縁を呈し、内外面には目蓋条痕が施される。3は外面にタテ方向の浅い沈線が数条施されるものである。



第111図 2区 第2ハイカ上面SK群配置図 S=1/120

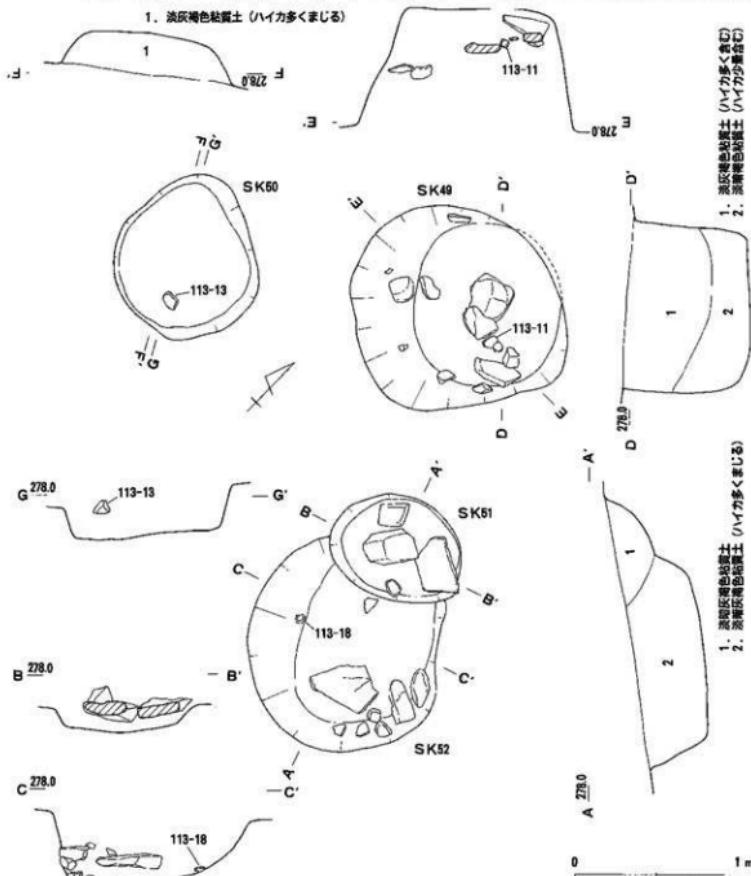
(2) 集石土坑

第111図に「集石土坑群」の配貯を示している。前述したように、その立地は標高227~228のランに沿って馬蹄形を呈している。総数36基みられるが、重なって掘り込まれているものもみられる。それぞれ適当な間隔を持つ、いくつかのまとまりをみるとことができ、ここではA群(SK49~50)・B群(SK53~60)・C群(SK61~65)・D群(SK66~69)・E群(SK70~79)・F群(SK80~83)・G群(SK84)の7グループに分類した。

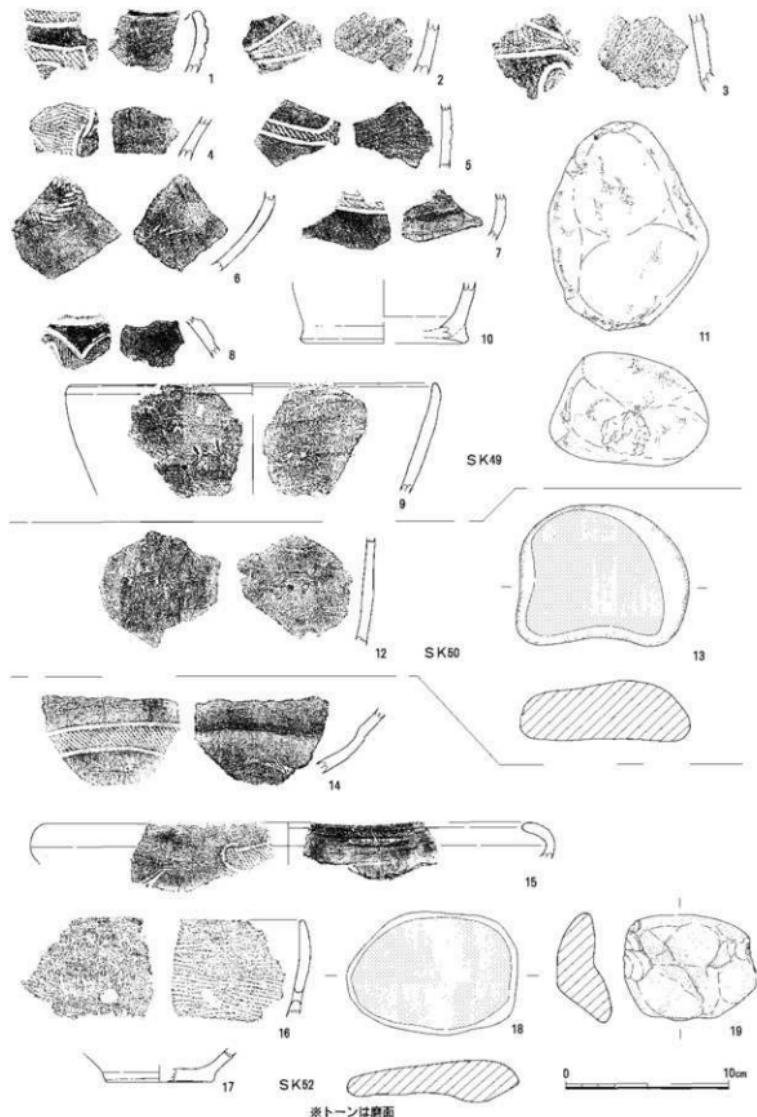
また、D群とC群の中間地点のハイカ上で、血色の変わった石製品が検出されている。

集石土坑群周辺出土遺物 (第110図)

ハイカの直上で検出された石製品で、石の平坦な面を下にして検出された。橢円形を呈する円礫



第112図 2区 第2ハイカ上面SK49~52 S=1/30



第113図 2区 第2ハイカ層上面SK49・50・52出土遺物 S=1/3

の表裏面にX字状に脈が通っており、その脈に沿うかたちで礫の上下左右に三角形の抉りが施されている。その形態は「X字状石器」というべきものであり、最大長14.4cm・最大幅9.9cm・中間部

の幅5.7cm・最大厚6.8cmを測る。石の表面は中央が肥厚しており、あたかも妊婦をかたどり四肢を表現した岩偶にもみうけられる。石材は花崗斑岩である。

A群：SK49～52（第112図）

馬蹄形を呈する集石上坑群の北東端に位置し、土坑は4基がし字状に配置されている。

SK49は不整な円形を呈し、長さ142cm・幅130cm・深さ78cmを測る。底面は平坦で、逆台形状に掘り込まれ、底面北側は袋状を呈する。遺物は多数の土器片や敲石が出土した他、扁平な角礫が下層から検出されている。

SK50は不整な椭円形を呈する土坑で、長さ102cm・幅94cm・深さ26cmを測るものである。上坑内上層から土器片と磨石が出土している。

SK51・52は重なって検出されており、上層の切り合いからSK51がSK52の北端部を掘り込んでいるようだ。両者とも椭円形を呈し、規模は全長166cm、幅はSK51が84cm、SK52が130cm、深さはSK51が24cm、SK52が43cmを測る。出土遺物は、SK52は土器片はみられなかったが、25cm大の角礫が3点上層から検出された。SK52では遺物は南側に集中しており、角礫に混じって磨石が底面から検出された。

S K49～52出土遺物（第113図）

1～11がSK49出土遺物である。

1～8は磨消繩文が施される土器である。1は波状口縁を呈し、口縁に沿って帶状の繩文が施されている。1～4は繩文の幅が広いものであるが、5は幅が狭く、直線的な文様構成とみられる。6は沈線がなく繩文のみ施されている。丸みを帯びた形状で、双耳壺などの壺形土器の胴部とみられるものである。7・8も内外面に丁寧にミガキが施され、7は浅鉢、8は頸部に太い沈線が施され、口縁がすぼまる壺形土器の肩部片とみられる。いずれも後期初頭のものとみられる。

9は粗製深鉢の口縁である。内外面の調整はナデである。

10は底部である。底面縁部に高台状に粘土帶が貼り付けられている。

11は下層から検出された敲石である。両端部がすぼまり、敲打面がみられる。長さ12.3cm・幅9.8cm・厚さ6.8cmを測る。石材は流紋岩質凝灰岩である。

12・13はSK50出土遺物である。

12は粗製深鉢の胴部片である。器壁はやや薄手で、調整は外面がケズリ、内面がナデである。

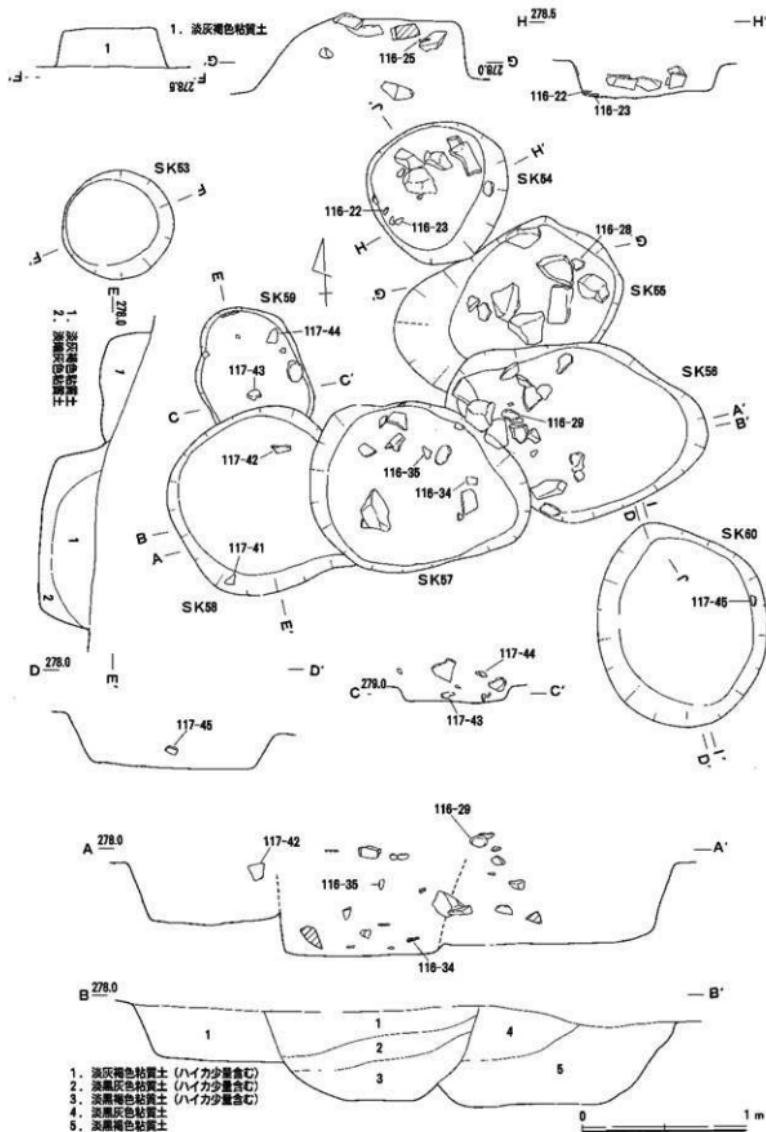
13は上層で検出された磨石である。扁平な円礫で、表面に磨り面がみられる。長さ10.4cm・幅8.2cm・厚さ3.6cmを測る。石材はひん岩である。

15～19はSK52出土遺物である。

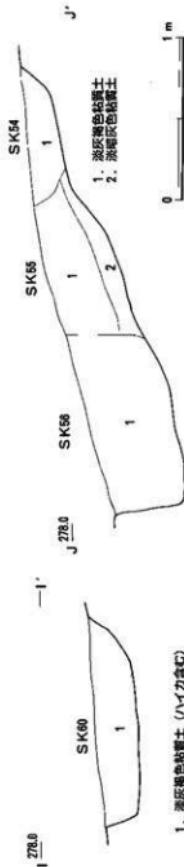
14・15は磨消繩文が施されるものである。14は胴部片であるが、内外面に丁寧なミガキが施され、浅鉢の胴部片と考えられる。外面に帶状の繩文が施され、内面には段がみられるものである。15は口縁が強く内湾し、復元口径32.8cmを測る浅鉢である。内外面にミガキが施されている。いずれも後期初頭とみられる。

16は粗製深鉢の口縁である。調整は外面が貝殻条痕後ナデ、内面が貝殻条痕である。焼成後穿孔もみられる。

17は底部である。底部は平底で、外面に貝殻条痕がみられる。



第114図 2区 第2ハイカ上面 SK53~60 S=1/30



第115図 2区 第2ハイカ上面SK54~56・60土層図 S=1/30

びる不整な楕円形を呈し、幅66cm・深さ24cmを測る。遺物は上層から下層にかけて土器片が2点出土し、上層には角礫が数点みられる。

S K60は南東側で単独で1基検出された土坑である。南北方向にびる不整な楕円形を呈し、長さ130cm・幅105cm・深さ26cmを測る。逆台形状に掘り込まれ、遺物は少なく、下層から土器片が1点出土しているのみで、角礫は含まれない。

S K53~60出土遺物（第116・117図）

20・21はS K53出土遺物である。20は外面に繩文施文後、ナデが施される。21は粗製深鉢で、調

18は底面で検出された磨石である。扁平な形状で、長さ10.5cm・幅7.5cm・厚さ2.5cmを測る。表面全面に磨り面が認められる。石材は細粒閃緑岩。19は石錐である。長さ7.8cm・幅6.5cm・厚さ3cmを測り、楕円形を呈する短辺に打ち欠きがみられる。石材は細粒閃緑岩である。

B群：SK53~60（第114・115図）

A群から西方3mの位置で検出された8基の集石土坑群である。中央に「コ」の字状に土坑が6基重なっており、そこから南東と北西の少し離れた位置にも、土坑が1基ずつ掘り込まれている。

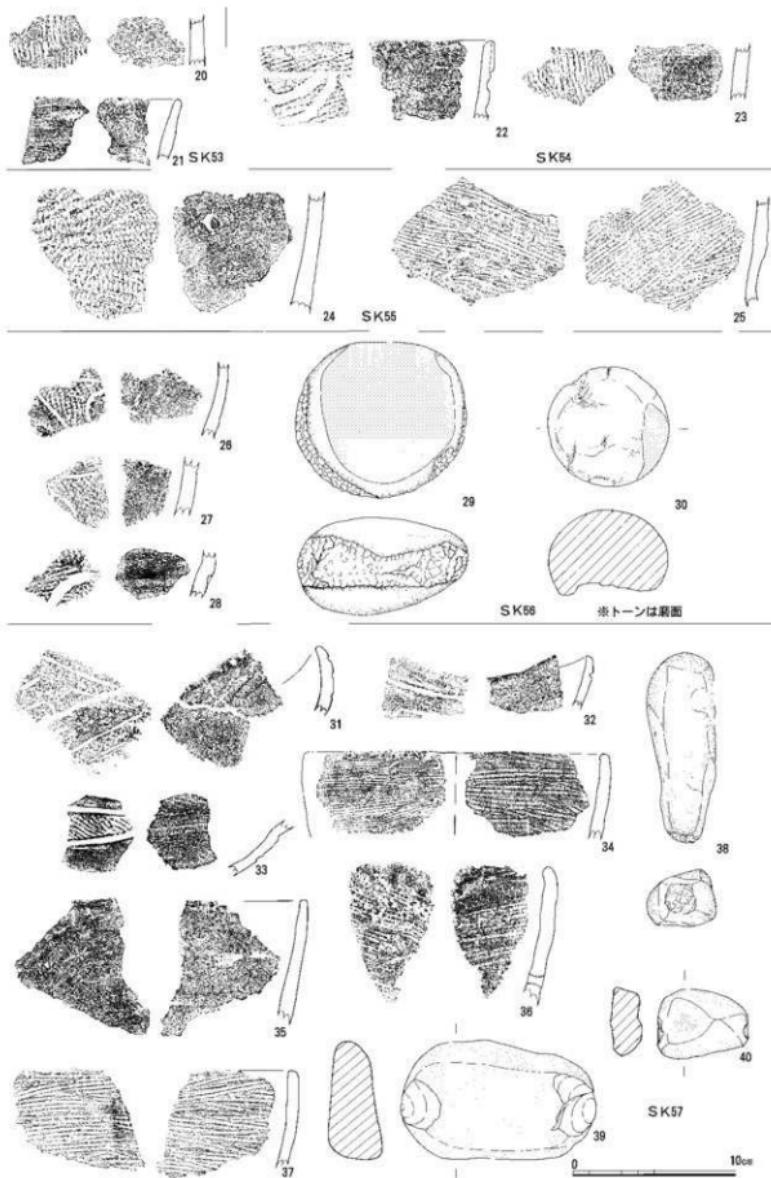
S K53は北西方向に離れた位置で検出された土坑である。ほぼ円形を呈し、規模は径70cm・深さ25cmを測る。逆台形に掘り込まれ底面は平坦である。遺物は土器片が2点出土しており、角礫はみられない。

S K54~59は「コ」の字に重なる土坑群で、上層観察からそれぞれの切り合いで確認できる。それによると、最も古く掘り込まれたのはS K55とS K59で、ついでS K55の北側にS K54が、南側にS K56が掘り込まれ、S K59の南側にもS K58が掘り込まれる。その後、S K56とS K58の間をつなぐようにS K57が掘り込まれている。長さはS K54~56間が272cm、S K58~56間が335cm、S K59~58間が180cmを測る。S K54は不整な円形を呈し、幅88cm・深さ22cmを測る。上層から角礫が5点、下面から土器片が数点出土している。S K55は東西方向にびる不整な楕円形を呈し、幅143cm・深さ45cmを測る。上層から底面にかけて長さ20cm大の角礫が6点、下面から土器片が2点出土している。S K56は東西方向にびる不整な楕円形を呈し、幅163cm・深さ532cmを測る。遺物は西側に集中しており、上層から下層にかけて小型の角礫が数点、上層から土器片や磨石が2点出土している。S K57は不整な楕円形を呈し、長さ138cm・幅105cm・深さ56cmを測る。

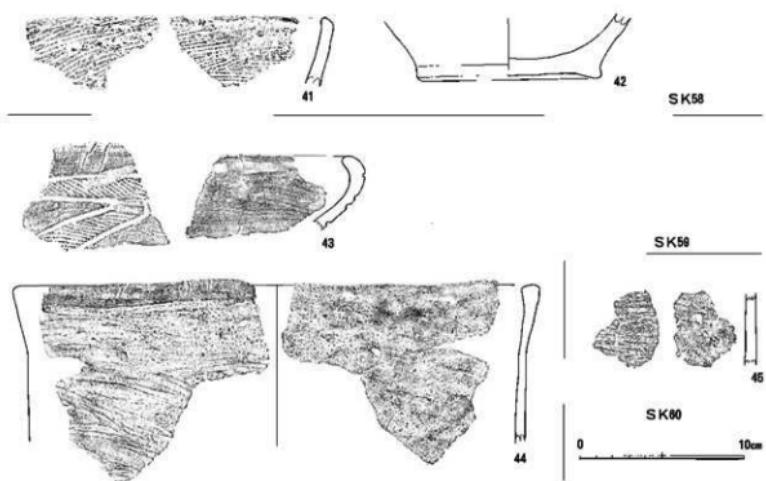
逆台形状に掘り込まれ、上層から底面にかけて角礫が数点、下層から土器片と敲石が1点、石錐が2点出土している。S K58は不整な楕円形を呈し、幅120cm・深さ33cmを測る。遺物は少なく、角礫は含まれず上層から土器片が2点出土するのみである。S K59は南北方向にの

びる不整な楕円形を呈し、幅66cm・深さ24cmを測る。遺物は上層から下層にかけて土器片が2点出土し、上層には角礫が数点みられる。

S K60は南東側で単独で1基検出された土坑である。南北方向にびる不整な楕円形を呈し、長さ130cm・幅105cm・深さ26cmを測る。逆台形状に掘り込まれ、遺物は少なく、下層から土器片が1点出土しているのみで、角礫は含まれない。



第116図 2区 第2ハイカ上面SK53~57出土遺物 S=1/3



第117図 2区 第2ハイカ上面SK58~60出土遺物 S=1/3

整は内外面ともナデである。

22・23はSK54出土遺物。いずれも外面撚糸文地の上器である。22は口縁外表面が肥厚し、連弧状の太い凹線が施される。23は1条ごとに深い圧痕が残る撚糸文が施されるものである。これらは里木II式の特徴をもち、中期後葉に比定される。

24・25はSK55出土遺物である。24は器壁が厚手で外面に原体の太い繩文が施されるものである。25は粗製深鉢の胸部片とみられ、外面に貝殻条痕が施される。

26~30はSK56出土遺物である。26・27は磨消繩文が施されるもので、同一個体の可能性もある。28は撚糸文地に太い凹線が施されており、中期後葉の土器とみられる。29・30は磨石・敲石類である。29は扁平な凸縁で、表面に磨り面が、側面に敲打痕が巡る。石材は黒雲母角閃石斑岩である。30は球状を呈し、側面に磨り面がみられる。石材は流紋岩である。

31~40はSK57出土遺物である。31~33は磨消繩文が施される土器である。31・32は波状口縁を呈する深鉢である。33は内外面とも丁寧なミガキが施され、内面に段がみられることから浅鉢と考えられる。34~37は粗製深鉢である。34・36・37は貝殻条痕、35は内外面とも丁寧なナデは施され、表面は平滑なものである。浅鉢であろうか。38は乳棒状を呈する敲石である。長さ11.7cm・幅4.2cm・厚さ3.5cmを測るもので、先端部に敲打痕がみられる。石材はアブライト質花崗岩である。39・40は石錐で、いずれも楕円形を呈し短辺に打ち欠きがみられる。39は大型のもので長さ12cm・幅7.2cm・厚さ3.3cmを測る。石材は39が花崗閃綠岩、40が石英斑岩である。

第117図41・42はSK58出土遺物である。いずれも粗製深鉢とみられ、41は口縁部、42は底部である。調整は41が内外面とも貝殻条痕、42は内面が貝殻条痕、外縁がミガキである。

43・44はSK59出土遺物である。43は磨消繩文が施される浅鉢で、口縁が強く内湾するものである。内外面にもミガキが顕著に施されている。中津III式とみられる。44は粗製深鉢である。口縁端

部が肥厚しており、縁辺も直線的でないことから波状口縁になる可能性もある。

45は小片であるが、外面にミガキ、内面にナデが施されるものである。浅鉢であろうか。

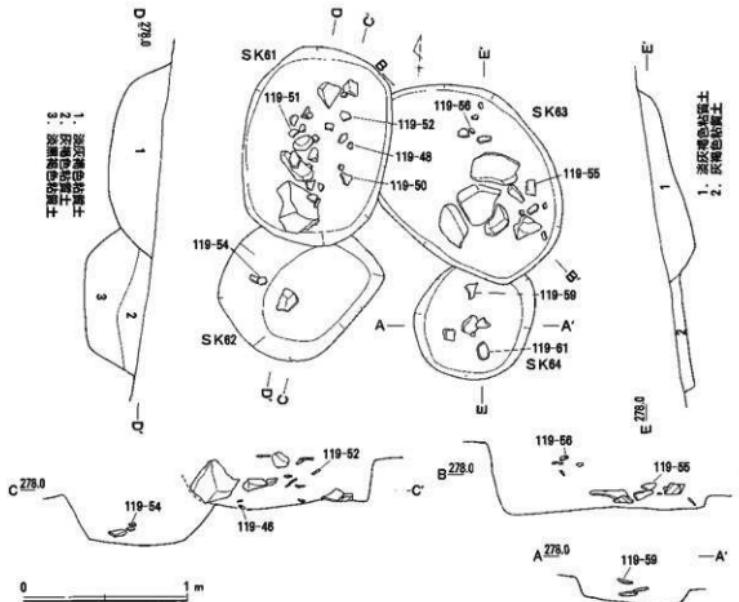
C群：SK61～65（第118・120図）

B群から西方へ1.3mの位置で検出された、5基の土坑からなる集石土坑群である。SK61～64が「コ」の字状に連結したかたちで検出され、SK65はSK62から西方へ0.8m離れた位置で単独で検出された土坑である。

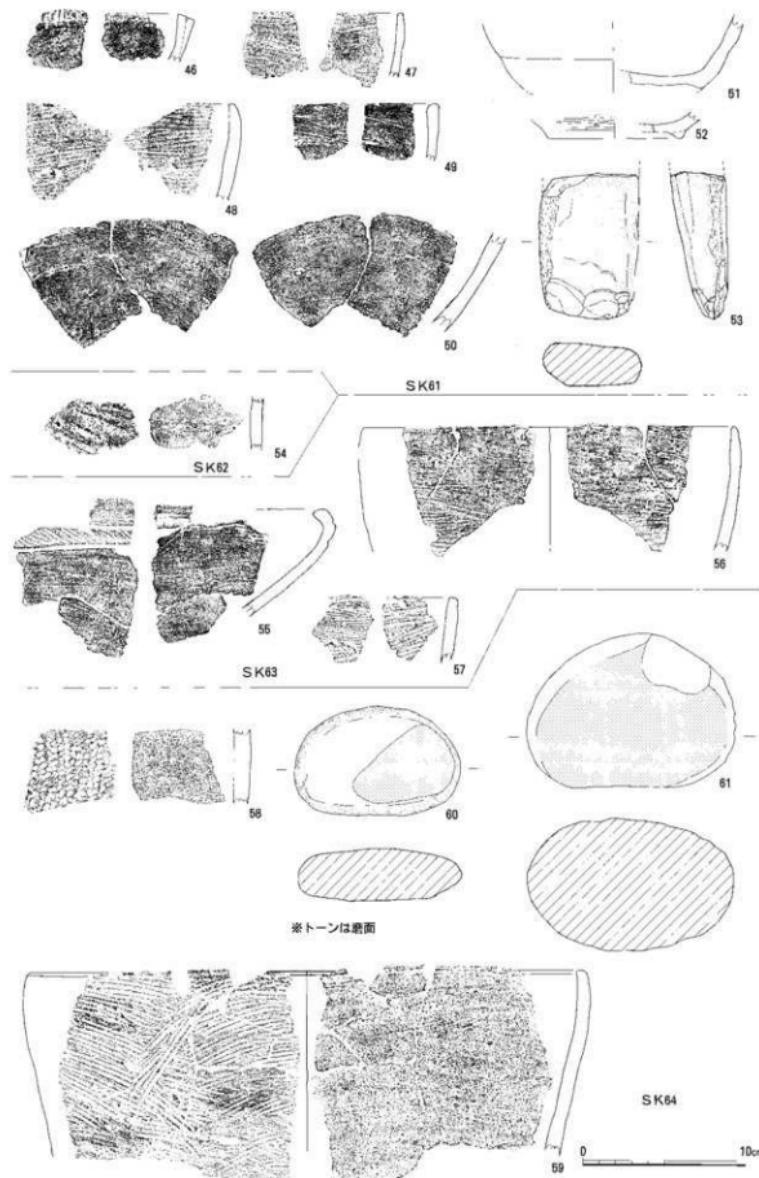
SK61～64は4基の土坑が掘り重なって「コ」の字状を呈する土坑である。上層観察でそれぞれの切り合ひが確認できる。最初に掘り込まれたのは南側のSK64とSK62で、その後、SK64の北側にSK63が掘り込まれる。そして最後にSK63とSK62をつなぐかたちでSK61が掘り込まれている。

SK61は隅丸な方形を呈し、長さ122cm・幅90cm・深さ32cmを測る。上層から下層にかけて遺物が多数出土しており、長さ30cm人の角蹠も含まれている。SK62は楕円形を呈し、長さ92cm・幅85cm・深さ40cmを測る。角蹠2点と土器片が1点下層から出土している。SK63は楕円形を呈し、長さ136cm・幅1m・深さ10cmを測る。遺物は南東側に集中しており、土器片に混じって扁平な角蹠が3枚上層から検出されている。SK64は楕円形を呈し、長さ80cm・幅72cm・深さ10cmを測る浅い土坑である。角蹠にまじって土器片と磨石が2点検出された。

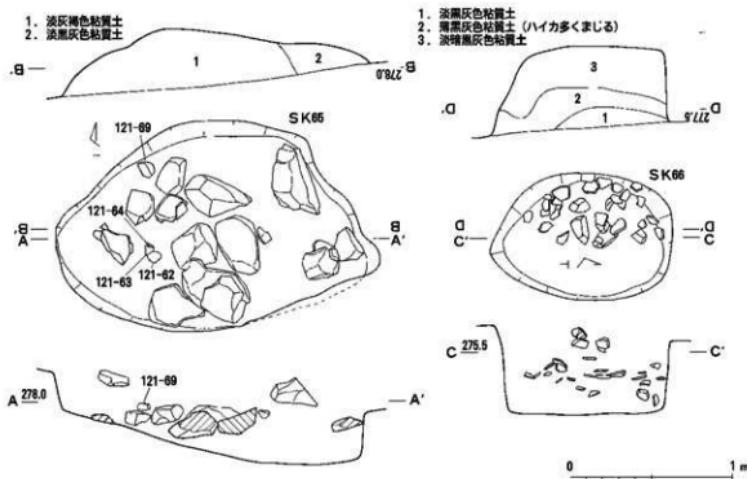
SK65は不整な楕円形を呈し、長さ2m・幅130cm・深さ36cmを測り、第2ハイカ上面で検出さ



第118図 2区 第2ハイカ上面SK61～64 S=1/30



第119図 2区 第2ハイカ層上面SK61~64出土遺物 S=1/3



第120図 2区 第2ハイカ上面SK65・66 S=1/30

れた土坑群の中で最大規模の十坑である。十坑の上層からは、長さ30~40cm大の扁平な角礫が土坑を覆うようなかたちで検出されている。

S K61~65出土遺物（第119・121図）

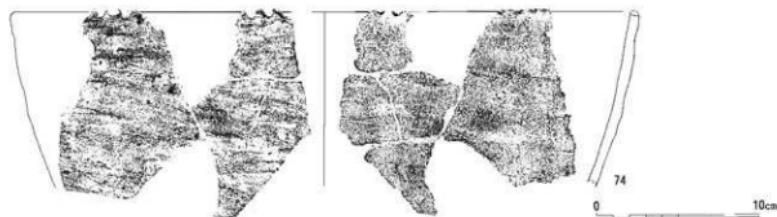
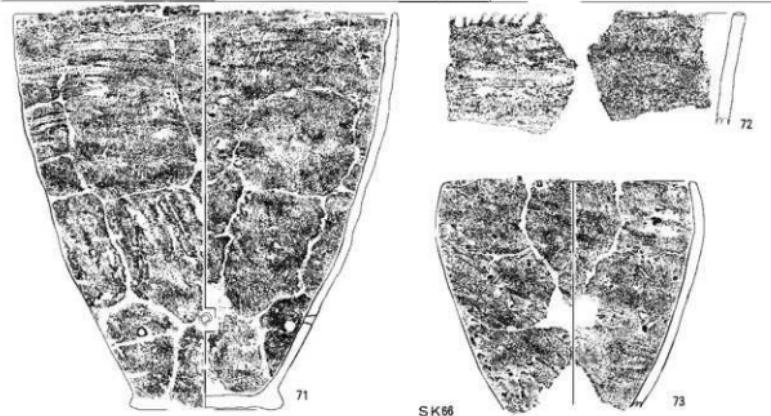
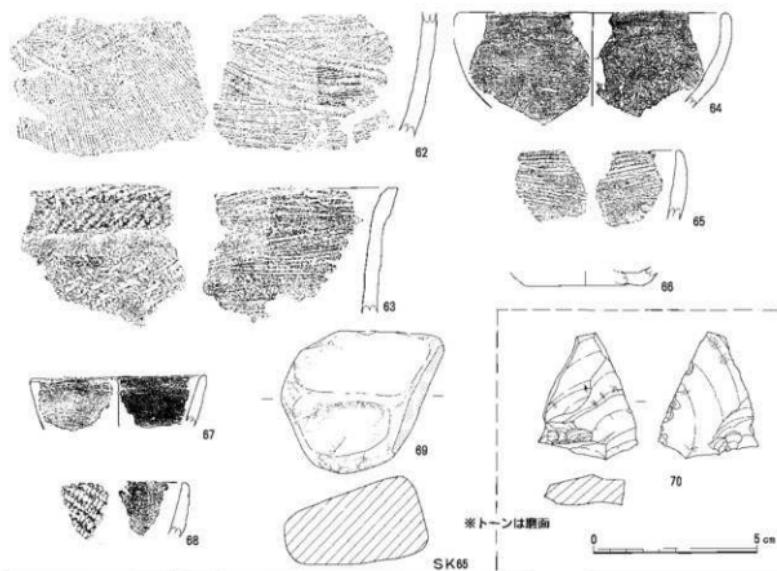
第119図46~53・61はS K61出土遺物である。46は口縁が肥厚し、端部に面をもつものである。端部に刻み目を施した後、ヨコ方向に深く沈線が施されている。縁帶文土器系のものであろうか。47~49は粗製深鉢である。47・49は条痕調整後、ナデが施されている。50は内外面ともミガキが施され、椀形を呈する浅鉢とみられる。51・52は底部である。52は外面ともミガキが施されており、浅鉢の底部と考えられる。53は扁平な石であるが、側面に敲打調整痕、先端部には両面からの調整剥離がみられることから磨製石斧の未製品とみられる。石材は安山岩である。61は表面に磨り面がみられる磨石である。石材は黒雲母花崗岩。

54はS K62出土遺物である。粗製深鉢の胴部片とみられ、内外面の調整はナデである。

55~57はS K63出土遺物である。55は磨消繩文が施される精製浅鉢である。口縁が強く内傾し、口縁に沿って帯状の繩文が施されている。中津川式に相当するものである。56は内外面にミガキが施されるものである。無文の浅鉢であろうか。57は内外面に貝殻条痕が施される粗製深鉢である。

58~60はS K64出土遺物である。58は器壁が厚手で、外面に原体の太い繩文が施されている。中期のものであろうか。59は59は粗製深鉢で、内外面に貝殻条痕が施される。60は磨石で、表面半分の範囲に磨り面がみられる。

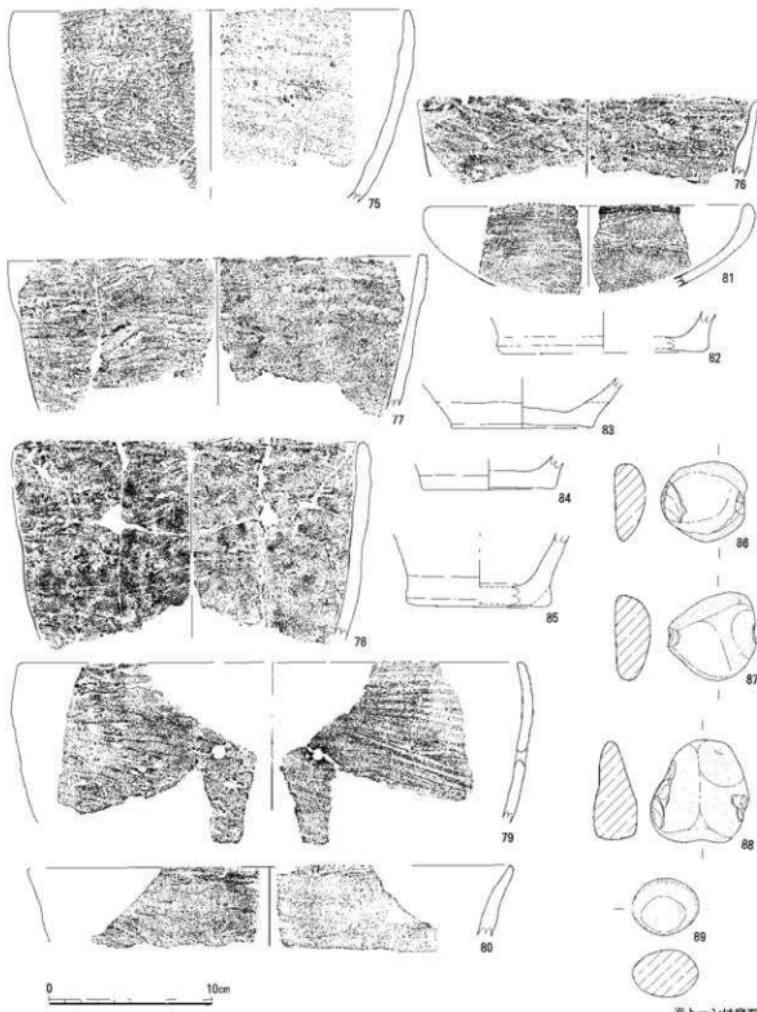
第121図62~70はS K65出土遺物である。62・65は内外面に貝殻条痕が施される粗製深鉢である。63は口縁外面が帯状に肥厚するもので、肥厚帯は幅3cmと幅広い。肥厚帯に繩文が施されるが、頸部にも原体を押圧した文様がみられる。縁帶文系の上器とみられる。64・67は無文の精製浅鉢であ



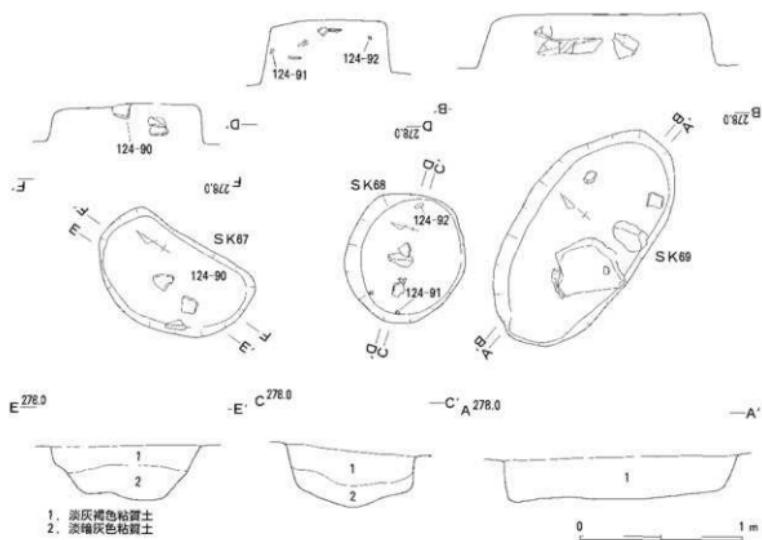
第121図 2区 第2ハイカ上面SK65・66出土遺物 S=1/3 (70はS=2/3)

る。64は復元口徑16.1cmを測る橢形のものである。66は底部片である。68は外面に原体の太い縄文が施されるものである。69はデイサイト製の磨石である。扁平な右の側面に磨り面がみられる。70は黒曜石製の剥片である。表裏面に大きな剥離面がみられる。石核であろうか。

D群：SK66～69（第120・123図）



第122図 2区 第2ハイカ上面SK66出土遺物2 S=1/3



第123図 2区 第2ハイカ上面SK67~69 S=1/30

D群は馬蹄形を呈する集石土坑群の西端部に位置し、土坑は4基みられる。いずれも単独で検出され、SK66~69にかけて「L」字状の配置される。

SK66は平面形が楕円形を呈し、長さ112cm・幅80cm・深さ50cmを測る。逆台形状に掘り込まれ、底面は平坦である。土坑内から角礫に混じって土器片が多数検出された。中には完形に復元できた深鉢も含まれる。

SK67は細長い不整な楕円形を呈し、長さ1m・幅62cm・深さ34cmを測る。土坑内の底面から台石が出土し、上層から扁平な角礫が2点検出された。

SK68は不整な円形を呈し、長さ80cm・幅74cm・深さ34cmを測る。土坑内下層から土器片と磨石が1点出土し、角礫も4点含まれる。

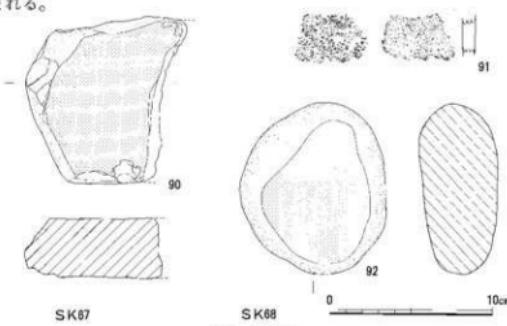
SK69は細長い楕円形を呈し、長さ152cm・幅82cm・深さ25cmを測りD群では最も大型の土坑である。土坑内に明確な遺物はみられず、上層から長さ40cm大の角礫が検出された。

S K 66~69出土遺物

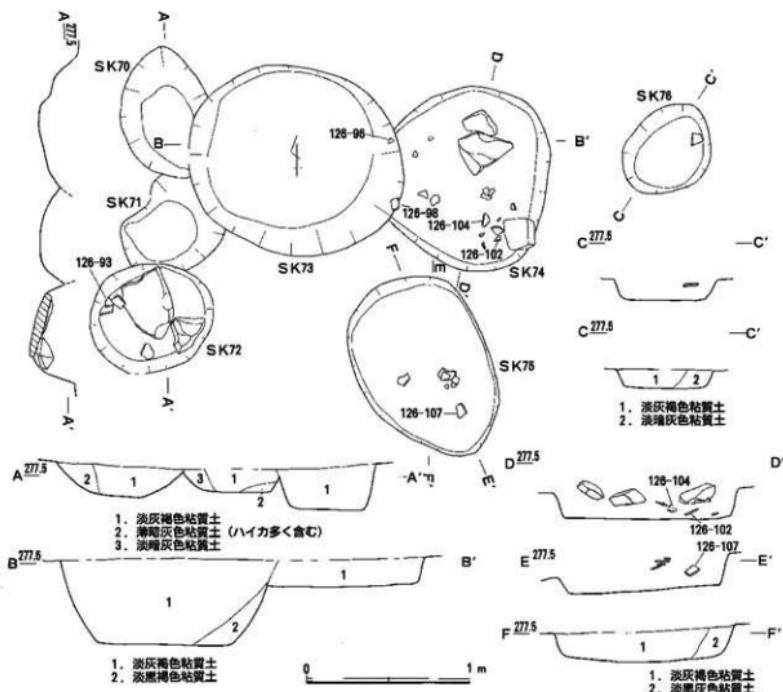
(第121・122・124図)

第121図71~74、第122図

75~89はSK66出土遺物で



第124図 2区 第2ハイカ上面SK67・68出土遺物 S=1/3



第125図 2区 第2ハイカ上面 S.K.70~76 S=1/30

ある。71~74・76~80は粗製深鉢である。71は完形に復元できたもので、口径23cm・器高24.2cmを測る。器形は砲弾形を呈し、底部は平底である。下方に焼成前穿孔は2穴みられる。調整は内外面ともナデである。73も同形態の深鉢とみられる。72・74は口縁端部に刻み日が施されるものである。79も焼成前穿孔が1穴みられる。75は外面上にミガキが施され、楕円形の浅鉢とみられる。81は内外面のミガキが顕著な浅鉢で、口縁が内湾気味に直立する。82~85は底部である。いずれも平底である。86~88は石錘である。いずれも梢円形を呈し、86・87は短辺に、88は長辺に抉りが施される。石材は86・87が閃緑岩、88はディサイトである。89は小型の球形を呈する磨石である。

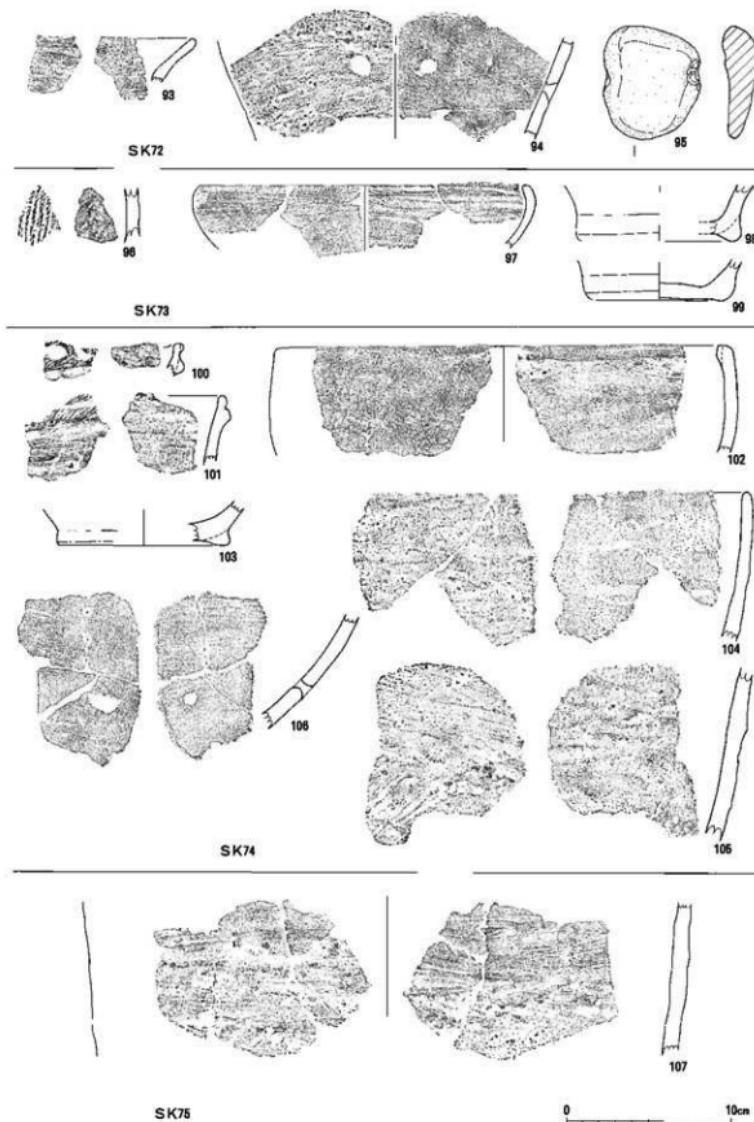
第124図90はS.K.67出土物である。扁平で小型の台石とみられ、表面に使用面がみられ平滑である。石材はひん岩。

91・92はS.K.68出土物である。91は小片で、内外面の調整はナデである。92は扁平な形状の磨石である。表面に磨り面がみられる。石材は黒雲母花崗岩である。

E群：S.K.70~76（第125図）・77・78（第127図）・79（129図）

D群の東方1.2mに位置し、総数10基の集石土坑群である。S.K.70~74、S.K.77・78は重なって掘り込まれており、S.K.79は東方へ2.5m離れた位置に単独で検出された。

S K70～74は「T」字状に重なっているが、土層観察から切り合ひが確認できる。まず、SK71が掘られ、その後SK71の北側にSK70が、南側にSK72が掘り込まれる。すこし離れた位置にS



第126図 2区 第2ハイカ層上面SK72～75出土遺物 S=1/3

K74も掘られ、最後にSK71・72とSK74をつなぐようにSK73が掘り込まれる。SK70～72は南北方向に連なる、径70cm前後の小型の土坑である。SK70・71は遺物がみられないが、SK73は下層から土器片が1点と、長さ40cmの大の扁平な角礫が検出された。SK73は楕円形で長さ136cm・幅116cm・深さ54cmを測る、逆台形に掘り込まれる土坑であるが、遺物は上層から土器片が3点出土したのみである。SK74は不整な三角形を呈する土坑で、幅114cm・深さ17cmを測る。上層に角礫が3点検出され、下層から上器片が7点出土した。

SK75は細長い楕円形を呈し、長さ120cm・幅82cm・深さ20cmを測る。上層から土器片が1点と礫片が数点検出された。

SK76は楕円形を呈する小型の土坑で、長さ66cm・幅50cm・深さ14cmを測る。遺物はみられないが、礫片が1片上層から出土した。

SK77・78はSK72から南方へ80cm離れた位置で検出された。南北方向に連結しており、土層観察からSK77がSK78の東端部を掘り込んでいるようだ。SK77は楕円形を呈し、長さ90cm・幅72cm・深さ45cmを測る。下層から、数点の七器片とともに長さ30cmの大の扁平な礫片が検出された。SK78は幅1m・深さ38cmを測る。上層から下層にかけて多数の上器片や石器が検出された。

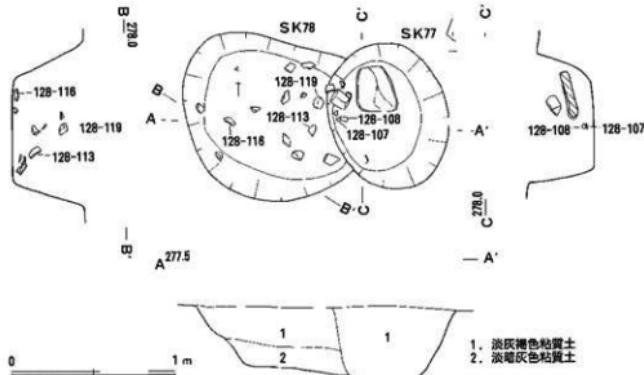
SK79は東方へ2.6m離れた位置に単独で検出された土坑である。細長い楕円形を呈し、長さ98cm・幅59cm・深さ24cmを測る。上層から角礫が2点と、下層から土器片が1点検出された。

SK70～76出土遺物（第126・128・130図）

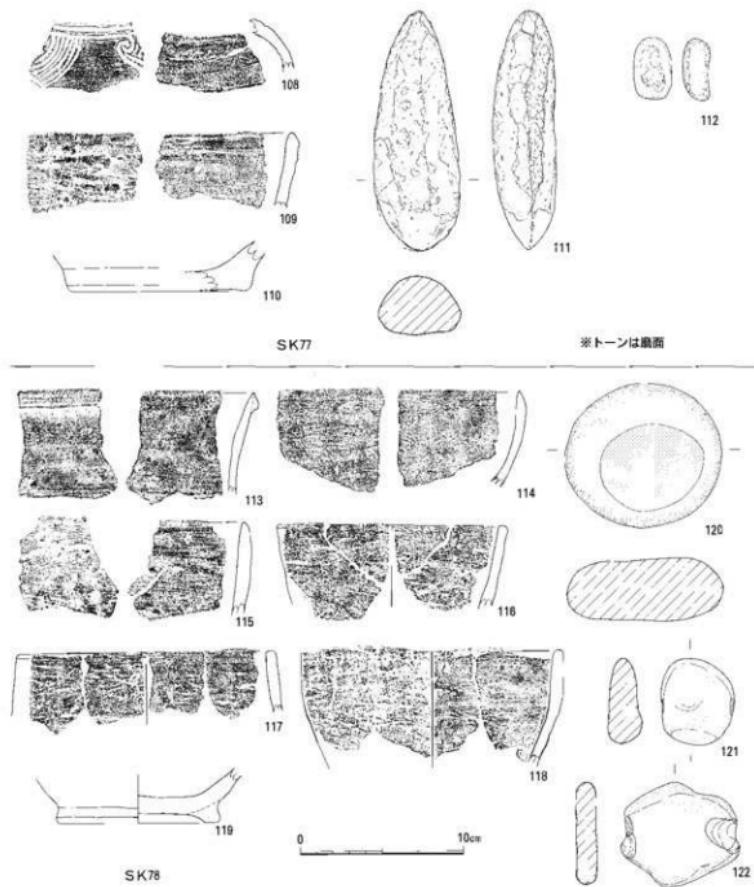
第126図93～95はSK72出土遺物である。93は逆ハの字状にひらく浅鉢の口縁と考えられる。調整は内外面ともナデである。94は粗製深鉢の胸部片で、焼成後穿孔がみられる。調整は内外面ともナデである。95は石鍤である。不整な楕円形を呈し、長辺に抉りがみられる。

96～99はSK73出土遺物である。96は小片であるが、外面に1条おきに深くなる綱文が施されている。壺木II式とみられる。97は椀状を呈し、口縁が内傾する無文の精製浅鉢である。98・99は底部である。98は高台状、99は平底を呈するもので、いずれも外面に貝殻条痕がみられる。

100～106はSK74出土遺物である。100・101は口縁外面が帶状に肥厚するもので、肥厚部に綱文が施される。100は波状口縁を呈し、波頂部には指頭による圧痕がみられる。101はヨコ方向に沈線



第127図 2区 第2ハイカ上面SK77・78 S=1/30



第128図 2区 第2ハイカ上面SK77・78出土遺物 S=1/3

が施される。いずれも縁帶文系の土器で、101は彦崎K1式とみられる。102・106は碗形を呈し、内外面ともミガキが施されることから、無文の精製浅鉢とみられる。102は口縁内面が帯状に肥厚する。106は焼成後穿孔がみられる。103は高台状を呈する底部である。104・105は粗製深鉢である。調整はいずれもナデである。

107はSK75出土遺物である。粗製深鉢の脛部片で、調整は外表面がナデ、内面はナデと巻き貝による条痕が施される。

第128図108～112はSK77出土遺物である。108は肩部片で、頸部境に2条の沈線と、弧状に垂下する7条単位の沈線、入り組み状の沈線が施されている。縁帶文系土器の肩部とみられる。109は粗製深鉢である。内外面ともナデが施されている。110は平底状を呈する底部である。111は完形の

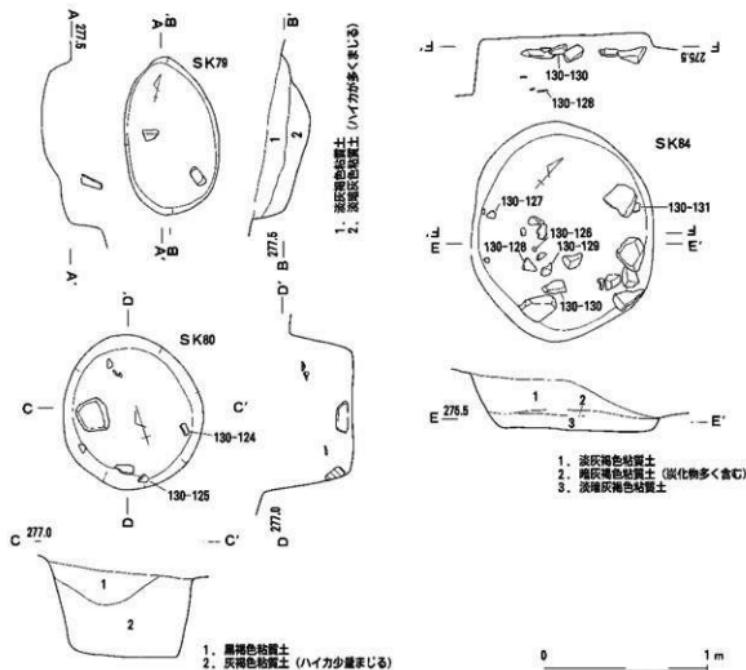
磨製石斧である。乳棒状を呈し、刃部と基部は尖り気味である。側部には敲打調整痕がみられる。長さ14.8cm・幅5.1cm・厚さ3.6cmを測り、石材は緑色岩である。112は豆粒状をもので、表面に磨り面がみられる。小型の磨石であろうか。石材は凝灰岩である。

113～122はS K78出土遺物である。113は器壁が薄手で、口縁端部外面が帯状に肥厚するものである。文様は施されないが、縁帶文系の深鉢とみられる。114は無文の精製浅鉢である。楕形を呈し、口縁は直立する。115～118は粗製深鉢である。調整はナデやケズリがみられる。119は高台状を呈する底部である。調整はナデである。120は磨石である。表裏面に磨り面がみられる。石材は鬼雲母花崗岩である。121・122は石錐である。楕円形を呈し、121は長辺に、122は短辺に抉りが施される。石材は121がダイサイト、122が安山岩である。

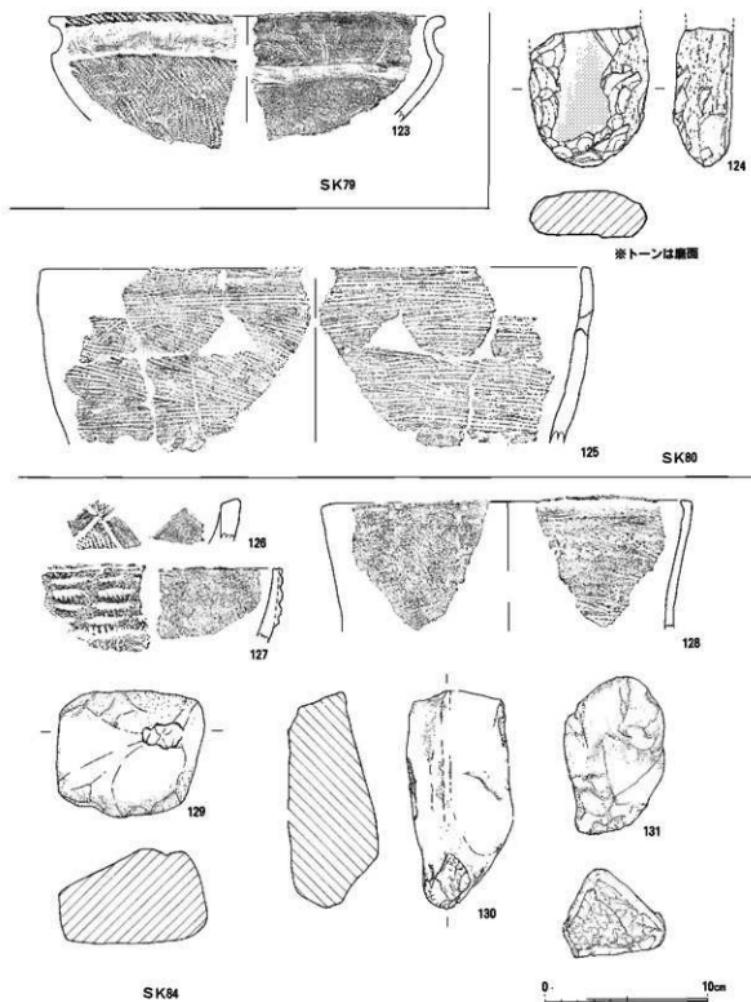
第129図123はS K79出土遺物である。有文の浅鉢であり、頸部がくびれ、口縁は強く外反するものである。口縁端部は若干肥厚し、口縁外面と胴部に縁文が施文され、頸部外面と内面はミガキが施される。縁帶文土器の浅鉢で、後期前葉に比定される。

F群：SK80（第129図）・SK81～83（第131図）

F群はE群のSK79から東方5.6mに位置し、4基からなる集石上坑群である。SK81～83は隣



第129図 2区 第2ハイカ上面 SK79・80・84 S=1/30



第130図 2区 第2ハイカ上面SK79・80・84出土遺物 S=1/3

接して握り込まれているが、SK80はSK81から南西方向に3m離れて単独で検出された。

SK80は椭円形の土坑で、長さ96cm・幅87cm・深さ52cmを測る。また底面は平坦で逆台形に掘り込まれている。土坑内下層から扁平な角砾や、砥石、土器片が検出された。

SK81~83はL字状に配置された十坑群である。SK81は円形を呈し、径112cm・深さ20cmを測る。上層から下層にかけて土器片や磨石、礫片が検出された。SK82・83は切り合っており、土層

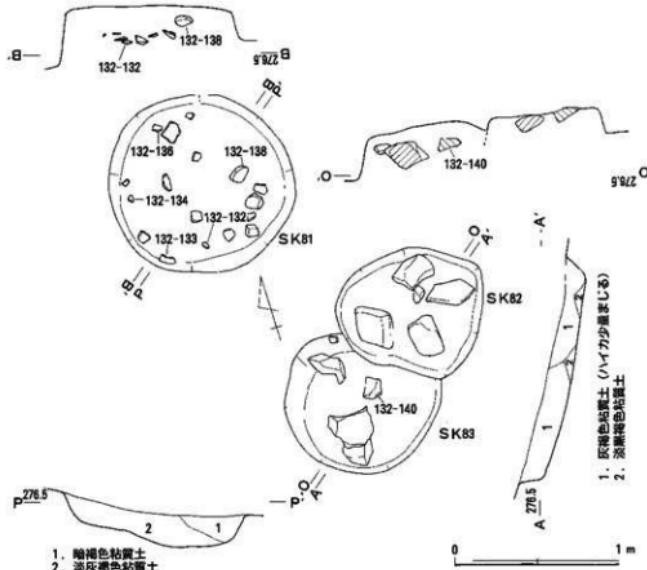
観察からSK82がSK83の北東側を掘り込んでいる。SK82は不整な梢円形を呈し、長さ91cm・幅76cm・深さ13cmを測る。長さ20cm大の扁平な角礫が4枚下層から検出されたが、遺物は含まれていない。SK83は不整な円形を呈し、径96cm・深さ15cmを測る。角礫に混じって台石が下層から検出された。

SK80~83出土遺物（第130・132図）

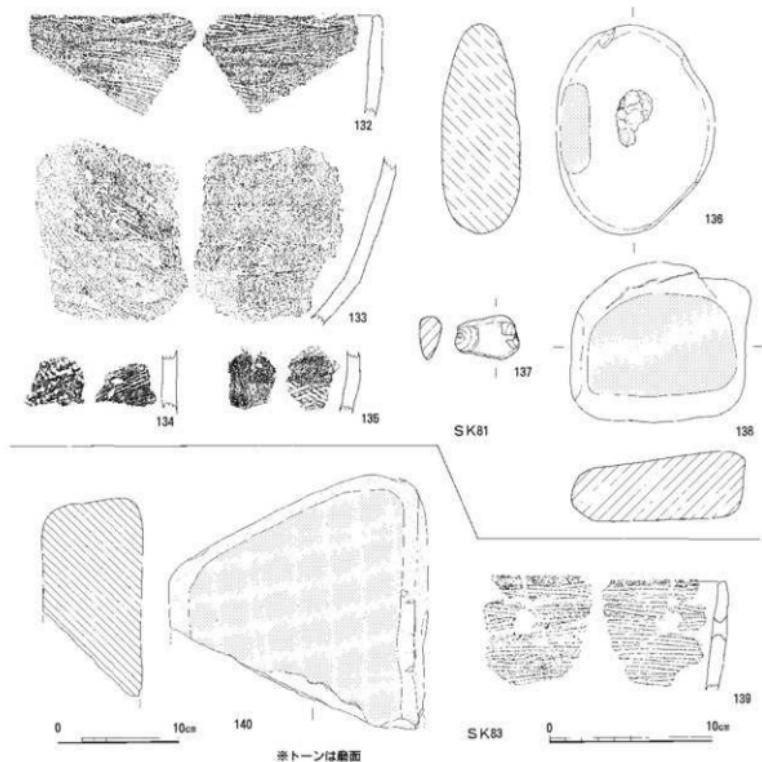
第130図121・125はSK80出土遺物である。121は扁平な石器で、左側面に細かな剥離調整、右側面に敲打調整痕が残る。磨製石斧未製品と考えられるものであるが、表面に非常に滑な底面がみられる。おそらく、製作途中で欠損したものを砥石として再利用したと想定される。長さ8.4cm・幅7.1cm・厚さ2.7cmを測り、石材は安山岩である。125は粗製深鉢である。復元口径33.6cmを測る大型のもので、内外面に条痕調整が顕著にみられる。

第132図132~138はSK81出土遺物である。132・133は粗製深鉢である。132は口縁で、内外面に貝殻条痕が施される。133は外面は貝殻条痕後ナデ、内面はナデである。134は器壁が厚手で、外面に原体の太い繩文が施されている。中期のものであろうか。135は器壁が厚手で、外面に格子目状に沈線が施されている。136は敲石である。扁平な円礫の表面中央に溝み状に敲打痕が残る。縁辺に磨り面もみられる。石材は花崗斑岩である。137は方形を呈する石鍤で、短辺に打ち欠きがみられる。長さ4.3cm・幅2.7cm・厚さ1.8cmを測る小型のもので。石材は花崗閃綠岩である。138は磨石である。

扁平な円礫の表面に磨り面がみられる。長さ10.6cm・幅9.8cm・厚さ3.7cmを測り、石材は角閃石石英閃綠岩である。



第131図 2区 第2ハイカ上面SK81~83 S=1/30



第132図 2区 第2ハイカ上面SK81・83出土遺物 S=1/3 (140はS=1/4)

139～140はSK83出土遺物である。139は粗製深鉢の口縁である。内外面とも貝殻条痕が顕著で、焼成後穿孔も認められる。140は台石である。およそ半分が欠損するが、厚さ8cmの扁平な形状で表面に使用面が認められる。石材は黒雲母角閃石英閃綠岩である。

G群：SK84（第129図）

F群のSK82から東方へ4.8mの位置で検出されたもので、単独で検出された土坑である。馬蹄形を呈する集石土坑群で南東端に位置し、他に隣接する遺構はない。

土坑は楕円形を呈し、長さ136cm・幅112cm・深さ30cmを測る。上坑内上層から土器片が、下層から石器や扁平な角礫が多数検出された。

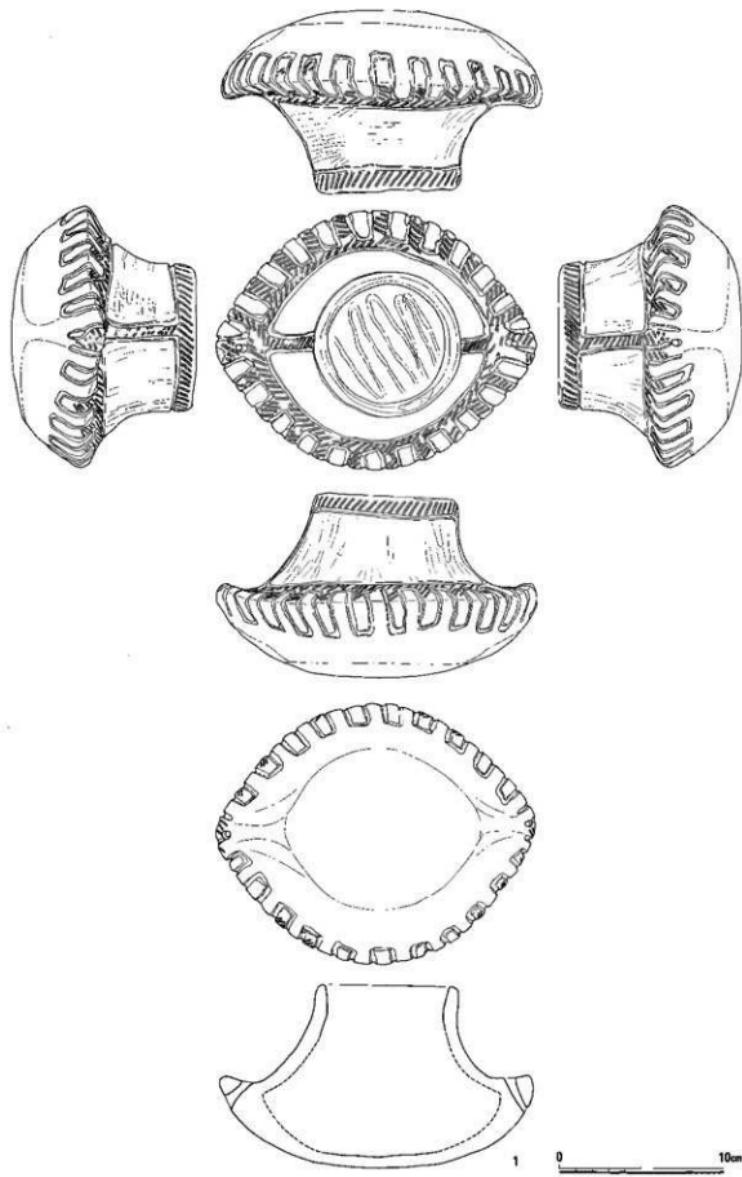
SK84出土遺物（第130図）

126～131がSK84出土遺物である。126は磨消繩文が施される波状口縁深鉢の波頂部である。中津三式に相当する。127は口縁外面が幅広の帯状に肥厚するものである。肥厚部外面には貝殻腹縁による刺突がヨコ方向に施される。口縁端部にも繩文原体の押圧痕がみられ、頸部にも繩文が施される。

されるものである。形式不明のものであるが、縁帶文土器とするには違和感がある土器である。底面から山上しており、あるいは土坑の底部を掘りすぎて第3黑色上の上器を掘り出したのかもしれない。128は粗製深鉢とみられるが、口縁内面が折り返されたように肥厚する。129～131は敲石である。129は扁平な形状であるが、表面が突起しており、その先端に敲打痕がみられる。130は棒状



第133図 2区 第2ハイカ上面SK85出土遺物 S=1/3



第134図 築廻遺跡出土双耳壺 S=1/3